

インストールガイド

Sun Java™ Enterprise System

Version 2003Q4

817-4242-10
2003 年 12 月

Copyright © 2003 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

Sun Microsystems, Inc. は、この製品に含まれるテクノロジーに関する知的所有権を保持しています。特に限定されることなく、これらの知的所有権は <http://www.sun.com/patents> に記載されている 1 つ以上の米国特許および米国およびその他の国における 1 つ以上の追加特許または特許出願中のものが含まれている場合があります。

このソフトウェアは SUN MICROSYSTEMS, INC. の機密情報と企業秘密を含んでいます。SUN MICROSYSTEMS, INC. の書面による許諾を受けることなく、このソフトウェアを使用、開示、複製することは禁じられています。

U.S. Government Rights - Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

この配布には、第三者が開発したソフトウェアが含まれている可能性があります。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company, Ltd が独占的にライセンスしている米国およびその他の国における登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、Java、Solaris、JDK、Java Naming and Directory Interface、JavaMail、JavaHelp、J2SE、iPlanet、Duke のロゴマーク、Java Coffee Cup のロゴ、Solaris のロゴ、SunTone 認定ロゴマークおよび Sun ONE のロゴマークは、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標もしくは登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャに基づくものです。

Legato および Legato のロゴマークは Legato Systems, Inc. の商標であり、Legato NetWorker は同社の商標または登録商標です。Netscape Communications Corp のロゴマークは Netscape Communications Corporation の商標または登録商標です。

OPEN LOOK および Sun Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカルユーザインタフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

この製品は、米国の輸出規制に関する法規の適用および管理下にあり、また、米国以外の国の輸出および輸入規制に関する法規の制限を受ける場合があります。核、ミサイル、生物化学兵器もしくは原子力船に関連した使用またはかかる使用者への提供は、直接的にも間接的にも、禁止されています。このソフトウェアを、米国の輸出禁止国へ輸出または再輸出すること、および米国輸出制限対象リスト (輸出が禁止されている個人リスト、特別に指定された国籍者リストを含む) に指定された、法人、または団体に輸出または再輸出することは一切禁止されています。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われないものとします。

目次

図目次	13
表目次	15
手順一覧	21
はじめに	25
対象読者	25
本書の構成	26
マニュアルの使用	26
表記規則	28
Web 上の参考資料	29
お問い合わせ先	30
ご意見、ご要望の送付先	30
第 1 章 概要	31
Java Enterprise System とは	31
Java Enterprise System を使用する利点	32
エンタープライズネットワークサービスとは	32
コンポーネント製品とは	34
共有コンポーネントとは	40
Java Enterprise System で利用できる言語	41
Java Enterprise System インストーラのしくみ	42
インストーラのモード	43
言語の選択	43
すでに存在するソフトウェアの確認	44
依存性の確認	45
設定の種類とパラメータの設定	48

アンインストール	48
インストールの流れ	49
Java Enterprise System ソフトウェアの入手方法	52

第 1 部 インストール 55

第 2 章 インストールの準備	57
インストールの過程	58
特定の配備要件に適したインストール手順	59
Sun Cluster ソフトウェアを使用した高可用性	59
64 ビット Solaris SPARC プラットフォームでの 32 ビット Directory Server	64
非ルート所有の Web Server または Application Server インスタンスでの Identity Server	64
非ルート所有の Web Server または Application Server インスタンスでの Portal Server	66
事前にロードされている Java Enterprise System ソフトウェアの配備の完了	67
アップグレードの必要性の決定	68
コンポーネント製品の依存性	68
既存のソフトウェアの確認	69
システムの準備状況の確認	71
アクセス権	71
システム要件	71
メモリとディスク容量の要件	72
インストールモードの選択	72
グラフィカルモードを選択する場合	72
テキストベースモードを選択する場合	72
サイレントモードを選択する場合	73
設定の種類を選択	73
カスタム設定を選択する場合	74
最小設定を選択する場合	74
設定データの収集	75
インストールディレクトリ	75
ポートの割り当て	75
次の手順	76
第 3 章 インストールおよび設定に関する情報の収集	77
この章の利用方法	79
デフォルト値	79
情報の参照方法	79
インストールディレクトリ	80
共通サーバー設定	82
管理サーバーの設定	84
Application Server の設定	86

Calendar Server の設定	86
Directory Server の設定	87
Directory Server : 管理情報	87
Directory Server : サーバー設定情報	88
Directory Server : Directory Server 設定情報	89
Directory Server : データ格納場所に関する設定情報	90
Directory Server : データの取り込み情報	92
Directory Proxy Server の設定	94
Directory Proxy Server : ポート選択の情報	94
Directory Proxy Server : Directory Server 管理者の設定情報	94
Directory Proxy Server : サーバルート情報	95
Identity Server の設定	96
Identity Server : 管理情報	97
Identity Server : Web コンテナ情報	98
Identity Server : サービス情報	106
Identity Server : Directory Server 情報	112
Identity Server : プロビジョニングされているディレクトリの情報	113
Identity Server SDK の設定	115
Identity Server SDK : 管理情報	115
Identity Server SDK : Directory Server 情報	117
Identity Server SDK : Web コンテナ情報	118
Instant Messaging の設定	119
Message Queue の設定	119
Messaging Server の設定	119
Portal Server の設定	120
Portal Server : Identity Server の設定情報	121
Portal Server : Portal Server の設定情報	122
Portal Server : Web コンテナ情報	122
Portal Server, Secure Remote Access の設定	125
Portal Server, Secure Remote Access Support	125
ゲートウェイのインストール	130
Netlet プロキシのインストール	133
Rewriter プロキシのインストール	137
Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster 用 Sun ONE エージェントの設定	142
Web Server の設定	143
Web Server : 管理情報	143
Web Server : デフォルト Web Server インスタンス情報	144
状態ファイルのみで使用されるパラメータ	145
第 4 章 システムコンポーネントのアップグレード	149
Administration Server 5.2 のアップグレード情報	150
Application Server 7 Update 1 のアップグレード情報	150
Application Server 7 からのアップグレード	150

Application Server 6.xからのアップグレード	151
Calendar Server 6.0のアップグレード情報	151
Calendar Server 5.xからのアップグレード	151
iPlanet Calendar Server 2.x または Netscape Calendar Server 4.xからのアップグレード	151
Directory Server 5.2のアップグレード情報	152
Directory Proxy Server 5.2のアップグレード情報	152
Identity Server 6.1のアップグレード情報	153
Identity Server 6.0 または 6.0 SP1からのアップグレード	153
DSAME 5.1からのアップグレード	153
Instant Messaging 6.1のアップグレード情報	154
Message Queue 3.0.1 SP2のアップグレード情報	154
MQ 3.0.1 SP1、3.0.1、または 3.0からのアップグレード	154
iMQ 2.0 または iMQ 2.0 SP1からのアップグレード	155
Messaging Server 6.0のアップグレード情報	156
Portal Server 6.2 または Portal Server, Secure Remote Access 6.2のアップグレード情報	156
Sun Cluster 3.1のアップグレード情報	156
Web Server 6.1のアップグレード情報	157
Web Server 6.0からのアップグレード	157
Web Server 4.1からのアップグレード	157
共有コンポーネントのアップグレード情報	157
J2SE プラットフォームのアップグレード情報	158
第5章 グラフィカルインタフェースによるソフトウェアのインストール	161
インストール前のチェックリスト	162
アップグレードが必要なコンポーネントの確認	164
グラフィカルモードでのインストーラの実行	166
コンポーネントの追加	183
次の手順	184
第6章 テキストベースのインタフェースを使用したソフトウェアのインストール	185
テキストベースモードの使用法	186
インストール前のチェックリスト	187
アップグレードが必要なコンポーネントの確認	189
テキストベースモードでのインストーラの実行	191
コンポーネントの追加	198
次の手順	199
第7章 サイレントモードでのソフトウェアのインストール	201
インストール前の手順	201
ガイドライン	202
状態ファイルの生成	203
状態ファイルの編集	204

ローカルパラメータの編集	204
プラットフォームに適した ID の作成	206
サイレントモードでのインストーラの実行	208
次の手順	210
第 8 章 インストール後の設定と起動	211
インストール後の設定の概要	211
カスタム設定モード	212
最小設定モード	212
インストールと設定の確認	213
Sun Cluster の設定	213
コンポーネント製品の設定	215
管理サーバーの設定	216
Application Server の設定	217
Calendar Server の設定	219
Directory Server の設定	220
Directory Proxy Server の設定	221
Identity Server の設定	222
Instant Messaging の設定	225
Messaging Server の設定	226
Portal Server の設定	227
Web Server の設定	228
コンポーネント製品の起動と停止	229
推奨起動シーケンス	230
管理サーバーの起動と停止	231
Application Server の起動と停止	232
Calendar Server の起動と停止	234
Directory Server の起動と停止	235
Directory Proxy Server の起動と停止	236
Identity Server の起動と停止	237
Instant Messaging の起動と停止	240
Message Queue の起動	241
Messaging Server の起動と停止	241
Portal Server の起動と停止	242
Portal Server, Secure Remote Access の起動と停止	243
Web Server の起動と停止	243
次の手順	245
第 9 章 インストールに関する問題のトラブルシューティング	247
トラブルシューティングチェックリスト	247
インストールログファイルの検証	248
コンポーネント製品のログファイルの検証	249

製品の依存関係の検証	249
リソースと設定のチェック	250
確認手続きの実行	250
配布メディアのチェック	251
Directory Server の接続性チェック	251
Web Server のファイルおよびディレクトリの削除	251
パスワードの確認	251
prodreg ツールの使用によるコンポーネントの検証とアンインストール	252
部分的なインストールのクリーンアップ	252
問題と解決策の例	253
トラブルシューティングのためのコンポーネント製品の情報	255
管理サーバー	255
Application Server	256
Calendar Server	257
Directory Proxy Server	258
Directory Server	258
Identity Server	259
Instant Messaging	259
Message Queue	259
Messaging Server	260
Portal Server	260
Portal Server, Secure Remote Access	261
Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster エージェント	261
Web Server	261
第 10 章 ソフトウェアのアンインストール	263
アンインストールの概要	263
アンインストーラについて	264
共有コンポーネント	265
製品の相互依存性	265
コンポーネント製品の詳細	268
アンインストール前の作業	278
アンインストーラへの管理者アクセス権の付与	280
アンインストーラの実行	282
グラフィカルインタフェースによるアンインストール	282
テキストベースインタフェースによるアンインストール	287
サイレントモードでのソフトウェアのアンインストール	290
アンインストール後に実行する作業	294
Messaging Server で必要となる作業	294
Portal Server のアンインストールと Identity Server の再起動	294
Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster のエージェント	295
アンインストールのトラブルシューティング	296
アンインストールの手順と依存関係の確認	296

ログファイルの検証	297
パスワードの確認	297
アンインストーラが見つからない場合	298
アンインストールのクリーンアップ	298
製品レジストリ	300
アンインストーラが設定ディレクトリサーバーに接続できない場合	300

第 2 部 管理 303

第 11 章 組織とユーザーのプロビジョニング	305
Directory Server について	305
組織とユーザーのディレクトリの概要	305
Java Enterprise System ユーザーの記述	308
プロビジョニングインタフェースの概要	309
ディレクトリ情報ツリー (DIT) について	309
コンポーネント製品の DIT に関する考慮点	309
シングルサインオン (SSO) とユーザー	311
Java Enterprise System ユーザーの管理	312
ユーザーと組織の計画	313
コンポーネント製品のインストールと設定	316
ユーザーのプロビジョニング	317
ユーザーのプロビジョニング、スキーマ、ツールに関する参照情報	321
コンポーネント製品のマニュアル	321
コンポーネント製品のプロビジョニングツール	323
第 12 章 Messaging Server 6.0 のプロビジョニングとスキーマの概念	325
LDAP ディレクトリ情報ツリー (DIT) と Messaging Server	326
Messaging Server 6.0 用のスキーマの選択	328
Sun ONE LDAP Schema v.2 のネイティブモード	328
Sun ONE LDAP Schema v.2 の互換モード	328
Sun ONE LDAP Schema v.1	329
適切なプロビジョニングツールの確認	329
プロビジョニングの組み合わせ	329
スキーマモデルの決定	331
プロビジョニングツールの決定	332
プロビジョニングに関する情報の参照先	332
Schema v.2 のネイティブモードと互換モードの選択	333
LDAP 構造が変更された理由	333
ネイティブモードの利点と制約	336
ネイティブモードへの変換	337
2 ツリーの構造をサポートし続ける互換モード	337

ネイティブモードと互換モードのデータモデル	338
名前空間の宣言	340
名前空間の重複とルートノード	342
検索テンプレート	343
検索テンプレートの概要	343
検索テンプレートの形式	344
グループ (メーリングリスト)	345
グループの種類	345
オープングループとクローズグループ	347
サービスクラス (CoS)	347
Messaging Server の CoS	347
Messaging Server での CoS の設定	348
第 13 章 シングルサインオン (SSO) の設定	351
Java Enterprise System での SSO の概要	351
ポリシーエージェント	352
Calendar Server と Messaging Server での SSO の使用	353
SSO をサポートするように Messaging Server と Calendar Server を設定するには	353
Portal Mail チャネルと Calendar チャネル用の SSO の設定	359
SSO アダプタサービス	359
プロキシ認証の概要	360
プロキシ認証の設定	363

第 3 部 付録 **365**

付録 A 情報収集用ワークシート	367
共通サーバー設定用ワークシート	368
管理サーバーのワークシート	369
Application Server のワークシート	370
Calendar Server のワークシート	371
Directory Server のワークシート	371
Directory Proxy Server のワークシート	373
Identity Server と Portal Server のワークシート	374
Application Server に配備された Identity Server	374
Web サーバーに配備された Identity Server	378
Application Server に配備された Identity Server と Portal Server	380
Web Server に配備された Identity Server と Portal Server	384
BEA WebLogic に配備された Identity Server と Portal Server	387
IBM WebSphere に配備された Identity Server と Portal Server	390
Identity Server の配備後に Application Server に配備された Portal Server	393
Identity Server の配備後に Web サーバーに配備された Portal Server	394

Instant Messaging のワークシート	395
Messaging Server のワークシート	396
Portal Server, Secure Remote Access のワークシート	396
Web Server のワークシート	403
付録 B インストーラのコマンド行オプション	405
Java Enterprise System インストーラ	405
Java Enterprise System アンインストーラ	407
付録 C コンポーネントのポート番号	409
付録 D インストール可能なパッケージの一覧	413
アンインストーラのパッケージ	413
コンポーネント製品用にインストールされるパッケージ	414
管理サーバー	414
Application Server	414
Calendar Server	415
Directory Server	415
Identity Server	416
Instant Messaging	416
Message Queue	417
Messaging Server	417
Portal Server	418
Portal Server, Secure Remote Access	419
Sun Cluster ソフトウェアとエージェント	419
Web Server	420
共有コンポーネント用にインストールされるパッケージ	421
コンポーネント製品用のローカライズされたパッケージ	422
簡体字中国語パッケージ	423
繁体字中国語パッケージ	424
フランス語のパッケージ	426
ドイツ語のパッケージ	427
日本語のパッケージ	429
韓国語のパッケージ	430
スペイン語のパッケージ	432
付録 E 配布内容のディレクトリ構造	435
付録 F ネットワークインストールのためのセットアップ方法	437
付録 G Identity Server によるユーザーのプロビジョニング	443
Identity Server によるユーザープロビジョニングの概要	444

Identity Server コンソールについて	445
Identity Server サービスによる Java Enterprise System ユーザープロビジョニングの例	445
新しい Identity Server プロビジョニングサービスを定義する手順の概要	446
サンプルの Java Enterprise System ユーザーの作成	449
LDAP 変更コマンドによるユーザーのプロビジョニング	451
メッセージングプロビジョニング用の Identity Server サービスの定義と拡張	454
Identity Server サンプルサービスのインポートと登録	457
用語集	461
索引	463

目次

図 1-1	Portal Server の相互依存性	46
図 1-2	開始からコンポーネントのアップグレードまでのインストールの流れ	50
図 1-3	共有コンポーネントの互換性チェックから終了までのインストールの流れ	51
図 10-1	製品の相互依存性	266
図 10-2	リモートホストからの製品依存	267
図 10-3	製品のサポート	267
図 10-4	「コンポーネントの選択」ページ	283
図 10-5	「アンインストールの準備が完了しています」画面	285
図 11-1	DIT 構造の例	307
図 12-1	LDAP 構造のネイティブモードと互換モードの比較	327
図 12-2	2 ツリー構造での <code>aliasedDomainName</code> と <code>inetDomainBaseDN</code> によるエイリアス設定	334
図 12-3	2 ツリー構造での <code>inetCanonicalDomainName</code> によるエイリアス設定	335
図 12-4	1 ツリー構造での <code>associatedDomain</code> によるエイリアス設定	336
図 12-5	名前空間としてのドメイン	341
図 13-1	プロキシ認証を使用する SSO アダプタサービス	360
図 13-2	Identity Server SSO と Portal Server チャンネル SSO メカニズム	361
図 13-3	Identity Server SSO とカレンダーチャンネルの通信	362
図 E-1	Java Enterprise System の配布用 DVD のレイアウト	435

表目次

表 1	システム全体に関するマニュアル	27
表 2	文字表記の規則	28
表 3	可変部分の表記規則	28
表 4	記号の表記規則	28
表 1-1	Portal Server を選択すると自動的に選択されるコンポーネント	46
表 2-1	インストールの過程	58
表 2-2	Sun ONE 用 Sun Cluster エージェントの高可用性インストールの概要	60
表 2-3	高可用性インストール用の共有コンポーネントパッケージ	63
表 2-4	コンポーネント製品間の依存性	68
表 2-5	コンポーネント製品の設定の種類	73
表 3-1	デフォルトのインストールディレクトリ	80
表 3-2	共通サーバー設定	82
表 3-3	管理サーバーの設定情報	84
表 3-4	Application Server の設定情報	86
表 3-5	Directory Server の管理に関する設定情報	87
表 3-6	Directory Server のサーバーに関する設定情報	88
表 3-7	Directory Server の Directory Server に関する設定情報	89
表 3-8	Directory Server のデータ格納場所に関する設定情報	91
表 3-9	Directory Server のデータ取り込みに関する設定情報	92
表 3-10	Directory Proxy Server のポート選択に関する設定情報	94
表 3-11	Directory Proxy Server の Directory Server 管理者に関する設定情報	94
表 3-12	Directory Proxy Server のサーバールートに関する設定情報	95
表 3-13	Identity Server のサブコンポーネントのインストールに必要な情報	96
表 3-14	Identity Server 用の管理に関する設定情報	97
表 3-15	Identity Server と Web コンテナの組み合わせ	98
表 3-16	Identity Server と Web Server を使用する場合の Web コンテナの設定情報	99
表 3-17	Identity Server と Application Server を使用する場合の Web コンテナの設定情報	101

表 3-18	Identity Server と BEA WebLogic を連動させる場合の Web コンテナの設定情報	103
表 3-19	Identity Server と IBM WebSphere を連動させる場合の Web コンテナの設定情報	104
表 3-20	Identity Server とサービスの組み合わせ	106
表 3-21	Identity Server のサービスに関する設定情報、例 1	106
表 3-22	Identity Server のサービスに関する設定情報、例 2	109
表 3-23	Identity Server のサービスに関する設定情報、例 3	110
表 3-24	Identity Server のサービスに関する設定情報、例 4	111
表 3-25	Identity Server 用の Directory Server の設定情報	112
表 3-26	Identity Server のプロビジョニングされた既存ディレクトリに関する設定情報	113
表 3-27	Identity Server の、プロビジョニングされた既存ディレクトリが検出されない場合の設定情報	113
表 3-28	Identity Server SDK 用の管理に関する設定情報	116
表 3-29	Identity Server SDK 用の Directory Server の設定情報	117
表 3-30	Identity Server SDK 用の Web コンテナに関する設定情報	118
表 3-31	Portal Server のインストールに必要な情報	120
表 3-32	Portal Server 用の Identity Server に関する設定情報	121
表 3-33	Portal Server 用の Portal に関する設定情報 (すべてのケース)	122
表 3-34	Sun ONE Web Server に関する Web コンテナ情報	123
表 3-35	Sun ONE Application Server に関する Web コンテナ情報	123
表 3-36	Portal Server, Secure Remote Access Support のインストール時に必要となる情報	125
表 3-37	Portal Server, Secure Remote Access Support のインストール時に必要となるゲートウェイに関する設定情報	126
表 3-38	Portal Server, Secure Remote Access 用の Web コンテナに関する設定情報	128
表 3-39	Portal Server, Secure Remote Access 用の Identity Server に関する設定情報	128
表 3-40	Portal Server, Secure Remote Access 用の Web コンテナに関する情報	129
表 3-41	Portal Server, Secure Remote Access 用の Identity Server に関する設定情報	129
表 3-42	Portal Server, Secure Remote Access 用の Sun ONE Application Server または BEA Web Server に関する設定情報	129
表 3-43	Portal Server, Secure Remote Access 用の Web コンテナに関する設定情報	130
表 3-44	ゲートウェイのインストールに必要な Identity Server に関する設定情報	130
表 3-45	ゲートウェイのインストール時に指定するゲートウェイに関する設定情報	131
表 3-46	Portal Server, Secure Remote Access の証明書に関する情報	132
表 3-47	Portal Server, Secure Remote Access 用の Web コンテナに関する情報	133
表 3-48	Netlet プロキシのインストールに必要な Identity Server に関する設定情報	133
表 3-49	Netlet プロキシのインストールに必要な Netlet プロキシに関する設定情報	134
表 3-50	Portal Server, Secure Remote Access Support 用のプロキシに関する設定情報	135
表 3-51	Portal Server, Secure Remote Access の証明書に関する情報	136
表 3-52	Portal Server, Secure Remote Access 用の Web コンテナに関する情報	137

表 3-53	Rewriter プロキシのインストールに必要な Identity Server に関する設定情報	138
表 3-54	Portal Server, Secure Remote Access Support 用の Rewriter プロキシに関する設定情報	138
表 3-55	Portal Server, Secure Remote Access の Portal に関する情報	140
表 3-56	Portal Server, Secure Remote Access の証明書に関する情報	141
表 3-57	Web Server 用の管理に関する設定情報	143
表 3-58	Web Server 用のデフォルト Web Server インスタンスに関する設定情報	144
表 3-59	状態ファイルのパラメータ	145
表 3-60	状態ファイルのコンポーネント名	147
表 5-1	インストール前の作業	162
表 5-2	システムチェックの結果	176
表 5-3	コンポーネント製品のフィールドが説明されている場所	180
表 6-1	インストーラのプロンプトに対する応答	186
表 6-2	インストール前の作業	187
表 6-3	コンポーネント製品のフィールドが説明されている場所	196
表 7-1	編集する状態ファイルのパラメータ	205
表 8-1	Java Enterprise System の推奨起動シーケンス	230
表 9-1	Java Enterprise System ログファイル名の形式	248
表 10-1	管理サーバーのアンインストールに関する詳細	268
表 10-2	Application Server のアンインストールに関する詳細	269
表 10-3	Calendar Server のアンインストールに関する詳細	270
表 10-4	Directory Server のアンインストールに関する詳細	271
表 10-5	Directory Proxy Server のアンインストールに関する詳細	272
表 10-6	Identity Server のアンインストールに関する詳細	272
表 10-7	Messaging Server のアンインストールに関する詳細	273
表 10-8	Messaging Server のアンインストールに関する詳細	273
表 10-9	Message Queue のアンインストールに関する詳細	274
表 10-10	Portal Server のアンインストールに関する詳細	275
表 10-11	Portal Server, Secure Remote Access のアンインストールに関する詳細	276
表 10-12	Sun Cluster ソフトウェアのアンインストールに関する詳細	277
表 10-13	Web Server のアンインストールに関する詳細	277
表 10-14	管理サーバーの設定情報	280
表 10-15	Directory Server の管理に関する設定情報	280
表 10-16	Identity Server 用の管理情報	281
表 10-17	アンインストーラのプロンプトに対する応答	287
表 11-1	DIT の計画に関する考慮点	310
表 11-2	ユーザーエントリとオブジェクトクラスの例	314
表 11-3	インストーラの入力値の例	315

表 11-4	コンポーネント製品ごとのオブジェクトクラスと属性の要件	317
表 11-5	LDAP エントリを表示、作成、変更するための選択肢	319
表 11-6	コンポーネント製品のプロビジョニングとスキーマに関するマニュアル	321
表 11-7	コンポーネント製品のプロビジョニングツール	323
表 12-1	プロビジョニングの組み合わせ	330
表 12-2	ネイティブモードのエントリタイプと対応するオブジェクトクラス	338
表 12-3	互換モードのエントリタイプと対応するオブジェクトクラス	339
表 13-1	Messaging Server の SSO パラメータ	354
表 13-2	Calendar Server の SSO パラメータ	355
表 13-3	Instant Messaging の SSO パラメータ	357
表 A-1	共通サーバー設定用ワークシート	368
表 A-2	管理サーバーの設定用ワークシート	369
表 A-3	Application Server の設定用ワークシート	370
表 A-4	Calendar Server の設定用ワークシート	371
表 A-5	Directory Server の設定用ワークシート	371
表 A-6	Directory Proxy Server の設定用ワークシート	373
表 A-7	Application Server に配備された Identity Server の設定用ワークシート	374
表 A-8	Web Server に配備された Identity Server の設定用ワークシート	378
表 A-9	Application Server に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート	380
表 A-10	Web Server に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート	384
表 A-11	BEA WebLogic に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート	387
表 A-12	IBM WebSphere に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート	390
表 A-13	Identity Server の配備後に Application Server に配備された Portal Server の設定用ワークシート	393
表 A-14	Identity Server の配備後に Web Server に配備された Portal Server の設定用ワークシート	394
表 A-15	Instant Messaging の設定用ワークシート	395
表 A-16	Messaging Server の設定用ワークシート	396
表 A-17	単一セッションインストールでの Portal Server SRA Support の設定用ワークシート	396
表 A-18	複数セッションインストールでの Portal Server SRA Support の設定用ワークシート	397
表 A-19	Portal Server, SRA ゲートウェイの設定用ワークシート	398
表 A-20	Portal Server, SRA Netlet プロキシの設定用ワークシート	399
表 A-21	Portal Server, SRA Rewriter プロキシの設定用ワークシート	401
表 A-22	Web Server の設定用ワークシート	403
表 B-1	Java Enterprise System インストーラのコマンド行オプション	405
表 B-2	インストーラオプションの使用	406
表 B-3	Java Enterprise System アンインストーラのコマンド行オプション	407

表 B-4	アンインストーラオプションの使用	408
表 C-1	コンポーネント製品のポート番号	409
表 D-1	アンインストーラのパッケージ	413
表 D-2	管理サーバーのパッケージ	414
表 D-3	Application Server のパッケージ	414
表 D-4	Calendar Server のパッケージ	415
表 D-5	Directory Server のパッケージ	415
表 D-6	Identity Server のパッケージ	416
表 D-7	Instant Messaging のパッケージ	416
表 D-8	Message Queue のパッケージ	417
表 D-9	Messaging Server のパッケージ	417
表 D-10	Portal Server のパッケージ	418
表 D-11	Portal Server SRA のパッケージ	419
表 D-12	Sun Cluster ソフトウェアとエージェントのパッケージ	419
表 D-13	Sun Cluster ソフトウェアエージェントのパッケージ	420
表 D-14	Web Server のパッケージ	420
表 D-15	共有コンポーネントのパッケージ	421
表 D-16	パッケージ名に含まれる言語略号	422
表 D-17	簡体字中国語にローカライズされたパッケージ	423
表 D-18	繁体字中国語にローカライズされたパッケージ	424
表 D-19	フランス語にローカライズされたパッケージ	426
表 D-20	ドイツ語にローカライズされたパッケージ	427
表 D-21	日本語にローカライズされたパッケージ	429
表 D-22	韓国語にローカライズされたパッケージ	430
表 D-23	スペイン語にローカライズされたパッケージ	432
表 E-1	Java Enterprise System の配布用 DVD に含まれる項目の説明	436
表 F-1	Solaris SPARC の配布内容	439
表 F-2	Solaris X86 の配布内容	440
表 G-1	Messaging Server ユーザーの一般的な LDAP エントリ	448

手順一覧

グラフィカルインストーラを使用してコンポーネントのアップグレードの必要性を判断するには.....	70
グラフィカルインストーラを使用してコンポーネントのアップグレードの必要性を判断するには.....	164
グラフィカルインストーラを起動するには.....	166
インストールの言語を選択するには.....	167
コンポーネントを選択するには.....	168
インストーラを使用して選択内容を確認するには.....	171
コンポーネント製品をアップグレードするには.....	172
共有コンポーネントをアップグレードするには.....	172
インストールディレクトリを指定し、システムチェックを開始するには.....	174
設定の種類を指定するには.....	176
共通サーバー設定を指定するには.....	177
個々のコンポーネント製品を設定するには.....	179
インストールの準備が完了していることを確認するには.....	181
製品を登録し、ソフトウェアのインストールを開始するには.....	182
インストールをキャンセルするには.....	182
インストールセッションを終了するには.....	182
製品を後から Sun に登録するには.....	183
テキストベースのインストーラを使用してコンポーネントのアップグレードの必要性を判断するには.....	189
テキストベースのインストーラを起動するには.....	191
インストールの言語を選択するには.....	192
コンポーネントを選択するには.....	192
依存に関する問題を解決するには.....	194
インストールディレクトリを指定し、システムチェックを開始するには.....	195
設定の種類を選択するには.....	195
設定データを指定するには.....	195

インストールの準備が完了していることを確認するには	197
ソフトウェアをインストールするには	197
製品を Sun に登録するには	198
状態ファイルを生成するには	203
インストーラを使用して状態ファイル ID を生成するには	207
プラットフォーム固有の配布ファイルを使用して状態ファイル ID を生成するには	207
サイレントモードでインストーラを実行するには	208
サイレントインストールの進行状況を監視するには	209
インストール後に Sun Cluster ソフトウェアを設定するには	214
コンポーネント製品のデータサービスの設定	214
カスタムインストール後の管理サーバーの設定	216
最小インストール後の管理サーバーの設定	216
カスタムインストール後の Application Server の設定	217
最小インストール後の Application Server の設定	218
インストール後の Calendar Server の設定	219
カスタムインストール後の Directory Server の設定	220
最小インストール後の Directory Server の設定	220
インストール後の Directory Proxy Server の設定	221
インストール後の Identity Server の設定	222
参照整合性検査プラグインの有効化	223
Identity Server インデックスの追加	223
インストール後の Instant Messaging の設定	225
インストール後の Message Queue の設定	225
インストール後の Messaging Server の設定	226
カスタムインストール後の Portal Server の設定	227
最小インストール後の Portal Server の設定	227
カスタムインストール後の Web Server の設定	228
最小インストール後の Web Server の設定	228
管理サーバーの起動	231
管理サーバーの停止	231
コンソールサーバーの起動	232
コンソールサーバーの停止	232
Application Server の起動	232
Application Server のグラフィカルインタフェースへのアクセス	234
Application Server の停止	234
Calendar Server の起動	234
Calendar Server のグラフィカルインタフェースへのアクセス	235

Calendar Server の停止	235
Directory Server の起動	235
Directory Server の停止	236
Directory Proxy Server の起動	236
Directory Proxy Server の停止	236
Identity Server の起動	237
Application Server 上の Identity Server と Portal Server の確認	238
Web Server 上の Identity Server と Portal Server の確認	238
BEA WebLogic 上の Identity Server と Portal Server の確認	239
IBM WebSphere 上の Identity Server と Portal Server の確認	239
Identity Server の停止	239
Instant Messaging の起動	240
Instant Messaging の停止	240
Message Queue の起動	241
Messaging Server の起動	241
Messaging Server の停止	242
Portal Server, Secure Remote Access の起動	243
Portal Server, Secure Remote Access の停止	243
Web Server の起動	243
Web Server のグラフィカルインタフェースへのアクセス	244
Web Server の停止	244
部分的なインストールをクリーンアップするには	252
アンインストーラを起動するには	282
アンインストールするコンポーネント製品を選択するには	284
コンポーネントの選択を変更するには	286
アンインストーラを起動するには	288
アンインストールするコンポーネント製品を選択するには	288
コンポーネントの選択を変更するには	289
アンインストールサマリおよびログを表示するには	290
状態ファイルを生成するには	291
サイレントモードでアンインストーラを実行するには	292
サイレントアンインストールの進行状況を監視するには	293
単一のインスタンスでインストールされている Identity Server を再起動するには	294
複数のインスタンスでインストールされている Identity Server を再起動するには	295
パッケージを手動でクリーンアップするには	299
管理サーバーまたは Directory Server のアンインストールに関するトラブルシューティングと アンインストールの完了	301
CoS の作成例	349

SSO をサポートするように Messaging Server を設定するには.....	353
SSO をサポートするように Calendar Server を設定するには	355
SSO をサポートするように Instant Messaging を設定するには.....	357
Messaging Server、Calendar Server、および Instant Messaging の SSO 動作を確認するには .	358
SSO のトラブルシューティング	358
SSO アダプタテンプレートを編集するには	363
Portal Server で Messaging Server と Calendar Server のプロキシ認証を設定するには.....	363
プロキシ認証が機能することを確認するには	364
共有ディレクトリでインストールイメージを利用できるようにするには	438
サンプルの Java Enterprise System ユーザーを作成するには	449
新しいサービスを Identity Server にインポートするには	457
新しいサービスを組織に登録するには	458
新しいサービスをユーザーに割り当てるには	459
各ユーザーにサービスを設定するには	459

はじめに

『Java Enterprise System インストールガイド』には、Sun Java™ Enterprise System ソフトウェアのインストールに必要な情報が記載されています。Java Enterprise System のリリースは、Solaris™ オペレーティングシステム (SPARC Platform Edition または X86 Platform Edition) でサポートされます。

この章で説明する項目は次のとおりです。

- 対象読者
- 本書の構成
- マニュアルの使用
- 表記規則
- Web 上の参考資料
- お問い合わせ先
- ご意見、ご要望の送付先

このマニュアルで解説しているタスクを実行する前に、『Java Enterprise System リリースノート』をお読みください。

対象読者

このマニュアルは、Java Enterprise System ソフトウェアをインストールする評価担当者、システム管理者、およびインストール技術者を対象としています。

このマニュアルは、次の事項に習熟している方を対象に記述されています。

- エンタープライズレベルのソフトウェア製品をインストールする方法
- UNIX オペレーティングシステム
- クライアント/サーバーモデル

- クラスタリングモデル (Sun Cluster ソフトウェアをインストールする場合)
- インターネットと World Wide Web

本書の構成

このマニュアルは、3つの部分に分かれています。

- **第1部「インストール」**
第1部の各章では、インストール前の計画、製品コンポーネントのアップグレード、インストーラおよびアンインストーラプログラムの使用、トラブルシューティング、正常なインストールの検証について説明します。
- **第2部「管理」**
第2部の各章では、シングルサインオンやユーザーのプロビジョニングなど、最初のコンポーネント間管理タスクについて説明します。
- **第3部「付録」**
第3部の付録では、インストール時に使用するワークシート、コンポーネント別にインストールされるパッケージのリスト、配布内容のディレクトリレイアウトの詳細などの参照情報を提供します。

マニュアルの使用

Java Enterprise System のマニュアルは、PDF (Portable Document Format) 形式および HTML (Hypertext Markup Language) 形式のオンラインファイルとして用意されています。どちらの形式のファイルも、障害を持つユーザーにも参照可能です。Sun のマニュアルには、次の Web サイトからアクセスできます。

[http://docs/sun.com](http://docs.sun.com)

Java Enterprise System のマニュアルには、システム全体に関する情報と、そのコンポーネント製品に関する情報が含まれます。このマニュアルには次の場所からアクセスできます。

<http://docs.sun.com/prod/entsys.03q4?l=ja>

次の表は、Java Enterprise System 全体について解説したマニュアルを示しています。左の列はマニュアル名です。右の列は、各マニュアルの概要を示しています。

表 1 システム全体に関するマニュアル

マニュアル名	内容
『Java Enterprise System リリースノート』 http://docs.sun.com/doc/817-4235?=ja	既知の問題など、Java Enterprise System に関する最新の情報が記載されています。これ以外に、コンポーネント製品ごとにリリースノートがあります。
『Java Enterprise System Roadmap』 http://docs.sun.com/doc/817-4715	Java Enterprise System に関するマニュアルについて説明しています。ここからコンポーネント製品に関連するマニュアルにリンクすることができます。
『Java Enterprise System Technical Overview』 http://docs.sun.com/doc/817-5085	Java Enterprise System のマニュアルで使用される技術概念と用語について説明します。Java Enterprise System、そのコンポーネント、および分散型のエンタープライズアプリケーションをサポートする役割について解説します。また、ライフサイクルの概念(システム配備に関する序論を含む)についても説明します。
『Java Enterprise System インストールガイド』 http://docs.sun.com/doc/817-4242?=ja	Java Enterprise System のインストールプロセスについて解説します。インストールするコンポーネント製品を選択する方法、インストールするコンポーネント製品を設定する方法、インストールしたソフトウェアが正常に機能するかどうかを検証する方法について説明します。また、ユーザーのプロビジョニングやシングルサインオンの設定など、基本的な管理タスクの実行方法についても説明します。
『Java Enterprise System Glossary』 http://docs.sun.com/doc/816-6873	Java Enterprise System のマニュアルで使用される用語を定義しています。

表記規則

次の表は、このマニュアルで使用される文字表記の規則を示しています。

表 2 文字表記の規則

表記	意味	例
AaBbCc123 (モノスペース)	API および言語の要素、HTML タグ、Web サイトの URL、コマンド名、ファイル名、ディレクトリパス名、画面出力の表示、サンプルコード	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 % You have mail.
AaBbCc123 (太字のモノスペース)	画面出力の表示に対し、ユーザーが入力する文字	% su Password:
AaBbCc123 (イタリック)	実際の名前や値に置き換えられるコマンド行変数	ファイルは、 <i>is_svr_base</i> /bin ディレクトリに格納されています。
『』	参照する書名	『ユーザーズガイド』の第 6 章を参照してください
「」	参照する章、節、ボタンやメニュー名、強調する単語	第 8 章「インストール後の設定と起動」を参照してください

次の表は、このマニュアルで使用される可変部分の表記規則を示しています。

表 3 可変部分の表記規則

項目	意味	例
<i>product_base</i>	製品をインストールするディレクトリを表わす	次に <i>is_svr_base</i> /bin ディレクトリの例を示します。 /opt/SUNWam/bin

次の表は、このマニュアルで使用される記号の表記規則を示しています。

表 4 記号の表記規則

記号	意味	表記法	例
[]	省略できるコマンドオプションを含む	O[n]	-O4, -O

表 4 記号の表記規則 (続き)

記号	意味	表記法	例
{ }	必須コマンドオプションの選択肢を含む	d{y n}	-dy
	コマンドオプションの選択肢を区切る		
+	グラフィカルユーザーインタフェースで使用されるキーボードショートカットで、同時に押すキーを連結する		Ctrl+A
-	グラフィカルユーザーインタフェースで使用されるキーボードショートカットで、連続して押すキーを連結する		Esc-S
>	グラフィカルユーザーインタフェースで選択するメニュー項目を示す		「ファイル」>「新規」 「ファイル」>「新規」 >「テンプレート」

Web 上の参考資料

次の場所には、Java Enterprise System およびそのコンポーネント製品に関する情報が用意されています。

<http://www.sun.com/software/learnabout/enterprisesystem/index.html>

このマニュアルには、補足的な関連情報を提供するために、サードパーティの URL も記載されています。

注 Sun は、このマニュアルに記載されているサードパーティの Web サイトが利用可能かどうかについて責任を負いません。Sun は、このようなサイトまたはリソースで得られるあらゆる内容、広告、製品、およびその他の資料を保証するものではなく、責任または義務を負いません。Sun は、このようなサイトまたはリソースで得られるあらゆるコンテンツ、製品、またはサービスによって生じる、または使用に関連して生じる、または信頼することによって生じる、または生じたと主張される、いかなる損害または損失についても責任または義務を負いません。

お問い合わせ先

Java Enterprise System の使用にあたって問題が発生した場合は、次のいずれかの方法で Sun のカスタマーサポートに連絡してください。

- Sun Software Support サービス

<http://www.sun.com/service/sunone/software>

このサイトには、「Knowledge Base」、「Online Support Center」、および「ProductTracker」へのリンクがあります。また、保守プログラム、およびサポートの問い合わせ先電話番号を参照することもできます。

- 保守契約に規定されている緊急電話番号

できるだけ適切に問題に対処するために、お問い合わせの際には次の情報をお知らせください。

- 問題の詳細な内容 (発生状況や業務への影響の度合など)
- 使用しているマシンの種類、オペレーティングシステムのバージョン、製品のバージョン (すべてのパッチや、問題に影響している可能性のあるその他のソフトウェアを含む)
- 問題を再現するための詳細な手順
- エラーログまたはコアダンプ

ご意見、ご要望の送付先

Sun ではマニュアルの品質向上のため、お客様のご意見、ご要望をお受けしております。次の Web ベースの書式を利用して Sun までフィードバックをお寄せください。

<http://www.sun.com/hwdocs/feedback/>

各フィールドにマニュアルの正式名称と Part No. をご記入ください。Part No. は、マニュアルのタイトルページまたは最上部に記載されている 7 桁または 9 桁の番号です。たとえば、この『Java Enterprise System インストールガイド』の Part No. は、817-4242-10 です。

概要

この章では、Sun Java™ Enterprise System および Java Enterprise System インストーラの概要について説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- [Java Enterprise System とは](#)
- [Java Enterprise System インストーラのしくみ](#)
- [Java Enterprise System ソフトウェアの入手方法](#)

Java Enterprise System とは

Java Enterprise System は Sun のサーバー側製品を 1 つのソフトウェアシステムに統合し、分散型のエンタープライズアプリケーションのサポートに必要な、統合されたサーバーソフトウェアを提供します。今回のリリースは、SPARC プラットフォームで稼動する Sun Solaris™ 8、9 オペレーティングシステム、および X86 プラットフォームで稼動する Solaris 9 オペレーティングシステムで利用できます。

Java Enterprise System の基本を理解するために、次の各節をお読みください。

- [Java Enterprise System を使用する利点](#)
- [エンタープライズネットワークサービスとは](#)
- [コンポーネント製品とは](#)
- [共有コンポーネントとは](#)
- [Java Enterprise System で利用できる言語](#)

Java Enterprise System 技術の完全な解説は、『Java Enterprise System Technical Overview』(<http://docs.sun.com/doc/817-5085>)に記載されています。

Java Enterprise System を使用する利点

Java Enterprise System を使用するすべての企業は、それぞれが異なるシステム動作を求めています。この動作は、Java Enterprise System がサポートしているアプリケーションの種類、ユーザー数、使用できるハードウェアの種類などの条件によって異なります。各組織からの異なる要求に対応できるように、Java Enterprise System のコンポーネントはさまざまな方法でインストールおよび設定することができます。

Java Enterprise System には次のような利点があります。

- **共通のコンポーネントと共通のインストーラ**：相互動作の保証と、配備までの時間の短縮
- **共有製品コンポーネント**：ネットワークのアーキテクチャと管理の単純化
- **共有技術コンポーネント**：システム保守の改善
- **オープンな業界標準**：相互動作と統合の改善。サードパーティ製品と社内開発の統合と、機能の拡張
- **シングルサインオン**：統合、効率、利便性の改善
- **Directory Server の共通データスキーマ**：データの整合性の維持

エンタープライズネットワークサービスとは

エンタープライズネットワークサービスは、企業がビジネスアプリケーションを開発、配備、運用する上で必要となるエンタープライズインフラストラクチャソフトウェアから構成されます。これは、従来のオペレーティングシステム (Solaris オペレーティングシステムなど) とビジネスアプリケーションの間に設置されるソフトウェア層です。

Java Enterprise System には、次のエンタープライズネットワークサービスが含まれます。

- **ポータルサービス**：ユーザーコミュニティに対して、時間と場所を問わないアクセス、および個人用のカスタマイズ、集計、セキュリティ、統合、モバイルアクセス、検索などの機能を提供します。ポータルサービスを利用することで、モバイル従業員、在宅勤務者、知識労働者、パートナー企業、仕入先、および顧客が、社内ネットワークの外からインターネットまたはエクストラネット経由で個人向けにカスタマイズされた企業ポータルにセキュリティ保護された状態でアクセスすることができます。
- **通信サービスと共同作業サービス**：多様なユーザーコミュニティ間で情報を安全に交換することができます。具体的な機能には、ユーザーのビジネス環境で使用するメッセージング、リアルタイムの共同作業、カレンダー機能とスケジュール機能などがあります。

- **ネットワークアイデンティティサービス**：グローバルベースのすべてのコミュニティ、アプリケーション、サービスの間で適切なアクセス制御が確実に適用されるようにすることで、企業の主要情報資産のセキュリティと保護が向上します。これらのサービスは、ID プロファイル、アクセス特権、アプリケーションおよびネットワークリソースの情報を格納、管理するリポジトリと連携して機能します。
- **Web サービスとアプリケーションサービス**：IT 企業は、広範な種類のサーバー、クライアント、その他デバイス用のアプリケーションを開発、配備、管理することができます。これらのサービスは J2EE™ (Java 2 Platform, Enterprise Edition) 技術に基づいているので、アプリケーションの再利用性と開発者の共同作業を最大限可能にします。
- **可用性サービス**：アプリケーションサービスレベルの管理にユニークなアプローチを提供します。可用性サービスは、アプリケーションサービスと Web サービスのための特許技術「Always-On」も提供し、極めて高い品質のサービスと強力なスケーラビリティを提供します。Always-On 技術では、アプリケーションセッション状態のデータは同時にレプリケートされるため、アプリケーションセッション状態データをほぼ連続して使用することができます。従来のリレーショナルデータベースとは異なり、管理やハードウェア要件は要求されません。
- **セキュリティサービス**：最新のセキュリティ標準や柔軟性の高い認証およびアクセス制御オプションを使用して、システム全体でコンテンツを保護します。企業ポータルを遠隔地の従業員やモバイル従業員、パートナー企業にまで安全に拡張することができます。従来の仮想プライベートネットワーク (VPN) ソリューションとは異なり、管理コストや保守コストが追加で必要になることはありません。

一貫性のあるシステムアーキテクチャ、システムレベルの機能を実現し、ユーザーの経験を生かすために、これらのサービスがすべて活用されます。1つまたは複数のネットワークサービスを選択して配備することもできます。それぞれのネットワークサービスが多数のコンポーネント製品から構成されることもあります。

コンポーネント製品とは

Sun ONE (Sun Open Network Environment) および Sun Cluster コンポーネント製品は、分散型のエンタープライズアプリケーションのサポートに必要なインフラストラクチャサービスを提供します。次のコンポーネント製品があります。

- [Sun Cluster 3.1 と Sun ONE 用 Sun Cluster エージェント](#)
- [Sun ONE Administration Server 5.2](#)
- [Sun ONE Application Server 7 Update 1、Standard Edition と Platform Edition](#)
- [Sun ONE Calendar Server 6.0](#)
- [Sun ONE Directory Server 5.2](#)
- [Sun ONE Directory Proxy Server 5.2](#)
- [Sun ONE Identity Server 6.1](#)
- [Sun ONE Instant Messaging 6.1](#)
- [Sun ONE Message Queue 3.0.1 Service Pack 2、Enterprise Edition と Platform Edition](#)
- [Sun ONE Messaging Server 6.0](#)
- [Sun ONE Portal Server 6.2](#)
- [Sun ONE Portal Server, Secure Remote Access 6.2](#)
- [Sun ONE Web Server 6.1](#)

次の各項では、これらのコンポーネント製品と、インストール可能なコンポーネントについて簡単に説明します。

コンポーネント製品のマニュアルを探すには、『Java Enterprise System Roadmap』(<http://docs.sun.com/doc/817-4715>) を参照してください。

Sun Cluster 3.1 と Sun ONE 用 Sun Cluster エージェント

Sun Cluster ソフトウェアは、SunPlex™ システムのコンポーネントです。SunPlex システムは、Solaris オペレーティングシステムをクラスタオペレーティングシステムにまで拡張する、ハードウェアおよび Sun Cluster ソフトウェアの統合化ソリューションです。クラスタまたはプレックスは、緩やかに結合したコンピューティングノードのコレクションで、データベース、Web サービス、ファイルサービスなどのネットワークサービスまたはアプリケーションの単一のクライアントビューを提供します。

クラスタの設定後に、データサービス用の Sun Cluster エージェントとアプリケーションをクラスタにインストールして設定することで、可用性の高いデータサービスを作成します。たとえば、高可用性 Messaging Server データサービスを作成するには、Messaging Server 用の Sun Cluster エージェントと Messaging Server コンポーネント製品をインストールして設定します。

Java Enterprise System インストーラでは、Sun Cluster コアおよび Sun ONE 用 Sun Cluster エージェントが、個別にインストール可能なコンポーネントとして提供されます。

注 Sun Cluster の実装には、その他の Java Enterprise System コンポーネントで使用されるプロセスへの多数の例外が含まれます。必要なタスクの概要については、59 ページの「Sun Cluster ソフトウェアを使用した高可用性」を参照してください。

Sun ONE Administration Server 5.2

Sun ONE Administration Server (管理サーバー) を使用すると、企業内の Sun ONE サーバソフトウェアを管理できます。これは、サーバーコンソールおよび管理サーバーコンポーネントで構成されます。

- **管理サーバー**：同一のルートディレクトリ内のサーバーグループにインストールされたサーバーの要求を処理して、要求の実行に必要なプログラムを起動します。
- **サーバーコンソール**：ネットワーク上の Directory Server インスタンスおよび管理サーバーインスタンスと連動して機能するスタンドアロンの Java アプリケーションです。これは、企業内の Sun ONE ソフトウェアのフロントエンド管理アプリケーションとして動作します。

Java Enterprise System インストーラではサーバーコンソールと管理サーバーは、まとめてインストール可能な 1 つのコンポーネントとして提供されます。

Sun ONE Application Server 7 Update 1

Sun ONE Application Server (Application Server) は、アプリケーションサービスと Web サービスの開発および配備に使用する J2EE 互換プラットフォームを提供します。このサーバーは、リモートメソッドの呼び出しや、その他の実行時サービスなど、密接に結合された分散コンポーネント間で行われる対話用のインフラストラクチャサービスを提供します。

- **Standard Edition (デフォルト)**：複数のアプリケーションサーバーインスタンスを中央の管理ステーションから管理できます。Web サーバー層のプロキシを通じて Web アプリケーショントラフィックを分割する機能も含まれます。管理ドメインごとに複数のアプリケーションサーバーインスタンスの設定がサポートされます。Standard Edition アプリケーションサーバーの監視には SNMP を使用できます。

- **Platform Edition** : 1つのアプリケーションサーバーインスタンス、つまり、Java プラットフォーム用の1つの仮想マシン (Java 仮想マシン、JVM™) に限定されます。複数層の配備トポロジがサポートされますが、Web サーバー層のプロキシはロードバランスを行いません。管理ユーティリティは、ローカルクライアントだけに限定されます。
- **アプリケーションサーバー管理クライアント** : Sun ONE Application Server のインストールと、ホストするアプリケーションの管理、設定に使用するグラフィカルクライアント、およびコマンド行管理クライアントを提供します。また、アプリケーションの配備も支援します。

Java Enterprise System インストーラでは、Application Server はインストール可能な単一のコンポーネントとして提供されます。さらに、以下の Application Server サブコンポーネントを、別個にインストールできます。

- アプリケーションサーバーコア (Standard Edition または Platform Edition)
- アプリケーションサーバー管理クライアント
- PointBase Server 4.2

Sun ONE Calendar Server 6.0

Sun ONE Calendar Server (Calendar Server) は、企業およびサービスプロバイダ向けの一元化されたカレンダー機能およびスケジュール機能を提供するスケーラブルな Web ベースのソリューションです。Calendar Server は、個人およびグループのカレンダー機能に加え、会議室や機器などのリソースのカレンダー機能をサポートします。

Java Enterprise System インストーラでは、Calendar Server はインストール可能な単一のコンポーネントとして提供されます。

Sun ONE Directory Server 5.2

Sun ONE Directory Server (Directory Server) が提供するディレクトリ サービスを利用すると、イントラネット、ネットワーク、およびエクストラネットの情報を一元管理できます。Directory Server は既存のシステムに統合され、従業員、顧客、仕入先、およびパートナー企業の情報の統合化に対応した集中的リポジトリとして動作します。Directory Server を拡張することで、ユーザーのプロファイルや設定情報、およびエクストラネットのユーザー認証を管理できます。

Java Enterprise System インストーラでは、Directory Server はインストール可能な単一のコンポーネントとして提供されます。

Sun ONE Directory Proxy Server 5.2

Sun ONE Directory Proxy Server (Directory Proxy Server) は、e- コマースソリューションに対応したミッションクリティカルなディレクトリサービスの中心的なコンポーネントです。Directory Proxy Server は、アプリケーション層のロードバランスおよびフェイルオーバー機能を利用して、強化されたディレクトリアクセス制御、スキーマ互換性、および高可用性を提供する、LDAP アプリケーション層のプロトコルゲートウェイです。

Java Enterprise System インストーラでは、Directory Proxy Server はインストール可能な単一のコンポーネントとして提供されます。

Sun ONE Identity Server 6.1

Sun ONE Identity Server (Identity Server) は、企業が Web ベースのサービスおよび Web ベースでないアプリケーションを使用する顧客、従業員、およびパートナーのデジタル ID の保守プロセスを管理するためのインフラストラクチャを提供します。これらのリソースは内部および外部の広範なコンピューティングネットワークで利用される可能性があるため、ID ごとに属性、ポリシー、資格付与が定義され、適用されて、これらのテクノロジーへのアクセスが管理されます。

- **Identity Server 管理コンソール** : アイデンティティサービスとポリシー管理を統合したグラフィカルインタフェースで、ユーザーが Sun ONE Directory Server でユーザーアカウント、サービス属性、アクセス規則を作成、管理するための単一インタフェースとなります。
- **連携管理の共有ドメインサービス** : ユーザーは、複数の関連するサービスプロバイダが提供するアプリケーションに、単一の ID でアクセスできます。
- **Identity Server SDK** : 開発者が企業の要求に合わせて Identity Server をカスタマイズする上で必要となるツールとテンプレートを提供します。

Java Enterprise System インストーラでは、Identity Server はインストール可能な単一のコンポーネントとして提供されます。さらに、以下の Identity Server サブコンポーネントを、別個にインストールできます。

- アイデンティティ管理およびポリシーサービスコア
- Identity Server 管理コンソール
- 連携管理の共有ドメインサービス
- Identity Server SDK

Sun ONE Instant Messaging 6.1

Sun ONE Instant Messaging (Instant Messaging) を使用すると、Web クライアントがインスタントメッセージやチャットセッションに参加したり、互いに警告メッセージを送信したり、グループのニュースをすぐに共有することが可能になります。これは、イントラネットとインターネットの両方で活用できます。

Java Enterprise System インストーラでは、Instant Messaging はインストール可能な単一のコンポーネントとして提供されます。さらに、以下の Instant Messaging サブコンポーネントを、別個にインストールできます。

- インスタントメッセージングサーバーコア
- インスタントメッセージングリソース
- アイデンティティサーバーインスタントメッセージングサービス

Sun ONE Message Queue 3.0.1 Service Pack 2

Sun ONE Message Queue (Message Queue) は、アプリケーション間通信および信頼性の高いメッセージ配信に対応した標準ベースのソリューションです。Message Queue は、オープン標準規格である JMS (Java Message Service) を実装する企業向けのメッセージングシステムであり、JMS プロバイダです。さらに、Message Queue の機能は JMS 仕様の最小要件を満たしています。

Message Queue ソフトウェアを使用することで、異なるプラットフォームおよびオペレーティングシステム上で稼動するプロセスが共通の Message Queue メッセージサービスに接続して、情報を送受信できます。アプリケーション開発者は、ネットワーク間の通信方法に関する低レベルの詳細に注意を奪われることなく、アプリケーションのビジネスロジックに集中して作業を行うことができます。

- **Enterprise Edition** (デフォルト): HTTP/HTTPS のサポート、拡張されたスケーラビリティ、セキュリティ機能を提供します。大規模な配備に適しています。
- **Platform Edition**: 基本的な JMS のサポートを提供します。小規模な配備および開発環境に適しています。

Java Enterprise System インストーラでは、Message Queue Enterprise Edition および Message Queue Platform Edition は個別にインストール可能なコンポーネントとして提供されます。

Sun ONE Messaging Server 6.0

Sun ONE Messaging Server (Messaging Server) は、企業およびサービスプロバイダの両方に対応した、強力かつ標準ベースのインターネットメッセージングサーバーです。Messaging Server は、大容量かつ信頼性の高いメッセージ処理を目的として設計されています。これは、複数のモジュール (複数の電子メールプロトコルをサポートする個別に設定可能なコンポーネント) から構成されています。

Java Enterprise System インストーラでは、Messaging Server はインストール可能な単一のコンポーネントとして提供されます。

Sun ONE Portal Server 6.2

Sun ONE Portal Server (Portal Server) は、アイデンティティに対応したポータルサーバーソリューションです。これは、セキュリティを保護するユーザー、ポリシー、アイデンティティ管理、および Web アプリケーションのシングルサインオン、エンドユーザーコミュニティへのアクセスの各機能をすべて提供します。また、個人用のカスタマイズ、集計、セキュリティ、統合、検索などの主なポータルサービスを組み合わせます。内部のリソースとアプリケーションへのセキュリティ保護されたリモートアクセスを実現する独自の機能により、従業員、企業、消費者向けの堅牢なポータル配備のための完全なポータルプラットフォームとなっています。

Java Enterprise System インストーラでは、Portal Server はインストール可能な単一のコンポーネントとして提供されます。

Sun ONE Portal Server, Secure Remote Access 6.2

Sun ONE Portal Server, Secure Remote Access (Portal Server, Secure Remote Access) は、Portal Server の機能を拡張し、リモートのブラウザからの Portal Server コンテンツおよびサービスへのセキュリティ保護されたリモートアクセスを提供します。Portal Server, Secure Remote Access は、Java テクノロジーに対応した任意のブラウザを使用してアクセス可能な、費用効果の高い、セキュリティ保護されたアクセスソリューションです。ユーザーは、クライアントソフトウェアを用意する必要はありません。Portal Server との統合により、ユーザーはアクセス権を持つコンテンツやサービスにセキュリティ保護された暗号を使用してアクセスすることができます。

- **ゲートウェイ**：外部からのリモートアクセスが可能な企業イントラネットにインタフェースとセキュリティバリアを提供します。ゲートウェイは単一のインタフェースにより、内部 Web サーバーとアプリケーションサーバーのコンテンツをリモートユーザーに安全に提供します。
- **Netlet プロキシ**：インターネットなどのセキュリティ保護されていないネットワークを通じて、一般的な TCP/IP サービスを安全に実行できます。Netlet プロキシを使用することで、telnet、SMTP、HTTP、固定ポートアプリケーションなどのアプリケーションを実行できます。
- **Rewriter プロキシ**：Web リンクを転送し、イントラネット Web ページの扱いに関するルールセットを作成することで、イントラネット外から企業イントラネット Web ページへのセキュリティ保護されたアクセスを提供します。

Java Enterprise System インストーラでは、Portal Server, Secure Remote Access はインストール可能な単一のコンポーネントとして提供されます。さらに、以下の Portal Server, Secure Remote Access サブコンポーネントを、別個にインストールできます。

- Secure Remote Access コア

- ゲートウェイ
- Netlet プロキシ
- Rewriter プロキシ

Sun ONE Web Server 6.1

Sun ONE Web Server (Web Server) は、オープン標準規格に基づいて構築された、マルチプロセスかつマルチスレッド対応のセキュリティ保護された Web サーバーです。また、あらゆる規模の企業に適用可能な高い性能、信頼性、スケーラビリティ、および管理能力を提供します。JDK 1.4.1、Java Servlet 2.3、JavaServer Pages™ (JSP™) 1.2、HTTP/1.1、PKCS #11、FIPS-140、168 ビットステップアップ証明書、その他のさまざまなセキュリティベース標準など、広範な Web ソフトウェア標準がサポートされます。

Java Enterprise System インストーラでは、Web Server はインストール可能な単一のコンポーネントとして提供されます。

共有コンポーネントとは

共有コンポーネントは、コンポーネント製品が依存するローカルサービスとテクノロジーサポートを提供します。コンポーネント製品をインストールすると、そのコンポーネントに必要な共有コンポーネントがインストールされていない場合に、Java Enterprise System インストーラは自動的にこれらのコンポーネントをインストールします。

Java Enterprise System には次の共有コンポーネントが含まれます。

- Ant (Jakarta ANT Java/XML ベースの構築ツール)
- Apache Common Logging
- ICU (International Components for Unicode)
- J2SE™ platform 1.4.1_06 (Java 2 Platform, Standard Edition)
- JAF (JavaBeans™ Activation Framework)
- JATO (Sun ONE Application Framework)
- JavaHelp™ Runtime
- JAXM (Java API for XML Messaging) Client Runtime
- JAXP (Java API for XML Processing)
- JAXR (Java API for XML Registries)
- JAX-RPC (Java APIs for XML-based Remote Procedure Call)

- JSS (Java Security Services)
- KT 検索エンジン
- LDAP C Language SDK
- NSPR (Netscape Portable Runtime)
- NSS (Network Security Services)
- SAAJ (SOAP with Attachments API for Java)
- SASL (Simple Authentication and Security Layer)
- XML C Library (libxml)

注 Application Server と Directory Server では、システムに Perl も必要になりますが、これは Java Enterprise System の共有コンポーネントとして自動的にインストールされません。

Java Enterprise System で利用できる言語

Java Enterprise System は、英語のほかに、次の言語に対応しています。

- フランス語
- ドイツ語
- スペイン語
- 韓国語
- 簡体字中国語
- 繁体字中国語
- 日本語

Java Enterprise System インストーラの言語については、[43 ページ](#)の「言語の選択」を参照してください。

Java Enterprise System インストーラのしくみ

Java Enterprise System の共通インストーラは、Solaris の pkgadd コーティリティを使用して Java Enterprise System ソフトウェアをシステムに転送するインストールフレームワークです。インストーラは、グラフィカルモードとテキストベースの対話モード、およびパラメータ駆動型のサイレントインストールモードに対応しています。Java Enterprise System のすべてのコンポーネントは、1つの共通インストーラを使用してインストールされます。

共通のインストーラを使用する利点は次のとおりです。

- インストール、アップグレード、アンインストールのポリシーと動作に一貫性がある
- 共通コンポーネントの重複を回避できる
- 共有コンポーネントのリリースレベルが確実に同一になる

インストール時に、選択したコンポーネント製品の設定を行えます。インストール時に行える設定の範囲は、インストールするコンポーネント製品、および行う設定の種類によって異なります。

インストーラのしくみについて、次の各項でさらに詳しく説明します。

- [インストーラのモード](#)
- [言語の選択](#)
- [すでに存在するソフトウェアの確認](#)
- [依存性の確認](#)
- [設定の種類とパラメータの設定](#)
- [アンインストール](#)
- [インストールの流れ](#)

インストーラのモード

Java Enterprise System のインストールは、対話的に実行することも、再利用可能なスクリプトを使用して実行することもできます。次に、インストーラの3つの実行モードについて説明します。

- **対話的なグラフィカルモード** : Java Enterprise System ソフトウェアのインストールタスクを順に示すグラフィカルウィザードを提供します。
- **対話的なテキストベースモード** : グラフィカルモードと同じ機能を提供しますが、ウィザードを使用する代わりにコマンド行で1行ごとに応答が示されます。
- **サイレントモード** : インストール用の値を記録したファイルを使用します。サイレントインストールを行うには、まず、インストーラを対話的に操作して「状態ファイル」を作成し、次にこの状態ファイルをインストーラへの入力として使用します。

インストールの実行モードの選択については、[72 ページの「インストールモードの選択」](#)を参照してください。

言語の選択

Java Enterprise System コンポーネントは、多数の言語で使用できます。英語のインタフェースに加えて、各言語に翻訳されたインタフェースでコンポーネントをインストールすることができます。

インストーラの言語

対話式インストーラは、オペレーティングシステムのロケール設定で指定されている言語で実行されます。次の言語を利用できます。

- 英語
- フランス語
- ドイツ語
- スペイン語
- 韓国語
- 簡体字中国語
- 繁体字中国語
- 日本語

オペレーティングシステムの言語がこのリストに含まれていない場合、インストーラは英語で実行されます。

コンポーネントの言語

インストーラにより、英語版の Java Enterprise System のコンポーネントがすべて自動的にインストールされます。さらに、コンポーネントパッケージをリスト内のいずれかの言語でインストールできます。オペレーティングシステムの言語がリスト内の言語と一致する場合、その言語がデフォルトでインストール用に選択されます。ただし、別の言語を選択することも可能です。

インストールセッションでは、インストールするすべてのコンポーネントに選択した言語が適用されます。一部のコンポーネントをある言語セットでインストールし、その他のコンポーネントを別の言語セットでインストールする場合は、インストーラを複数回実行します。

以前にインストールしたコンポーネントに対し、インストーラを使用して追加言語パッケージをインストールすることはできません。ただし、`pkgadd` ユーティリティを使用することで、いつでも言語を追加できます。各コンポーネント製品に追加するパッケージについては、[422 ページの「コンポーネント製品用のローカライズされたパッケージ」](#)を参照してください。

すでに存在するソフトウェアの確認

インストール時に、インストーラはすでにインストールされているコンポーネントについて、インストール先のマシンを調べます。

- Java Enterprise System コンポーネント製品がすでにインストールされているかどうか
- インストール済みのコンポーネントは、Java Enterprise System と互換性があるか、アップグレードする必要があるかどうか
- インストール前にアップグレードする必要があるインストール済み共有コンポーネントが存在するかどうか

パッケージベースの方法でインストールされたソフトウェアについては、インストーラを使用して過去にインストールされた製品をリスト表示することができます。実行方法については、[164 ページの「アップグレードが必要なコンポーネントの確認」](#)を参照してください。

多くのシステムでは、J2SE や NSS など、いくつかのバージョンの共有コンポーネントが事前にインストールされています。Java Enterprise System インストーラは、マシンにインストールされている共有コンポーネントを確認します。インストーラは、Java Enterprise System と互換性のないバージョンの共有コンポーネントを検出すると、そのリストを表示します。インストールを続行すると、インストーラにより共有コンポーネントがより新しいバージョンにアップグレードされます。

依存性の確認

インストールしたコンポーネントが正常に機能するように、インストーラはコンポーネント間のチェックを広範囲に行います。この節で説明する内容は次のとおりです。

- [コンポーネント製品の依存性の確認](#)
- [コンポーネントの選択プロセス](#)

コンポーネント製品の依存性の確認

コンポーネントの多くは、主要な独自機能を提供するために、ほかのコンポーネントの存在に依存しています。Java Enterprise System インストーラは、これらの依存性要件を満たすために、依存性をチェックするロジックを備えています。このため、インストーラは、ユーザーの選択に応じて特定のコンポーネントを自動的に選択する場合があります。

たとえば、Portal Server は Identity Server のローカルインスタンスを必要とし、Identity Server は Directory Server のローカルインスタンスまたはリモートインスタンスを必要とします。Portal Server と Identity Server は、両方とも同じ J2EE Web コンテナに配備する必要があります。Sun ONE Application Server、Sun ONE Web Server、IBM WebSphere、BEA WebLogic のいずれか任意の製品を使用して、Portal Server および Identity Server の Web コンテナを提供できます。

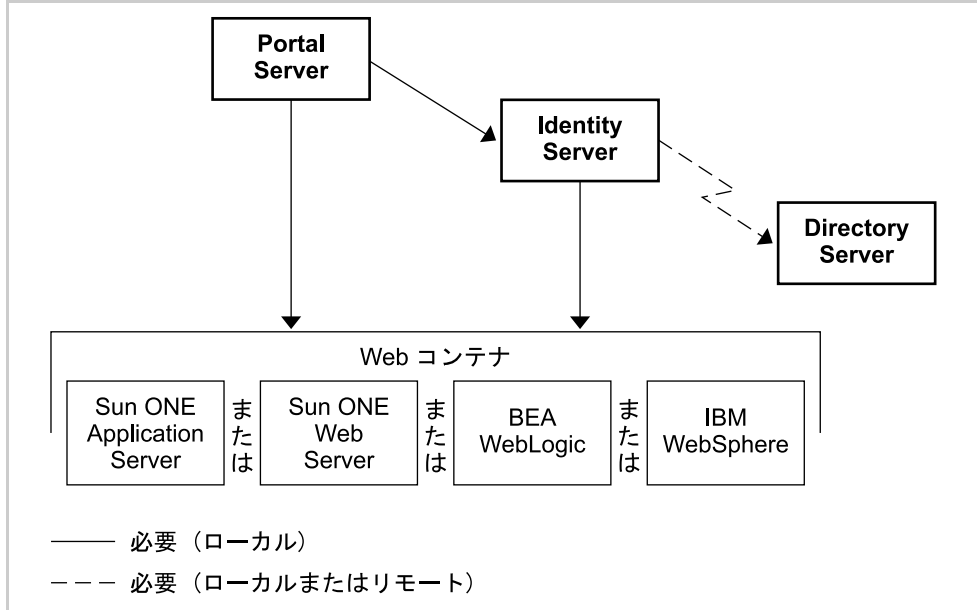
インストーラは、選択したソフトウェアとすでにインストールされているソフトウェアの関係調べます。次に例を示します。

- ユーザーが Portal Server を選択し、互換性のないバージョンの Identity Server がインストールされている場合、インストーラはエラーを生成して、ユーザーによる操作を停止します。
- ユーザーが Identity Server を選択し、Directory Server の選択を解除すると、インストーラは警告を生成しますが、ユーザーは操作を続行できます。

相互依存性の例

次の図は、コンポーネント製品間の依存関係を示しています。この図では、実線はローカルマシン上で満たす必要のある依存性を表します。点線は、リモートで満たす必要のある依存性を表します。

図 1-1 Portal Server の相互依存性



次の表は、Portal Server を選択した場合にインストーラが自動的に選択する内容を示しています。右の列では、各選択に関連するオプションについて説明しています。

表 1-1 Portal Server を選択すると自動的に選択されるコンポーネント

選択するコンポーネント	ユーザーの選択肢
Identity Server	なし。Portal Server をインストールするたびに Identity Server をインストールする必要がある
Directory Server	ネットワーク上で Directory Server のインスタンスを使用可能な場合、Directory Server の選択を解除できる。Directory Server は、インストール時に稼動しており、かつアクセス可能である必要がある
Application Server	Application Server の選択を解除し、Web Server を選択し、Portal Server と Identity Server 用の Web コンテナとして Web Server を使用することができる Application Server に加えて Web Server を選択し、Portal Server と Identity Server 用の Web コンテナとしていずれかを使用することができる Application Server の選択を解除し、Portal Server と Identity Server 用の Web コンテナとして BEA WebLogic または IBM WebSphere を使用することができる。ただし、選択した製品はインストール時に稼動している必要がある

コンポーネントの選択プロセス

Java Enterprise System インストーラによるコンポーネント製品の選択と選択解除は、通常次の規則に従って行われます。

- コンポーネントを選択すると、自動的に依存関係のあるコンポーネントおよびサブコンポーネントが選択されます。

たとえば、Portal Server を選択した場合、自動的に Identity Server と Directory Server が選択されます。これは、Portal Server が Identity Server を必要とし、Identity Server が Directory Server を必要とするためです。
- 選択したコンポーネントがローカルに必要とするコンポーネントを選択解除することはできません。
- 選択したコンポーネントが必要とする場合でも、そのコンポーネントの選択を解除することができます。その場合でも、ネットワーク上で使用可能にしておくことができます。
- サブコンポーネントを選択すると、自動的に上位コンポーネントが選択されます。
- コンポーネントの選択を解除すると、自動的にすべてのサブコンポーネントの選択が解除されます。
- Portal Server または Identity Server のいずれかを選択すると、自動的に Application Server が Web コンテナとして選択されます。Web コンテナとして Web Server を選択した場合、インストーラは Application Server または Message Queue を自動的に選択解除しません。このため、これらのコンポーネントをインストールしない場合は、明示的に選択を解除する必要があります。

インストーラの選択規則には、いくつかの例外があります。

- インストーラは Solaris オペレーティングシステムによって配布される Directory Server のバージョンを調べ、この Solaris の配布の中に含まれている Directory Server のスクリプトの名前がインストーラによって変更されることを警告します。
- インストーラは、Solaris オペレーティングシステムによって配布される Message Queue のバージョンをレポートします。このバージョンのパッケージ名は、Java Enterprise System バージョンのパッケージ名と同じになります。
- パッケージを使ってインストールされていないため、インストーラは Instant Messaging のバージョンを無視します。

設定の種類とパラメータの設定

Java Enterprise System のコンポーネント製品の多くは、インストール時にある程度の設定を行う必要があります。指定する情報は、管理者のユーザー ID やパスワードなどのいくつかの一般的なパラメータだけの場合もあれば、コンポーネントに固有の詳細なパラメータを含む場合もあります。インストールした製品の設定方法は、選択した設定の種類によって異なります。

- **カスタム設定**：インストール時に設定可能なコンポーネント製品を設定できます。
- **最小設定**：インストールに必要な最小限の値だけを入力し、インストール後に詳細な設定を行います。

選択する設定の種類については、[73 ページの「設定の種類を選択」](#)を参照してください。

選択した設定の種類 (カスタムまたは最小) に応じて、インストール時に 2 種類の情報が必要になります。

- **共通サーバー設定**：これは、複数のコンポーネント製品で使用するパラメータです。たとえば、ほとんどのコンポーネント製品では、管理 ID およびパスワードを指定する必要があります。これらの共通の値を設定することで、すべてのコンポーネント製品の管理 ID とパスワードのデフォルト値を設定できます。
- **コンポーネント製品の設定**：これは、特定のコンポーネント製品に適用されるパラメータで、カスタム設定モードを選択した場合、または任意のモードで Identity Server を選択した場合にインストール時の設定が求められます。コンポーネント製品の一部の設定は、共通サーバー設定のページから取り込まれます。

アンインストール

Java Enterprise System には、Java Enterprise System インストーラを使用してシステムにインストールしたコンポーネント製品を消去するためのアンインストールプログラムが用意されています。アンインストールは、アンインストールが実行されているシステムで製品の依存関係をチェックし、他の製品への依存が検出された場合は警告メッセージを出力します。アンインストールは、グラフィカル、テキストベース、またはサイレントモードで実行できます。

Java Enterprise System をインストールすると、`/var/sadm/prod/entsys` にアンインストールがインストールされます。

アンインストールの詳細な使用方法については、[第 10 章「ソフトウェアのアンインストール」](#)を参照してください。

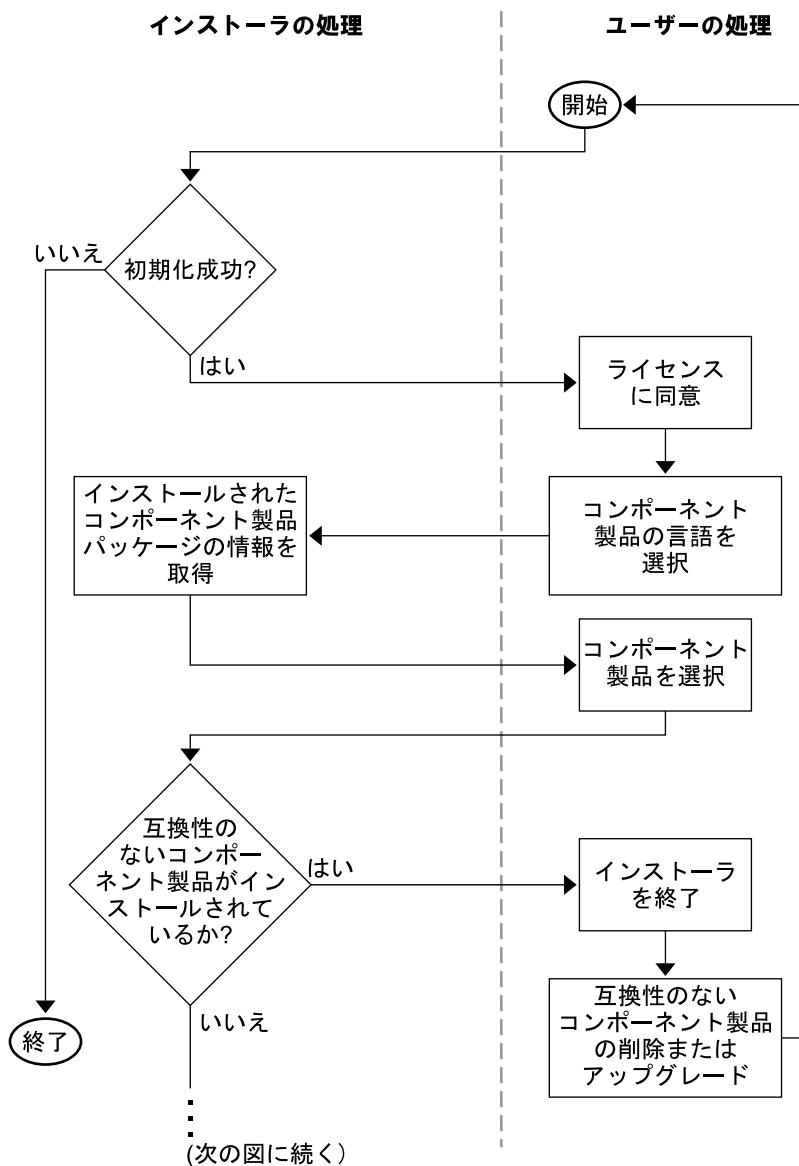
インストールの流れ

インストールの流れは、配備計画や、実装するコンポーネント製品の組み合わせによって異なります。インストール時に実行するタスクセットの詳細については、[58 ページの「インストールの過程」](#)を参照してください。これらのタスクをすべて実行することが必要になる場合も、必要ない場合もあります。

実行するインストールの種類別の高度な例については、[59 ページの「特定の配備要件に適したインストール手順」](#)を参照してください。いずれかの例が計画している実装に近い場合は、この手順をガイドラインとして利用できます。

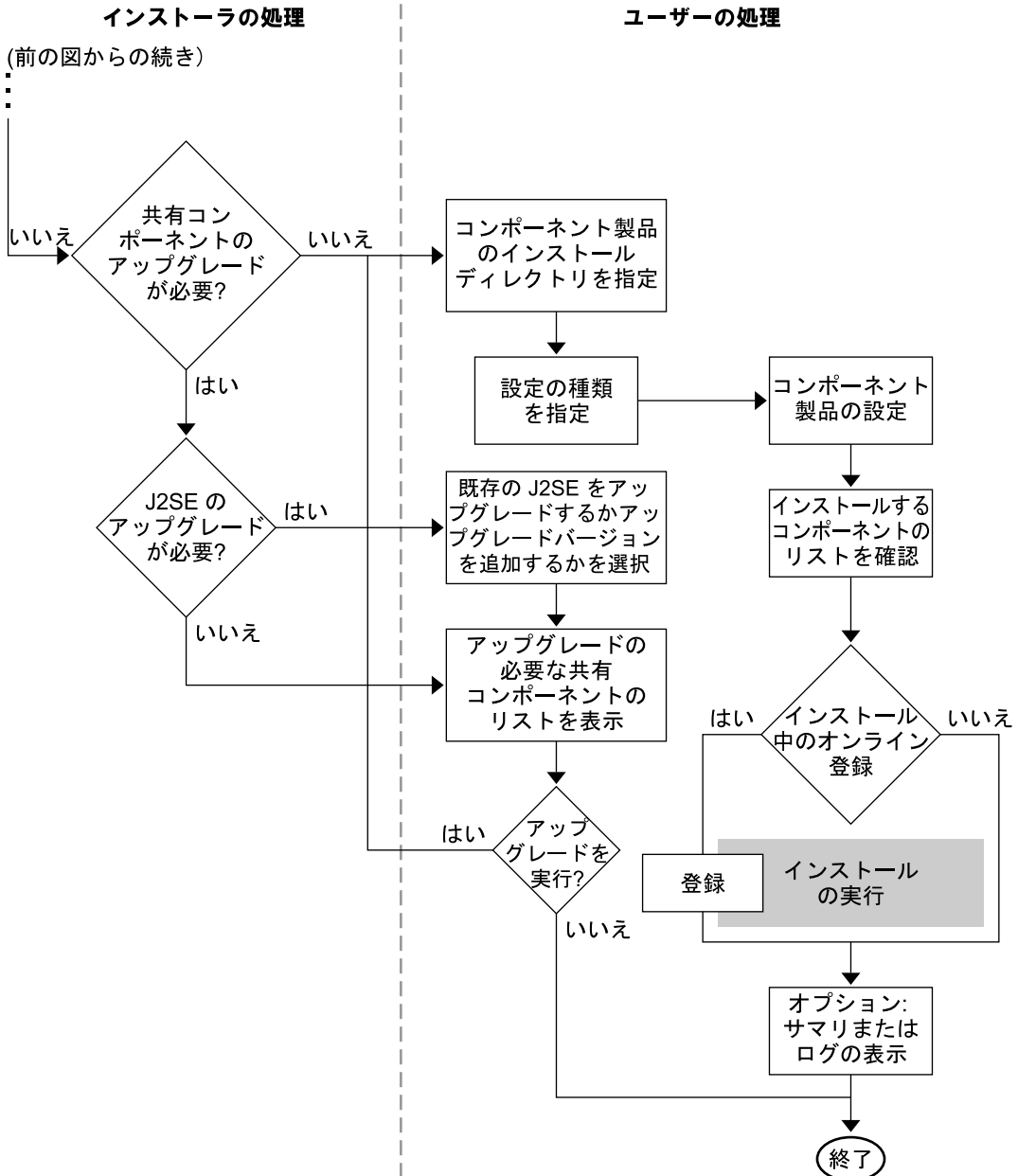
次のフローチャートは、Java Enterprise System の標準的なインストールで実行する主な操作と、意思決定が必要なポイントを示しています。サイズの制約により、図は各部に分割されています。図の左側にインストーラの処理を示し、右側にユーザーの処理を示します。

図 1-2 開始からコンポーネントのアップグレードまでのインストールの流れ



次の図は、図 1-2 の続きです。図 1-2 の下部にある省略記号 (...) は、図 1-3 の上部にある省略記号とつながっています。

図 1-3 共有コンポーネントの互換性チェックから終了までのインストールの流れ



Java Enterprise System ソフトウェアの入手方法

Java Enterprise System ソフトウェアは、次の方法で入手できます。

- **CD または DVD**

ご購入先または <http://www.sun.com> から CD または DVD を含むメディアキットを入手できます。各 CD には、単一のオペレーティングシステム (Sun Solaris SPARC または Solaris x86) 用の、Java Enterprise System インストーラプログラム、およびすべてのコンポーネント製品のインストールファイルが収録されています。DVD には、すべてのオペレーティングシステム用の、Java Enterprise System インストーラプログラム、およびすべてのコンポーネント製品のインストールファイルが収録されています。

一部の Solaris 9 メディアキットには、CD または DVD に収録されている Java Enterprise System ソフトウェアがすでに含まれています。

- **Web ダウンロード**

Sun Download Center (<http://www.sun.com/download>) では、Java Enterprise System ソフトウェアをいくつかの形式でダウンロードできます。次の形式が用意されています。

- 単一オペレーティングシステム用のすべてのインストールファイルを含む ISO CD イメージ
- 単一オペレーティングシステム用のすべてのインストールファイルを含む圧縮アーカイブ
- コンポーネント製品、その製品に必要な共有コンポーネントを含む、単一コンポーネント製品用のすべてのインストールファイルの圧縮アーカイブ

- **システムにすでにロードされているソフトウェア**

ソフトウェアが事前にロードまたはインストールされている Sun のハードウェアシステムを注文した場合は、Java Enterprise System ソフトウェアがシステムにすでにロードされている可能性があります。システムに次のディレクトリが存在すれば、Java Enterprise System ソフトウェアは事前にロードされています。

```
/var/spool/stage/JES_03Q4_SPARC/Solaris_sparc/
```

事前にロードされているソフトウェアのインストールと設定を完了する方法については、67 ページの「事前にロードされている Java Enterprise System ソフトウェアの配備の完了」を参照してください。

- **ネットワーク上のファイルサーバー**

各企業の操作手順によっては、社内ネットワークに Java Enterprise System のインストールファイルが用意されている場合があります。このような環境に該当するかどうかについて、システムを操作または管理する担当者に確認してください。

注 Java Enterprise System のインストールファイルをネットワーク上のファイルサーバーから入手可能にする方法については、[438 ページ](#)の「[共有ディレクトリでインストールイメージを利用できるようにするには](#)」を参照してください。

インストール

- 第 2 章 「インストールの準備」
- 第 3 章 「インストールおよび設定に関する情報の収集」
- 第 4 章 「システムコンポーネントのアップグレード」
- 第 5 章 「グラフィカルインタフェースによるソフトウェアのインストール」
- 第 6 章 「テキストベースのインタフェースを使用したソフトウェアのインストール」
- 第 7 章 「サイレントモードでのソフトウェアのインストール」
- 第 8 章 「インストール後の設定と起動」
- 第 9 章 「インストールに関する問題のトラブルシューティング」
- 第 10 章 「ソフトウェアのアンインストール」

インストールの準備

この章では、**Java Enterprise System** ソフトウェアのインストールを行う前に解決する必要のあるタスクと判断について説明しています。

この章で説明するタスクを実行する前に、[42 ページの「Java Enterprise System インストーラのしくみ」](#)に記載されている情報に習熟しておく必要があります。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- [インストールの過程](#)
- [特定の配備要件に適したインストール手順](#)
- [アップグレードの必要性の決定](#)
- [システムの準備状況の確認](#)
- [インストールモードの選択](#)
- [設定の種類を選択](#)
- [設定データの収集](#)
- [次の手順](#)

インストーラの過程

Java Enterprise System のインストールに備えるために、実行するイベントの一般的な過程を理解する必要があります。次の表では、基本的なインストールタスクが左の列に示され、そのタスクの実行に必要な情報が記載されている箇所が右の列に示されています。

表 2-1 インストーラの過程

実行するタスク	情報の参照先
<p>配備計画の例を参照し、いずれかの例が必要な配備と一致しているかどうかを確認する</p> <p>コンポーネント製品をインストールする方法、場所、順序を決定する</p> <p>マシンにすでにインストールされているプログラムを確認する</p> <p>必要に応じてコンポーネント製品をアップグレードする</p> <p>システムでインストールの準備が整っていることを確認する</p> <p>インストールモードを選択する</p> <p>設定の種類を選択する</p> <p>インストーラが要求する設定データを収集する</p> <p>インストーラを実行するか、サイレントインストール処理を設定して実行する</p> <p>注意: 選択したコンポーネント製品によっては、この手順にインストール時の設定が含まれる可能性があります。</p>	<p>59 ページの「特定の配備要件に適したインストール手順」</p> <p>69 ページの「既存のソフトウェアの確認」</p> <p>第 4 章「システムコンポーネントのアップグレード」</p> <p>71 ページの「システムの準備状況の確認」</p> <p>72 ページの「インストールモードの選択」</p> <p>73 ページの「設定の種類を選択」</p> <p>第 3 章「インストールおよび設定に関する情報の収集」</p> <p>第 5 章「グラフィカルインタフェースによるソフトウェアのインストール」</p> <p>または</p> <p>第 6 章「テキストベースのインタフェースを使用したソフトウェアのインストール」</p> <p>または</p> <p>第 7 章「サイレントモードでのソフトウェアのインストール」</p>
<p>インストール後の設定を完了し、コンポーネント製品を起動する</p> <p>インストールに関する問題を解決する</p> <p>必要に応じてアンインストーラを実行する</p>	<p>第 8 章「インストール後の設定と起動」</p> <p>第 9 章「インストールに関する問題のトラブルシューティング」</p> <p>第 10 章「ソフトウェアのアンインストール」</p>

表 2-1 インストールの過程 (続き)

実行するタスク	情報の参照先
必要に応じてユーザーを追加、変更、削除する	第 11 章「組織とユーザーのプロビジョニング」
必要に応じてシングルサインオンを設定する	第 13 章「シングルサインオン (SSO) の設定」
必要に応じてインストールイメージを利用可能にする	付録 F「ネットワークインストールのためのセットアップ方法」

特定の配備要件に適したインストール手順

このマニュアルでは、Java Enterprise System のほぼすべての配備に対応したインストール手順について説明しています。しかし、特定の配備では若干異なる手順や、省略された手順が必要になります。次に、これらの配備の手順について説明します。

- Sun Cluster ソフトウェアを使用した高可用性 (59 ページ)
- 64 ビット Solaris SPARC プラットフォームでの 32 ビット Directory Server (64 ページ)
- 非ルート所有の Web Server または Application Server インスタンスでの Identity Server (64 ページ)
- 非ルート所有の Web Server または Application Server インスタンスでの Portal Server (66 ページ)
- 事前にロードされている Java Enterprise System ソフトウェアの配備の完了 (67 ページ)

Sun Cluster ソフトウェアを使用した高可用性

Java Enterprise System の配備計画で、Sun Cluster をインストールして高可用性ソリューションをサポートする必要がある場合は、次の 2 段階のインストール手順を実行してください。

1. Sun Cluster のフレームワークをインストールし、設定、起動します。
2. 適切なエージェントとコンポーネント製品、またはサードパーティ製品をインストールし、設定します。

Sun Cluster のフレームワークのインストール、設定、起動

1. クラスタに含めるマシンを決定します。
2. クラスタ内の各マシンがシステム要件を満たしていることを確認します。

3. クラスタ内の各マシンで Java Enterprise System インストーラを使用して、最小設定モードで Sun Cluster コアコンポーネントをインストールします。
4. 『Sun Cluster 3.1 ソフトウェアのインストール』
(<http://docs.sun.com/doc/817-1020-10?l=ja>) に記載されている手順に従って、クラスタを設定、起動します。一連の手順で scinstall プログラムを実行する場合には、/usr/cluster/bin/scinstall に格納されているコピーを使用します。

エージェントと製品のインストールと設定

配備計画に Sun ONE 製品の高可用性を必要とする場合は、表 2-2 に示すインストール手順を参照してください。配備計画にその他の製品の高可用性を必要とする場合は、その製品をサポートするエージェントを入手し、適切な Sun Cluster Data Service のマニュアルの説明に従ってインストールおよび設定を行います。その他の製品のエージェントを入手する方法の 1 つとして、Sun Cluster 3.1 Data Service 5/03 CD から入手する方法があります。Data Service のマニュアルは、<http://docs.sun.com/coll/1098.1?l=ja> で入手できます。

表 2-2 には、Sun ONE コンポーネント用の Sun Cluster エージェントに対応するエージェントが用意されている Sun ONE 製品を示しています。製品ごとに、利用できる HA (高可用性) サービスが示され、サービスのインストール手順の概要が説明されています。

表 2-2 Sun ONE 用 Sun Cluster エージェントの高可用性インストールの概要

製品	HA サービス	インストール手順の概要
管理サーバー	フェイルオーバー	<p>インストールと設定については、『Sun ONE Directory Server 5.2 インストールおよびチューニングガイド』(http://docs.sun.com/doc/816-6847-10?l=ja) を参照してください。</p> <p>必要なパッケージをインストールするには、各ノードで Java Enterprise System インストーラを実行し、管理サーバーと Sun ONE 用エージェントを最小設定モードでインストールします。</p> <p>設定時は、クラスタファイルシステム上の場所をサーバールートとして使用します。</p>
Application Server	フェイルオーバー	<p>インストールと設定については、『Sun Cluster 3.1 Data Service for Sun ONE Application Server』(http://docs.sun.com/doc/817-1530) を参照してください。</p> <p>必要なパッケージをインストールするには、各ノードで Java Enterprise System インストーラを実行し、Application Server と Sun ONE 用エージェントを最小設定モードでインストールします。インストールディレクトリを指定するときは、Application Server のノードのローカルファイルシステムの場所を使用し、Application Server のサーバー設定と製品の場所としては、クラスタファイルシステム上の場所を使用します。</p>

表 2-2 Sun ONE 用 Sun Cluster エージェントの高可用性インストールの概要 (続き)

製品	HA サービス	インストール手順の概要
Calendar Server	フェイル オーバー	<p>インストールと設定については、『Sun ONE Calendar Server Administrator's Guide』(http://docs.sun.com/doc/816-6708-10) に記載されている「Setting Up a High Availability (HA) Configuration」を参照してください。</p> <p>必要なパッケージをインストールする方法は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 主ノードで Java Enterprise System インストーラを実行し、Calendar Server と Sun ONE 用エージェントを最小設定モードでインストールします。インストールディレクトリを指定するときは、Calendar Server のクラスタファイルシステム上の場所を使用します。 その他の各ノードで Java Enterprise System インストーラを実行し、Sun ONE 用エージェントを最小設定モードでインストールします。また、主ノード以外の各ノードで pkgadd コマンドを実行し、共有コンポーネント ICU、LDAPCS SDK、NSPR、NSS、SASL 用のパッケージを追加します。パッケージ名とこれらのコンポーネントの場所については、63 ページの表 2-3 を参照してください。
Directory Server	フェイル オーバー	<p>インストールと設定については、『Sun ONE Directory Server 5.2 インストールおよびチューニングガイド』(http://docs.sun.com/doc/816-6847-10?=-ja) を参照してください。</p> <p>必要なパッケージをインストールするには、各ノードで Java Enterprise System インストーラを実行し、Directory Server と Sun ONE 用エージェントを最小設定モードでインストールします。インストールディレクトリを指定するときは、Directory Server のサーバールートのクラスタファイルシステム上の場所を使用します。</p>
Message Queue	フェイル オーバー	<p>インストールと設定については、『Sun Cluster 3.1 Data Service for Sun ONE Message Queue』(http://docs.sun.com/doc/817-1531) を参照してください。</p> <p>必要なパッケージをインストールするには、各ノードで Java Enterprise System インストーラを実行し、Message Queue と Sun ONE 用エージェントを最小設定モードでインストールします。</p> <p>設定時に、スタティックファイルとデータの場所として各ノードのローカルファイルシステム上の場所を使用し、ダイナミックデータの場所としてクラスタファイルシステム上の場所を使用します。</p>

表 2-2 Sun ONE 用 Sun Cluster エージェントの高可用性インストールの概要 (続き)

製品	HA サービス	インストール手順の概要
Messaging Server	フェイルオーバー	<p>インストールと設定については、『Sun ONE Messaging Server 6.0 Installation Guide』(http://docs.sun.com/doc/816-6735-10)に記載されている「Configuring High Availability Solutions」を参照してください。</p> <p>必要なパッケージをインストールするには、各ノードで Java Enterprise System インストーラを実行し、Messaging Server と Sun ONE 用エージェントを最小設定モードでインストールします。インストールディレクトリを指定するときは、Messaging Server のローカルファイルシステム上の場所を使用します。</p> <p>設定時は、クラスタファイルシステム上の場所をメールボックスの場所として使用します。</p>
Web Server	フェイルオーバー	<p>インストールと設定については、『Sun Cluster 3.1 Data Service for Sun ONE Web Server』(http://docs.sun.com/doc/817-1528)を参照してください。</p> <p>必要なパッケージをインストールする方法は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 主ノードで Java Enterprise System インストーラを実行し、Web Server と Sun ONE 用エージェントを最小設定モードでインストールします。インストールディレクトリを指定するときは、Web Server のクラスタファイルシステム上の場所を使用します。 その他の各ノードで Java Enterprise System インストーラを実行し、Sun ONE 用エージェントを最小設定モードでインストールします。また、主ノード以外の各ノードで pkgadd コマンドを実行し、共有コンポーネント ICU、J2SE、KTSE、LDAPCSDK、NSPR、NSPRD、NSS、SASL 用のパッケージを追加します。パッケージ名とこれらのコンポーネントの場所については、63 ページの表 2-3 を参照してください。 <p>設定時は、クラスタファイルシステムの場所をドキュメントルートディレクトリとして使用します。</p>
Web Server	スケラブル	<p>インストールと設定については、『Sun Cluster 3.1 Data Service for Sun ONE Web Server』(http://docs.sun.com/doc/817-1528)を参照してください。</p> <p>必要なパッケージをインストールするには、各ノードで Java Enterprise System インストーラを実行し、Web Server と Sun ONE 用エージェントを最小設定モードでインストールします。インストールディレクトリを指定するときは、Web Server のローカルファイルシステム上の場所を使用します。</p> <p>設定時は、クラスタファイルシステムの場所をドキュメントルートディレクトリとして使用します。</p>

注 Identity Server と Portal Server は、高可用性 Web コンテナに配備することができます。ただし、Web コンテナに配備されるその他の Web アプリケーションと同様に、これらのサーバーは Web コンテナがフェイルオーバーを行わないなどの障害が起こることがあります。

データサービスおよびサポートされるすべての層 (ボリュームマネージャ、クラスタファイルシステム、リソースグループ情報) が完全に設定されるまでは、Java Enterprise System への Sun Cluster のインストールは完了しません。

表 2-3 高可用性インストール用の共有コンポーネントパッケージ

共有コンポーネント	パッケージ	Java Enterprise System の配布におけるパッケージの場所
ICU	SUNWicu SUNWicux	オペレーティングシステムのバージョンによって、 Product/shared_components/Solaris_8/Packages/ または Product/shared_components/Solaris_9/Packages/
J2SE	SUNWj3dev SUNWj3dmo SUNWj3dvx SUNWj3jmp SUNWj3man SUNWj3rt SUNWj3rtx	Product/shared_components/Packages/ J2SE パッケージを追加した後に、次のディレクトリ とシンボリックリンクを作成し、Java Enterprise System コンポーネントからアクセス可能にする必要 があります。 # mk /usr/jdk # ln -s /usr/j2se /usr/jdk/entsys-j2se
KTSE	SUNWktse	Product/shared_components/Packages/
LDAPCSDK	SUNWldk SUNWldkx	Product/shared_components/Packages/
NSPR	SUNWpr SUNWprx	オペレーティングシステムのバージョンによって、 Product/shared_components/Solaris_8/Packages/ または Product/shared_components/Solaris_9/Packages/
NSPRD	SUNWprd	オペレーティングシステムのバージョンによって、 Product/shared_components/Solaris_8/Packages/ または Product/shared_components/Solaris_9/Packages/
NSS	SUNWt1su	オペレーティングシステムのバージョンによって、 Product/shared_components/Solaris_8/Packages/ または Product/shared_components/Solaris_9/Packages/

表 2-3 高可用性インストール用の共有コンポーネントパッケージ (続き)

共有コンポーネント	パッケージ	Java Enterprise System の配布におけるパッケージの場所
SASL	SUNWsas1 SUNWsas1x	オペレーティングシステムのバージョンによって、 Product/shared_components/Solaris_8/Packages/ または Product/shared_components/Solaris_9/Packages/

64 ビット Solaris SPARC プラットフォームでの 32 ビット Directory Server

Java Enterprise System の配備計画で、64 ビットモードで稼動する Solaris SPARC プラットフォームで Directory Server を 32 ビットモードで実行する必要があるときは、次のインストール手順を実行します。

1. Java Enterprise System インストーラを使用して、Directory Server と管理サーバーを最小設定モードでインストールします。
2. pkgrm コマンドを実行して、64 ビットの Directory Server パッケージ、SUNWdsvhx および SUNWdsvx を削除します。
3. /var/sadm/install/productregistry ファイルを編集し、SUNWdsvhx パッケージと SUNWdsvx パッケージへの参照を削除します。
4. [220 ページの「最小インストール後の Directory Server の設定」](#)の説明に従って、Directory Server を設定します。
5. [216 ページの「最小インストール後の管理サーバーの設定」](#)の説明に従って、管理サーバーを設定します。

非ルート所有の Web Server または Application Server インスタンスでの Identity Server

Java Enterprise System の配備計画で、スーパーユーザー (root) が所有していない Web Server または Application Server のインスタンスに Identity Server を配備する必要があるときは、Directory Server、Web Server、Application Server とは異なるインストールセッションで Identity Server をインストールする必要があります。

注 ルート所有の Web Server または Application Server インスタンスにすでに Identity Server をインストールしている場合は、次のインストール手順を実行する前に、Identity Server をアンインストールし、Portal Server をすでに配備している場合には Portal Server もアンインストールする必要があります。

インストール手順は次のとおりです。

1. Directory Server と管理サーバーをインストールし、設定します。Identity Server が、別のシステムで稼動する Directory Server を使用する場合はこの手順を省略できます。
2. 非ルート所有の Web Server または Application Server のインスタンスが、Identity Server のインストール先と同じシステムにインストールされ、設定されていることを確認します。
 - Web Server の場合
Web Server のインストールが完了していない場合は Java Enterprise System インストーラを使用して Web Server をカスタム設定モードでインストールし、実行時ユーザーと実行時グループの設定パラメータにルート以外の所有者を指定します。
Web Server がすでにインストールされている場合は、Web Server の管理ユーティリティを使用して、非ルートユーザーが所有する新しい Web Server インスタンスを作成します。
 - Application Server の場合
Application Server のインストールが完了していない場合は、Java Enterprise System インストーラを使用して Application Server をインストールします。
Application Server がすでにインストールされている場合は、Application Server の管理ユーティリティを使用して、非ルートユーザーが所有する新しい Application Server インスタンスを作成します。
3. Directory Server が稼動していることを確認します。また、Web Server または Application Server の非ルートインスタンス、および Web Server または Application Server の管理インスタンスが稼動していることを確認します。
4. カスタム設定モードで Identity Server をインストールします。インストーラを利用した設定段階で次の処理を行います。
 - 共通サーバー設定を指定するときに、システムユーザーとシステムグループのパラメータとして、ルート以外のインスタンス所有者のユーザー情報とグループ情報を入力します。
 - Identity Server の Web Server または Application Server コンテナのパラメータを指定するときに、非ルートインスタンスに関する情報を入力します。

非ルート所有の Web Server または Application Server インスタンスでの Portal Server

Java Enterprise System の配備計画で、スーパーユーザー (root) が所有していない Web Server または Application Server のインスタンスに Portal Server を配備する必要があるときは、「非ルート所有の Web Server または Application Server インスタンスでの Identity Server」の説明に従って非ルート所有のインスタンスに Identity Server を配備してから Portal Server をインストールおよび設定します。Identity Server の配備が正常に機能することを確認したら、次の手順を実行して Portal Server をインストールします。

1. カスタム設定モードで Identity Server をインストールします。インストーラを利用した設定段階で次の処理を行います。
 - 共通サーバー設定を指定するときに、システムユーザーとシステムグループのパラメータとして、ルート以外のインスタンス所有者のユーザー情報とグループ情報を入力します。
 - Portal Server の Web Server または Application Server コンテナのパラメータを指定するときに、非ルートインスタンスに関する情報を入力します。

2. インストールが完了したら、次のディレクトリの所有者を root から `UserId:UserGroup` に変更します。次のように入力します。

```
chown -R UserId:UserGroup /opt/SUNWps
chown -R UserId:UserGroup /etc/opt/SUNWps
chown -R UserId:UserGroup /var/opt/SUNWps
```

3. Portal Server ディレクトリの次のアクセス権を設定します。

```
chmod 0755 /opt/SUNWps
chmod 0755 /etc/opt/SUNWps
chmod 0755 /var/opt/SUNWps
```

4. 237 ページの「Identity Server の起動と停止」の説明に従って Identity Server を停止し、起動し直します。

事前にロードされている Java Enterprise System ソフトウェアの配備の完了

ソフトウェアが事前にロードまたはインストールされている Sun のハードウェアシステムを注文した場合は、Java Enterprise System ソフトウェアがシステムにすでにロードされている可能性があります。システムに次のディレクトリが存在すれば、Java Enterprise System ソフトウェアは事前にロードされています。

```
/var/spool/stage/JES_03Q4_SPARC/Solaris_sparc/
```

Java Enterprise System ソフトウェアが事前にロードされている場合、次のコンポーネント製品がそれぞれのデフォルトディレクトリ (80 ページの表 3-1 を参照) に最小設定モードでインストールされています。

- Application Server
- Calendar Server
- Directory Proxy Server
- Directory Server
- Instant Messaging
- Message Queue
- Messaging Server
- Web Server

事前にインストールされているコンポーネント製品の設定を完了する方法については、第 8 章「インストール後の設定と起動」を参照してください。

Java Enterprise System のその他のコンポーネント製品をインストール、設定するには、すでに /var/spool/stage/JES_03Q4_SPARC/Solaris_sparc/ にインストールされている Java Enterprise System インストーラを実行します。

アップグレードの必要性の決定

次に、コンポーネント製品をどのように組み合わせてインストールするかを決定する上で役立つ情報について説明します。

- [コンポーネント製品の依存性](#)
- [既存のソフトウェアの確認](#)

コンポーネント製品の依存性

次の表は、各コンポーネント製品が他のコンポーネント製品に対して持つ依存性を示しています。ここには J2SE などの共有コンポーネントに対する依存性は含まれていません。

この表を利用して依存連鎖のリストやダイアグラムを作成し、最終的なインストールセットを決定できます。

表 2-4 コンポーネント製品間の依存性

コンポーネント製品	必須コンポーネント製品	互換性のあるバージョン	ローカルの必要性
Sun Cluster 3.1.0	なし		
管理サーバーおよび Console 5.2	Directory Server	5.2	あり
Application Server 7.0	Message Queue	3.0.1 SP2	あり
Calendar Server 6.0	Directory Server	5.2	なし
Directory Proxy Server 5.2	管理サーバー	5.2	あり
Directory Server 5.2	管理サーバー	5.2	あり
Identity Server 6.1	Directory Server	5.2	なし
(Web コンテナを必要とする)	Sun ONE Application Server ¹	7.0	あり
	Sun ONE Web Server ¹	6.1.0	あり
	BEA WebLogic ^{1,2}	6.1 SP4	あり
	IBM WebSphere ^{1,2}	4.0.5	あり
Instant Messaging 6.1	Identity Server	6.1	あり
Messaging Server 6.0	Directory Server	5.2	なし
	管理サーバー	5.2	あり

表 2-4 コンポーネント製品間の依存性 (続き)

コンポーネント製品	必須コンポーネント製品	互換性のあるバージョン	ローカルの必要性
Message Queue 3.0.1 SP2	なし		
Portal Server 6.2	Identity Server	6.1	あり
Portal Server, Secure Remote Access 6.2	Portal Server	6.2	あり
Web Server 6.1	Identity Server	6.1	あり
	なし		

1. Sun ONE Application Server、Sun ONE Web Server、BEA WebLogic、IBM WebSphere のいずれか 1 つのみを必要とする
2. BEA WebLogic または IBM WebSphere を使用するには、Identity Server と Portal Server の両方をインストールする必要がある

既存のソフトウェアの確認

インストーラは、マシンにすでにインストールされているソフトウェアが Java Enterprise System ソフトウェアと互換性があるかどうかを確認します。互換性がない場合、インストールが中断されることが多いため、インストーラを実行する前に、インストールされているソフトウェアのバージョンを確認し、必要なアップグレードを行うことをお勧めします。インストールされているソフトウェアを調べるには、prodreg コマンドまたは pkginfo コマンドを使用するか、この節で説明する方法でインストーラ自体を使用することができます。

注 この情報を得るために、インストーラだけを頼りにすることは、避けるべきです。インストール済みのソフトウェアについて、システムを独自に調査して確認することも必要です。インストーラは、Solaris パッケージ配布によってインストールされたコンポーネント製品だけを検出し、その他の方法でインストールされたコンポーネントを検出しません。

Solaris パッケージ配布によってインストールされたソフトウェアについては、システムにすでにインストールされているソフトウェアパッケージのインストール前チェックにインストーラを使用できます。インストーラでは、すでにインストールされている製品のレポートを参照し、コンポーネントのアップグレードが必要であるかどうかを判断することができます。

▶ **グラフィカルインストーラを使用してコンポーネントのアップグレードの必要性を判断するには**

1. アクティブインストールではないことを示す `-no` オプションを指定してインストーラを起動します。

```
./installer -no
```

2. インストーラのページを先に進め、「コンポーネントの選択」ページを表示します。
3. 左上にあるドロップダウンリストで、「コンポーネントの選択」に変更します。
4. ページ上部の「インストール済みの製品」をクリックします。

インストールされているコンポーネント製品が「インストール済みの製品」レポートにリスト表示され、各コンポーネントの **Java Enterprise System** の互換性レベルが指定されます。

5. 「次へ」をクリックして操作を続けます。

Java Enterprise System との互換性がない共有コンポーネントがマシンに存在する場合は、「アップグレードの必要がある共有コンポーネント」ページが表示されます。

6. 各共有コンポーネントについて、「インストール済みのバージョン」と「必要なバージョン」を比較し、必要なアップグレードを確認します。
7. インストーラを終了し、次のいずれか、または両方を実行します。
 - コンポーネント製品については、[第4章「システムコンポーネントのアップグレード」](#)の説明に従ってコンポーネント製品をアップグレードします。
 - 共有コンポーネントについては、**Java Enterprise System** のより新しいバージョンが、ホストにインストールされているアプリケーションと互換性を持つかどうかを確認します。

警告

ホストに存在する依存関係を確認せずに共有コンポーネントをアップグレードしないでください。ホストにインストールされ、その共有コンポーネントを使用するアプリケーションの動作に問題が生じる可能性があります。必要となる共有コンポーネントのバージョンと、既存のアプリケーションが依存する共有コンポーネントのバージョンの間に互換性があるかどうかを確認する必要があります。

ホスト上の共有コンポーネントを安全にアップグレードできることを確認したら、次のいずれかの操作を行います。

- 必要に応じて共有コンポーネントを削除またはアップグレードする
または

- アクティブインストール時にインストーラで共有コンポーネントをアップグレードする

注 アップグレード後は、新しいバージョンを適用するにはマシンを再起動する必要があります。

8. コンポーネントが Java Enterprise System の要件を満たすことをインストーラが示すまでこの手順を繰り返します。

テキストベースのインストーラを使用する手順については、189 ページの「テキストベースのインストーラを使用してコンポーネントのアップグレードの必要性を判断するには」を参照してください。

システムの準備状況の確認

インストール手順を開始する前に、次の点を考慮する必要があります。

- [アクセス権](#)
- [システム要件](#)
- [メモリとディスク容量の要件](#)

アクセス権

Java Enterprise System ソフトウェアをインストールするには、root としてログインするか、スーパーユーザーになる必要があります。

システム要件

Java Enterprise System をインストールする前に、最小限のハードウェア要件およびオペレーティングシステム要件を満たしていることを確認してください。サポートするプラットフォーム、ソフトウェア要件、およびハードウェア要件に関する最新の情報は、次の Web サイトにある『Java Enterprise System リリースノート』(<http://docs.sun.com/doc/817-4235?=ja>) を参照してください。

マシンに実装されているオペレーティングシステムが Java Enterprise System の要件を満たしていないことが判明した場合、インストーラは処理を中断します。インストーラを終了し、問題を解決してからインストーラを再起動してください。

メモリとディスク容量の要件

選択したコンポーネント製品が必要とするメモリとディスク容量が十分であるかどうかについて、インストーラはマシンを検証します。

- マシンから検出されたメモリが Java Enterprise System の推奨した容量に達しない場合、インストーラは警告を出力しますが、インストール自体は続行できます。
- マシンのディスク容量が不足している場合は、インストーラは処理を中断します。インストーラを終了し、問題を解決してからインストーラを再起動してください。

インストールモードの選択

Java Enterprise System インストーラでは、対話的なインストールモード (グラフィカルおよびテキストベース) と、非対話モード (サイレント) を利用できます。

グラフィカルモードを選択する場合

インストーラのグラフィカルモードを使用すると、Java Enterprise System コンポーネントのインストールに必要な作業を、手順を追ってウィザード形式で実行できます。

次のいずれかの場合は、グラフィカルモードの使用を検討してください。

- グラフィカルワークステーションを使用している
- Java Enterprise System を評価目的でインストールする
- Java Enterprise System を初めてインストールする

テキストベースモードを選択する場合

インストーラのテキストベースモードでも、グラフィカルインタフェースと同じ機能が提供されます。ただし、このモードを使用すると、ウィザード形式ではなく行単位で応答が求められます。

インストールを端末ウィンドウ内で、かつ対話形式で実行する場合は、テキストベースモードの使用を検討してください。

サイレントモードを選択する場合

サイレントモードを使用すると、インストールに必要な値を状態ファイルと呼ばれる再利用可能なスクリプトに保存できます。状態ファイルには、インストールおよび設定パラメータを表す名前と値のペアのリストが含まれます。その後、複数のシステムでインストーラを実行します。インストーラを実行するたびに、状態ファイルを使用してオプションを指定します。

次の状況では、サイレントモードの使用を検討してください。

- 複数のマシン全体でインストールを高速化する
- 一貫した設定を正確に再作成して、多数のマシンに Java Enterprise System をインストールする
- インストール値を作成するユーザーとは別のユーザーが、他のマシンでインストーラを実行する

設定の種類を選択

Java Enterprise System インストーラでは、次の 2 種類の設定方法を利用できます。

- **カスタム設定** : 指定した値を使用してコンポーネントを設定する
- **最小設定** : コンポーネントを設定しない。Java Enterprise System インストーラを使用してインストールを実行した後で、コンポーネントを設定する必要があります。

次の表は、各コンポーネント製品で利用できる設定オプションを示しています。

表 2-5 コンポーネント製品の設定の種類

コンポーネント製品	カスタム設定	最小設定
管理サーバー	可	可
Application Server	可	可
Calendar Server	不可	可
Directory Server	可	可
Directory Proxy Server	可	可
Identity Server	可	不可
Instant Messaging	不可	可
Message Queue	可	可
Messaging Server	不可	可

表 2-5 コンポーネント製品の設定の種類 (続き)

コンポーネント製品	カスタム設定	最小設定
Portal Server	可	可
Sun Cluster	不可	可
Web Server	可	可

カスタム設定を選択する場合

カスタム設定を使用すると、コンポーネント製品の設定値をインストール時に指定できます。

カスタム設定は、次のような場合に便利です。

- ユーザーがインストーラの使用経験豊富な管理者である
- 一部のコンポーネント製品がインストール済みである
- 一部の製品でデフォルト以外の値を指定する
- 個別のコンポーネント製品を、ネットワーク上の異なるホストに配備する計画がある

カスタム設定をサポートするコンポーネント製品の一覧については、[73 ページの表 2-5](#) を参照してください。

最小設定を選択する場合

最小設定を使用すると、インストール時に必要な作業は最も少なくはなりますが、インストール後に設定を行う必要があります。インストール時に最小設定を選択した場合は、Java Enterprise System インストーラによって、コンポーネント製品のパッケージファイルが各ディレクトリに配置されます。パラメータの設定は行われず、実行時サービスを利用できないため、ほとんどのコンポーネント製品はそのままでは機能しません。

注 最小設定によるインストールを選択し、コンポーネントとして Identity Server を選択する場合は、インストール中に Identity Server および関連コンポーネントの設定を行うようにインストーラから指示されます。

設定データの収集

カスタム設定を選択する、または Identity Server を含む最小設定を選択した場合は、インストール中にコンポーネント製品に関する設定情報を指定するように求められます。

注 例外は Calendar Server、Instant Messaging、Messaging Server、Sun Cluster コンポーネントで、これらのコンポーネントをインストール時に設定することはできません。

コンポーネント製品の設定パラメータについては、[第3章「インストールおよび設定に関する情報の収集」](#)を参照してください。利便性を考慮して、[付録A「情報収集用ワークシート」](#)に設定データを記録するためのワークシートが用意されています。

インストール処理の最後に、インストール中に設定された設定値がサマリファイルに記録されます。このファイルをインストーラで表示したり、このファイルが保存されている `/var/sadm/install/logs` ディレクトリから表示することができます。

インストールディレクトリ

各種コンポーネント製品のソフトウェアをどこにインストールするかを決定する必要があります。インストーラが示すデフォルトディレクトリを使用する場合は、インストール前の操作は特に必要ありません。デフォルトディレクトリについては、[80 ページの「インストールディレクトリ」](#)を参照してください。

ポートの割り当て

インストールするコンポーネント製品のポート番号の割り当てを計画する必要があります。インストーラが示すデフォルトポート番号を使用する場合は、インストール前の操作は特に必要ありません。デフォルトポート番号については、[付録C「コンポーネントのポート番号」](#)を参照してください。

次の手順

設定情報の収集やアップグレードなど、この章で説明したタスクを完了したら、インストールに関する次のいずれかの章に進んでください。

- [第5章「グラフィカルインターフェースによるソフトウェアのインストール」](#)
- [第6章「テキストベースのインターフェースを使用したソフトウェアのインストール」](#)
- [第7章「サイレントモードでのソフトウェアのインストール」](#)

インストールおよび設定に関する情報の収集

この章では、コンポーネント製品を設定するため、Java Enterprise System インストーラに指定する情報について説明します。この章の内容と、付録 A に掲載されているワークシートを使用して、Java Enterprise System のインストール準備を行なってください。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 「この章の利用方法」
- 「インストールディレクトリ」
- 「共通サーバー設定」
- 「管理サーバーの設定」
- 「Application Server の設定」
- 「Calendar Server の設定」
- 「Directory Server の設定」
- 「Directory Proxy Server の設定」
- 「Identity Server の設定」
- 「Identity Server SDK の設定」
- 「Instant Messaging の設定」
- 「Message Queue の設定」
- 「Messaging Server の設定」
- 「Portal Server の設定」
- 「Portal Server, Secure Remote Access の設定」
- 「Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster 用 Sun ONE エージェントの設定」
- 「Web Server の設定」

- 「状態ファイルのみで使用されるパラメータ」

この章の内容は、すべてのインストーラモード (グラフィカル、テキスト、およびサイレント) に適用されます。

最小設定オプションを使用する場合、Java Enterprise System インストーラはインストールするコンポーネントを設定しません。ただし、次の各項で説明するように、Identity Server のインストール時は情報を指定する必要があります。

- 118 ページの「Identity Server SDK : Web コンテナ情報」
- 112 ページの「Identity Server : Directory Server 情報」

注 多くのコンポーネントでは、ポート番号の割り当てが必要になります。コンポーネントの設定を開始する前に、コンポーネント製品が使用するポート番号のリストを参照することができます。コンポーネント製品のポート番号については、付録 C 「コンポーネントのポート番号」を参照してください。

 インストーラは、ポート番号の入力をユーザーに要求する際、使用中のポートの実行時チェックを実行して適切なデフォルト値を表示します。別のコンポーネント製品、または同じコンポーネント製品の別のインスタンスがデフォルト番号のポートを使用している場合、インストーラは別の値を示します。

 たとえば、Sun ONE Web Server と Sun ONE Application Server のデフォルトポート番号はどちらも 80 です。同じマシンに両方のコンポーネントをインストールしようとする、最初にインストールするコンポーネントはデフォルトポートである 80 を使用するよう設定され、2 番目のコンポーネントには 81 または 82 などの別のデフォルトポートが設定されます。

この章の利用方法

この章では、インストーラが要求する設定情報のそれぞれについて説明します。設定情報は、グラフィカルインストーラに表示されるとおりに、最初にコンポーネント製品ごとに、次に情報の種類ごとにグループ化されています。この章に記載されている表は、インストーラが表示するページに直接対応しています。

設定情報の表には、「ラベル」、「状態ファイルのパラメータ」と「説明」という列があります。「ラベル」、「状態ファイルのパラメータ」列には、次の情報が含まれます。

- **ラベル**：情報を識別するためのテキストで、通常は、グラフィカルモードのインストーラに表示される入力フィールドのラベル。たとえば、インストーラには「パスワードの暗号鍵」というフィールドラベルがあります。
- **状態ファイルのパラメータ**：サイレントインストール用の状態ファイルで情報を識別するためのキー。状態ファイルのパラメータは、大文字のモノスペースフォントで表示されます。たとえば、「パスワードの暗号鍵」フィールドに対応する状態ファイルのパラメータは、AM_ENC_PWD です。

デフォルト値

デフォルト値は、インストーラのすべてのモードに適用されます。ただし、状態ファイルの説明では別の値が示されます。

状態ファイルでは、特に明記されない限り、すべての値で大文字と小文字が区別されます。

情報の参照方法

この章でグラフィカルモードのインストーラに表示される設定情報を参照するには、次のようにします。

1. そのコンポーネントについて説明している項目を特定します。
2. 表示されているインストーラページに対応する表を探します。各表には、インストーラのそれぞれのページに含まれるすべてのフィールドと質問が記載されています。

この章で状態ファイルのパラメータに関する情報を参照するには、次のようにします。

- オンラインマニュアルを使用している場合は、HTML または PDF の検索機能を使用してパラメータ文字列を検索します。
- 印刷されているマニュアルを使用している場合は、索引を参照します。索引には、各パラメータ名の項目が記載されています。

インストールディレクトリ

Java Enterprise System インストーラは、ユーザーが指定しない限り、コンポーネント製品をデフォルトディレクトリに自動的にインストールします。表 3-1 は、Java Enterprise System コンポーネントのデフォルトディレクトリを示しています。

Java Enterprise System インストーラを実行すると、インストーラにより各コンポーネントのデフォルトの場所が表示されます。通常は、デフォルトの場所を別の場所に指定できます。

次のコンポーネントのインストールディレクトリには制限があります。

- **Directory Server** : Directory Server の実行時設定データの場所を指定することはできますが、Directory Server のインストール場所を指定することはできません。
- **Portal Server, Secure Remote Access** : Portal Server, Secure Remote Access Support は、Portal Server と同じ場所にインストールする必要があります。
- **Sun Cluster ソフトウェア、Sun Cluster エージェント** : インストールディレクトリの場所を変更することはできません。
- **Sun ONE Message Queue** : インストールディレクトリの場所を変更することはできません。

表 3-1 デフォルトのインストールディレクトリ

ラベルと状態ファイルのパラメータ	デフォルトディレクトリ	コメント
Application Server CMN_AS_INSTALLDIR	/opt/SUNWappserver7	Application Server ソフトウェアのすべてのユーティリティ、実行可能ファイル、およびライブラリは、この場所に格納される
アプリケーションサーバーのサーバー設定 CMN_AS_DOMAINSDIR	/var/opt/SUNWappserver7/domains	管理ドメインが作成されるデフォルトの領域
アプリケーションサーバー製品設定 CMN_AS_CONFIGDIR	/etc/opt/SUNWappserver7	ライセンスやこのインストール用に設定された管理ドメインのマスター一覧など、インストール全体に適用される設定情報が保存される
Calendar Server CMN_CS_INSTALLDIR	/opt	
ディレクトリサーバー、サーバールート CMN_DS_INSTALLDIR	/var/opt/mps/serverroot	

表 3-1 デフォルトのインストールディレクトリ (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	デフォルトディレクトリ	コメント
Directory Proxy Server CMN_DPS_INSTALLDIR	/	
Identity Server CMN_IS_INSTALLDIR	/opt	
Instant Messaging Server CMN_IIM_INSTALLDIR	/opt	
インスタントメッセージングサーバードキュメントディレクトリ CMN_IIM_DOCSDIR	/opt/SUNWiim/html	
Message Queue	なし	<p>Sun ONE Message Queue ソフトウェアは、次の場所にインストールされる</p> <p>/usr/bin /usr/share/lib /etc/imq /var/imq</p> <p>インストールディレクトリを変更できないため、この情報に関するインストーラのフィールド、または状態ファイルのパラメータのフィールドは存在しない</p>
Messaging Server CMN_MS_INSTALLDIR	/opt/SUNWmsgsr	
Portal Server CMN_PS_INSTALLDIR	/opt	
Portal Server, Secure Remote Access CMN_SRA_INSTALLDIR	/opt	Portal Server, SRA Support を Portal Server と同じディレクトリにインストールする必要がある

表 3-1 デフォルトのインストールディレクトリ (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	デフォルトディレクトリ	コメント
Sun Cluster	なし	Sun Cluster ソフトウェアは、次の場所にインストールされる / /usr /opt インストールディレクトリを変更できないため、この情報に関するインストーラのフィールド、または状態ファイルのパラメータのフィールドは存在しない
Web Server CMN_WS_INSTALLDIR	/opt/SUNWwbsvr	

共通サーバー設定

次の手順に進む前に、次の表に示す共通サーバー設定の値を指定する必要があります。

表 3-2 共通サーバー設定

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明	デフォルト値	使用するコンポーネント
ホスト名 CMN_HOST_NAME	インストール先マシンのホスト名	hostname コマンドの出力	管理サーバー Application Server Directory Server Directory Proxy Server Identity Server Web Server
DNS ドメイン名 CMN_DOMAIN_NAME	インストール先マシンのドメイン	ローカル DNS サーバーに登録されている、このコンピュータのドメイン名	管理サーバー Directory Server Identity Server Portal Server Web Server
ホスト IP アドレス CMN_IPADDRESS	インストール先マシンの IP アドレス	ローカルホストの IP アドレス	Identity Server Portal Server, Secure Remote Access

表 3-2 共通サーバー設定 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明	デフォルト値	使用するコンポーネント
管理者ユーザー ID CMN_ADMIN_USER	管理者のデフォルトユーザー ID	admin	管理サーバー Application Server Directory Server Web Server
管理者パスワード CMN_ADMIN_PASSWORD	管理者のデフォルトパスワード パスワードは 8 文字以上で指定する必要がある	なし	管理サーバー Application Server Directory Server Web Server Identity Server
システムユーザー CMN_SYSTEM_USER	コンポーネントプロセスが稼動し、ファイルが所属するユーザー ID	root	管理サーバー Directory Server Identity Server Web Server
システムグループ CMN_SYSTEM_GROUP	システムユーザーのグループ (gid)	other	管理サーバー Directory Server Identity Server Web Server

カスタム設定オプションを使用してコンポーネントをインストールする場合、インストーラにより、これらの共通サーバー設定が、設定を使用する各コンポーネントのデフォルト値として表示されます。この値は、コンポーネントの設定時にコンポーネント単位で編集できます。

管理サーバーの設定

インストール時に、管理サーバーについて次の情報を指定する必要があります。

表 3-3 管理サーバーの設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
サーバールート ADMINSERV_ROOT	管理サーバーによって管理されるコンポーネント製品のインストール先のベースパス名 デフォルト値は /var/opt/mps/serverroot
管理ポート ADMINSERV_PORT	管理コンソールから HTTP 経由でこの管理サーバーに接続する際に使用するポート デフォルト値は 390。使用可能な任意のポート番号を指定できる
管理ドメイン ADMINSERV_DOMAIN	ディレクトリサービスを共有するサーバーコレクションの名前 推奨されるデフォルト値は、共通サーバー設定に指定したホストドメイン名。 82 ページの表 3-2 を参照。ただし、管理ドメインの名称は、ネットワークドメインに対して、一致や関連付けの必要はない
設定サーバー管理 ID ADMINSERV_CONFIG_ADMIN_USER	設定ディレクトリ管理者のユーザー ID。管理サーバーは、この ID を使用して設定ディレクトリのデータを管理する デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「管理者ユーザー ID」の値。 82 ページの表 3-2 を参照 このセッションで Directory Server をインストールする場合、デフォルト値は Directory Server の「管理者ユーザー ID」で指定した値となる。 87 ページの表 3-5 を参照
パスワード ADMINSERV_CONFIG_ADMIN_PASSWORD	設定ディレクトリ管理者のパスワード デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「管理者のユーザーパスワード」の値。 82 ページの表 3-2 を参照 このセッションで Directory Server をインストールする場合、デフォルト値は Directory Server の「管理者のユーザーパスワード」で指定した値となる。 87 ページの表 3-5 を参照

表 3-3 管理サーバーの設定情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
システムユーザー ADMINSERV_SYSTEM_USER	<p>管理サーバープロセスの実行に適用されるユーザー ID。有効な任意のシステムユーザーを指定できる</p> <p>デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「システムユーザー」の値。82 ページの表 3-2 を参照</p>
システムグループ ADMINSERV_SYSTEM_GROUP	<p>有効な任意のシステムグループを指定できる</p> <p>デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「システムグループ」の値。82 ページの表 3-2 を参照</p>
ディレクトリサーバーホスト ADMINSERV_CONFIG_DIR_HOST	<p>設定ディレクトリが存在するホストを決定するホスト名または値を指定する。設定ディレクトリには、管理ドメインに所属する全サーバーの設定データが保存される</p> <p>このセッションで Directory Server をインストールする場合、デフォルト値は共通サーバー設定で指定した「ホスト名」の値 (CMN_HOST_NAME) となる。82 ページの表 3-2 を参照</p> <p>このセッションで Directory Server をインストールしない場合、デフォルト値は存在しない</p>
ディレクトリサーバーポート ADMINSERV_CONFIG_DIR_PORT	<p>LDAP 操作で設定ディレクトリへのバインド時に使用するポート</p> <p>使用中でない任意の有効なポート番号を指定できる</p> <p>このセッションで Directory Server をインストールする場合、デフォルト値は Directory Server の「Port」の値となる。88 ページの表 3-6 を参照</p> <p>このセッションで Directory Server をインストールしない場合、デフォルト値は存在しない</p>

Application Server の設定

インストール時に、Application Server について次の情報を指定する必要があります。

表 3-4 Application Server の設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
管理者ユーザー ID AS_ADMIN_USER	Application Server 管理者のユーザー ID デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「管理者ユーザー ID」の値。82 ページの表 3-2 を参照
管理者パスワード AS_ADMIN_PASSWORD	Application Server 管理者のパスワード デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「管理者パスワード」の値。82 ページの表 3-2 を参照
管理サーバーポート AS_ADMIN_PORT	Application Server の管理サーバーが接続を待機するポート デフォルト値は 4848
HTTP サーバーポート AS_HTTP_PORT	Application Server が HTTP 接続を待機するポート デフォルト値は 80。デフォルトポートが使用中の場合、インストーラにより別の値が表示される

Calendar Server の設定

Java Enterprise System インストーラを使用して、Calendar Server を設定することはできません。Calendar Server は、インストール後に設定する必要があります。Calendar Server の設定方法については、第 8 章「インストール後の設定と起動」を参照してください。

Directory Server の設定

インストール時に、Directory Server について次の情報を指定する必要があります。

- 管理情報
- サーバー設定情報
- Directory Server 設定情報
- データの格納場所の情報
- データ取り込み情報

Directory Server : 管理情報

表 3-5 Directory Server の管理に関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
管理者ユーザー ID DS_ADMIN_USER	設定ディレクトリに対して管理者権限を持つユーザー このユーザーは、サフィックスの作成や削除など、Directory Server の設定を変更できるが、アクセス制御の制約を受ける デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「管理者ユーザー ID」の値。 82 ページの表 3-2 を参照
管理者パスワード DS_ADMIN_PASSWORD	管理者のパスワード デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「管理者パスワード」の値。 82 ページの表 3-2 を参照
ディレクトリマネージャ DN DS_DIR_MGR_USER	Directory Server へのすべてのアクセス権を持つユーザーの DN デフォルト値は cn=Directory Manager
ディレクトリマネージャパスワード DS_DIR_MGR_PASSWORD	ディレクトリマネージャのパスワード デフォルト値は存在しない

Directory Server : サーバー設定情報

表 3-6 Directory Server のサーバーに関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
サーバー識別子 DS_SERVER_IDENTIFIER	<p>管理コンソールで Directory Server のインスタンスを識別する名前</p> <p>名前は、Solaris のファイル命名規則に準拠している必要がある。ピリオドや空白文字は使用できない</p> <p>デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「ホスト名」の値 (CMN_HOST_NAME)。82 ページの表 3-2 を参照</p>
サーバーポート DS_SERVER_PORT	<p>Directory Server がクライアント接続を待機するポート</p> <p>デフォルト値は 389</p>
サフィックス DS_SUFFIX	<p>このインスタンスによって管理される初期ディレクトリサフィックス</p> <p>デフォルト値は、現在のホストの完全修飾ドメイン名のセグメントから構成される。たとえば、インストール先が siroe.sub1.example.com の場合、デフォルト値は dc=sub1,dc=example,dc=com となる</p>
管理ドメイン DS_ADM_DOMAIN	<p>Directory Server のこのインスタンスの管理ドメインの名前</p> <p>デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「DNS ドメイン名」の値 (CMN_DOMAIN_NAME) となる。82 ページの表 3-2 を参照</p>
システムユーザー DS_SYSTEM_USER	<p>Directory Server プロセスの実行に適用されるユーザー ID</p> <p>デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「システムユーザー」の値。82 ページの表 3-2 を参照</p>
システムグループ DS_SYSTEM_GROUP	<p>ディレクトリサーバーがユーザーとして実行されるグループ</p> <p>デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「システムグループ」の値。82 ページの表 3-2 を参照</p>

Directory Server : Directory Server 設定情報

この Directory Server インスタンスの設定データは、この Directory Server インスタンス、または別のマシン上の既存の Directory Server インスタンスに格納できます。このインスタンスに設定データを格納する場合は、次の表の最初の質問に対してだけ情報を指定します。別のインスタンスに設定データを格納する場合は、次の表に示されるすべての情報を指定します。

表 3-7 Directory Server の Directory Server に関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
<p>このサーバーに設定データを保存します。</p> <p>このサーバーの設定データをディレクトリサーバーの次のインスタンスに保存します。</p> <p>USE_EXISTING_CONFIG_DIR</p>	<p>Java Enterprise System インストーラがこの Directory Server の設定データを格納する場所 (この Directory Server インスタンスまたは別のインスタンス) を制御するオプション</p> <p>状態ファイルで、次の値のいずれかを指定する</p> <ul style="list-style-type: none"> 0: (ゼロ) この Directory Server インスタンスを使用する。これがデフォルト値 1: 別のインスタンスを使用する <p>別のインスタンスに設定データを格納する場合は、この表の他の情報も指定する必要がある。このインスタンスに設定データを格納する場合は、他の項目を指定する必要はない</p>
<p>ホスト名</p> <p>CONFIG_DIR_HOST</p>	<p>ホスト名、または設定ディレクトリが存在するホストを解決する値を指定する。設定ディレクトリには、管理ドメインに所属する全サーバーの設定データが保存される</p> <p>このパラメータは、状態ファイル内でデフォルト値を持たない。この値は、USE_EXISTING_CONFIG_DIR に 1 を設定した場合にだけ指定が必要となる</p>
<p>ディレクトリサーバーポート</p> <p>CONFIG_DIR_PORT</p>	<p>LDAP 操作で設定ディレクトリへのバインド時に使用するポート</p> <p>デフォルト値は 389</p> <p>状態ファイルでは、このパラメータはデフォルト値を持たない。この値は、USE_EXISTING_CONFIG_DIR を 1 に設定した場合にだけ指定が必要となる</p>

表 3-7 Directory Server の Directory Server に関する設定情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
ディレクトリマネージャ DN CONFIG_DIR_ADM_USER	Directory Server へのすべてのアクセス権を持つユーザーの DN デフォルト値は cn=Directory Manager 状態ファイルでは、このパラメータはデフォルト値を持たない。この値は、USE_EXISTING_CONFIG_DIR を 1 に設定した場合にだけ指定が必要となる
ディレクトリマネージャパスワード CONFIG_DIR_ADM_PASSWD	ディレクトリマネージャのパスワードを指定する 状態ファイルでは、このパラメータはデフォルト値を持たない。この値は、USE_EXISTING_CONFIG_DIR を 1 に設定した場合にだけ指定が必要となる

Directory Server : データ格納場所に関する設定情報

ユーザーデータおよびグループデータは、この Directory Server インスタンスまたは既存のインスタンスに格納できます。次の表に示す設定情報を指定する必要があるのは、この Directory Server インスタンスのユーザーデータおよびグループデータを別のインスタンスのユーザーディレクトリに格納する場合だけです。

表 3-8 Directory Server のデータ格納場所に関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
このサーバーにユーザー / グループデータを保存します。 ディレクトリサーバーの次のインスタンスにユーザー / グループデータを保存します。 USE_EXISTING_USER_DIR	Java Enterprise System インストーラが、Directory Server のユーザーデータおよびグループデータを、インストール中のインスタンスに格納するか、既存の Directory Server インスタンスに格納するかを制御するオプション 別のインスタンスにユーザーデータおよびグループデータを保存する場合は、この表に記載された追加情報を指定する必要がある 状態ファイルで、次の値のいずれかを指定する <ul style="list-style-type: none"> • 0 : (ゼロ) ユーザーデータおよびグループデータをこの Directory Server インスタンスに格納する。これがデフォルト値 • 1 : リモートインスタンスを使用する
ホスト名 USER_DIR_HOST	Directory Server がユーザーデータを保存するホストを解決するホスト名または値を指定する 状態ファイルでは、このパラメータはデフォルト値を持たない。この値は、USE_EXISTING_USER_DIR を 1 に設定した場合にだけ指定が必要となる
ディレクトリサーバーポート USER_DIR_PORT	LDAP 操作でユーザーディレクトリへのバインド時に使用するポート このポートは、Directory Server の設定で指定した「ディレクトリサーバーポート」の値 (CONFIG_DIR_PORT) と一致する必要がある。デフォルト値は 389 状態ファイルでは、このパラメータはデフォルト値を持たない。この値は、USE_EXISTING_USER_DIR を 1 に設定した場合にだけ指定が必要となる
ディレクトリマネージャ DN USER_DIR_ADM_USER	Directory Server へのすべてのアクセス権を持つユーザーの DN デフォルト値は cn=Directory Manager 状態ファイルでは、このパラメータはデフォルト値を持たない。この値は、USE_EXISTING_USER_DIR を 1 に設定した場合にだけ指定が必要となる

表 3-8 Directory Server のデータ格納場所に関する設定情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
ディレクトリマネージャパスワード USER_DIR_ADM_PASSWD	ディレクトリマネージャのパスワード 状態ファイルでは、このパラメータはデフォルト値を持たない。この値は、USE_EXISTING_USER_DIR を 1 に設定した場合にだけ指定が必要となる
サフィックス USER_DIR_SUFFIX	ユーザーおよびグループデータを含む Directory Server サフィックス。たとえば、dc=example,dc=com など この値は、LDAP ツリー内のエントリーに対応している必要がある 状態ファイルでは、このパラメータはデフォルト値を持たない。この値は、USE_EXISTING_USER_DIR を 1 に設定した場合にだけ指定が必要となる

Directory Server : データの取り込み情報

インストールおよび設定処理を行う際に、Directory Server のユーザーディレクトリを取り込むことができます。この場合、後から別の手順を実行して取り込みを行う必要はありません。

表 3-9 Directory Server のデータ取り込みに関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
サンプル組織構造の読み込み DS_ADD_SAMPLE_ENTRIES	Java Enterprise System インストーラに対し、サンプルのロールおよびグループを、この Directory Server インスタンスの対応するアクセス制御リストとともに追加するように指示するオプション 状態ファイルで次のいずれかの値を指定する <ul style="list-style-type: none"> 1 : Directory Server にサンプル組織構造を読み込む 0 : (ゼロ) サンプル組織構造を読み込まない。これがデフォルト値

表 3-9 Directory Server のデータ取り込みに関する設定情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
データの読み込み DS_POPULATE_DATABASE	<p>Java Enterprise System インストーラに対し、エントリーを後で別個にロードするのではなく、インストーラおよび設定処理の一部としてロードするように指示する</p> <p>状態ファイルで次のいずれかの値を指定する</p> <ul style="list-style-type: none"> • 1: Directory Server にサンプルデータを読み込む • 0:(ゼロ) サンプルデータを読み込まない。これがデフォルト値
サンプルデータあるいは自分のデータ (LDIF ファイル) ファイル名 DS_POPULATE_DATABASE_FILE_NAME	<p>次のオプションのいずれかを指定する</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>dir_svr_base/slapd-ServerID/ldif/</i> 内のサンプル LDIF ファイルからエントリーをロードする • ユーザーが指定した LDIF ファイルからエントリーをロードする。このオプションを選択する場合は、ファイル名を入力する必要がある <p>状態ファイルで次のいずれかを選択する</p> <ul style="list-style-type: none"> • パラメータ値には何も入力せずに、サンプルファイルからエントリーをロードする • 完全修飾ファイル名を指定して、そのファイルからエントリーをロードする
データのインポートにかかる時間を短縮するため、スキーマチェックを無効にします。 DS_DISABLE_SCHEMA_CHECKING	<p>Java Enterprise System インストーラに対し、エントリーが既知のスキーマに従っているかどうかをチェックせずにサンプルデータをロードするように指示するオプション</p> <p>スキーマチェックを有効にすると、既知のスキーマに従っている場合にのみ、ロードされたエントリーを変更できる。スキーマチェックを無効にする場合は、インストール後に矛盾を解決することを予定に入れておく必要がある</p> <p>状態ファイルで次のいずれかの値を指定する</p> <ul style="list-style-type: none"> • 1: スキーマチェックを無効にする • 0:(ゼロ) スキーマチェックを有効にする。これがデフォルト値

Directory Proxy Server の設定

インストール時に、Directory Proxy Server について次の情報を指定する必要があります。

- ポート選択の情報
- Directory Server 管理者の設定情報

いずれかのバージョンの管理サーバーがすでにインストールされているマシンに Directory Proxy Server をインストールする場合は、インストーラに次の情報も指定する必要があります。

- 管理サーバーのルート情報

Directory Proxy Server : ポート選択の情報

表 3-10 Directory Proxy Server のポート選択に関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
ディレクトリプロキシサーバー ポート DPS_PORT	Directory Proxy Server がクライアント接続を待機するポート デフォルト値は 489

Directory Proxy Server : Directory Server 管理者の設定情報

表 3-11 Directory Proxy Server の Directory Server 管理者に関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
管理者ユーザー ID DPS_CDS_ADMIN	すべての管理者権限を持つユーザーのユーザー ID デフォルト値は、管理サーバーの「設定サーバー管理 ID」として指定した値 (ADMINSERV_CONFIG_ADMIN_USER)。84 ページの表 3-3 を参照

表 3-11 Directory Proxy Server の Directory Server 管理者に関する設定情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
管理者パスワード DPS_CDS_PWD	すべての管理者権限を持つユーザーを確認するためのパスワード デフォルト値は、管理サーバーの「設定サーバーの管理パスワード」として指定したパスワード (ADMINSERV_CONFIG_ADMIN_USER)。84 ページの表 3-3 を参照

Directory Proxy Server : サーバールート情報

管理サーバーがすでにインストールされている場合に限り、インストーラは次の表に記載されている情報を要求します。

表 3-12 Directory Proxy Server のサーバールートに関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
管理サーバールートディレクトリ DPS_SERVERROOT	DPS のこのインスタンスの管理サーバー設定データが格納されているファイルシステムディレクトリ このディレクトリは、管理サーバーの「サーバールート」の値 (ADMINSERV_ROOT) に関連している。84 ページの表 3-3 を参照 この値の形式は、ローカルファイルシステムの完全修飾パス名 デフォルト値は存在しない

Identity Server の設定

Java Enterprise System インストーラは、Identity Server の次のサブコンポーネントのインストールをサポートします。

- アイデンティティ管理とポリシーサービスコア
- 連携管理の共有ドメインサービス
- Identity Server 管理コンソール

注 アイデンティティ管理とポリシーサービスコアの一部として Identity Server SDK は自動的にインストールされますが、リモートマシンに個別にインストールすることもできます。Identity Server SDK の個別のインストールについては、[115 ページの「Identity Server SDK の設定」](#)を参照してください。

インストールするサブコンポーネントが異なると、インストーラに指定する情報も異なります。詳細は次の表を参照してください。この表には、関連情報を参照できる表の参照先も記載されています。

表 3-13 Identity Server のサブコンポーネントのインストールに必要な情報

インストールするサブコンポーネント	必要な情報	参照先
アイデンティティ管理とポリシーサービスコア	Web コンテナ情報	98 ページの表 3-15
	Directory Server 情報	112 ページの表 3-25
	作成されたディレクトリの情報	113 ページの表 3-26 および 113 ページの表 3-27
連携管理の共有ドメインサービス	サービス情報	106 ページの表 3-20
Identity Server 管理コンソール	管理情報	97 ページの表 3-14
	サービス情報	106 ページの表 3-20

Identity Server : 管理情報

Identity Server の管理コンソールをインストールする場合、インストーラは次の情報を要求します。

表 3-14 Identity Server 用の管理に関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
管理者ユーザー ID IS_ADMIN_USER_ID	Identity Server の最上位管理者。このユーザーは、Identity Server が管理するすべてのエントリに対する無制限のアクセス権を持つ デフォルト名の amadmin を変更することはできない。これにより、Identity Server 管理者のロールおよび権限の作成と Directory Server へのマッピングが正しく行われることが保証されるため、ユーザーはインストール後すぐに Identity Server にログオンできる
管理者パスワード IS_ADMINPASSWD	amadmin ユーザーのパスワード。パスワードは 8 文字以上で指定する必要がある デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「管理者パスワード」の値 (CMN_ADMIN_PASSWORD)。82 ページの表 3-2 を参照
LDAP ユーザー ID IS_LDAP_USER	LDAP サービス、Membership サービス、および Policy サービスに対するバインド DN ユーザー。このユーザーは、Directory Server のすべてのエントリに対する読み取りおよび検索アクセス権を持つ デフォルトユーザー名の amldapuser は変更できない
LDAP パスワード IS_LDAPUSERPASSWD	amldapuser ユーザーのパスワード。このパスワードを amadmin ユーザーのパスワードとは違うものにする必要がある。有効な任意の Directory Service パスワードを指定できる

表 3-14 Identity Server 用の管理に関する設定情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
パスワードの暗号鍵 AM_ENC_PWD	<p>Identity Server がユーザーパスワードの暗号化に使用する文字列</p> <p>対話式インストーラは、デフォルトのパスワード暗号化鍵を生成する。デフォルト値を受け入れることも、J2EE 乱数発生関数の生成する任意の鍵を指定することもできる。Identity Server のインストール時にプロパティファイルが更新され、<code>am.encryption.pwd</code> プロパティがこの値に設定される。プロパティファイルは <code>/is_svr_base/SUNWam/lib/AMConfig.properties</code> で、<code>IS_svr_base</code> のデフォルト値は <code>/opt</code> である</p> <p>Identity Server のサブコンポーネントはすべて、アイデンティティ管理およびポリシーサービスコアが使用するのと同じ暗号化鍵を使用する必要がある。Identity Server のサブコンポーネントを複数のシステム間で配布し、管理コンソールまたは連携管理の共有ドメインサービスをインストールする場合、コアのインストールで生成された <code>am.encryption.pwd</code> の値をコピーし、このフィールドにペーストする</p> <p>状態ファイルのデフォルトは LOCK。任意の文字の組み合わせを使用できる</p>

Identity Server : Web コンテナ情報

Identity Server のアイデンティティ管理およびポリシーサービスコアの各サブコンポーネントは、4 つの Web コンテナのいずれかで稼動します。インストーラが要求する情報は、Web コンテナの種類によって異なります。

次の表は、4 つの Web コンテナと、制限が適用される場合はその制限を示しています。また、各 Web コンテナで Identity Server について必要となる情報の相互参照先も示されています。

表 3-15 Identity Server と Web コンテナの組み合わせ

Web コンテナ	可用性	参照先
Sun ONE Web Server	制限なし	99 ページの「Web コンテナ情報 : Identity Server と Sun ONE Web Server の使用」

表 3-15 Identity Server と Web コンテナの組み合わせ (続き)

Web コンテナ	可用性	参照先
Sun ONE Application Server	制限なし	101 ページの「Web コンテナ情報 : Identity Server と Sun ONE Application Server の使用」
BEA WebLogic	Portal Server だけで使用可	103 ページの「Web コンテナ情報 : Identity Server と BEA WebLogic との連動」
IBM Websphere	Portal Server と Solaris 8 オペレーティングシステムだけで使用可	104 ページの「Web コンテナ情報 : Identity Server と IBM WebSphere との連動」

Web コンテナ情報 : Identity Server と Sun ONE Web Server の使用

表 3-16 は、Sun ONE Web Server が Identity Server のアイデンティティ管理およびポリシーサービスコアサブコンポーネントの Web コンテナである場合に、インストーラに指定する必要がある情報を示しています。

表 3-16 Identity Server と Web Server を使用する場合の Web コンテナの設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
ホスト名 IS_WS_HOST_NAME	ホストの完全修飾ドメイン名 たとえば、このホストが siroe.example.com の場合、値は siroe.example.com となる デフォルト値は、現在のホストの完全修飾ドメイン名
Web サーバーポート IS_WS_INSTANCE_PORT	Web Server が HTTP 接続に対して待機するポート デフォルト値は 80 このインストーラセッションで Web Server をインストールする場合、デフォルト値は「Web サーバーポート」の値 (WS_INSTANCE_PORT) となる。 144 ページの表 3-58 を参照

表 3-16 Identity Server と Web Server を使用する場合の Web コンテナの設定情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
Web サーバーインスタンスディレクトリ IS_WS_INSTANCE_DIR	<p>Web Server インスタンスのインストール先ディレクトリへのパス。パスの構文は次のとおり</p> <p><i>web_svr_base</i>/<i>https-web-server-instance-name</i></p> <p>例: /opt/SUNWwbsvr/https-myinstance</p> <p>このインストーラセッションで Web Server をインストールする場合、<i>web_svr_base</i> のデフォルト値は Web Server のインストールディレクトリ (デフォルトでは /opt/SUNWwbsvr) となる</p>
ドキュメントルートディレクトリ IS_WS_DOC_DIR	<p>Web Server がコンテンツドキュメントを格納するディレクトリ</p> <p>このインストーラセッションで Web Server をインストールする場合、デフォルト値は Web Server の「ドキュメントルートディレクトリ」の値 (<i>WS_INSTANCE_CONTENT_ROOT</i>) となる。144 ページの表 3-58 を参照</p> <p>Web Server をインストールしない場合、デフォルトの場所は <i>web_svr_base/docs</i> となる。 <i>web_svr_base</i> のデフォルト値は /opt/SUNWwbsvr</p>
サーバーインスタンスポートはセキュリティ保護されていますか IS_PROTOCOL	<p>Web Server のインスタンスのポートがセキュリティ保護されたポートであるかどうかを指定する。セキュリティ保護されたポートでは、HTTPS プロトコルが使用される。セキュリティ保護されていないポートでは、HTTP が使用される</p> <p>状態ファイルで、セキュリティ保護されたポートの場合は <i>https</i>、またはセキュリティ保護されていないポートの場合は <i>http</i> を指定する</p>

Web コンテナ情報 : Identity Server と Sun ONE Application Server の使用

表 3-17 は、Sun ONE Application Server が Identity Server のアイデンティティ管理およびポリシーサービスコアサブコンポーネントの Web コンテナである場合に、インストーラに指定する情報を示しています。

表 3-17 Identity Server と Application Server を使用する場合の Web コンテナの設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
インストールディレクトリ IS_APPSERVERBASEDIR	Application Server のインストール先ディレクトリへのパス Application Server をインストールする場合、この値のデフォルト値は Application Server のインストールディレクトリに指定した値となる デフォルト値は /opt/SUNWappserver7
構成ディレクトリ IS_AS_CONFIG_DIR	Application Server インスタンスの設定ファイルを含むディレクトリへのパス デフォルト値は /etc/opt/SUNWappserver7
アイデンティティサーバー実行時インスタンス IS_IAS7INSTANCE	Identity Server を実行する Application Server インスタンスの名前 デフォルト値は server1
インスタンスディレクトリ IS_IAS7INSTANCEDIR	Application Server がインスタンスのファイルを格納するディレクトリへのパス デフォルト値は /var/opt/SUNWappserver7/domains/ domain1/server1
アイデンティティサーバーインスタンスポート IS_IAS7INSTANCE_PORT	Application Server がインスタンスへの接続を待機するポート デフォルト値は 80
管理者ユーザー ID IS_IAS7_ADMIN	Application Server 管理者のユーザー ID デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「管理者ユーザー ID」の値。82 ページの表 3-2 を参照
管理者パスワード IS_IAS7_ADMINPASSWD	Application Server 管理者のパスワード デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「管理者のユーザーパスワード」の値。82 ページの表 3-2 を参照

表 3-17 Identity Server と Application Server を使用する場合は Web コンテナの設定情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
管理ポート IS_IAS7_ADMINPORT	Application Server の管理サーバーが接続を待機するポート デフォルト値は 4848
ドキュメントルート IS_SUNAPPSERVER_DOCS_DIR	Application Server がコンテンツドキュメントを格納するディレクトリ Portal Server を同じインストーラセッション内でインストールする場合にのみ、このフィールドが表示される デフォルトのドキュメントルートは、PS_DEPLOY_INSTANCE によって指定される Application Server インスタンスディレクトリの最後に /docroot を追加した値となる。たとえば、「サーバーインスタンス」に server1 を指定した場合は、デフォルト値は .../server1/docroot となる
サーバーインスタンスポートはセキュリティ保護されていますか IS_PROTOCOL	「インスタンスポート」の値 (IS_IAS7INSTANCE_PORT) がセキュリティ保護されているポートを参照するかどうかを指定する。セキュリティ保護されたポートでは、HTTPS プロトコルが使用される。セキュリティ保護されていないポートでは、HTTP が使用される 状態ファイルで、セキュリティ保護されたポートの場合は https、またはセキュリティ保護されていないポートの場合は http を指定する
管理サーバーポートはセキュリティ保護されていますか ASADMIN_PROTOCOL	「管理ポート」の値 (IS_IAS7_ADMINPORT) がセキュリティ保護されたポートであるかどうかを指定する。セキュリティ保護されたポートでは、HTTPS プロトコルが使用される。セキュリティ保護されていないポートでは、HTTP が使用される 状態ファイルで、セキュリティ保護されたポートの場合は https、またはセキュリティ保護されていないポートの場合は http を指定する

Web コンテナ情報 : Identity Server と BEA WebLogic との連動

表 3-18 は、BEA WebLogic が Identity Server のアイデンティティ管理およびポリシーサービスコアサブコンポーネントの Web コンテナである場合に、インストーラに指定する情報を示しています。

表 3-18 Identity Server と BEA WebLogic を連動させる場合の Web コンテナの設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
インストールディレクトリ IS_BEA_INSTALLDIR	BEA WebLogic のインストール先ディレクトリへのパス デフォルト値は /bea/wlserver6.1
管理パスワード IS_BEA_ADMIN_PASSWORD	BEA WebLogic 管理者 (システムユーザー) のパスワード デフォルト値は存在しない
管理ポート IS_BEA_ADMIN_PORT	BEA WebLogic が管理接続を待機するポート デフォルト値は 7001
ドメイン IS_BEA_DOMAIN	BEA WebLogic が配備される BEA WebLogic ドメインの名前 デフォルト値は mydomain
インスタンス IS_BEA_INSTANCE	Identity Server を実行する BEA WebLogic インスタンスの名前 デフォルト値は myserver
ドキュメントルートディレクトリ IS_BEA_DOC_ROOT_DIR	BEA WebLogic がコンテンツドキュメントを格納するディレクトリへのパス デフォルト値は /bea/wlserver6.1/config/mydomain/applications/DefaultWebApp
BEA WebLogic 用の Java ホームディレクトリ IS_BEA_WEB_LOGIC_JAVA_HOME_DIR	BEA WebLogic が使用する Java 2 プラットフォームバージョンのインストール先ディレクトリへのパス デフォルト値は /bea/jdk131

表 3-18 Identity Server と BEA WebLogic を連動させる場合の Web コンテナの設定情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
管理サーバー IS_BEA_MANAGED_SERVER	BEA WebLogic Server が管理対象サーバーであることを指定できる BEA WebLogic Server が管理対象サーバーである場合、Portal Server Web アプリケーションを WebLogic の「サーバーインスタンス」(PS_DEPLOY_INSTANCE) に指定したインスタンスに配備してはならない 状態ファイルで、管理対象サーバーの場合は Yes、または管理対象外サーバーの場合は No を指定する。デフォルト値は No
サーバーインスタンスポートはセキュリティ保護されていますか IS_PROTOCOL	この BEA WebLogic インスタンスのポートがセキュリティ保護されたポートであるかどうかを指定する。セキュリティ保護されたポートでは、HTTPS プロトコルが使用される。セキュリティ保護されていないポートでは、HTTP が使用される 状態ファイルで、セキュリティ保護されたポートの場合は https、またはセキュリティ保護されていないポートの場合は http を指定する

Web コンテナ情報 : Identity Server と IBM WebSphere との連動

次の表は、IBM WebSphere が Identity Server のアイデンティティ管理およびポリシーサービスコアサブコンポーネントの Web コンテナである場合に、インストーラに指定する情報を示しています。

表 3-19 Identity Server と IBM WebSphere を連動させる場合の Web コンテナの設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
インストールディレクトリ IS_IBM_INSTALLDIR	IBM WebSphere のインストール先ディレクトリへのパス デフォルト値は /opt/WebSphere/AppServer
仮想ホスト IS_IBM_VIRTUAL_HOST	IBM WebSphere インスタンスの仮想ホストエイリアスの名前 デフォルト値は default_host

表 3-19 Identity Server と IBM WebSphere を連動させる場合の Web コンテナの設定情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
ノード名 IS_WAS40_NODE	IBM WebSphere インスタンスの名前 デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「ホスト名」の値 (CMN_HOST_NAME)。82 ページの表 3-2 を参照
アプリケーションサーバー名 IS_IBM_APPSERV_NAME	IBM WebSphere インスタンスの名前 デフォルト値は Default_Server
アプリケーションサーバーポート IS_IBM_APPSERV_PORT	IBM WebSphere アプリケーションインスタンスが HTTP 接続を待機するポート。この値は、通常はフロントエンド Web サーバーから設定される デフォルト値は 9080
ドキュメントルートディレクトリ IS_IBM_DOC_DIR_HOST	IBM WebSphere がコンテンツドキュメントを格納するディレクトリ デフォルト値は /opt/IBMHTTPS/htdocs/en_US 英語以外の言語を使用する場合は、パス名の最後の部分を変更する必要がある
Web サーバーポート IS_IBM_WEB_SERV_PORT	IBM HTTP Server など、IBM WebSphere のフロントエンド Web サーバーが HTTP 接続を待機するポート デフォルト値は 80
IBM Websphere の Java Home ディレクトリ IS_IBM_WEBSPPHERE_JAVA_HOME	IBM WebSphere が使用する Java バージョンのホームディレクトリへのパス デフォルト値は /opt/WebSphere/AppServer/java
サーバーインスタンスポートはセキュリティ保護されていますか IS_PROTOCOL	Web Server ポート (IS_IBM_WEB_SERV_PORT) がセキュリティ保護されたポートであるかどうかを指定する。セキュリティ保護されたポートでは、HTTPS プロトコルが使用される。セキュリティ保護されていないポートでは、HTTP が使用される 状態ファイルで、セキュリティ保護されたポートの場合は https、またはセキュリティ保護されていないポートの場合は http を指定する

Identity Server : サービス情報

Identity Server のサブコンポーネントが異なる場合、インストーラに指定する Identity Server サービスの情報も異なります。表 3-20 に示すように、インストール済みのコンポーネントによっても要件が異なります。

表 3-20 Identity Server とサービスの組み合わせ

インストールするサブコンポーネント	インストールされているサブコンポーネント	参照先
アイデンティティ管理とポリシーサービスコア、および Identity Server 管理コンソール	Identity Server のコンポーネントはインストールされていない	例 1、表 3-21
Identity Server 管理コンソールのみ	アイデンティティ管理とポリシーサービスコア	例 2、表 3-22
Identity Server 管理コンソールのみ	Identity Server のコンポーネントはインストールされていない	例 3、表 3-23
連携管理の共有ドメインサービスのみ	アイデンティティ管理とポリシーサービスコア	例 4、表 3-24

例 1

表 3-21 は、アイデンティティ管理、ポリシーサービスコア、および Identity Server 管理コンソールサブコンポーネントのインストール時に、インストーラに指定するサービス情報を示しています。

この例では、新規コンソールを配備するか、配備済みのコンソールを使用できます。「説明」列に示すように、新規コンソールを配備する場合は表 3-21 の一部の情報は必要ありません。

表 3-21 Identity Server のサービスに関する設定情報、例 1

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
HOST SERVER_HOST	インストール先のシステムの完全修飾ドメイン名 デフォルト値は、ローカルシステムの完全修飾ドメイン名

表 3-21 Identity Server のサービスに関する設定情報、例 1 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
サービス配備 URI SERVER_DEPLOY_URI	<p>アイデンティティ管理およびポリシーサービスコアサブコンポーネントに関連する HTML ページ、クラス、および JAR ファイルにアクセスするための URI (Uniform Resource Identifier) プレフィックス</p> <p>デフォルト値は <code>amserver</code>。先頭にスラッシュを入力してはならない</p>
共通ドメイン配備 URI CDS_DEPLOY_URI	<p>Web コンテナ上の共通ドメインサービスにアクセスするための URI プレフィックス</p> <p>デフォルト値は <code>amcommon</code>。先頭にスラッシュを入力してはならない</p>
クッキードメイン COOKIE_DOMAIN_LIST	<p>Identity Server がユーザーにセッション ID を付与する場合にブラウザに返す、信頼できる DNS ドメインの名前</p> <p>この値は、<code>example.com</code> などの単一の最上位ドメインに限定することができる。この場合、セッション ID で <code>example.com</code> のすべてのサブドメインの認証が得られる。</p> <p>また、<code>.corp.example.com</code>、<code>.sales.example.com</code> のように、コンマで区切ってサブドメインを指定することもできる。この場合、セッション ID でリスト内のすべてのサブドメインの認証が得られる。</p> <p>リスト内の各ドメインの先頭に、ドット (.) を指定する必要がある</p> <p>デフォルト値は、現在のドメインにプレフィックスとしてドット (.) を付加した値となる</p>
このサービスにコンソールを配備しますか？ USE_DSAME_SERVICES_WEB_CONTAINER	<p>Identity Server がインストールされるホストの Web コンテナにコンソールを配備するには、<code>yes</code> を指定する。別のホストに配備されている既存のコンソールを使用する場合は、<code>no</code> を指定する</p> <p><code>no</code> を指定する場合は、「コンソールホスト」、「コンソールポート」、「コンソール配備 URI」、および「パスワード配備 URI」を指定する必要がある</p> <p>状態ファイルでは、<code>yes</code> の場合は <code>true</code>、<code>no</code> の場合は <code>false</code> を指定する</p>

表 3-21 Identity Server のサービスに関する設定情報、例 1 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
コンソールホスト CONSOLE_HOST	<p>既存のコンソールをホストするサーバーの完全修飾ドメイン名</p> <p>コンソールを新たに配備する場合は、この値を指定する必要はない。グラフィカルインストールモードでは、既存のコンソールを使用する場合にだけこのフィールドを編集できる</p> <p>デフォルト値には、「ホスト」に指定した値 (SERVER_HOST)、ドット、および共通サーバー設定で指定した「DNS ドメイン名」の値が含まれる。82 ページの表 3-2 を参照</p> <p>たとえば、ホストが siroe、ドメインが example.com であれば、デフォルト値は siroe.example.com となる</p>
コンソールポート CONSOLE_PORT	<p>既存のコンソールが接続を待機するポート。0 ～ 65535 の範囲内で、有効かつ未使用の任意のポート番号を使用できる</p> <p>コンソールを新たに配備する場合は、この値を指定する必要はない。グラフィカルインストールモードでは、既存のコンソールを使用する場合のみ、このフィールドを編集できる</p> <p>デフォルト値は、次のいずれかの Web コンテナポートで指定した値となる</p> <ul style="list-style-type: none"> 「Web サーバーポート」 (IS_WS_INSTANCE_PORT)。 99 ページの表 3-16 の定義を参照 「アイデンティティサーバーインスタンスポート」 (IS_IAS7INSTANCE_PORT)。 101 ページの表 3-17 の定義を参照 「管理ポート」 (IS_BEADMIN_PORT)。 103 ページの表 3-18 の定義を参照 「Web サーバーポート」 (IS_IBM_WEB_SERV_PORT)。 104 ページの表 3-19 の定義を参照

表 3-21 Identity Server のサービスに関する設定情報、例 1 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
コンソール配備 URI CONSOLE_DEPLOY_URI	Identity Server 管理コンソールサブコンポーネントに関連する HTML ページ、クラス、および JAR ファイルにアクセスするための URI プレフィックス デフォルト値は amconsole。先頭にスラッシュを入力してはならない
パスワード配備 URI PASSWORD_SERVICE_DEPLOY_URI	Identity Server を実行する Web コンテナが使用する、ユーザー指定の文字列と対応する配備済みアプリケーション間のマッピングを決定する URI デフォルト値は ampasword。先頭にスラッシュを入力してはならない

例 2

表 3-22 は、次の両方の条件が真である場合にインストーラに指定するサービス情報を示しています。

- Identity Server 管理コンソールサブコンポーネントのみをインストールする
- アイデンティティ管理およびポリシーサービスコアサブコンポーネントが、すでに同一のホストにインストールされている

表 3-22 Identity Server のサービスに関する設定情報、例 2

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
コンソール配備 URI CONSOLE_DEPLOY_URI	Identity Server 管理コンソールサブコンポーネントに関連する HTML ページ、クラス、および JAR ファイルにアクセスするための URI (Uniform Resource Identifier) プレフィックス デフォルト値は amconsole。先頭にスラッシュを入力してはならない
パスワードサービス配備 URI PASSWORD_SERVICE_DEPLOY_URI	Identity Server を実行する Web コンテナが使用する、ユーザー指定の文字列と対応する配備済みアプリケーション間のマッピングを決定する URI デフォルト値は ampasword。先頭にスラッシュを入力してはならない

例 3

表 3-23 は、次の両方の条件が真である場合にインストーラに指定するサービス情報を示しています。

- Identity Server 管理コンソールサブコンポーネントのみをインストールする
- アイデンティティ管理およびポリシーサービスコアサブコンポーネントが、異なるホストにインストールされている

表 3-23 Identity Server のサービスに関する設定情報、例 3

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
Sun ONE Identity Server コンソールを実行するための Web コンテナ	
コンソールホスト CONSOLE_HOST	インストール先のシステムの完全修飾ドメイン名
コンソール配備 URI CONSOLE_DEPLOY_URI	Identity Server 管理コンソールサブコンポーネントに関連する HTML ページ、クラス、および JAR ファイルにアクセスするための URI (Uniform Resource Identifier) プレフィックス デフォルト値は amconsole。先頭にスラッシュを入力してはならない
パスワードサービス配備 URI PASSWORD_SERVICE_DEPLOY_URI	パスワードサービス用の配備 URI デフォルト値は ampasword。先頭にスラッシュを入力してはならない
Sun ONE Identity Server サービスを実行するための Web コンテナ	
サービスホスト SERVER_HOST	アイデンティティ管理およびポリシーサービスコアサブコンポーネントのインストール先ホストの完全修飾ドメイン名 デフォルト値は、このホストの完全修飾ドメイン名。デフォルト値は指定形式を示す例としてだけ用い、正しいリモートホスト名を指定する必要がある 状態ファイルでは、リモートホストの完全修飾ドメイン名を指定する
ポート CONSOLE_PORT	アイデンティティ管理およびポリシーサービスコアサブコンポーネントが接続を待機するポート。このポートは、Web コンテナが使用する HTTP ポートまたは HTTPS ポートである

表 3-23 Identity Server のサービスに関する設定情報、例 3 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
サービス配備 URI SERVER_DEPLOY_URI	アイデンティティ管理およびポリシーサービスコアサブコンポーネントに関連する HTML ページ、クラス、および JAR ファイルにアクセスするための URI プレフィックス デフォルト値は <code>amserver</code> 。先頭にスラッシュを入力してはならない
クッキードメイン COOKIE_DOMAIN_LIST	Identity Server がユーザーにセッション ID を付与する場合にブラウザに返す、信頼できる DNS ドメインの名前 この値を、 <code>.example.com</code> などの単一の最上位ドメインに限定できる。この場合、セッション ID で <code>example.com</code> のすべてのサブドメインの認証が得られる また、 <code>.corp.example.com</code> 、 <code>.sales.example.com</code> のように、コンマで区切ってサブドメインを指定することもできる。この場合、セッション ID でリスト内のすべてのサブドメインの認証が得られる。 各ドメインの先頭に、ドット (.) を指定する必要がある デフォルト値は、現在のドメインにプレフィックスとしてドット (.) を付加した値となる

例 4

表 3-24 は、連携管理サブコンポーネントの共有ドメインサービスのみをインストールする場合に、インストーラに指定するサービス情報を示しています。

表 3-24 Identity Server のサービスに関する設定情報、例 4

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
共通ドメイン配備 URI CDS_DEPLOY_URI	Web コンテナ上の共通ドメインサービスにアクセスするための URI プレフィックス デフォルト値は <code>amcommon</code> 。先頭にスラッシュを入力してはならない

Identity Server : Directory Server 情報

アイデンティティ管理およびポリシーサービスコアをインストールする場合に、インストーラに指定する情報は次のとおりです。

表 3-25 Identity Server 用の Directory Server の設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
ディレクトリサーバーホスト IS_DS_HOSTNAME	Directory Server が存在するホストを決定するホスト名または値 デフォルト値は、ローカルマシンの完全修飾ドメイン名。たとえば、ローカルマシンが siroe.example.com の場合、デフォルト値は siroe.example.com となる
ディレクトリサーバーポート IS_DS_PORT	Directory Server がクライアント接続を待機するポート デフォルト値は 389
アイデンティティサーバーディレクトリルートサフィックス IS_ROOT_SUFFIX	Identity Server ルートサフィックスとして設定する識別名 (DN) デフォルト値は、このホストの完全修飾ホスト名からホスト名を除いた値に基づく。たとえば、このホストが siroe.subdomain.example.com の場合、値は dc=subdomain,dc=example,dc=com となる
ディレクトリマネージャ DN IS_DIRMGRDN	Directory Server へのすべてのアクセス権を持つユーザーの DN デフォルト値は cn=Directory Manager
ディレクトリマネージャパスワード IS_DIRMGRPASSWD	ディレクトリマネージャのパスワード

Identity Server : プロビジョニングされているディレクトリの情報

プロビジョニングされたディレクトリの設定に必要な情報は、インストーラがマシン内でプロビジョニングされた既存ディレクトリを検出するかどうかによって異なります。

インストーラが状態ファイルの生成時にプロビジョニングされた既存ディレクトリを検出すると、状態ファイルに `IS_EXISTING_DIT_FOUND=true` が書き込まれます。プロビジョニングされた既存ディレクトリが検出されない場合、インストーラは状態ファイルに `IS_EXISTING_DIT_FOUND=false` を書き込みます。

プロビジョニングされた既存ディレクトリが検出された場合

インストーラがプロビジョニングされた既存ディレクトリを検出した場合は、次の情報を指定します。

表 3-26 Identity Server のプロビジョニングされた既存ディレクトリに関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
ユーザーネーミング属性 <code>IS_USER_NAMING_ATTR</code>	プロビジョニングされたディレクトリ内でユーザーに対して使用されるネーミング属性 デフォルト値は <code>uid</code>

プロビジョニングされた既存ディレクトリが検出されない場合

インストーラがプロビジョニングされた既存ディレクトリを検出しない場合、プロビジョニングされた既存ディレクトリを使用するかどうかを選択できます。次の表の最初の質問に対して **Yes** を指定した場合、表に記載されている残りの質問に対しても情報を指定する必要があります。

表 3-27 Identity Server の、プロビジョニングされた既存ディレクトリが検出されない場合の設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
ディレクトリサーバーにユーザーデータが準備されていますか？ <code>IS_LOAD_DIT</code>	プロビジョニングされた既存ディレクトリを使用するかどうかを指定する デフォルト値は <code>No</code> 状態ファイルの値として指定できる値は、 <code>y</code> または <code>n</code> 。デフォルト値は <code>n</code>

表 3-27 Identity Server の、プロビジョニングされた既存ディレクトリが検出されない場合の設定情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
組織マーカーオブジェクトクラス IS_ORG_OBJECT_CLASS	<p>プロビジョニングされた既存ディレクトリ内で組織に対して定義されているオブジェクトクラス</p> <p>デフォルト値は SunManagedOrganization</p> <p>この値は、この表の最初の項目の値を Yes に設定した場合にだけ使用される</p>
組織ネーミング属性 CONFIG_IDENT_NA4ORG	<p>プロビジョニングされている既存ディレクトリ内で組織の定義に使用されるネーミング属性</p> <p>この値は、この表の最初の項目の値を Yes に設定した場合にだけ使用される</p> <p>デフォルト値は o</p>
ユーザーマーカーオブジェクトクラス IS_USER_OBJECT_CLASS	<p>プロビジョニングされた既存ディレクトリ内でユーザーに対して定義されているオブジェクトクラス</p> <p>この値は、この表の最初の項目の値を Yes に設定した場合にだけ使用される</p> <p>デフォルト値は inetorgperson</p>
ユーザーネーミング属性 CONFIG_IDENT_NA4USER	<p>プロビジョニングされた既存ディレクトリ内でユーザーに対して使用されるネーミング属性</p> <p>この値は、この表の最初の項目の値を Yes に設定した場合にだけ使用される</p> <p>デフォルト値は uid</p>

Identity Server SDK の設定

Identity Server のサブコンポーネントであるアイデンティティ管理とポリシーサービスコアをインストールすると、Identity Server SDK が自動的にインストールされます。Identity Server SDK は、Identity Server コアサービスから離れたリモートマシンにも独立したコンポーネントとしてインストールできます。

Identity Server SDK を独立したコンポーネントとしてインストールする場合は、次の情報を指定する必要があります。

- 管理情報
- Directory Server 情報
- Web コンテナ情報

Identity Server SDK をインストールする前に、リモートマシンに Identity Server コアサービスをインストールし、稼動しておく必要があります。このインストールの実行中に指定する Web コンテナの情報と Directory Server の設定情報は、Identity Server コアサービスの Web コンテナ情報および Directory Server 設定情報と一致している必要があります。

注 インストーラは、Web コンテナと Directory Server に関する情報を要求するときに、ローカルホストの設定に基づいてデフォルト値を表示します。

デフォルト値は形式の例としてだけ使用し、これらの値をそのまま適用しないでください。ここでは、デフォルト値の代わりに、正しいリモート情報を指定する必要があります。

Identity Server SDK : 管理情報

Identity Server SDK だけをインストールする場合、インストーラは次の管理情報を要求します。

表 3-28 Identity Server SDK 用の管理に関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
管理者ユーザー ID IS_ADMIN_USER_ID	<p>Identity Server の最上位管理者。このユーザーは、Identity Server が管理するすべてのエントリに対するすべてのアクセス権を持つ</p> <p>デフォルト名の amadmin を変更することはできない。これにより、Identity Server 管理者のロールおよび権限の作成と Directory Server へのマッピングが正しく行われることが保証されるため、ユーザーはインストール後すぐに Identity Server にログオンできる</p>
管理者パスワード IS_ADMINPASSWORD	<p>amadmin ユーザーのパスワード。パスワードは 8 文字以上で指定する必要がある</p> <p>デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「管理者パスワード」の値 (CMN_ADMIN_PASSWORD)。82 ページの表 3-2 を参照</p>
LDAP ユーザー ID IS_LDAP_USER	<p>LDAP サービス、Membership サービス、および Policy サービスに対するバインド DN ユーザー。このユーザーは、Directory Server のすべてのエントリに対する読み取りおよび検索アクセス権を持つ</p> <p>デフォルトユーザー名の amldapuser は変更できない</p>
LDAP パスワード IS_LDAPUSERPASSWORD	<p>amldapuser ユーザーのパスワード。このパスワードを amadmin ユーザーのパスワードと同じにすることはできない。有効な任意の Directory Service パスワードを指定できる</p>
パスワードの暗号鍵 AM_ENC_PWD	<p>Identity Server がユーザーパスワードの暗号化に使用する文字列</p> <p>Identity Server のサブコンポーネントはすべて、アイデンティティ管理およびポリシーサービスコアが使用するのと同じ暗号化鍵を使用する必要がある。Identity Server SDK の暗号化鍵を指定するには、コアのインストール時に生成される am.encrypted.pwd の値をコピーし、このフィールドにペーストする</p> <p>状態ファイルのデフォルトは LOCK。任意の文字の組み合わせを使用できる</p>

Identity Server SDK : Directory Server 情報

Identity Server のサブコンポーネントなしで Identity Server SDK をインストールする場合、インストーラは Directory Server に関する次の情報を要求します。

表 3-29 Identity Server SDK 用の Directory Server の設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
ディレクトリサーバーホスト IS_DS_HOSTNAME	<p>Directory Server が存在するホストを決定するホスト名または値</p> <p>デフォルト値は、このマシンの完全修飾ドメイン名。たとえば、インストール先が <code>siroe.example.com</code> の場合、デフォルト値は <code>siroe.example.com</code> となる</p> <p>このホストに Directory Server がインストールされている場合以外は、デフォルト値を形式を示す例としてだけ利用する</p>
ディレクトリサーバーポート IS_DS_PORT	<p>Directory Server がクライアント接続を待機するポート</p> <p>デフォルト値は 389</p>
アイデンティティサーバーディレクトリルートサフィックス IS_ROOT_SUFFIX	<p>Directory Server のインストール時に Identity Server のルートサフィックスとして指定した識別名 (DN)。ルートサフィックスは、Identity Server によって管理されるディレクトリの一部を示す</p> <p>デフォルト値は、このホストの完全修飾ホスト名からホスト名を除いた値に基づく。たとえば、このホストが <code>siroe.subdomain.example.com</code> の場合、値は <code>dc=subdomain,dc=example,dc=com</code> となる</p> <p>デフォルト値は、形式を示す例としてだけ利用する</p>
ディレクトリマネージャ DN IS_DIRMGRDN	<p>Directory Server へのすべてのアクセス権を持つユーザーの DN</p> <p>デフォルト値は <code>cn=Directory Manager</code></p>
ディレクトリマネージャパスワード IS_DIRMGRPASSWD	ディレクトリマネージャのパスワード

Identity Server SDK : Web コンテナ情報

Identity Server SDK だけをインストールする場合、インストーラは Web コンテナに関する次の情報を要求します。

表 3-30 Identity Server SDK 用の Web コンテナに関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
ホスト IS_WS_HOST_NAME (Web Server)	<p>Identity Server コアサービスを実行する Web コンテナのホスト名。リモートマシンに Identity Server をインストールするときに指定した値を使用する</p> <p>デフォルト値は、このマシンの完全修飾ホスト名。 例: siroe.example.com</p> <p>デフォルト値は、形式を示す例としてだけ利用する</p>
サービス配備 URI SERVER_DEPLOY_URI	<p>Identity Server に関連する HTML ページ、クラス、および JAR ファイルにアクセスするための URI プレフィックス</p> <p>デフォルト値は amserver。先頭にスラッシュを入力してはならない</p>
クッキードメイン COOKIE_DOMAIN_LIST	<p>Identity Server がユーザーにセッション ID を付与する場合にブラウザに返す、信頼できる DNS ドメインの名前</p> <p>この値を、example.com などの単一の最上位ドメインに限定できる。この場合、セッション ID で example.com のすべてのサブドメインの認証が得られる</p> <p>また、.corp.example.com, .sales.example.com のように、コンマで区切ってサブドメインを指定することもできる。この場合、セッション ID でリスト内のすべてのサブドメインの認証が得られる。</p> <p>各ドメインの先頭に、ドット (.) を指定する必要がある</p> <p>デフォルト値は、現在のドメインにプレフィックスとしてドット (.) を付加した値となる</p>

表 3-30 Identity Server SDK 用の Web コンテナに関する設定情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
サービスポート IS_WS_INSTANCE_PORT (Web Server) IS_IAS7INSTANCE_PORT (Application Server)	Identity Server コアサービスを実行する Web コンテナインスタンスのポート番号。Identity Server コアサービスのインストール時に指定したポート番号を使用する Sun ONE Web Server と Sun ONE Application Server はどちらもデフォルトポート番号として 80 を使用する

Instant Messaging の設定

Instant Messaging コンポーネント製品では、Java Enterprise System インストーラによるカスタム設定は使用できません。Instant Messaging の設定については、[第 8 章「インストール後の設定と起動」](#)を参照してください。

Message Queue の設定

Message Queue コンポーネント製品では、Java Enterprise System インストーラによるカスタム設定は使用できません。Message Queue の設定については、[第 8 章「インストール後の設定と起動」](#)を参照してください。

Messaging Server の設定

Messaging Server コンポーネント製品では、Java Enterprise System インストーラによるカスタム設定は使用できません。Messaging Server の設定については、[第 8 章「インストール後の設定と起動」](#)を参照してください。

Portal Server の設定

次の表は、Portal Server のインストール時にインストーラが要求する情報を示しています。

表 3-31 Portal Server のインストールに必要な情報

インストールするコンポーネント	必要な情報	参照先
Portal Server と Identity Server	Portal Server 情報	122 ページの表 3-33
Portal Server のみ、Identity Server はインストール済み	Portal Server 情報	122 ページの表 3-33
	Identity Server 情報	121 ページの表 3-32
	Web コンテナ情報	次のいずれか <ul style="list-style-type: none"> • 123 ページの表 3-34 (Sun ONE Web Server) • 123 ページの表 3-35 (Sun ONE Application Server)

Portal Server : Identity Server の設定情報

表 3-32 Portal Server 用の Identity Server に関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
アイデンティティサーバー情報	
LDAP パスワード PS_IS_LDAP_AUTH_PASSWORD	<p>Identity Server の LDAP ユーザー (amldapuser) のパスワード</p> <p>このユーザーは、ディレクトリサーバーのすべてのエントリに対する読み取りおよび検索アクセス権を持つ</p> <p>このフィールドは、Identity Server がすでにインストールされ、Sun ONE Web Server または Sun ONE Application Server Web コンテナに配備されている場合にだけ表示される。この場合、状態ファイルには値を指定する必要がある</p> <p>Portal Server と Identity Server を同じセッションでインストールする場合は、このフィールドは表示されない。この場合、状態ファイルには値を指定する必要がない</p>
管理者パスワード PS_IS_ADMIN_PASSWORD	<p>Identity Server の最上位管理者 (amAdmin) のパスワード</p> <p>このユーザーは、Identity Server が管理するすべてのエントリに対するすべてのアクセス権を持つ</p>
ディレクトリサーバー情報	
ディレクトリマネージャ DN PS_DS_DIRMGR_DN	<p>Directory Server へのすべてのアクセス権を持つユーザーの DN。Portal Server は、この情報を使用して Directory Server サービスにアクセスする</p> <p>デフォルト値は cn=Directory Manager</p>
ディレクトリマネージャパスワード PS_DS_DIRMGR_PASSWORD	<p>ディレクトリマネージャのパスワード</p>

Portal Server : Portal Server の設定情報

次の表は、インストール時にインストーラが要求する Portal Server の設定情報を示しています。

注	この項の見出しは、関連するインストーラのページに指定する情報の種類を反映して「Portal Server の設定情報」としました。実際のページの見出しは、「Web コンテナ情報」です。
---	--

表 3-33 Portal Server 用の Portal に関する設定情報 (すべてのケース)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
配備 URI PS_DEPLOY_URI	Portal Server が使用する Web コンテナ上の領域にアクセスするための URI (Uniform Resource Identifier) 値の先頭にスラッシュを含め、かつそれ以外のスラッシュを含んではならない デフォルト値は /portal
サンプルポータル の配備 PS_SAMPLE_PORTAL	サンプルポータルを配備するかどうかを指定する 状態ファイルで指定可能な値は、y または n。デフォルト値は y

Portal Server : Web コンテナ情報

すでに Identity Server がインストールされており、Portal Server だけをインストールする場合は、Identity Server が実行される Web コンテナに関する情報を指定する必要があります。詳細については、次の各項を参照してください。

- [122 ページの「Sun ONE Web Server に関する Web コンテナ情報」](#)
- [123 ページの「Sun ONE Application Server に関する Web コンテナ情報」](#)

Sun ONE Web Server に関する Web コンテナ情報

表 3-34 は、Portal Server をサポートする Identity Server が Sun ONE Web Server 内で稼動している場合に、インストーラに指定する情報を示しています。Identity Server と Portal Server を同時にインストールする場合は、Identity Server の設定時に指定した値がデフォルト値として表示されます。

表 3-34 Sun ONE Web Server に関する Web コンテナ情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
インストールディレクトリ PS_DEPLOY_DIR	Web Server のインストール先ディレクトリ デフォルト値は /opt/SUNWwbsvr
サーバーインスタンス PS_DEPLOY_INSTANCE	Portal Server で使用する Web Server インスタンス デフォルト値は、Identity Server Web コンテナの「ホスト名」の値 (IS_WS_HOST_NAME)。この値については、99 ページの表 3-16 を参照 状態ファイルで IS_WS_HOST_NAME の値が設定されていない場合、デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「ホスト名」の値 (CMN_HOST_NAME) となる。82 ページの表 3-2 を参照
サーバードキュメントルート PS_DEPLOY_DOCROOT	スタティックページが保持されるディレクトリ デフォルト値は /opt/SUNWwbsvr/docs

Sun ONE Application Server に関する Web コンテナ情報

表 3-35 は、Portal Server をサポートする Identity Server が Sun ONE Application Server 内で稼動している場合に、インストーラに指定する情報を示しています。

Identity Server と Portal Server を同時にインストールする場合は、Identity Server の設定時に指定した値がデフォルト値として表示されます。

表 3-35 Sun ONE Application Server に関する Web コンテナ情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
インストールディレクトリ PS_DEPLOY_DIR	Application Server のインストール先ディレクトリ デフォルト値は /opt/SUNWappserver7
ドメインディレクトリ PS_DEPLOY_DOMAIN	ドメインの、この Portal Server インスタンスを配備する Application Server ディレクトリへのパス デフォルト値は /var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1

表 3-35 Sun ONE Application Server に関する Web コンテナ情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
サーバーインスタンス PS_DEPLOY_INSTANCE	<p>Portal Server を配備する Application Server インスタンスの名前。この名前は、Application Server インスタンスディレクトリの名前でもある</p> <p>デフォルト値は、「アイデンティティサーバー実行時インスタンス」の値 (IS_IAS7INSTANCE)。101 ページの表 3-17 を参照</p> <p>状態ファイルに IS_IAS7INSTANCE の値が存在しない場合、この値は server1 となる</p>
ドキュメントルートディレクトリ PS_DEPLOY_DOCROOT	<p>スタティックページが保持されるディレクトリの名前</p> <p>デフォルトのドキュメントルートは、PS_DEPLOY_INSTANCE によって指定される Application Server インスタンスディレクトリの最後に /docroot を追加した値となる。たとえば、「サーバーインスタンス」に server1 を指定した場合は、デフォルト値は server1/docroot となる</p>
管理サーバーポート番号 PS_DEPLOY_ADMIN_PORT	<p>Sun ONE Application Server 管理インスタンスが、Portal Server のインストール先ドメインで稼動するポート</p> <p>デフォルト値は 4848</p>
管理者ユーザー ID PS_DEPLOY_ADMIN	<p>Portal Server が Application Server に管理者としてアクセスする際に使用するユーザー ID</p> <p>デフォルト値は admin</p>
管理者のユーザーパスワード PS_DEPLOY_ADMIN_PASSWORD	<p>Portal Server が Application Server に管理者としてアクセスする際に使用するパスワード</p>

Portal Server, Secure Remote Access の設定

Java Enterprise System インストーラは、Portal Server, Secure Remote Access (Portal Server SRA) の次のサブコンポーネントのインストールをサポートします。

- Portal Server, Secure Remote Access Support
- ゲートウェイ
- Netlet プロキシ
- Rewriter プロキシ

ここでは、最初に Portal Server, Secure Remote Access Support のインストールについて説明し、次にゲートウェイ、Netlet プロキシ、Rewriter プロキシのインストールについて説明します。

Portal Server, Secure Remote Access Support

表 3-36 は、Portal Server, Secure Remote Access Support のインストール時にインストーラが要求する情報を示しています。指定が必要となる情報は、次に示すインストール方法によって異なります。

- **単一セッションインストール** : Portal Server と Portal Server, Secure Remote Access を同時にインストールする
- **複数セッションインストール** : あるセッションで Portal Server をインストールし、その後のセッションで Portal Server, Secure Remote Access をインストールする

次の表の「必要な情報」列に示される項目は、グラフィカルモードのインストーラに表示されるページの見出しと一致しています。この列の項目は、インストーラが表示する関連ページと同じ順序で並んでいます。

表 3-36 Portal Server, Secure Remote Access Support のインストール時に必要となる情報

Portal Server のインストール	必要な情報	参照先
このセッションでインストールする	ゲートウェイ情報	126 ページの「単一セッションインストール」

表 3-36 Portal Server, Secure Remote Access Support のインストール時に必要となる情報 (続き)

Portal Server のインストール	必要な情報	参照先
すでにインストールされ、Sun ONE Web Server または IBM WebSphere を使用している	Web コンテナ情報 アイデンティティサーバー情報	127 ページの「複数セッションインストール (Sun ONE Web Server または IBM WebSphere を使用)」
すでにインストールされ、Sun ONE Application Server を使用している	Web コンテナ情報 アイデンティティサーバー情報 Sun ONE Application Server information	128 ページの「複数セッションインストール (Sun ONE Application Server または BEA WebLogic を使用)」
すでにインストールされ、BEA WebLogic を使用している	Web コンテナ情報 アイデンティティサーバー情報 BEA WebLogic information	128 ページの「複数セッションインストール (Sun ONE Application Server または BEA WebLogic を使用)」

単一セッションインストール

Portal Server, Secure Remote Access と Portal Server を単一のセッションでインストールする場合は、Portal Server, Secure Remote Access ゲートウェイに関する情報を指定する必要があります。インストーラは、Portal Server, Secure Remote Access のその他の設定情報を Portal Server の設定情報から取得します。

表 3-37 は、Portal Server, Secure Remote Access Support のインストール時にインストーラが要求するゲートウェイに関する情報を示しています。

表 3-37 Portal Server, Secure Remote Access Support のインストール時に必要となるゲートウェイに関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
ポータルサーバードメイン SRA_SERVER_DOMAIN	Portal Server のドメイン名 たとえば、完全修飾ドメイン名が siroe.subdomain.example.com の場合、 subdomain.example.com を入力する

表 3-37 Portal Server, Secure Remote Access Support のインストール時に必要となるゲートウェイに関する設定情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
ゲートウェイプロトコル SRA_GATEWAY_PROTOCOL	Portal Server との通信時にゲートウェイが使用するプロトコル。セキュリティ保護されたポートでは、HTTPS プロトコルが使用される。セキュリティ保護されていないポートでは、HTTP が使用される 状態ファイルで、セキュリティ保護されたポートの場合は https、またはセキュリティ保護されていないポートの場合は http を指定する
ゲートウェイドメイン SRA_GATEWAY_DOMAIN	ゲートウェイコンポーネントのドメイン名 たとえば、Portal Server ホストの完全修飾ドメイン名が siroe.subdomain.example.com の場合、subdomain.example.com を入力する
ゲートウェイポート SRA_GATEWAY_PORT	ゲートウェイマシンが待機するポート デフォルト値は 443
ゲートウェイプロファイル名 SRA_GATEWAY_PROFILE	リスナポート、SSL オプション、およびプロキシオプションなどのゲートウェイ設定情報を含むプロファイル デフォルト値は default
ログのユーザーパスワード SRA_LOG_USER_PASSWORD	ルート以外のアクセス権を持つ管理者がゲートウェイログファイルにアクセスするためのパスワード

複数セッションインストール (Sun ONE Web Server または IBM WebSphere を使用)

ここでは、次の条件が満たされるマシンに Portal Server, Secure Remote Access をインストールするときに必要な情報について説明します。

- Portal Server がすでにインストールされている
- Portal Server は Sun ONE Web Server または IBM WebSphere Web コンテナに配備されている

このケースでは、次の情報を指定する必要があります。

- Web コンテナ情報
- Identity Server 情報

次の表は、Web コンテナについて指定が必要な情報を示しています。

表 3-38 Portal Server, Secure Remote Access 用の Web コンテナに関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
配備 URI SRA_DEPLOY_URI	Portal Server の配備に使用する URI (Uniform Resource Identifier) 配備 URI の値は、先頭がスラッシュであり、かつそれ以外のスラッシュを含んでいてはならない デフォルト値は /portal

次の表は、Identity Server について指定が必要な情報を示しています。

表 3-39 Portal Server, Secure Remote Access 用の Identity Server に関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
LDAP パスワード SRA_IS_LDAP_AUTH_PASSWORD	Identity Server に LDAP ユーザーとしてアクセスするためのパスワード
管理者パスワード PS_DEPLOY_ADMIN_PASSWORD	Identity Server に管理者としてアクセスするためのパスワード

複数セッションインストール (Sun ONE Application Server または BEA WebLogic を使用)

ここでは、次の条件が満たされるマシンに Portal Server, Secure Remote Access をインストールするときに必要な情報について説明します。

- Portal Server がすでにインストールされている
- Portal Server が Sun ONE Application Server Web コンテナまたは BEA WebLogic Web コンテナに配備されている

このケースでは、次の情報を指定する必要があります。

- Web コンテナ情報
- Identity Server 情報
- Sun ONE Application Server 情報または BEA WebLogic 情報

次の表は、Web コンテナについて指定が必要な情報を示しています。

表 3-40 Portal Server, Secure Remote Access 用の Web コンテナに関する情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
配備 URI SRA_DEPLOY_URI	Portal Server の配備に使用する URI (Uniform Resource Identifier) 配備 URI の値は、先頭がスラッシュであり、かつそれ以外のスラッシュを含んでいてはならない デフォルト値は /portal

次の表は、Identity Server について指定が必要な情報を示しています。

表 3-41 Portal Server, Secure Remote Access 用の Identity Server に関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
LDAP パスワード SRA_IS_LDAP_AUTH_PASSWORD	Identity Server に LDAP ユーザーとしてアクセスするためのパスワード
管理者パスワード PS_DEPLOY_ADMIN_PASSWORD	Identity Server に管理者としてアクセスするためのパスワード

次の表は、Sun ONE Application Server または BEA Web Server について指定が必要な情報を示しています。

表 3-42 Portal Server, Secure Remote Access 用の Sun ONE Application Server または BEA Web Server に関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
管理者のユーザーパスワード PS_DEPLOY_ADMIN_PASSWORD	Portal Server が Application Server または BEA WebLogic に管理者としてアクセスするためのパスワード

ゲートウェイのインストール

ここでは、ゲートウェイサブコンポーネントをインストールするときに指定する必要がある情報について説明します。このケースでは、次の情報を指定する必要があります。

- Web コンテナ情報
- Identity Server 情報
- ゲートウェイ情報
- 証明書情報

Web コンテナ情報

次の表は、Web コンテナについて指定が必要な情報を示しています。

表 3-43 Portal Server, Secure Remote Access 用の Web コンテナに関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
配備 URI SRA_DEPLOY_URI	Portal Server の配備に使用する URI (Uniform Resource Identifier) 配備 URI の値は、先頭がスラッシュであり、かつそれ以外のスラッシュを含んでいてはならない デフォルト値は /portal

Identity Server 情報

次の表は、Identity Server について指定が必要な情報を示しています。

表 3-44 ゲートウェイのインストールに必要な Identity Server に関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
インストールディレクトリ SRA_IS_INSTALLDIR	Identity Server 製品のインストール先ディレクトリ デフォルト値は /opt

ゲートウェイ情報

表 3-45 は、ゲートウェイサブコンポーネントのインストール時に、インストーラに指定するゲートウェイ情報を示しています。

表 3-45 ゲートウェイのインストール時に指定するゲートウェイに関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
プロトコル SRA_GW_PROTOCOL	<p>ゲートウェイが通信に使用するプロトコル (HTTP または HTTPS)。セキュリティ保護されたポートでは、HTTPS プロトコルが使用される。セキュリティ保護されていないポートでは、HTTP が使用される。ほとんどの場合、ゲートウェイでは HTTPS を使用する必要がある</p> <p>状態ファイルで、セキュリティ保護されたポートの場合は <code>https</code>、またはセキュリティ保護されていないポートの場合は <code>http</code> を指定する</p>
ホスト名 SRA_GW_HOSTNAME	<p>ゲートウェイマシンの名前</p> <p>たとえば、完全修飾ドメイン名が <code>siroe.subdomain1.example.com</code> の場合、<code>siroe</code> を入力する</p> <p>デフォルト値は、ローカルマシンの名前</p>
サブドメイン SRA_GW_SUBDOMAIN	<p>ゲートウェイマシンのサブドメイン名</p> <p>たとえば、完全修飾ドメイン名が <code>siroe.sub1.example.com</code> の場合、この値は <code>sub1</code> となる</p> <p>デフォルト値は、ローカルマシンのサブドメイン</p>
ドメイン SRA_GW_DOMAIN	<p>ゲートウェイマシンのドメイン名</p> <p>たとえば、完全修飾ドメイン名が <code>siroe.example.com</code> の場合、この値は <code>example.com</code> となる</p> <p>デフォルト値は、ローカルマシンのドメイン</p>
IP アドレス SRA_GW_IPADDRESS	<p>ゲートウェイマシンの IP アドレス</p> <p>デフォルト値は、ローカルマシンの IP アドレス</p>
アクセスポート SRA_GW_PORT	<p>ゲートウェイの待機ポート</p> <p>デフォルト値は 443</p>
ゲートウェイプロファイル名 SRA_GW_PROFILE	<p>リスナポート、SSL オプション、およびプロキシ オプションなどのゲートウェイ設定情報を含むプロファイル</p> <p>デフォルト値は <code>default</code></p>

表 3-45 ゲートウェイのインストール時に指定するゲートウェイに関する設定情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
ログのユーザーパスワード SRA_LOG_USER_PASSWORD	ルート以外のアクセス権を持つ管理者がゲートウェイログファイルにアクセスするためのパスワード
インストール後ゲートウェイの開始 SRA_GW_START	インストール後にゲートウェイを自動的に起動させるかどうかをインストーラに指示する 状態ファイルで指定可能な値は、y または n。デフォルト値は y

証明書情報

ゲートウェイ、Netlet プロキシ、または Rewriter プロキシをインストールする場合、Portal Server, Secure Remote Access で使用する自己署名付き証明書を作成するための情報を指定できます。証明書を設定するには、インストーラに次の情報を指定する必要があります。

注 証明書情報には、マルチバイト文字を使用することはできません。

表 3-46 Portal Server, Secure Remote Access の証明書に関する情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
組織 SRA_CERT_ORGANIZATION	所属する組織または会社名
部署 SRA_CERT_DIVISION	所属する部署名
市 / 地域 SRA_CERT_CITY	居住する市または地域
州 / 都道府県名 SRA_CERT_STATE	居住する都道府県
国名コード SRA_CERT_COUNTRY	2 文字の国名コード
証明書データベースパスワード SRA_CERT_PASSWORD	自己署名付き証明書にのみ適用されるパスワード (および確認用パスワード)

Netlet プロキシのインストール

ここでは、Netlet プロキシサブコンポーネントをインストールするときに指定する必要がある情報について説明します。このケースでは、次の情報を指定する必要があります。

- Web コンテナ情報
- Identity Server 情報
- Netlet プロキシ情報
- Portal Server 情報
- 証明書情報

次に、指定が必要な情報について詳しく説明します。

Web コンテナ情報

次の表は、Web コンテナについて指定が必要な情報を示しています。

表 3-47 Portal Server, Secure Remote Access 用の Web コンテナに関する情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
配備 URI SRA_DEPLOY_URI	Portal Server の配備に使用する URI (Uniform Resource Identifier) 配備 URI の値は、先頭がスラッシュであり、かつそれ以外のスラッシュを含んでいてはならない デフォルト値は /portal

Identity Server 情報

次の表は、Identity Server について指定が必要な情報を示しています。

表 3-48 Netlet プロキシのインストールに必要な Identity Server に関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
インストールディレクトリ SRA_IS_INSTALLDIR	Identity Server 製品のインストール先ディレクトリ デフォルト値は /opt

Netlet プロキシ情報

表 3-49 は、Netlet プロキシのインストール時に、インストーラに指定する Netlet プロキシ情報を示しています。

表 3-49 Netlet プロキシのインストールに必要な Netlet プロキシに関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
ホスト名 SRA_NLP_HOSTNAME	Netlet プロキシマシンのホスト名 デフォルト値は、ローカルマシンのホスト名
サブドメイン SRA_NLP_SUBDOMAIN	Netlet プロキシマシンのサブドメイン名 デフォルト値は、ローカルマシンのサブドメイン
ドメイン SRA_NLP_DOMAIN	Netlet プロキシマシンのドメイン名 デフォルト値は、ローカルマシンのドメイン
IP アドレス SRA_NLP_IPADDRESS	Netlet プロキシマシンの IP アドレス デフォルト値は、ローカルマシンの IP アドレス
アクセスポート SRA_NLP_PORT	Netlet プロキシの待機ポート デフォルト値は 10555
ゲートウェイプロファイル名 SRA_NLP_GATEWAY_PROFILE	リスナポート、SSL オプション、およびプロキシ オプションなどのゲートウェイ設定情報を含むプ ロファイル デフォルト値は default
ログのユーザーパスワード SRA_NLP_USER_PASSWORD	ルート以外のアクセス権を持つ管理者がログファ イルにアクセスするためのパスワード
インストール後 Netlet プロキシの 開始 SRA_NLP_START	インストール後に Netlet プロキシを自動的に起動 させるかどうかをインストーラに指示する 状態ファイルで指定可能な値は、y または n。デ フォルト値は y

Portal Server 情報

次の表は、Portal Server, Secure Remote Access がすでにインストールされているマシンに Netlet プロキシサブコンポーネントをインストールする場合に指定が必要な情報を示しています。

表 3-50 Portal Server, Secure Remote Access Support 用のプロキシに関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
別のホスト上でポータルサーバーで作業 SRA_IS_CREATE_INSTANCE	<p>このホストに Netlet プロキシと Rewriter プロキシをインストールし、これらのプロキシが Portal Server SRA のリモートインスタンスと通信する場合にだけこのオプションを選択する (CLI モードでは y を指定する)</p> <p>Netlet プロキシと Rewriter プロキシが Portal Server SRA のローカルインスタンスと通信する場合は、このオプションを選択しない (CLI モードでは n を指定する)</p> <p>状態ファイルで指定可能な値は、y または n。状態ファイルでのこの値の意味は次のとおり</p> <ul style="list-style-type: none"> • y を指定した場合、プロキシは Portal Server SRA のローカルインスタンスと対話する • n を指定した場合、プロキシは Portal Server SRA のリモートインスタンスと対話する <p>この表に示す残りのフィールドは、プロキシが Portal Server SRA のリモートインスタンスと対話することを指定した場合にだけ適用される</p>
プロトコル SRA_SERVER_PROTOCOL	<p>ゲートウェイが Portal Server との通信に使用するプロトコル (HTTP または HTTPS)</p> <p>状態ファイルで、https または http を指定する。デフォルト値は https</p>
ポータルホスト名 SRA_SERVER_HOST	Portal Server のインストール先ホストの完全修飾ドメイン名
ポータルサーバーポート SRA_SERVER_PORT	Portal Server へのアクセスに使用するポート デフォルト値は 80
ポータルサーバー配備 URI SRA_DEPLOY_URI	<p>Portal Server の配備に使用する URI (Uniform Resource Identifier)</p> <p>配備 URI の値は、先頭がスラッシュであり、かつそれ以外のスラッシュを含んではならない</p> <p>デフォルト値は /portal</p>
組織 DN SRA_IS_ORG_DN	<p>Portal Server のインストール先ドメインのルートサフィックスの識別名 (DN)</p> <p>デフォルト値は .com。このデフォルト値を編集する必要がある</p>

表 3-50 Portal Server, Secure Remote Access Support 用のプロキシに関する設定情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
アイデンティティサーバーサービス URI SRA_IS_SERVICE_URI	Identity Server サービスの呼び出しに使用する URI (Uniform Resource Identifier) デフォルト値は /amserver
アイデンティティサーバーパスワードの暗号鍵 SRA_IS_PASSWORD_KEY	Identity Server がユーザーパスワードの暗号化に使用する文字列 Portal Server SRA は、Identity Server がインストール時に使用した暗号化鍵を使用する必要があるため、インストーラはデフォルト値を自動的にその鍵に設定する。対話モードのインストーラでは、デフォルト値として表示される値を変更してはならない Identity Server の暗号化鍵は、 /IS_svr_base/SUNWam/lib/AMConfig.properties という Identity Server プロパティファイルで確認できる。このファイル名の IS_svr_base のデフォルト値は /opt である この値を含むプロパティは am. encryption. pwd である

証明書情報

ゲートウェイ、Netlet プロキシ、または Rewriter プロキシをインストールする場合、Portal Server, Secure Remote Access で使用する自己署名付き証明書を作成するための情報を指定できます。証明書を設定するには、インストーラに次の情報を指定する必要があります。

注 証明書情報には、マルチバイト文字を使用することはできません。

表 3-51 Portal Server, Secure Remote Access の証明書に関する情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
組織 SRA_CERT_ORGANIZATION	所属する組織または会社名
部署 SRA_CERT_DIVISION	所属する部署名

表 3-51 Portal Server, Secure Remote Access の証明書に関する情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
市 / 地域 SRA_CERT_CITY	居住する市または地域
州 / 都道府県名 SRA_CERT_STATE	居住する都道府県
国名コード SRA_CERT_COUNTRY	2 文字の国名コード
証明書データベースパスワード SRA_CERT_PASSWORD	自己署名付き証明書にのみ適用されるパスワード (および確認用パスワード)

Rewriter プロキシのインストール

ここでは、Rewriter プロキシサブコンポーネントをインストールするときに指定する必要がある情報について説明します。このケースでは、次の情報を指定する必要があります。

- Web コンテナ情報
- Identity Server 情報
- Rewriter プロキシ情報
- Portal Server 情報
- 証明書情報

次に、指定が必要な情報について詳しく説明します。

Web コンテナ情報

次の表は、Web コンテナについて指定が必要な情報を示しています。

表 3-52 Portal Server, Secure Remote Access 用の Web コンテナに関する情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
配備 URI SRA_DEPLOY_URI	Portal Server の配備に使用する URI (Uniform Resource Identifier) 配備 URI の値は、先頭がスラッシュであり、かつそれ以外のスラッシュを含んでいてはならない デフォルト値は /portal

Identity Server 情報

次の表は、Identity Server について指定が必要な情報を示しています。インストーラは、ゲートウェイ、Netlet プロキシ、Rewriter プロキシについて、この情報を必要とします。

表 3-53 Rewriter プロキシのインストールに必要な Identity Server に関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
インストールディレクトリ SRA_IS_INSTALLDIR	Identity Server 製品のインストール先ディレクトリ デフォルト値は /opt

Rewriter プロキシ情報

表 3-54 は、Rewriter プロキシのインストール時に、インストーラに指定する Rewriter プロキシ情報を示しています。

表 3-54 Portal Server, Secure Remote Access Support 用の Rewriter プロキシに関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
ホスト名 SRA_RWP_HOSTNAME	Rewriter プロキシのインストール先マシンのホスト名 デフォルト値は、ローカルマシンのホスト名
サブドメイン SRA_RWP_SUBDOMAIN	Rewriter プロキシのインストール先マシンのサブドメイン名 デフォルト値は、ローカルマシンのサブドメイン
ドメイン SRA_RWP_DOMAIN	Rewriter プロキシのインストール先マシンのドメイン名 デフォルト値は、ローカルマシンのドメイン名
IP アドレス SRA_RWP_IPADDRESS	Rewriter プロキシのインストール先マシンの IP アドレス デフォルト値は、ローカルホストの IP アドレス
アクセスポート SRA_RWP_PORT	Rewriter プロキシの待機ポート デフォルト値は 10443

表 3-54 Portal Server, Secure Remote Access Support 用の Rewriter プロキシに関する設定情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
ゲートウェイプロファイル名 SRA_RWP_GATEWAY_PROFILE	リスナポート、SSL オプション、およびプロキシオプションなどのゲートウェイ設定情報を含むプロファイル デフォルト値は default
ログのユーザーパスワード SRA_LOG_USER_PASSWORD	ルート以外のアクセス権を持つ管理者がログファイルにアクセスするためのパスワード
インストール後 Rewriter プロキシの開始 SRA_RWP_START	インストール後に Rewriter プロキシを自動的に起動させるかどうかをインストーラに指示する 状態ファイルで指定可能な値は、y または n。デフォルト値は y

Portal Server 情報

次の表は、Portal Server, Secure Remote Access がすでにインストールされているマシンにプロキシサブコンポーネントをインストールする場合に指定が必要な情報を示しています。

表 3-55 Portal Server, Secure Remote Access の Portal に関する情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
別のホスト上でポータルサーバーで作業 SRA_IS_CREATE_INSTANCE	<p>このホストに Netlet プロキシと Rewriter プロキシをインストールし、これらのプロキシが Portal Server SRA のリモートインスタンスと通信する場合にだけこのオプションを選択する (CLI モードでは y を指定する)</p> <p>Netlet プロキシと Rewriter プロキシが Portal Server SRA のローカルインスタンスと通信する場合は、このオプションを選択しない (CLI モードでは n を指定する)</p> <p>状態ファイルで指定可能な値は、y または n。状態ファイルでのこの値の意味は次のとおり</p> <ul style="list-style-type: none"> • y を指定した場合、プロキシは Portal Server SRA のローカルインスタンスと対話する • n を指定した場合、プロキシは Portal Server SRA のリモートインスタンスと対話する <p>この表に示す残りのフィールドは、プロキシが Portal Server SRA のリモートインスタンスと対話することを指定した場合にだけ適用される</p>
プロトコル SRA_SERVER_PROTOCOL	<p>ゲートウェイが Portal Server との通信に使用するプロトコル (HTTP または HTTPS)</p> <p>状態ファイルで、https または http を指定する。デフォルト値は https</p>
ポータルホスト名 SRA_SERVER_HOST	Portal Server のインストール先ホストの完全修飾ドメイン名
ポータルサーバーポート SRA_SERVER_PORT	Portal Server へのアクセスに使用するポート デフォルト値は 80
ポータルサーバー配備 URI SRA_DEPLOY_URI	<p>Portal Server の配備に使用する URI (Uniform Resource Identifier)</p> <p>配備 URI の値は、先頭がスラッシュであり、かつそれ以外のスラッシュを含んではならない</p> <p>デフォルト値は /portal</p>
組織 DN SRA_IS_ORG_DN	<p>Portal Server のインストール先ドメインのルートサフィックスの識別名 (DN)</p> <p>デフォルト値は .com。このデフォルト値を編集する必要がある</p>

表 3-55 Portal Server, Secure Remote Access の Portal に関する情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
アイデンティティサーバーサービス URI SRA_IS_SERVICE_URI	Identity Server サービスの呼び出しに使用する URI (Uniform Resource Identifier) デフォルト値は /amserver
アイデンティティサーバーパスワードの暗号鍵 SRA_IS_PASSWORD_KEY	Identity Server がユーザーパスワードの暗号化に使用する文字列 Portal Server SRA は、Identity Server がインストール時に使用した暗号化鍵を使用する必要があるため、インストーラはデフォルト値を自動的にその鍵に設定する。対話モードのインストーラでは、デフォルト値として表示される値を変更してはならない Identity Server の暗号化鍵は、 /IS_svr_base/SUNWam/lib/AMConfig.properties という Identity Server プロパティファイルで確認できる。このファイル名の IS_svr_base のデフォルト値は /opt である この値を含むプロパティは am.encryption.pwd である

証明書情報

ゲートウェイ、Netlet プロキシ、または Rewriter プロキシをインストールする場合、Portal Server, Secure Remote Access で使用する自己署名付き証明書を作成するための情報を指定できます。証明書を設定するには、インストーラに次の情報を指定する必要があります。

注 証明書情報には、マルチバイト文字を使用することはできません。

表 3-56 Portal Server, Secure Remote Access の証明書に関する情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
組織 SRA_CERT_ORGANIZATION	所属する組織または会社名
部署 SRA_CERT_DIVISION	所属する部署名

表 3-56 Portal Server, Secure Remote Access の証明書に関する情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
市 / 地域 SRA_CERT_CITY	居住する市または地域
州 / 都道府県名 SRA_CERT_STATE	居住する都道府県
国名コード SRA_CERT_COUNTRY	2 文字の国名コード
証明書データベースパスワード SRA_CERT_PASSWORD	自己署名付き証明書にのみ適用されるパスワード (および確認用パスワード)

Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster 用 Sun ONE エージェントの設定

Java Enterprise System インストーラを使用して、Sun Cluster ソフトウェアを設定することはできません。Sun Cluster ソフトウェアおよび Sun Cluster 用のエージェントは、インストール後に設定する必要があります。

Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster 用のエージェントの設定については、[第 8 章「インストール後の設定と起動」](#)を参照してください。

Web Server の設定

インストール時に、Web Server に関する以下の情報を指定する必要があります。

- 管理情報
- デフォルトの Web Server インスタンス情報

Web Server : 管理情報

表 3-57 Web Server 用の管理に関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
管理者ユーザー ID WS_ADMIN_USER	Web Server 管理者のユーザー ID デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「管理者ユーザー ID」の値。82 ページの表 3-2 を参照
管理者パスワード WS_ADMIN_PASSWORD	Web Server 管理者のパスワード デフォルト値は、共通サーバー設定で指定した「管理者パスワード」の値。82 ページの表 3-2 を参照
Web Server のドメイン名 WS_ADMIN_HOST	ローカルホストとして解決されるホストとドメインの値。この値を使用して、Web Server インスタンスのサーバールート内にディレクトリが作成される デフォルト値は、共通サーバー設定の「ホスト名」と「DNS ドメイン名」に指定した値を結合して自動的に作成される。値の書式は、 <i>host-name.domain-name</i> である。82 ページの表 3-2 を参照
管理ポート WS_ADMIN_PORT	Web Server の管理サーバーが接続を待機するポート デフォルト値は 8888
管理実行時ユーザー ID WS_ADMIN_SYSTEM_USER	Web Server の管理サーバーを実行するユーザー ID デフォルト値は root

Web Server : デフォルト Web Server インスタンス情報

表 3-58 Web Server 用のデフォルト Web Server インスタンスに関する設定情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
実行時ユーザー ID WS_INSTANCE_USER	<p>Web Server のデフォルトインスタンスがシステムでの実行に使用するユーザー ID</p> <p>Identity Server または Portal Server をインストールする場合は、この値を root に設定し、次の値を other に設定する。これらの値は、インストール後に変更できる。その他のサーバーの場合、「実行時ユーザー ID」をルート以外のユーザーに設定する必要がある</p> <p>デフォルト値は root</p>
実行時グループ WS_INSTANCE_GROUP	<p>Web Server のデフォルトインスタンスを実行するグループ ID</p> <p>デフォルト値は other</p>
HTTP ポート WS_INSTANCE_PORT	<p>Web Server が HTTP 接続に対して待機するポート</p> <p>デフォルト値は 80</p>
ドキュメントルートディレクトリ WS_INSTANCE_CONTENT_ROOT	<p>Web Server がコンテンツドキュメントを格納する場所</p> <p>デフォルト以外の値を使用するには、指定するディレクトリがファイルシステムにすでに存在していることを確認する。存在しないディレクトリを指定しても、インストーラはディレクトリを作成しない</p> <p>デフォルト値は /opt/SUNWwbsvr/docs</p>
システムが再起動すると自動的に Web サーバーを起動します WS_INSTANCE_AUTO_START	<p>システムを再起動したときに Web Server が自動的に起動されるように設定する</p> <p>Web Server は、システムの再起動時に Identity Server の起動スクリプトによって起動されるため、Identity Server を Web Server に配備した場合、この値は無視される。このスクリプトは /etc/*.d/S*amserver に格納されている</p> <p>状態ファイルで指定可能な値は、Y または N。デフォルト値は Y</p>

状態ファイルのみで使用されるパラメータ

次の表は、コンポーネント製品の設定に関係しない状態ファイルパラメータに関する情報を示しています。パラメータ名は、アルファベット順に記載されています。

表 3-59 状態ファイルのパラメータ

パラメータ名	説明
CCCP_UPGRADE_EXTERNAL_INCOMPATIBLE_JDK	JDK がシステム内で検出されたが、Java Enterprise System により配布される JDK とは互換性がない場合に、アップグレードするかどうかを指定する 指定できる値は yes または no のいずれか。このパラメータでは、大文字と小文字は区別される。デフォルト値は no
CONFIG_TYPE	設定の種類を定義する 指定可能な値は、Custom および Skip (Minimal と同義)。デフォルト値は Custom 状態ファイルにこの値を設定してはならない。インストーラを実行して状態ファイルを生成する場合にのみ、この値を指定する。設定タイプは、インストーラの処理ロジックにさまざまな方法で影響を及ぼす。状態ファイルの生成後に値を変更した場合、エラーが発生する可能性がある。
DeploymentServer	Identity Server の Web コンテナの種類を指定する 設定可能な値は、WebServer、AppServer、BEAWeblogic、および IBMWebSphere。デフォルト値は Appserver (Application Server)

表 3-59 状態ファイルのパラメータ (続き)

パラメータ名	説明
LANGUAGE_SUPPORT	<p>インストールする言語を指定する</p> <p>指定可能な値と各略語の意味は次のとおり</p> <ul style="list-style-type: none"> • en (英語) • es (スペイン語) • ja (日本語) • fr (フランス語) • de (ドイツ語) • ko (韓国語) • zh_TW (繁体字中国語) • zh_CN (簡体字中国語) <p>英語はいかなる場合でもインストールされ、パラメータ値が空白の場合でもインストールされる。複数の言語を選択する場合は、言語の略号をコンマで区切って指定する。たとえば、en,es,ja,frのように指定することができる</p>
LICENSE_TYPE	<p>指定可能な値は「評価」および「配備」であるが、このフィールドは使用されない</p>
PSP_EXIT_ON_DEPENDENCY_WARNING	<p>選択したコンポーネントの依存関係が要件を満たしていない場合に終了するようにインストーラに指示する。通常、警告を確認することで、設定時に指定可能なリモートコンポーネントに適した依存関係を識別できる</p> <p>依存関係の警告が表示されたらインストールを終了する場合は Yes を指定し、警告に関係なく処理を続行する場合は No を指定する。デフォルト値は No</p> <p>このパラメータでは、大文字と小文字が区別されない</p>

表 3-59 状態ファイルのパラメータ (続き)

パラメータ名	説明
PSP_LOG_CURRENTLY_INSTALLED	<p>現在インストールされている製品リストのログファイルへの書き出しをインストーラに指示する。このオプションは、グラフィカルインストーラの「製品の選択」ページの「インストール済みの製品」ボタンをクリックする操作に相当する</p> <p>指定可能な値は、Yes および No。デフォルト値は Yes</p> <p>このパラメータでは、大文字と小文字が区別されない</p>
PSP_SELECTED_COMPONENTS	<p>インストールするコンポーネントおよびサブコンポーネントをコンマで区切って指定したリスト。値には、All またはコンポーネントのリストを指定できる。詳細は、表 3-60 を参照</p> <p>デフォルト値は All</p>

状態ファイル内の PSP_SELECTED_COMPONENTS パラメータの値は、「コンポーネントの選択」ページで選択したコンポーネントをコンマで区切って指定します。

このリストの内容を理解するには、次の表で名前を確認してください。表の左側の列には、コンポーネント製品の名前が記載されています。状態ファイルに、この値を入力しないようにしてください。これは、他の 2 つの列の値を見つけやすくするためのキーワードです。次の列には、コンポーネントを識別するための文字列が記載されています。コンポーネントに選択可能なサブコンポーネントが存在する場合は、3 番目の列にその名前が記載されています。

表 3-60 状態ファイルのコンポーネント名

コンポーネント	最上位の名前	選択可能なサブコンポーネント
管理コンソールおよび管理サーバー	AdminConsole、AdminServ	
Application Server	appserv ¹	ASAdminClient ASCore ASStudioSupport PointBase Server 4.2 ASPE
Calendar Server	CalendarServ	
Directory Proxy Server	DirectoryProxyServ	

表 3-60 状態ファイルのコンポーネント名 (続き)

コンポーネント	最上位の名前	選択可能なサブコンポーネント
Directory Server	DirectoryServ32	
Identity Server	IdentityServ	SunONEIdentityServerManagementandPolicyServices ISAdministrationConsole ISCommonDomainDeployment IdentityServerSDKAlone
Instant Messaging	InstantMessagingServ	InstantMessagingConfig InstantMessagingServer InstantMessengerResources IdentityServerInstantMessagingService
Message Queue	SunONEMessageQueue	MQPE MQEE
Messaging Server	MessagingServ	
Portal Server	PortalServer	
Portal Server, Secure Remote Access	PortalSRA	SRACore SRAGateway SRANetletProxy SRARewriterProxy
Sun Cluster	SunCluster	SCCore SCAgents
Web Server	SunONERWebServer	

1. デフォルトでは、Standard Edition (SE) がインストールされる。Platform Edition をインストールする場合は ASPE を指定する。

サブコンポーネントが存在するコンポーネントをインストールするには、コンポーネントの最上位レベルの名前とすべてのサブコンポーネント名を指定します。

選択したサブコンポーネントだけをインストールするには、最上位レベルの名前とインストールするサブコンポーネントの名前を含めます。

システムコンポーネントのアップグレード

この章では、コンポーネント製品を Java Enterprise System 2003Q4 に含まれているバージョンにアップグレードする手順について説明します。この章では、ほとんどのコンポーネント製品について、アップグレード手順の概要を簡単に説明します。また、アップグレード手順の詳細を説明しているコンポーネント製品のマニュアルを紹介します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- [Administration Server 5.2 のアップグレード情報](#)
- [Application Server 7 Update 1 のアップグレード情報](#)
- [Calendar Server 6.0 のアップグレード情報](#)
- [Directory Server 5.2 のアップグレード情報](#)
- [Directory Proxy Server 5.2 のアップグレード情報](#)
- [Identity Server 6.1 のアップグレード情報](#)
- [Instant Messaging 6.1 のアップグレード情報](#)
- [Message Queue 3.0.1 SP2 のアップグレード情報](#)
- [Messaging Server 6.0 のアップグレード情報](#)
- [Portal Server 6.2 または Portal Server, Secure Remote Access 6.2 のアップグレード情報](#)
- [Sun Cluster 3.1 のアップグレード情報](#)
- [Web Server 6.1 のアップグレード情報](#)
- [共有コンポーネントのアップグレード情報](#)

Administration Server 5.2 のアップグレード情報

一般的に、管理サーバーに依存するコンポーネント製品をアップグレードする場合を除いて、Administration Server 5.2 にアップグレードする必要はありません。

アップグレードを実行する必要がある場合は、Java Enterprise System インストーラを使用して、Administration Server 5.2 を旧バージョンがインストールされているマシンにインストールします。この場合、必ずサーバールート、管理ドメイン、リスナポートに別々の値を指定します。

詳細については、『Sun ONE Server Console 5.2 Server Management Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6704-10>) の第 2 章「Installing Sun ONE Servers and Server Console」を参照してください。

Application Server 7 Update 1 のアップグレード情報

Application Server 7 または Application Server 6.x から Application Server 7 Update 1 にアップグレードすることができます。

Application Server 7 からのアップグレード

Application Server 7 から Application Server 7 Update 1 にアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. /etc ディレクトリにある次のアイテムのバックアップコピーを保存します。
appserv.lic
domains.bin
asenv.conf
2. 管理ドメインが格納されているディレクトリ内のすべてのコンテンツのバックアップコピーを保存します。デフォルトでは、このディレクトリは /var/opt/SUNWappserver7 ですが、asenv.conf ファイルを参照して、インストールされている場所を確認してください。
3. Application Server 7 のアンインストーラを使用して、Application Server 7 を完全に削除します。
4. Java Enterprise System インストーラを使用し、最小設定モードで Application Server 7 Update 1 をインストールします。
5. [手順 1](#) および [手順 2](#) で保存したファイルを復元します。

Application Server 6.x からのアップグレード

Application Server 6.x からアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. 旧バージョンがインストールされているマシンに Application Server 7 Update 1 をインストールします。この場合、必ずインストールディレクトリとリスナポートに別々の値を指定します。
2. 旧バージョンから Application Server 7 Update 1 にアプリケーションを移行します。

Calendar Server 6.0 のアップグレード情報

Sun ONE Calendar Server 5.x、iPlanet Calendar Server 2.x、Netscape Calendar Server 4.x から Calendar Server 6.0 にアップグレードすることができます。

Calendar Server 5.x からのアップグレード

Calendar Server 5.x からアップグレードするには、『Sun ONE Calendar Server 6.0 Installation Guide for Solaris Operating Systems』(<http://docs.sun.com/doc/816-6707-10>) の付録 C 「Calendar Server 5.x to 6.0 Upgrade/Migration Process」を参照してください。

iPlanet Calendar Server 2.x または Netscape Calendar Server 4.x からのアップグレード

iPlanet Calendar Server 2.x または Netscape Calendar Server 4.x からアップグレードするには、旧バージョンがインストールされているマシンに Calendar Server 6.0 をインストールします。次に、移行ユーティリティを使用して、旧バージョンから Calendar Server 6.0 にカレンダーのデータを移行します。データ移行手順およびデータ移行ユーティリティの詳細については、『Sun ONE Calendar Server 6.0 Installation Guide for Solaris Operating Systems』(<http://docs.sun.com/doc/816-6707-10>) の第 3 章 「Migrating Calendar Server Data」を参照してください。

Directory Server 5.2 のアップグレード情報

Directory Server 5.2 からアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. 旧バージョンがインストールされているマシンに Directory Server 5.2 および Application Server 5.2 をインストールします。この場合、必ずサーバールート、管理ドメイン、リスナポートに別々の値を指定します。
2. 旧バージョンの Directory Server を停止します。
3. 旧バージョンから Directory Server 5.2 に、設定およびユーザーデータを移行します。
4. 旧バージョンのクライアントに、新しいバージョンを使用するように指示します。

この手順の実行方法の詳細については、『Sun ONE Directory Server 5.2 インストールおよびチューニングガイド』(<http://docs.sun.com/doc/816-6847-10?ja>) の第 2 章「旧バージョンからのアップグレード」を参照してください。次の手順に従う場合、Directory Server 5.2 をインストールするように指示されたら、Directory Server インストーラではなく、Java Enterprise System インストーラを使用します。

Directory Proxy Server 5.2 のアップグレード情報

Directory Proxy Server 5.2 からアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. 旧バージョンがインストールされているマシンに、Directory Proxy Server 5.2 および Administrator Server 5.2 をインストールします。この場合、必ずサーバールート、管理ドメイン、リスナポートに別々の値を指定します。
2. 旧バージョンの Directory Server を停止します。
3. 旧バージョンから Directory Proxy Server 5.2 に、データを移行します。
4. 旧バージョンのクライアントに、新しいバージョンを使用するように指示します。

この手順の実行方法の詳細については、『Sun ONE Directory Proxy Server 5.2 Installation Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6390-10>) の付録 A 「Migration of Configuration」を参照してください。次の手順に従う場合、Directory Proxy Server 5.2 をインストールするように指示されたときに、Directory Proxy Server インストーラではなく、Java Enterprise System インストーラを使用します。

Identity Server 6.1 のアップグレード情報

Identity Server 6.0 または 6.0 SP1、DSAME 5.1 から Identity Server 6.1 にアップグレードすることができます。

警告 Identity Server と Portal Server の両方をアップグレードする場合は、Identity Server をアップグレードするための特別な手順を適用します。Identity Server のアップグレードは Portal Server のアップグレードの一部として実行する必要があります。156 ページの「[Portal Server 6.2 または Portal Server, Secure Remote Access 6.2 のアップグレード情報](#)」を参照してください。

Identity Server 6.0 または 6.0 SP1 からのアップグレード

Identity Server 6.0 または 6.0 SP1 からアップグレードするには、『Sun ONE Identity Server 6.1 Migration Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6771-10>) の第 1 章「Upgrading from Identity Server 6.0 to Identity Server 6.1」を参照してください。

DSAME 5.1 からのアップグレード

iPlanet Directory Server Access Management Edition (DSAME) 5.1 からアップグレードするには、先に Identity Server 6.0 へのアップグレードを行う必要があります。その後、Identity Server 6.0 から Identity Server 6.1 にアップグレードできるようになります。

DSAME 5.1 から Identity Server 6.0 にアップグレードするには、『Sun ONE Identity Server 6.1 Migration Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6771-10>) の第 2 章「Upgrading from DSAME 5.1 to Identity Server 6.0」を参照してください。

Instant Messaging 6.1 のアップグレード情報

Instant Messaging 6.1 にアップグレードするには、『Sun ONE Instant Messaging 6.1 Installation Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6676-10>) の第 2 章「Upgrading Instant Messaging Overview」を参照してください。

Message Queue 3.0.1 SP2 のアップグレード情報

Message Queue 3.0.1 SP1、3.0.1、3.0、iPlanet Message Queue 2.0、iPlanet Message Queue 2.0 SP1 から Message Queue 3.0.1 SP2 にアップグレードすることができます。

MQ 3.0.1 SP1、3.0.1、または 3.0 からのアップグレード

Message Queue versions 3.0.1 SP1、3.0.1、または 3.0 からアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. 古いバージョンをアンインストールします。
 - a. 実行しているすべての Message Queue クライアントアプリケーションを停止します。
 - b. 実行しているすべてのブローカを停止します。

```
imqcmd shutdown bkr -u name -p password [-b hostName:port]
```

- c. ダイナミックブローカデータを維持する場合以外は、各ブローカインスタンスに関連付けられているすべてのデータファイルを消去します。

```
imqbrokerd -name brokerName -remove instance
```

- d. MQ フラットファイルユーザーリポジトリと MQ アクセス制御ファイルを残すときは、MQ パッケージを消去する前に次のファイルを安全な場所にコピーします。それらは、MQ の再インストールまたはアップグレード後に復元できます。

```
/etc/imq/passwd
```

```
/etc/imq/accesscontrol.properties
```

- e. インストールされている MQ パッケージを特定します。

pkginfo を使用してシステムにインストールされている MQ パッケージのリストを確認するには、次のように入力します。

```
pkginfo | grep SUNWiq
```

- f. 次のように入力してルートになります。

```
su root
```

パスワードが要求されたら、ルートのパスワードを入力します。

- g. インストールされている MQ パッケージを消去します。

次のコマンドを実行します。

```
pkgrm packageName [packageName] ...
```

packageName は、手順 e で確認したシステム上の MQ パッケージの名前です。複数のパッケージを消去するときは、パッケージ名を空白文字で区切ります。

その他の製品が MQ パッケージを使用している可能性があるため、消去は慎重に行なってください。pkgrm コマンドを実行すると、消去前にパッケージへの依存に関する警告が出力されます。

警告が出力されたら、**y** を入力して削除要求の実行を確認します。

旧バージョンのアンインストールの詳細については、『Sun ONE Message Queue 3.0.1 Service Pack 2 Installation Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-3730-10>) の第 2 章にある「Uninstalling MQ on Solaris」を参照してください。

2. Java Enterprise System インストーラを使用し、最小設定モードで Message Queue 3.0.1 SP2 をインストールします。
3. 手順 1 で保存したファイルを復元します。
4. Message Queue を起動すると、手順 3 で復元したファイルが自動的に更新されるようになります。

iMQ 2.0 または iMQ 2.0 SP1 からのアップグレード

iPlanet Message Queue for Java のバージョン 2.0 または 2.0 SP1 からアップグレードするには、『Sun ONE Message Queue 3.0.1 Service Pack 2 Installation Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-3730-10>) の第 1 章にある「Upgrading from Version 2.0」を参照してください。これらのアップグレード手順を実行する場合、Message Queue 3.0.1 SP2 をインストールするように指示されたら、Message Queue のインストールではなく、Java Enterprise System インストーラを使用します。

Messaging Server 6.0 のアップグレード情報

Messaging Server 6.0 にアップグレードするには、『Sun ONE Messaging Server 6.0 Installation Guide for Solaris Operating Systems』

(<http://docs.sun.com/doc/816-6735-10>) の第 4 章「Upgrading to Sun ONE Messaging Server」を参照してください。

Portal Server 6.2 または Portal Server, Secure Remote Access 6.2 のアップグレード情報

Portal Server 6.2 または Portal Server, Secure Remote Access 6.2 にアップグレードするために必要な手順には、多くの要素が影響します。このような要因や、アップグレードするために必要な手順については、『Sun ONE Portal Server 6.2 Migration Guide』

(<http://docs.sun.com/doc/816-6759-10>) を参照してください。

Sun Cluster 3.1 のアップグレード情報

Sun Cluster 3.1 にアップグレードするには、『Sun Cluster 3.1 ソフトウェアのインストール』(<http://docs.sun.com/doc/817-1020-10?l=ja>) の第 3 章「Sun Cluster ソフトウェアのアップグレード」を参照してください。この章で説明されている手順に従う場合は、Java Enterprise System の配布の次のディレクトリにある `scinstall` ユーティリティを使用する必要があることに注意してください。

`Product/sun_cluster/os-version/Tools`

ここでは、`os-version` は `Solaris_8` または `Solaris_9` です。

Web Server 6.1 のアップグレード情報

Web Server 6.0 または Web Server 4.1 から Web Server 6.1 にアップグレードすることができます。

Web Server 6.0 からのアップグレード

Web Server 6.0 または 6.0 SP1 からアップグレードするには、『Sun ONE Web Server 6.1 Installation and Migration Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-1830-10>) の第 5 章「Migrating from Version 6.0 to 6.1」を参照してください。

Web Server 4.1 からのアップグレード

Web Server 4.1 からアップグレードするには、『Sun ONE Web Server 6.1 Installation and Migration Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-1830-10>) の第 6 章「Migrating from Version 4.1 to 6.1」を参照してください。

共有コンポーネントのアップグレード情報

Java Enterprise System インストーラは、Java Enterprise System の互換性を維持するためにアップグレードが必要な共有コンポーネントを自動的に調べ、ユーザーに提示します。J2SE プラットフォームコンポーネントは例外ですが、インストーラは旧バージョンを置き換えて共有コンポーネントをアップグレードします。

このため、共有コンポーネントのアップグレードは、既存のアプリケーションが共有コンポーネントの新しいバージョンと互換性を持つことを確認してから行う必要があります。

さらに、共有コンポーネントをアップグレードした後は、すべてのアプリケーションが新しいバージョンを確実に認識するようにシステムを再起動する必要があります。

J2SE プラットフォームのアップグレード情報

Java Enterprise System インストーラは互換性のないパッケージベースの J2SE プラットフォームのインストールを検出した場合、既存のバージョンをアップグレードするか、Java Enterprise System コンポーネントが使用するための 2 つ目のインストールとして新しいバージョンを追加するかを選択できます。

- **既存バージョンのアップグレードを選択した場合**

この場合は、インストーラは既存のパッケージベースの J2SE プラットフォームのインストールを、Java Enterprise System と互換性のあるバージョンに置き換えます。

「置換」インストールの実行中は、J2SE プラットフォームに依存するその他の実行中アプリケーションを一時停止、または停止する必要があります。さらに、すべてのアプリケーションが J2SE プラットフォームの新しいバージョンを確実に認識するように、インストール後にシステムを再起動する必要があります。

- **2 つ目のインストールとして新しいバージョンの追加を選択した場合**

この場合は、インストーラは J2SE プラットフォームパッケージのセットを追加します。インストールが完了したら、`pkginfo` コマンドを実行してこれらの追加パッケージを確認できます。次に例を示します。

```
# pkginfo | grep SUNWj3
system      SUNWj3dev      JDK 1.3 development tools
system      SUNWj3dev.2    J2SDK 1.4 development tools
system      SUNWj3dmo      JDK 1.3 demo programs
system      SUNWj3dmo.2    J2SDK 1.4 demo programs
system      SUNWj3dvx      J2SDK 1.4 development tools
(64-bit)
system      SUNWj3jmp      J2SDK 1.4 Japanese man pages
system      SUNWj3man      JDK 1.3 man pages
system      SUNWj3man.2    J2SDK 1.4 man pages
system      SUNWj3rt       JDK 1.3 run time environment
system      SUNWj3rt.2     J2SDK 1.4 runtime environment
system      SUNWj3rtx      J2SDK 1.4 runtime environment
(64-bit)
```

この例では、Java Enterprise System 用にインストールされたパッケージの追加セットは `.2` というサフィックスで識別されます。いずれかのパッケージについて詳細な情報を確認するには、次の例のように `-l` オプションを指定して `pkginfo` コマンドを実行します。

```
# pkginfo -l SUNWj3rt.2
PKGINST: SUNWj3rt.2
NAME: J2SDK 1.4 runtime environment
CATEGORY: system
ARCH: sparc
VERSION: 1.4.1,REV=2003.07.09.05.20
BASEDIR: /usr/jdk/.j2se1.4.1_05
VENDOR: Sun Microsystems, Inc.
DESC: Java virtual machine and core class libraries
PSTAMP: hop-sparc20030709052032
INSDATE: Oct 30 2003 16:11
HOTLINE: Please contact your local service provider
STATUS: completely installed
FILES:      647 installed pathnames
           7 shared pathnames
           64 directories
           58 executables
           104533 blocks used (approx)
```

どちらの方法を選択した場合も、インストールが完了すると、/usr/jdk/entsys-j2se リンクは **Java Enterprise System** との互換性を持つ **J2SE** プラットフォームのバージョンを参照するようになります。

グラフィカルインタフェースによる ソフトウェアのインストール

この章では、インストーラの対話的なグラフィカルインタフェースを使用して、**Java Enterprise System** ソフトウェアをインストールする方法を説明します。この章で説明するタスクを実行する前に、[第 2 章「インストールの準備」](#)に記載されているタスクを完了しておく必要があります。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- [インストール前のチェックリスト](#)
- [アップグレードが必要なコンポーネントの確認](#)
- [グラフィカルモードでのインストーラの実行](#)
- [コンポーネントの追加](#)
- [次の手順](#)

Java Enterprise System インストーラの基本については、[42 ページの「Java Enterprise System インストーラのしくみ」](#)を参照してください。

インストール前のチェックリスト

次の表は、Java Enterprise System のインストールを開始する前に必要なタスクを示しています。左の列は、タスクの一般的な実行順序を示し、中央の列は実行するタスクを説明しています。右の列は、便利な情報と参照先を示しています。

表 5-1 インストール前の作業

順序	実行するタスク	便利な情報と参照先
1	システム要件が満たされていることを確認する	『Java Enterprise System リリースノート』 http://docs.sun.com/doc/817-4235?=ja
2	Java Enterprise System との互換性を持たない既存のコンポーネント製品をアップグレードする	prodreg または pgkinfo コマンド (詳細についてはマニュアルページを参照) 164 ページの「アップグレードが必要なコンポーネントの確認」 第 4 章「システムコンポーネントのアップグレード」
3	製品コンポーネントのインストール方法を計画する	第 2 章「インストールの準備」
4	コンポーネント製品に必要な設定情報を収集する	第 3 章「インストールおよび設定に関する情報の収集」 付録 A 「情報収集用ワークシート」
5	製品レジストリファイル (/var/sadm/install/productregistry) のコピーを作成する	製品レジストリのバックアップコピーは、インストールが失敗した際にシステムの復旧に役立つ
6	必要なシステムアカウントを作成する	Directory Server または管理サーバーをルート以外のユーザーとして実行する場合は、設定前にアカウントを作成する必要がある nobody または root として Identity Server を実行する場合に、nobody や system などのグループの一部として実行するには、これらのシステムアカウントを事前に設定しておく必要がある
7	Sun Cluster ソフトウェアをインストールする場合は、インストールの順序を計画する	59 ページの「Sun Cluster ソフトウェアを使用した高可用性」
8	すでにインストールされているサーバーまたはサービスに依存するコンポーネントをインストールする場合は、既存のサーバーおよびサービスが稼動し、アクセス可能であることを確認する	たとえば、Portal Server, Secure Remote Access サブコンポーネントをインストールする場合は、Portal Server, Secure Remote Access コアが稼動し、アクセス可能である必要がある

表 5-1 インストール前の作業 (続き)

順序	実行するタスク	便利な情報と参照先
9	Application Server または Directory Server をインストールする場合は、Perl がインストールされていることを確認する	Perl のパッケージ (SUNWpl5*) は Solaris 8 および Solaris 9 の媒体に用意されている。パッケージの追加には pkgadd を使用する
10	Identity Server をインストールする場合は、Identity Server のインストール先となるマシンのドメイン名が設定されていることを確認する	ドメイン名を設定するには、次のいずれかの操作を行う <ul style="list-style-type: none"> • /etc/resolv.conf ファイルが存在する場合は、ドメイン設定エントリにドメイン名を入力する。例: domain madisonparc.com • /etc/resolv.conf ファイルが存在しない場合は、次のコマンドを実行する <pre># domainname domain_name</pre> <p>詳細については、『Sun ONE Identity Server 6.1 Migration Guide』(http://docs.sun.com/doc/816-6771-10) を参照</p>
11	Web Server をインストールする場合は、UID 80 と GID 80 がすでに Web Server に割り当てられていないことを確認する	Web Server にすでに 80 が割り当てられている場合、エラーが発生して Web Server のインストールは失敗する
12	再インストールを行う場合、Web Server のディレクトリは空であることを確認する	Web Server のアンインストールでは、.../docs, .../https-admserv, .../https-instance_server ディレクトリは消去されないため、手動で削除する必要がある
13	Messaging Server をインストールする場合	
	インストーラを実行する前に sendmail を停止する	/etc/init.d/sendmail stop
	単純なホスト名ではなく、完全修飾ドメイン名 (FQDN) が含まれる /etc/hosts ファイルの 2 番目の列を確認する	例: 192.18.99.999 mycomputer.company.com loghost
14	Calendar Server をインストールする場合は、/etc/hosts ファイルの 2 番目の列に単純なホスト名ではなく FQDN が含まれていることを確認する	例: 192.18.99.999 mycomputer.company.com loghost
15	J2SE ソフトウェアをアップグレードする場合は、アップグレードする J2SE コンポーネントに依存するその他の製品が停止されていることを確認する	J2SE の詳細については、158 ページの「J2SE プラットフォームのアップグレード情報」を参照

アップグレードが必要なコンポーネントの確認

パッケージベースでインストールされたソフトウェアについては、システムにすでにインストールされている、Java Enterprise System に関連するソフトウェアパッケージをインストール前にチェックするにはインストーラを使用できます。このチェックの利点は、互換性のないコンポーネントを事前に確認し、インストール前に必要な処理を行えることです。これにより、インストールセッションをより効率的に実行することができます。

▶ グラフィカルインストーラを使用してコンポーネントのアップグレードの必要性を判断するには

1. ローカルディスプレイへのアクセスを確保します。

Java Enterprise System インストーラは、ローカルディスプレイへのアクセスを必要とすることがあります。リモートマシンにログインするか、あるいは su コマンドを使用してローカルマシンの superuser になる場合は、ローカルマシンで xhost コマンドを実行し、ローカルディスプレイにアクセスできるようにします。たとえば、すべてのユーザーにアクセスを許可するには、次のコマンドを使用します。

```
xhost +
```

リモートマシンにログインするときは、DISPLAY 環境変数がローカルディスプレイに適切に設定されていることを確認します。DISPLAY 変数が正しく設定されていないと、インストーラはテキストベースで実行されます。たとえば、マシン名が myhost である場合は、次のように設定します。

```
(C Shell) % setenv DISPLAY myhost:0.0
```

```
(Korn Shell) $ DISPLAY=myhost:0.0
```

2. アクティブインストールではないことを示す -no オプションを指定してインストーラを起動します。

```
./installer -no
```

3. インストーラのページを先に進め、「コンポーネントの選択」ページを表示します。
4. 左上にあるドロップダウンリストを「コンポーネントの選択」に変更します。
5. ページ上部の「インストール済みの製品」をクリックします。

インストールされているコンポーネント製品が「インストール済みの製品」レポートにリスト表示され、各コンポーネントの Java Enterprise System での互換性レベルが指定されます。

6. 「次へ」をクリックして操作を続けます。

Java Enterprise System との互換性がない共有コンポーネントがマシンに存在する場合は、「アップグレードの必要がある共有コンポーネント」ページが表示されます。

7. 各共有コンポーネントについて、「インストール済みのバージョン」と「必要なバージョン」を比較し、必要なアップグレードを確認します。
8. インストーラを終了し、次のいずれか、または両方を実行します。
 - コンポーネント製品については、第4章「システムコンポーネントのアップグレード」の説明に従ってコンポーネント製品をアップグレードします。
 - 共有コンポーネントについては、Java Enterprise System のより新しいバージョンが、ホストにインストールされているアプリケーションと互換性を持つかどうかを確認します。

警告

ホストに存在する依存関係を確認せずに共有コンポーネントをアップグレードしないでください。ホストにインストールされ、その共有コンポーネントを使用するアプリケーションの動作に問題が生じる可能性があります。必要となる共有コンポーネントのバージョンと、既存のアプリケーションとの間に互換性があるかどうかを確認する必要があります。

ホスト上の共有コンポーネントを安全にアップグレードできることを確認したら、次のいずれかの操作を行います。

- 必要に応じて共有コンポーネントを消去またはアップグレードする
- アクティブインストール時にインストーラで共有コンポーネントをアップグレードする

注

アップグレード後は、マシンを再起動して新しいバージョンを認識させる必要があります。

9. コンポーネントが Java Enterprise System の要件を満たすことをインストーラが示すまでこの手順を繰り返します。

テキストベースのインストーラを使用する手順については、189 ページの「テキストベースのインストーラを使用してコンポーネントのアップグレードの必要性を判断するには」を参照してください。

グラフィカルモードでのインストーラの実行

ここでは、次の手順について説明します。

- グラフィカルインストーラを起動するには
- インストールの言語を選択するには
- コンポーネントを選択するには
- インストーラを使用して選択内容を確認するには
- コンポーネント製品をアップグレードするには
- 共有コンポーネントをアップグレードするには
- インストールディレクトリを指定し、システムチェックを開始するには
- 設定の種類を指定するには
- 共通サーバー設定を指定するには
- 個々のコンポーネント製品を設定するには
- インストールの準備が完了していることを確認するには
- 製品を登録し、ソフトウェアのインストールを開始するには
- インストールをキャンセルするには
- インストールセッションを終了するには
- 製品を後から Sun に登録するには

▶ グラフィカルインストーラを起動するには

1. 次のいずれかの方法で、製品を入手します。
 - ソフトウェアをダウンロードし、アンパックする
 - Java Enterprise System CD または DVD を適切なドライブに挿入する
2. ローカルディスプレイへのアクセスを確保します。

リモートマシンにログインするか、あるいは `su` コマンドを使用してローカルマシンの `superuser` になる場合は、ローカルマシンで `xhost` コマンドを実行し、ローカルディスプレイにアクセスできるようにします。たとえば、すべてのユーザーにアクセスを許可するには、次のコマンドを使用します。

```
xhost +
```

リモートマシンにログインするときは、`DISPLAY` 環境変数がローカルディスプレイに適切に設定されていることを確認します。`DISPLAY` 変数が正しく設定されていないと、インストーラはテキストベースで実行されます。たとえば、マシン名が `myhost` である場合は、次のように設定します。

```
(C Shell)    % setenv DISPLAY myhost:0.0
(Korn Shell) $ DISPLAY=myhost:0.0
```

3. root としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
4. 適切なディレクトリに移動します。
 - ソフトウェアをダウンロードした場合は、ダウンロードしたディレクトリに移動します。


```
cd installer-directory
```
 - CD を使用している場合は、インストール用の適切なディレクトリ (Solaris_sparc または Solaris_x86) に移動します。
例:


```
cd /cdrom/Solaris_sparc
```
 - DVD を使用している場合は、プラットフォームと一致する名前のディレクトリ (Solaris_sparc または Solaris_x86) に移動します。
5. グラフィカルインストールソフトウェアを起動します。

```
./installer
```

オプションの `-no` パラメータを使用して、ソフトウェアをインストールせずにインストーラを実行することができます。このオプションは、インストーラの動作について詳しく知る場合、およびサイレントインストールのための状態ファイルを作成する場合に役立ちます。

インストーラのオプションの詳細については、[405 ページの「インストーラのコマンド行オプション」](#)を参照してください。

6. インストーラが起動し、ソフトウェアライセンス契約のページが表示されます。ライセンスに同意し、続行します。

▶ インストールの言語を選択するには

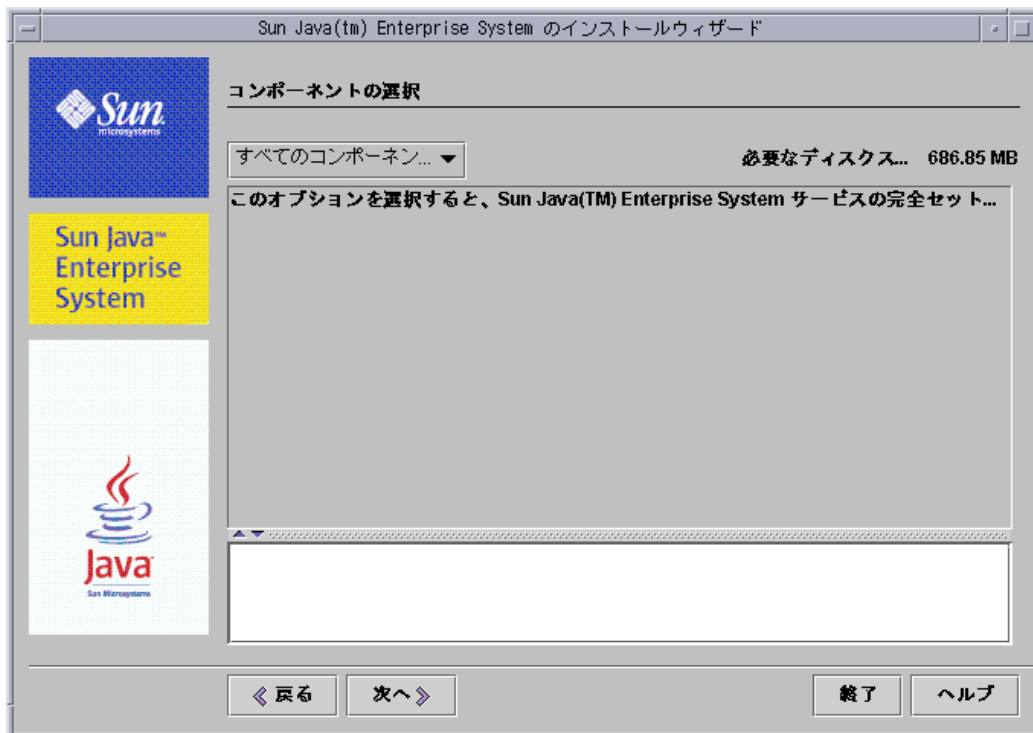
ここで選択した言語は、選択するすべてのコンポーネントにインストールされます。言語を追加するごとにインストールするパッケージが増え、インストールに必要なディスク容量が増えます。英語は必ずインストールされます。

注 ホストシステムのロケールの言語が英語ではない場合、ホストシステムの言語がデフォルトで選択されます。

1. **Java Enterprise System** コンポーネントのインストールに使用する言語を「言語サポート」ページで選択します。
2. 「次へ」をクリックして処理を続けます。

▶ コンポーネントを選択するには

1. すべてのコンポーネントをインストールするには(デフォルト)、「コンポーネントの選択」ページで「次へ」をクリックし、171 ページの「インストーラを使用して選択内容を確認するには」に進みます。



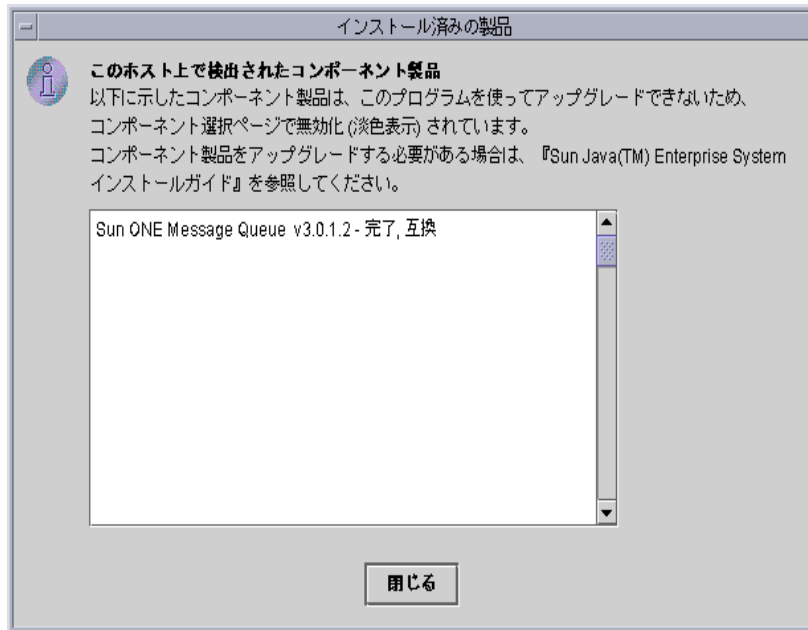
2. コンポーネントを選択するには、左上にあるドロップダウンリストで「すべてのコンポーネントのインストール」を「コンポーネントの選択」に変更します。
コンポーネントが関連するサービスごとにグループ化されてリスト表示されます。
3. コンポーネント名をクリックすると、次に示す「コンポーネントの選択」ページ下部の情報パネルにそのコンポーネントの簡単な説明が表示されます。



注 選択したコンポーネント製品のバージョンがすでにインストールされている場合は、「コンポーネントの選択」ページではそのコンポーネント製品は無効表示され、インストールできません。

オプションが無効な場合、次の状況では追加の対応が必要になります。

- 無効表示されるコンポーネント製品を新しいバージョンにアップグレードする
 - 無効表示されるコンポーネント製品の新しいバージョンに依存する別のコンポーネント製品をインストールする
4. すでにインストールされている（そのためにグレー表示される）製品に関するレポートを表示するには、ページ上部の「インストール済みの製品」をクリックします。



「インストール済みの製品」ウィンドウには、インストーラが検出したインストール済みコンポーネント製品がリスト表示され、**Java Enterprise System** との互換性のレベルが示されます。

- a. すべてのコンポーネントに **Java Enterprise System** との互換性がある場合は、「インストール済みの製品」ウィンドウを閉じて先に進みます。
 - b. コンポーネントが別バージョンへのアップグレードを必要とする場合は、[172 ページ](#)の「**コンポーネント製品をアップグレードするには**」に進みます。
5. 「コンポーネントの選択」ページでインストールするコンポーネント製品を選択します。

製品を選択すると、選択したコンポーネントが依存するコンポーネントが自動的に選択されます。

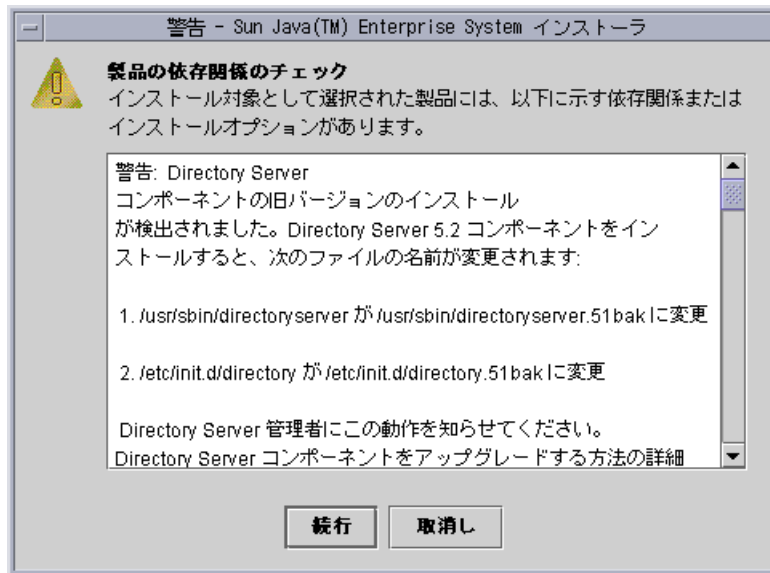
注 場合によっては、選択した製品に含まれるコンポーネント製品も選択されます。リスト全体をよく調べ、インストールが必要ないコンポーネントの選択が解除されていることを確認してください。

各コンポーネント製品の隣には、その製品が必要とするディスク容量を表す数字が表示されます。ページ上部の「必要なディスクスペース」の値は、コンポーネント製品を選択するたびに増え、選択しているすべてのコンポーネント製品のインストーラに必要なディスク容量の総量を概算で示します。

6. 「次へ」をクリックして処理を続けます。

▶ インストーラを使用して選択内容を確認するには

インストーラによって、選択されたコンポーネント製品の依存性チェックが実行されます。依存性に問題がある場合は、「製品の依存関係のチェック」ウィンドウが表示されます。



1. このページに表示される内容を慎重に確認します。

コンポーネント製品間の依存関係は次のとおりです。

- **互換性あり**：選択したコンポーネントは相互に互換性があり、また、マシン上で検出されているコンポーネントとも互換性があります。インストーラは選択内容を受け付け、次の質問に進みます。
- **互換性なし**：選択したコンポーネントは相互に互換性がなく、また、マシン上で検出されているコンポーネントとも互換性がありません。インストーラは処理を停止します。問題について説明するエラーメッセージが表示されます。

互換性の問題を解決するには、次のいずれか、または両方の手順を実行します。

- [172 ページの「コンポーネント製品をアップグレードするには」](#)

- 172 ページの「共有コンポーネントをアップグレードするには」
 - リモートコンポーネントは機能する可能性あり：選択したコンポーネントは、選択されていないコンポーネントに依存しますが、この依存関係はそのコンポーネントのリモートコピーでも解決されます。インストーラは処理を継続できますが、「製品の依存関係のチェック」ウィンドウに警告が表示されます。
2. 依存性チェックで必要とされたアップグレードを行います。問題が解決すると、インストーラは処理を継続できるようになります。

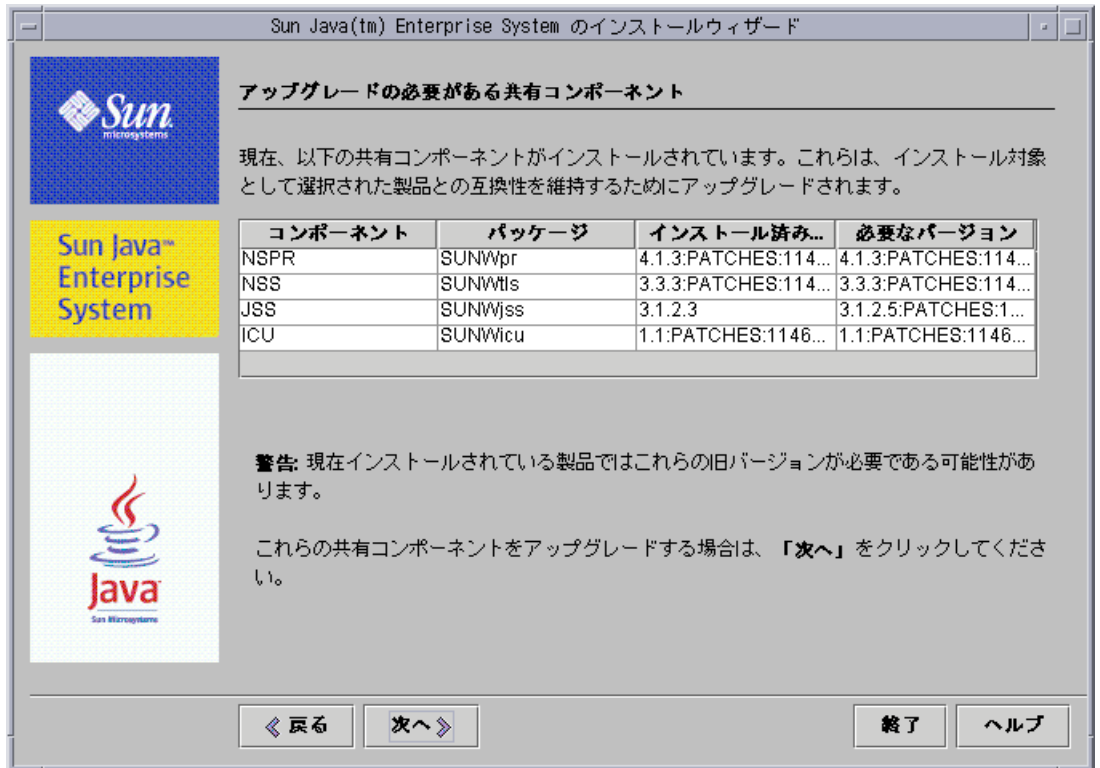
▶ **コンポーネント製品をアップグレードするには**

1. 「取消し」をクリックしてインストーラを終了します。
2. 第 4 章「システムコンポーネントのアップグレード」の手順を参照し、必要なアップグレードを行います。
3. インストーラを再起動し、「コンポーネントの選択」ページが表示されるまでページを切り替えます。
4. 「インストール済みの製品」をクリックし、インストールされているすべての製品に Java Enterprise System との互換性が確保されたことを確認します。

▶ **共有コンポーネントをアップグレードするには**

J2SE などの、Java Enterprise System に含まれる共有コンポーネントは、このホストにすでにインストールされている可能性があります。インストールされているバージョンの共有コンポーネントは、Java Enterprise System との互換性のためにアップグレードする必要があります。「コンポーネントの選択」ページで「次へ」をクリックすると、このようなコンポーネントのリストが表示されます。

1. いずれかの共有コンポーネントに互換性の問題がある場合は、「アップグレードの必要がある共有コンポーネント」ページが表示されます。

**警告**

ホストに存在する依存関係を確認せずに共有コンポーネントをアップグレードしないでください。ホストにインストールされ、その共有コンポーネントを使用するアプリケーションの動作に問題が生じる可能性があります。必要となる共有コンポーネントのバージョンと、既存のアプリケーションとの間に互換性があるかどうかを確認する必要があります。

2. J2SE コンポーネントの互換性のないバージョンが検出された場合、「アップグレードの必要がある共有コンポーネント」ページに次のメッセージウィンドウが表示されます。

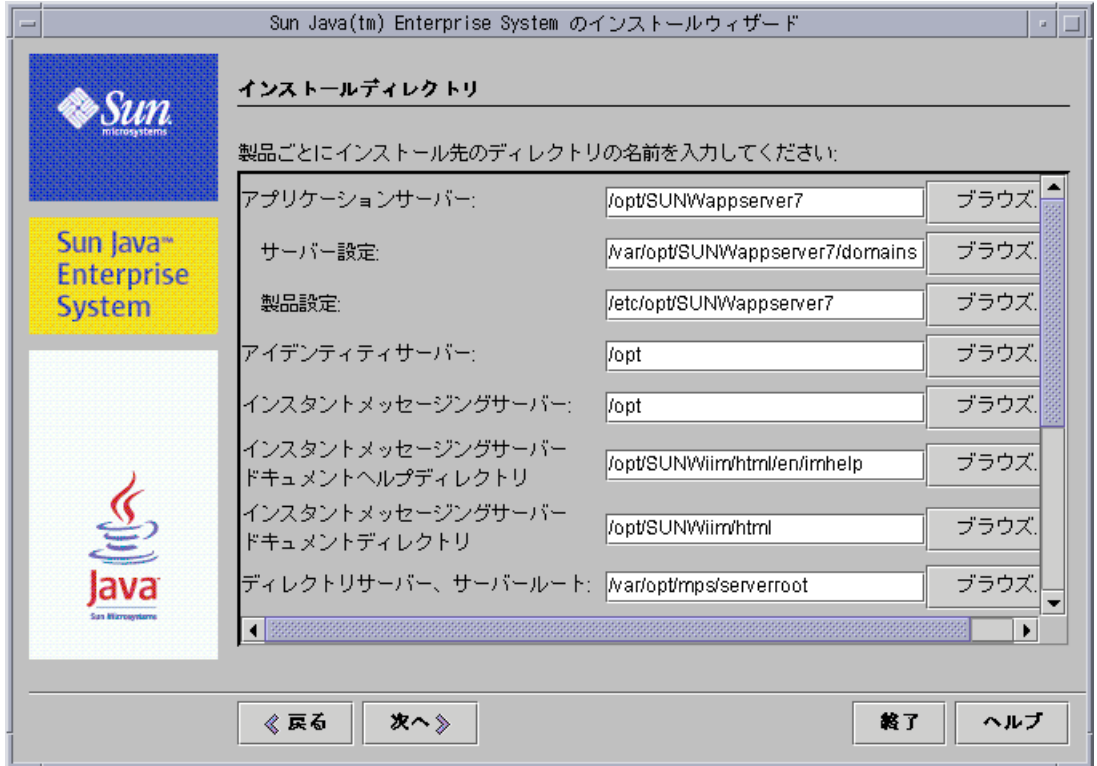


これらのオプションについては、[158 ページの「J2SE プラットフォームのアップグレード情報」](#)を参照してください。

3. オプションを選択し、「了解」をクリックします。(2 番目のオプションが表示されない場合は、ウィンドウのサイズ変更が必要な場合がある)
4. 「アップグレードの必要がある共有コンポーネント」ページに表示される共有コンポーネントをインストーラでアップグレードするには、「次へ」をクリックします。

▶ **インストールディレクトリを指定し、システムチェックを開始するには**

「インストールディレクトリ」ページには、選択したコンポーネント製品のデフォルトディレクトリが表示されます。



1. 確定する前にデフォルトのインストールディレクトリを調べ、配備に適したディレクトリであることを確認します。
2. デフォルトのディレクトリが適していない場合は、必要に応じて別のパスを参照し、変更します。
3. 「次へ」をクリックしてシステムチェックを開始します。

インストーラは指定したディレクトリを基に、次のシステム要件を確認します。

- 利用可能なディスク容量
- インストールされているメモリ
- オペレーティングシステムのパッチ

次の表の左側の列には、システムチェックの結果表示されるメッセージを示しています。右の列は、それぞれの結果に対して必要となる対処方法を示しています。

表 5-2 システムチェックの結果

表示されるメッセージ	対処方法
System ready for installation	「次へ」をクリックし、設定の種類を指定する
System ready for installation メモリの量が推奨レベルに達していない ことを示す警告メッセージを含む場合	「次へ」をクリックしてインストールを続行するが、作業完了後にメモリを追加する。メモリを追加しない場合、パフォーマンスに深刻な影響が生じる可能性がある
System not ready for installation	「レポートの参照」をクリックし、インストーラによって検出された問題に関する情報を参照する 問題としては、メモリ不足、オペレーティングシステムのパッチが見つからないなどが考えられる。インストーラを停止して問題を解決する必要がある場合は、「取消し」をクリックする。問題を解決し、インストーラを再起動する インストーラを停止することなく、レポートされた問題を解決できる場合は、問題を解決した後で「再チェック」をクリックし、システムの再チェックを行う。システムチェックの結果として「System ready for installation」というメッセージが表示されたら、「次へ」をクリックして処理を継続する

4. システムチェックが完了し、システムの状態に問題がなければ、「次へ」をクリックします。

▶ **設定の種類を指定するには**

インストール時に設定できるコンポーネントを選択したときは、選択したコンポーネントに関連する設定の種類が「設定タイプ」ページに表示されます。

注 Calendar Server、Instant Messaging、Message Queue、Messaging Server、Sun Cluster ソフトウェアは、インストール時に設定することができません。

1. どの種類の設定を行うかを指定します。
 - **カスタム**：インストール時に設定可能なコンポーネント製品を設定できます。
共通サーバー設定を指定し、次に選択したコンポーネント製品の設定情報を指定します。

- **最小**：パッケージのインストールに必要な最小限の値だけを入力します。

Identity Server をインストールする場合は、共通サーバー設定を指定し、Identity Server およびその依存している製品を設定します。

Identity Server をインストールしない場合は、インストーラはその他の設定情報なしで処理を継続します。181 ページの「インストールの準備が完了していることを確認するには」に進んでください。

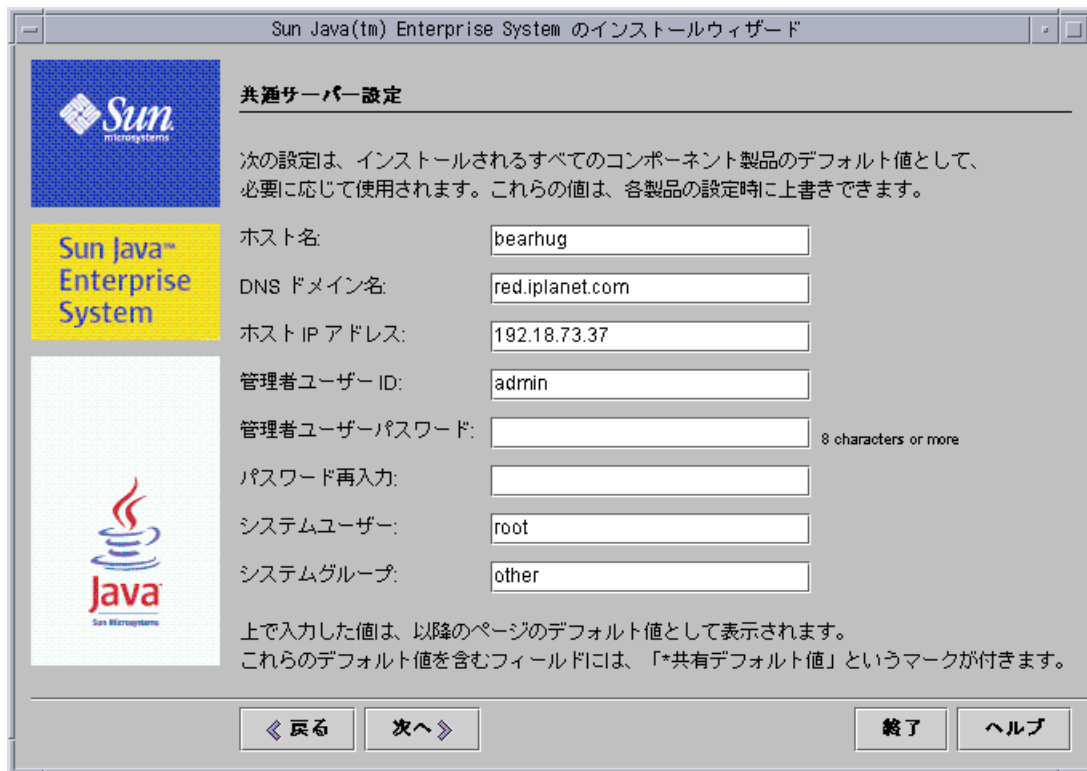
2. 設定の種類を選択し、「次へ」をクリックします。

▶ 共通サーバー設定を指定するには

設定の種類を選択し、インストール時の設定を必要とするコンポーネントセットを選択すると、設定ページが表示されます。インストーラの各設定ページに関する情報は、コンポーネント別に第3章「インストールおよび設定に関する情報の収集」に記載されています。

インストールのこの段階を実行する前に、選択したコンポーネント製品に必要な設定情報が収集されていることを確認してください。設定データの収集に利用できるワークシートが付録 A 「情報収集用ワークシート」に用意されています。

カスタム設定を選択した場合、または最小設定に Identity Server が含まれる場合は、「共通サーバー設定」ページが表示されます。



1. 共通の値を指定するには、82 ページの表 3-2 の情報を入力します。
ここに入力する値は、コンポーネント製品の設定ページにデフォルト値として表示されます。

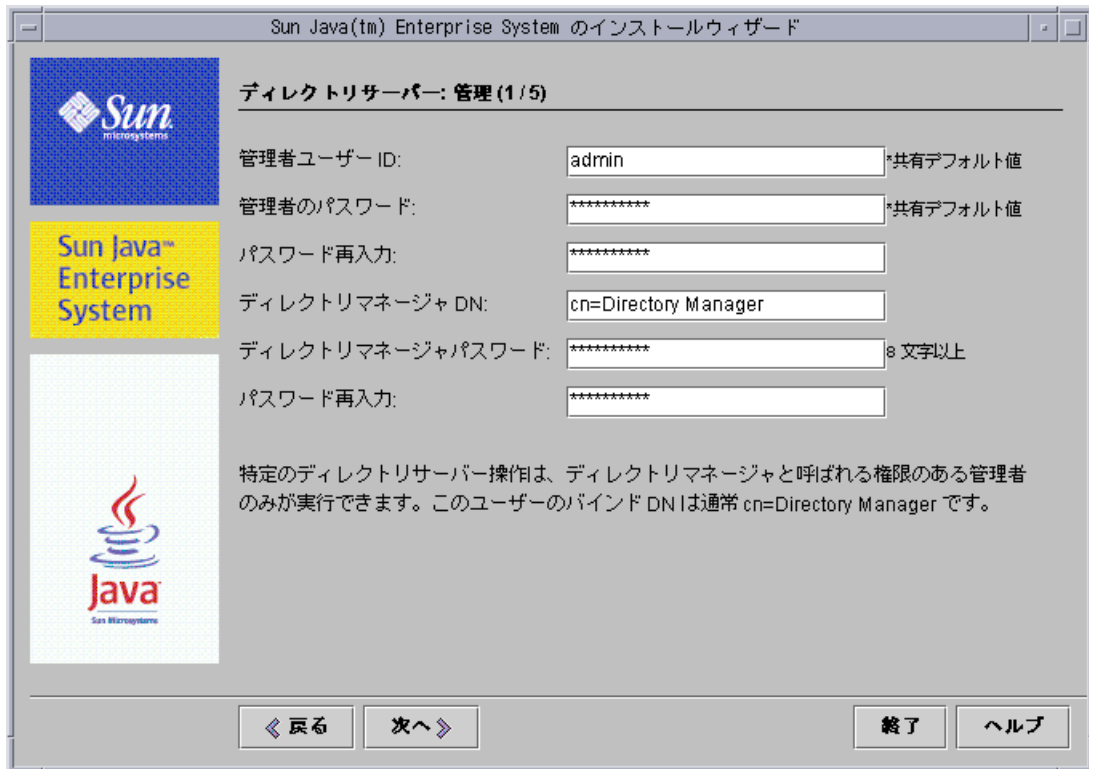
ヒント ここに入力するデフォルト以外の情報とパスワードは書き留めておいてください。後から実行するタスクでこの情報が必要になることがあります。

2. 「次へ」をクリックして、コンポーネント製品の設定ページに進みます。

▶ 個々のコンポーネント製品を設定するには

「共通サーバー設定」ページの設定が完了すると、インストーラは選択したコンポーネント製品専用の設定ページを表示します。

コンポーネント製品のページの一部のフィールドには、「共通サーバー設定」ページに指定したデフォルト値が表示されます。これらの値は編集可能です。たとえば、次の画面例は Directory Server の初期設定ページを示しています。「共通サーバー設定」ページにデフォルト値が設定されているフィールドは、「管理者ユーザー ID」と「管理者のパスワード」です。これらのフィールドは、アスタリスクで示されます。



1. 表示される各設定ページでは、設定に関する情報の入力が必要です。

ヒント

設定パネルの操作中に、インストーラは設定情報を収集します。インストールの完了後は、`/var/sadm/install/logs` のインストールサマリレポートでこの情報を確認することができます。

次の表は、設定情報の詳細が記載された第3章「インストールおよび設定に関する情報の収集」の各ページへの相互参照を示しています。

表 5-3 コンポーネント製品のフィールドが説明されている場所

コンポーネント	設定情報の参照先
管理サーバー	84 ページの「管理サーバーの設定」
Application Server	86 ページの「Application Server の設定」
Calendar Server	86 ページの「Calendar Server の設定」
Directory Server	87 ページの「Directory Server の設定」
Directory Proxy Server	94 ページの「Directory Proxy Server の設定」
Identity Server	96 ページの「Identity Server の設定」
Identity Server SDK	115 ページの「Identity Server SDK の設定」
Instant Messaging	119 ページの「Instant Messaging の設定」
Message Queue	119 ページの「Message Queue の設定」
Messaging Server	119 ページの「Messaging Server の設定」
Portal Server	120 ページの「Portal Server の設定」
Portal Server, Secure Remote Access	125 ページの「Portal Server, Secure Remote Access の設定」
Web Server	143 ページの「Web Server の設定」

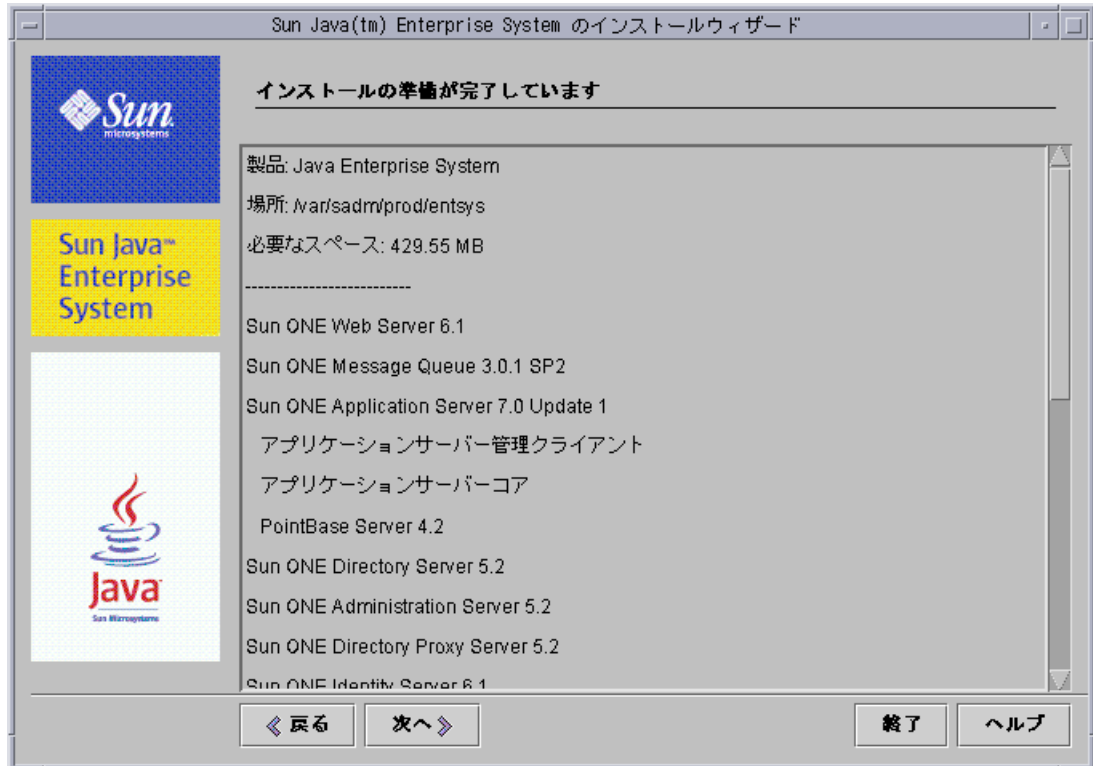
2. 「次へ」をクリックして、次のコンポーネント製品の設定ページに進みます。

最後のコンポーネント製品の最後の設定ページで「次へ」をクリックすると、インストール時の設定が完了します。インストーラでは、ソフトウェアパッケージのインストールに進むことができますようになります。

▶ **インストールの準備が完了していることを確認するには**

システムにソフトウェアを転送する前に、「コンポーネントの選択」ページで選択したコンポーネント製品を示す概要ページが表示されます。ここには共有コンポーネントは表示されませんが、必要に応じてインストールされます。

1. 「インストールの準備が完了しています」ページに表示されるコンポーネントを確認します。



注 インストーラがこのページを表示するときに、共有コンポーネントがインストールされることを示す「共有コンポーネントのアップグレード/インストール」ウィンドウが表示されます。共有コンポーネントがインストールされるまで待機してください。

2. 「コンポーネントの選択」ページで、必要な変更を行います。

「コンポーネントの選択」ページに戻るには、「戻る」ボタンをクリックし、「コンポーネントの選択」ページが表示されるまで各ページの「戻る」ボタンをクリックし続けます。

3. インストーラの先のページに進むには、「次へ」をクリックします。すでに入力されている値を変更する必要はありません。
4. 「インストールの準備が完了しています」ページの情報が適切であることを確認したら、「次へ」をクリックします。

▶ 製品を登録し、ソフトウェアのインストールを開始するには

ソフトウェアのインストール中に「製品登録」ページが表示されます。ここには、製品の登録オプションが示されます。

1. インストールの最中に情報を入力し、登録フォームを送信したくない場合は、デフォルトの「インストール中に登録ウィンドウを開きます」オプションの選択を解除します。
2. 「次へ」をクリックして、コンポーネントパッケージのインストールを開始します。インストール中に表示される項目は次のとおりです。
 - インストールがどこまで完了したか、割合を示す進捗バー
 - インストールしているパッケージの名前
 - 製品登録オプションを受け入れた場合は、登録を行うためのブラウザウィンドウ

注 インストールのサイズと複雑さによっては、インストールに長い時間がかかる可能性があります。

▶ インストールをキャンセルするには

「取消し」をクリックすると、インストールをキャンセルすることができます。インストールをキャンセルすると、アンインストーラが起動し、それまでにインストールされたソフトウェアが消去されます。

▶ インストールセッションを終了するには

インストールが完了すると、「インストールが完了しました」ページが表示されます。メモリ不足など、インストールに関する問題はこのページに表示されます。また、このページからインストールサマリおよびログを参照することができます。

1. 「インストールサマリ」または「インストールログ」ボタンをクリックすると、インストールに関する情報が表示されます。この情報は /var/sadm/install/logs 内のファイルに保存されるので、インストーラを終了してからも参照できます。
 - **インストールサマリ**：インストールされた各コンポーネントと、指定した設定内容が記録されます。カスタム設定を選択した場合、この概要ファイルにはすべての設定値が記録されます。

- **インストールログ**: コンポーネント製品に関するインストーラのログメッセージを示します。
2. 「ご使用にあたって」ページが自動的に表示されないようにするには、デフォルトで選択されているオプションの選択を解除します。
「ご使用にあたって」ページでは、コンポーネント製品のマニュアルへのリンクと製品登録ページへのリンク、および **Java Enterprise System** のマニュアルを紹介しています。
3. 「閉じる」をクリックしてインストーラを終了します。
これでインストーラセッションは完了です。インストールしたコンポーネント製品は、インストール後のタスクが完了してから起動する必要があります。
4. **Java Enterprise System** のインストールを完了する方法については、[184 ページの「次の手順」](#)を参照してください。

▶ **製品を後から Sun に登録するには**

1. 「ご使用にあたって」ページにアクセスするには、インストールディレクトリ内の `WhatsNext.html` ファイルをブラウザで開きます。
2. 「ご使用にあたって」ページの「**Java Enterprise System** ソフトウェアを登録する」セクションで「登録」リンクをクリックします。

コンポーネントの追加

追加のコンポーネントをインストールするために、インストーラを再び実行することもできます。インストーラは、新しくインストールされたコンポーネントを検出し、他のコンポーネントとの依存関係を満たすコンポーネントを使用します。インストールされたコンポーネントについては、「コンポーネントの選択」ページで選択肢が無効表示されます。

たとえば、今回のインストールで **Identity Server** およびその依存コンポーネントをインストールしたとします。その後で、**Portal Server** をインストールすることになりました。**Portal Server** との依存関係を満たす **Identity Server** の既存のインスタンスが使用され、**Identity Server** の再インストールを促すメッセージは表示されません。

次の手順

この章を終えた時点で、**Java Enterprise System** のインストールのうち、インストーラで実行する部分は完了しています。コンポーネント製品を環境に合わせて設定する最終的な方法については、[211 ページの「インストール後の設定と起動」](#)を参照してください。

注 インストール時に拡張設定を行なっている場合もありますが、ほとんどのコンポーネント製品では追加設定が必要です。他の作業に進む前に、インストール後の設定要件を参照してください。

インストールイメージを企業内の他の管理者も利用できるようにする方法については、[437 ページの「ネットワークインストールのためのセットアップ方法」](#)を参照してください。

テキストベースのインタフェースを使用したソフトウェアのインストール

この章では、対話的なテキストベースのインタフェースを使用して **Java Enterprise System** コンポーネント製品をインストールする方法について説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- テキストベースモードの使用方法
- インストール前のチェックリスト
- アップグレードが必要なコンポーネントの確認
- テキストベースモードでのインストーラの実行
- コンポーネントの追加
- 次の手順

インストールを開始する前に、**Java Enterprise System** とそのコンポーネント製品について、インストールに関連する全体的な機能に習熟している必要があります。概要を迅速に把握するには、[42 ページの「Java Enterprise System インストーラのしくみ」](#) および [第 5 章「グラフィカルインタフェースによるソフトウェアのインストール」](#) を参照してください。

テキストベースモードの使用法

インストーラのテキストベースモードでは、グラフィカルな画面は表示されず、一連の質問の形式で情報が要求されます。次の表は、Java Enterprise System インストーラのプロンプトで要求される応答について説明しています。

表 6-1 インストーラのプロンプトに対する応答

処理	入力
鍵カッコ ([]) 内に示されているデフォルト値を受け入れる	Return キーを押す
リストから項目を選択する	項目の番号を入力し、複数の場合はコンマで区切り、Return キーを押す。空白文字は使用できない。たとえば、リスト内の項目 2 を選択するには、2 と入力してから Return キーを押す 項目 1、3、4 を選択するには、1,3,4 と入力してから Return キーを押す
リストに含まれる項目の選択を解除する	項目番号の前にマイナス記号 (-) を入力し、複数の場合はコンマで区切る。空白文字は使用できない。最後に Return キーを押す たとえば、リスト内の項目 2 の選択を解除するには、-2 を入力してから Return キーを押す 項目 1、3、4 の選択を解除するには、-1,-3,-4 と入力してから Return キーを押す
テキストフィールドに値を指定する たとえば、ユーザー名やポート番号の指定が求められた場合など	値を入力し、Return キーを押す
パスワードを指定する	パスワードを入力し、Return キーを押す パスワードは端末ウィンドウには表示されない
前のページに戻る	左向きの不等号 (<) を入力し、Return キーを押す
セッションを終了する	感嘆符 (!) を入力し、Return キーを押す

インストール前のチェックリスト

次の表は、Java Enterprise System のインストールを開始する前に必要なタスクを示しています。左の列は、タスクの一般的な実行順序を示し、中央の列は実行するタスクを説明しています。右の列は、便利な情報と参照先を示しています。

表 6-2 インストール前の作業

順序	実行するタスク	便利な情報と参照先
1	システム要件が満たされていることを確認する	『Java Enterprise System リリースノート』 http://docs.sun.com/doc/817-4235?=ja
2	Java Enterprise System との互換性を持たない既存のコンポーネント製品をアップグレードする	prodreg または pgkinfo コマンド (詳細についてはマニュアルページを参照) 189 ページの「アップグレードが必要なコンポーネントの確認」 第 4 章「システムコンポーネントのアップグレード」
3	製品コンポーネントのインストール方法を計画する	第 2 章「インストールの準備」
4	コンポーネント製品に必要な設定情報を収集する	第 3 章「インストールおよび設定に関する情報の収集」 付録 A 「情報収集用ワークシート」
5	製品レジストリファイル (/var/sadm/install/productregistry) のコピーを作成する	製品レジストリのバックアップコピーは、インストールが失敗した際にシステムの復旧に役立つ
6	必要なシステムアカウントを作成する	Directory Server または管理サーバーをルート以外のユーザーとして実行する場合は、設定前にアカウントを作成する必要がある nobody または root として Identity Server を実行する場合に、nobody や system などのグループの一部として実行するには、これらのシステムアカウントを事前に設定しておく必要がある
7	Sun Cluster ソフトウェアをインストールする場合は、インストールの順序を計画する	59 ページの「Sun Cluster ソフトウェアを使用した高可用性」
8	すでにインストールされているサーバーまたはサービスに依存するコンポーネントをインストールするときは、既存のサーバーおよびサービスが稼動し、アクセス可能であることを確認する	たとえば、Portal Server, Secure Remote Access サブコンポーネントをインストールする場合は、Portal Server, Secure Remote Access コアが稼動し、アクセス可能である必要がある

表 6-2 インストール前の作業 (続き)

順序	実行するタスク	便利な情報と参照先
9	Application Server または Directory Server をインストールする場合は、Perl がインストールされていることを確認する	Perl のパッケージ (SUNWpl5*) は Solaris 8 および Solaris 9 の媒体に用意されている。パッケージの追加には pkgadd を使用する
10	Identity Server をインストールする場合は、Identity Server のインストール先となるマシンのドメイン名が設定されていることを確認する	ドメイン名を設定するには、次のいずれかの操作を行う <ul style="list-style-type: none"> • /etc/resolv.conf ファイルが存在する場合は、ドメイン設定エントリにドメイン名を入力する。例: domain madisonparc.com • /etc/resolv.conf ファイルが存在しない場合は、次のコマンドを実行する <pre># domainname domain_name</pre> 詳細については、『Sun ONE Identity Server 6.1 Migration Guide』 (http://docs.sun.com/doc/816-6771-10) を参照
11	Web Server をインストールする場合は、UID 80 と GID 80 がすでに Web Server に割り当てられていないことを確認する	Web Server にすでに 80 が割り当てられている場合、エラーが発生して Web Server のインストールは失敗する
12	再インストールを行う場合、Web Server のディレクトリは空であることを確認する	Web Server のアンインストールでは、.../docs, .../https-admserv, .../https-instance_server ディレクトリは消去されないため、手動で削除する必要がある
13	Messaging Server をインストールする場合は、 インストーラを実行する前に sendmail を停止する 単純なホスト名ではなく、完全修飾ドメイン名 (FQDN) が含まれる /etc/hosts ファイルの 2 番目の列を確認する	/etc/init.d/sendmail stop 例: 192.18.99.999 mycomputer.company.com loghost
14	Calendar Server をインストールする場合は、/etc/hosts ファイルの 2 番目の列に単純なホスト名ではなく FQDN が含まれていることを確認する	例: 192.18.99.999 mycomputer.company.com loghost
15	J2SE ソフトウェアをアップグレードする場合は、アップグレードする J2SE コンポーネントに依存するその他の製品が停止されていることを確認する	J2SE の詳細については、158 ページの「J2SE ブラットフォームのアップグレード情報」を参照

アップグレードが必要なコンポーネントの確認

パッケージベースでインストールされたソフトウェアについては、システムにすでにインストールされている、Java Enterprise System に関連するソフトウェアパッケージをインストール前にチェックするにはインストーラを使用できます。このチェックの利点は、互換性のないコンポーネントを事前に確認し、インストール前に必要な処理を行えることです。これにより、インストールセッションをより効率的に実行することができます。

次の手順は、テキストベースモードのインストーラを使用して、アップグレードが必要なコンポーネントを確認する方法を示しています。グラフィカルベースのインストーラを使用する手順については、[164 ページの「グラフィカルインストーラを使用してコンポーネントのアップグレードの必要性を判断するには」](#)を参照してください。

▶ テキストベースのインストーラを使用してコンポーネントのアップグレードの必要性を判断するには

1. root としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
2. アクティブインストールではないことを示す `-no` オプションを指定してインストーラを起動します。

```
./installer -nodisplay -no
```
3. Java Enterprise System 製品サービスの完全なセットをインストールするかどうかを確認する質問が表示されるまでインストーラのページを先に進めます。
4. Return キーを押し、デフォルト設定 (Yes) を受け入れます。

インストーラは、システム上の配布に含まれるすべてのコンポーネント製品を検出し、各コンポーネントの互換性レベルを示します。

5. すでにインストールされている製品のリストを参照し、Return キーを押して処理を継続します。

インストーラはコンポーネント製品の依存性チェックを行い、問題があれば説明を表示します。

6. 製品の依存問題を参照し、Return キーを押して処理を継続します。

Java Enterprise System との互換性を持たない共有コンポーネントが検出された場合、インストーラはインストール時にアップグレードされる共有コンポーネントに関する説明を表示します。

7. 共有コンポーネントに関する問題を参照し、その共有コンポーネントをインストール時にインストーラでアップグレードするか、ユーザー自身が手動でアップグレードする必要があるかを決定します。

警告

ホストに存在する依存関係を確認せずに共有コンポーネントをアップグレードしないでください。ホストにインストールされ、その共有コンポーネントを使用するアプリケーションの動作に問題が生じる可能性があります。必要となる共有コンポーネントのバージョンと、既存のアプリケーションとの間に互換性があるかどうかを確認する必要があります。

8. インストーラを終了するには、**!**を入力して **Return** キーを押します。
インストーラの終了を確認するために、**1** と入力して **Return** キーを押します。
9. コンポーネント製品に必要なアップグレードを行います。
コンポーネント製品をアップグレードする方法については、[第4章「システムコンポーネントのアップグレード」](#)を参照してください。
10. 共有コンポーネントに必要なアップグレードを行います。
新しいバージョンが、ホストにインストールされているアプリケーションと互換性を持つかどうかを確認します。ホスト上の共有コンポーネントを安全にアップグレードできることを確認したら、次のいずれかの操作を行います。
 - 必要に応じて共有コンポーネントを手動で消去またはアップグレードする
 - アクティブインストール時にインストーラで共有コンポーネントをアップグレードする

注

コンポーネントのアップグレード後は、新しいバージョンを適用するにはマシンを再起動する必要があります。

11. コンポーネントが **Java Enterprise System** の依存要件を満たすことをインストーラが示すまでこの手順を繰り返します。

テキストベースモードでのインストーラの実行

ここでは、次の手順について説明します。

- テキストベースのインストーラを起動するには
- インストールの言語を選択するには
- コンポーネントを選択するには
- 依存に関する問題を解決するには
- インストールディレクトリを指定し、システムチェックを開始するには
- 設定の種類を選択するには
- 設定データを指定するには
- インストールの準備が完了していることを確認するには
- ソフトウェアをインストールするには
- 製品を Sun に登録するには

▶ テキストベースのインストーラを起動するには

1. 次のいずれかの方法で、Java Enterprise System の配布内容を入手します。
 - ソフトウェアをダウンロードし、アンパックする
 - Java Enterprise System CD または DVD を適切なドライブに挿入する
2. root としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
3. 適切なディレクトリに移動します。
 - ソフトウェアをダウンロードした場合は、ダウンロードしたディレクトリに移動します。

```
cd installer-directory
```

- CD を使用している場合は、インストール用の適切なディレクトリ (Solaris_sparc または Solaris_x86) に移動します。

例:

```
cd /cdrom/Solaris_sparc
```

- DVD を使用している場合は、プラットフォームと一致する名前のディレクトリ (Solaris_sparc または Solaris_x86) に移動します。
4. インストーラをテキストベースモードで起動します。

```
./installer -nodisplay
```

インストーラのオプションの詳細については、[405 ページの「インストーラのコマンド行オプション」](#)を参照してください。次のコマンドを入力して、この情報にアクセスすることもできます。

```
./installer -help
```

インストーラが起動すると、ソフトウェアライセンス契約が表示されます。ソフトウェアライセンス契約をよく読んでください。操作を続けるには、この契約に同意する必要があります。

5. ソフトウェアライセンスの条項に同意します。

yes と入力して **Return** キーを押し、処理を続けます。

▶ **インストールの言語を選択するには**

インストール用に追加する言語パッケージの選択ができます。英語は常にインストールされます。

1. インストールする追加の言語パッケージに対応する番号をコンマで区切って入力します。
2. **Return** キーを押して処理を続けます。

▶ **コンポーネントを選択するには**

使用しているマシンに Java Enterprise System コンポーネント製品のいずれかがすでにインストールされている場合、検出されたコンポーネント製品のリストが表示されます。

次に例を示します。

```
Component Products Detected on this Host
-----
Following Component Products are detected on this system. The component
product shown below will be disabled in Product Selection Menu

Application Server core v7.0.0.1 - Complete
PointBase Server v7.0.0.1 - Complete
Sun ONE Message Queue v3.0.1.2 - Complete
Application Server Administration Client v7.0.0.1 - Complete
```

これらのコンポーネント製品は、製品の選択ページでは選択できませんが、Java Enterprise System の要件、または他のコンポーネント製品との依存要件を満たしていないバージョンの場合は、アップグレードが必要になることがあります。

注 インストールバンドルに含まれるすべての製品がすでにインストールされていることが検出されると、インストーラは終了します。再インストールを行うには、**Java Enterprise System** アンインストーラを使用してコンポーネントをアンインストールし、インストーラを再起動する必要があります。アンインストールの手順については、[第 10 章「ソフトウェアのアンインストール」](#)を参照してください。

1. **Java Enterprise System** 製品サービスの完全なセットをインストールするかどうか確認します。

デフォルトの設定 (Yes) を選択した場合は、「[依存に関する問題を解決するには](#)」に進んでください。

No を選択した場合は、インストーラは「製品選択メニュー」を表示します。次に例を示します。

```
Product Selection - Main Menu
-----
1. Sun ONE Web Server 6.1 (62.86 MB)
2. Sun ONE Instant Messaging Server 6.1 (19.21 MB)
3. Sun ONE Calendar Server 6.0 (37.05 MB)
4. Sun ONE Directory Proxy Server 5.2 (7.51 MB)
5. Sun ONE Application Server 7.0 Update 1 (113.57 MB)
6. Sun ONE Messaging Server 6.0 (147.05 MB)
7. Sun ONE Portal Server Secure Remote Access 6.2 (18.98 MB)
8. Sun ONE Administration Server 5.2 (12.17 MB)
9. Sun Cluster 3.1 (58.09 MB)
10. Sun ONE Identity Server 6.1 (61.39 MB)
11. Sun ONE Message Queue 3.0.1 SP2 (5.24 MB)
12. Sun ONE Portal Server 6.2 (52.24 MB)
13. Sun ONE Directory Server 5.2 (44.70 MB)
```

2. インストールするコンポーネントに対応する番号をコンマで区切って入力し、インストールするコンポーネント製品を指定して **Return** キーを押します。
インストーラは、インストールする製品の確認または変更を求めます。
3. 製品の選択を確認します。
選択している各コンポーネント製品にサブコンポーネントがある場合には、インストールするサブコンポーネントの選択が必要になります。
4. 表示されるメッセージに従って、インストールするサブコンポーネントを選択します。

サブコンポーネントを選択するたびに、インストーラはインストールするサブコンポーネントの確認または変更を求めます。

5. 各サブコンポーネントの選択を確認します。

最後のサブコンポーネントの選択を確認すると、インストーラは製品の依存に関する情報を表示します。

▶ 依存に関する問題を解決するには

インストーラによって、選択されたコンポーネント製品の依存チェックが実行されます。このチェックの結果によって、対処が必要な場合があります。

1. 次のチェック結果がコンポーネントに適用されるかどうかを確認します。

- a. **互換性あり**：選択したコンポーネント間、およびマシン上で検出されたコンポーネントとの間に互換性がある場合、選択内容がインストーラに受け入れられ、次の質問に進みます。

- b. **互換性なし**：選択したコンポーネント間、およびマシン上で検出されたコンポーネントとの間に互換性がない場合、インストーラは処理を継続できません。問題についてのエラーメッセージが表示されます。

インストーラを終了し、互換性のないコンポーネントを削除するか、アップグレードのための**手順 2**または**手順 3**に進みます。

- c. **リモートコンポーネントは機能する可能性あり**：選択したコンポーネントが、選択されていないコンポーネントに依存し、この依存関係がそのコンポーネントのリモートコピーによって解決される場合、次のページに進むことができますが、警告メッセージが表示されます。

2. **コンポーネント製品をアップグレードする場合**：インストーラがアップグレードが必要なコンポーネントを検出したときは、次の手順を実行します。

- a. インストーラを終了します。

- b. **149 ページの「システムコンポーネントのアップグレード」**の手順を参照し、必要なアップグレードを行います。

- c. インストーラをもう一度実行します。

3. **共有コンポーネントをアップグレードする場合**：インストーラがアップグレードが必要な共有コンポーネントを検出したときは、正しいバージョンへのアップグレードをインストーラで実行することができます (**J2SE** では、**第 2 の J2SE SDK** をインストールするオプションもあります)。共有コンポーネントのアップグレードについては、**157 ページの「共有コンポーネントのアップグレード情報」**を参照してください。

警告

ホストに存在する依存関係を確認せずに共有コンポーネントをアップグレードしないでください。ホストにインストールされ、その共有コンポーネントを使用するアプリケーションの動作に問題が生じる可能性があります。必要となる共有コンポーネントのバージョンと、既存のアプリケーションとの間に互換性があるかどうかを確認する必要があります。

▶ インストールディレクトリを指定し、システムチェックを開始するには

デフォルトのディレクトリが表示されます。

1. 操作環境に応じて、必要であればディレクトリを変更します。
2. システムチェックの結果を確認します。

インストーラは、ディスク容量、メモリ、およびオペレーティングシステムのパッチのシステムチェックを実行します。ディスク容量またはメモリが不足している場合や、オペレーティングシステムのパッチが見つからない場合は、一度インストーラを終了し、問題を解決してから再起動します。

▶ 設定の種類を選択するには

カスタム設定 (デフォルト) または最小設定のどちらかの、設定の種類を指定します。

- **カスタム** : インストール時に設定可能なコンポーネント製品を設定できます。共通サーバー設定を指定し、次に選択したコンポーネント製品の設定情報を指定します。
- **最小** : パッケージのインストールに必要な最小限の値だけを入力します。

Identity Server をインストールする場合は、共通サーバー設定を指定し、Identity Server およびその依存している製品を設定します。

Identity Server をインストールしない場合は、インストーラはその他の設定情報なしで処理を継続します。197 ページの「[インストールの準備が完了していることを確認するには](#)」に進んでください。

▶ 設定データを指定するには

インストール時に設定が必要なコンポーネント製品または設定の種類を選択した場合は、共通サーバー設定およびコンポーネント製品の設定の設定情報を指定するように指示されます。

パスワードを除いて、デフォルト値が表示されます。パスワードは 8 文字以上で指定する必要があります。

ヒント 設定パネルの操作中に、インストーラは設定情報を収集します。インストールの完了後は、`/var/sadm/install/logs` のインストールサマリレポートでこの情報を確認することができます。

1. 共通サーバー設定を指定します。

デフォルト値を受け入れるか、または共通サーバー設定のワークシートで収集した情報を使用してインストーラの質問に答えます。これらのフィールドの詳細については、[82 ページの「共通サーバー設定」](#)を参照してください。

2. コンポーネント製品の設定を指定します。

デフォルト値を受け入れるか、またはコンポーネント製品のワークシートで収集した情報を使用してインストーラの質問に答えます。

次の表は、設定情報の詳細が記載された[第3章「インストールおよび設定に関する情報の収集」](#)の各ページへの相互参照を示しています。

表 6-3 コンポーネント製品のフィールドが説明されている場所

コンポーネント	設定情報の参照先
管理サーバー	84 ページの「管理サーバーの設定」
Application Server	86 ページの「Application Server の設定」
Calendar Server	86 ページの「Calendar Server の設定」
Directory Server	87 ページの「Directory Server の設定」
Directory Proxy Server	94 ページの「Directory Proxy Server の設定」
Identity Server	96 ページの「Identity Server の設定」
Identity Server SDK	115 ページの「Identity Server SDK の設定」
Instant Messaging	119 ページの「Instant Messaging の設定」
Message Queue	119 ページの「Message Queue の設定」
Messaging Server	119 ページの「Messaging Server の設定」
Portal Server	120 ページの「Portal Server の設定」
Portal Server, Secure Remote Access	125 ページの「Portal Server, Secure Remote Access の設定」
Web Server	143 ページの「Web Server の設定」

▶ **インストールの準備が完了していることを確認するには**

選択したコンポーネント製品が表示されます。共有コンポーネントは表示されませんが、必要に応じてインストールされます。
次に例を示します。

```

Product: Java Enterprise System
Location: /var/sadm/prod/entsys
Space Required: 85.11 MB
-----
Sun ONE Message Queue 3.0.1 SP2
Sun ONE Application Server 7.0 Update 1
  Application Server Administration Client
  Application Server core
  PointBase Server 4.2
Ready to Install
1. Install
2. Start Over
3. Exit Installation
What would you like to do [1] {"<" goes back, "!" exits}?
    
```

このリストをよく確認してください。変更する必要がある場合は、変更が必要な質問が表示されるまで<キーを押し続けます。

▶ **ソフトウェアをインストールするには**

1. インストールを開始するには、Return キーを押してデフォルトの「1」を受け入れます。

インストール処理が開始され、進捗バーにインストールの状況が表示されます。

例：

```

Java Enterprise System
|-1%-----25%-----50%--
    
```

注 インストールのサイズと複雑さによっては、インストールに長い時間がかかる場合があります。

インストールが正常に完了すると、「インストールが完了しました」というメッセージが表示されます。

2. /var/sadm/install/logs に保存された、インストール後のファイルを確認します。

- [1] **インストールサマリ**：インストールされた各コンポーネントと、指定した設定内容が記録されます。カスタム設定を選択した場合、この概要ファイルにはすべての設定値が記録されます。
 - [2] **インストールログ**：コンポーネント製品に関するインストーラのログメッセージを示します。
 - 別のログファイルに、共有コンポーネントのインストールについての情報が記載されます。
3. インストーラを終了します。
 4. 「ご使用にあたって」ページを表示します。

「ご使用にあたって」ページでは、コンポーネント製品のマニュアルへのリンクと製品登録ページへのリンク、および **Java Enterprise System** のマニュアルを紹介しています。「ご使用にあたって」ページにアクセスするには、インストールディレクトリ内の `WhatsNext.html` ファイルをブラウザで開きます。

▶ **製品を Sun に登録するには**

「ご使用にあたって」ページの「**Java Enterprise System** ソフトウェアを登録する」セクションで「登録」リンクをクリックします。

コンポーネントの追加

さらにコンポーネント製品を追加するために、インストーラを再び実行することもできます。インストーラは、新しくインストールされたコンポーネントを検出し、他のコンポーネントとの依存関係を満たすコンポーネントを使用します。インストールされているコンポーネントを表すオプションは無効になっています。

たとえば、今回のインストールで **Identity Server** およびその依存コンポーネントをインストールしたとします。その後で、**Portal Server** をインストールすることになりました。**Portal Server** との依存関係を満たす **Identity Server** の既存のインスタンスが使用され、**Identity Server** の再インストールを促すメッセージは表示されません。

次の手順

この章を終えた時点で、Java Enterprise System のインストールのうち、インストーラで実行する部分は完了しています。操作環境に合わせてコンポーネント製品をさらに設定する方法については、[211 ページの「インストール後の設定と起動」](#)を参照してください。

注 インストール時に拡張設定を行なっている場合もありますが、ほとんどのコンポーネント製品では追加設定が必要です。他の作業に進む前に、インストール後の設定要件を参照してください。

インストールイメージを企業内の他の管理者も利用できるようにする方法については、[437 ページの「ネットワークインストールのためのセットアップ方法」](#)を参照してください。

次の手順

サイレントモードでのソフトウェア のインストール

サイレントインストールは、類似した設定を共有している複数のホストに **Java Enterprise System** をインストールする場合に便利です。サイレントインストールでは、インストーラを実行して、状態ファイルに入力した値が取り込まれるようにする必要があります。応答が含まれている状態ファイルはパラメータのリストであり、それぞれが 1 つのフィールドのプロンプトを表します。

同じ状態ファイルを入力に使用して、多数のホストでインストーラを実行できます。このプロセスにより、企業内の複数のホストに設定が伝達されます。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- [インストール前の手順](#)
- [ガイドライン](#)
- [状態ファイルの生成](#)
- [状態ファイルの編集](#)
- [サイレントモードでのインストーラの実行](#)
- [次の手順](#)

インストール前の手順

状態ファイルを作成する前に、対話式インストールを実行する場合と同じインストール前の手順を実行する必要があります。以下の章をまだ参照していない場合は、読んでおいてください。

- [第 2 章「インストールの準備」](#)には、システム要件や他の重要な計画についての情報が記載されています。

- 第3章「インストールおよび設定に関する情報の収集」には、インストーラからの各質問についての情報が記載されています。この章では、質問に答えることによって設定する状態ファイルのパラメータと各質問との関連について説明します。

ガイドライン

Java Enterprise System のコンポーネントを使い慣れている場合は、手動で状態ファイルを作成することに慣れていないかもしれません。この方法では、インストール時、設定時、またはサーバーの起動時に問題が発生する可能性があります。

サイレントインストールを正常に実行するには、以下のガイドラインに従います。

- 203 ページの「状態ファイルの生成」に説明されているとおり、インストーラを使用して状態ファイルを生成できます。

独自の状態ファイルは作成しないでください。インストーラが生成する状態ファイルを使用することで、リアルタイムの依存性チェックとエラーレポートを活用することができます。

- 編集する前に、状態ファイルのコピーを保存します。
- 値を編集する以外は、パラメータを変更しないでください。
 - 値が指定されていない場合でも、パラメータを削除しないでください。
 - パラメータを追加しないでください。
 - パラメータの順序を変更しないでください。
- 値を編集する場合は、次のガイドラインに従ってください。
 - 元の種類や形式に注意し、新しい値を入力するときにはそれを維持する。たとえば、次のような点に注意する
 - 古い値がホスト名の場合、ドメインの完全修飾名ではなく、ホスト名を入力する
 - 古い値の先頭にスラッシュ (/) が付いている場合、新しい値の先頭にも必ずスラッシュを付ける。
 - 削除する値の代わりに、他の値を入力する。パラメータが必要な場合、インストーラまたは設定に失敗する可能性がある
 - 元の値の大文字 / 小文字の区別を維持する

状態ファイルの生成

状態ファイルを生成するには、グラフィカルインタフェースまたはテキストベースインタフェースを使用して、最初にインストーラを実行する必要があります。インストーラを実行する前に次のいずれかの章をよく読み、正しいインストールに必要な準備を行なってください。

第5章「グラフィカルインタフェースによるソフトウェアのインストール」

第6章「テキストベースのインタフェースを使用したソフトウェアのインストール」

▶ 状態ファイルを生成するには

1. インストーラのグラフィカルインタフェースを使用する場合は、ディスプレイへのアクセスを確保します。

リモートマシンにログインするか、あるいは `su` コマンドを使用してローカルマシンの `superuser` になる場合は、ローカルマシンで `xhost` コマンドを実行し、ローカルディスプレイにアクセスできるようにします。たとえば、すべてのユーザーにアクセスを許可するには、次のコマンドを使用します。

```
xhost +
```

リモートマシンにログインする場合には、`DISPLAY` 環境変数がローカルディスプレイに適切に設定されていることを確認してください。`DISPLAY` 変数が正しく設定されていないと、インストーラはテキストベースで実行されます。たとえば、マシン名が `myhost` である場合は、次のように設定します。

```
(C Shell)    % setenv DISPLAY myhost:0.0
(Korn Shell) $ DISPLAY=myhost:0.0
```

2. `root` としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
3. インストーラプログラムが格納されているディレクトリに移動します。

```
cd installer-directory
```

4. 状態ファイルのパス名を指定して、インストーラを起動します。`installer` コマンドの形式は次のとおりです。

```
./installer [-no] [-nodisplay] -saveState [statefile]
```

各オプションの意味は次のとおりです。

<code>-no</code>	インストーラによってこのホストにソフトウェアがインストールされないようにする
<code>-nodisplay</code>	インストーラをテキストベースモードで起動する。このオプションを指定しない場合、インストーラはグラフィカルモードで起動される

<code>-saveState</code>	<p><code>statefile</code> によって指定される場所に状態ファイルを生成するようにインストーラに指示する。指定されたファイルが存在しない場合、このファイルは自動的に作成される</p> <p><code>statefile</code> の値を省略すると、インストーラはデフォルトの <code>statefile.out</code> ファイルに書き込みを行う</p> <p>連続インストールセッションで同じ状態ファイルを指定することができる。初回のインストールセッションが終了すると、ファイル名に <code>n</code> が追加される。この <code>n</code> はゼロ (0) から始まる整数であり、セッションが開始されるたびに増える</p>
<code>statefile</code>	<p>生成する状態ファイルへの絶対パスまたは相対パスを指定する</p>

5. [161 ページの「グラフィカルインタフェースによるソフトウェアのインストール」](#)に記載されている手順に従って、インストーラのページを先に進めます。

インストーラからの質問に回答すると、その回答が状態ファイルに記録されます。インストールが完了すると、指定された場所にある状態ファイルが利用可能になります。

状態ファイルの編集

サイレントインストールを実行する前に、ホスト名、ドメイン名、IP アドレスなどのローカルパラメータ、およびその他の設定がインストール先のマシンに適切になるように、状態ファイルを編集します。

状態ファイルを作成したのとは異なるオペレーティングシステムにインストールすることを計画している場合、状態ファイルのキーの変更が必要になる場合があります。

ローカルパラメータの編集

次の表は、インストールするコンポーネントに応じて編集の必要があるパラメータを示しています。また、編集が必要となるパラメータは、マシンのセットアップによっても異なります。たとえば、状態ファイルを生成したマシンが、インストール先のマシンと同じドメインに含まれるかどうか、などの条件が影響します。

表 7-1 編集する状態ファイルのパラメータ

コンポーネント	パラメータ名
共通サーバー設定	CMN_HOST_NAME
	CMN_DOMAIN_NAME
	CMN_IPADDRESS
管理サーバー	ADMINSERV_DOMAIN
	ADMINSERV_CONFIG_DIR_HOST
Directory Server	DS_SERVER_IDENTIFIER
	CONFIG_DIR_HOST (USE_EXISTING_CONFIG_DIR が 1 に設定されている場合)
	USER_DIR_HOST (USE_EXISTING_USER_DIR が 1 に設定されている場合)
Identity Server	IS_WS_HOST_NAME
	IS_WS_INSTANCE_DIR (Web Server が Web コンテナの場合)
	CONSOLE_HOST
	SERVER_HOST
	IS_DS_HOST
	IS_DS_HOSTNAME
	COOKIE_DOMAIN_LIST
Portal Server	SRA_SERVER_DOMIAN
	SRA_GATEWAY_DOMAIN
	SRA_GW_DOMAIN
	SRA_GW_IPADDRESS
	SRA_NLP_DOMAIN
	SRA_NLP_IPADDRESS
	SRA_RWP_DOMAIN
SRA_RWP_IPADDRESS	

表 7-1 編集する状態ファイルのパラメータ (続き)

コンポーネント	パラメータ名
Portal Server, Secure Remote Access	SRA_GW_HOSTNAME
	SRA_GW_SUBDOMAIN
	SRA_NLP_HOSTNAME
	SRA_NLP_SUBDOMAIN
	SRA_RWP_HOSTNAME
	SRA_RWP_SUBDOMAIN
	SRA_SERVER_HOST
Web Server	WS_ADMIN_HOST

各パラメータの詳細については、[第3章「インストールおよび設定に関する情報の収集」](#)を参照してください。

プラットフォームに適した ID の作成

状態ファイルを実行するマシンとは異なるオペレーティングシステムのマシン上に状態ファイルを生成することはできません。次の3つのプラットフォーム用に、それぞれ状態ファイル ID があります。

- SPARC 上の Solaris 8
- SPARC 上の Solaris 9
- X86 上の Solaris

状態ファイルを作成したプラットフォームとは異なるプラットフォームでその状態ファイルを編集するには、2つの手順があります。

インストーラによる状態ファイル ID の生成

この手順では、サイレントインストールを実行するプラットフォームでインストーラを実行することによって、状態ファイル ID を生成します。

▶ **インストーラを使用して状態ファイル ID を生成するには**

1. root としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
2. インストーラが格納されているディレクトリに移動します。

```
cd installer-dir
```

3. -id オプションを指定してインストーラを実行します。

```
./installer -id
```

このコマンドにより、暗号化された ID が生成されます。

4. ID をコピーし、STATE_BEGIN パラメータおよび STATE_DONE パラメータの値として状態ファイルに貼り付けます。

次に、状態ファイル内の状態ファイル ID の例を示します。

```
[STATE_BEGIN Sun Java(tm) Enterprise System
f31c7e86a64605bc5b9b629931a30b275a0eb447]
.
.
[STATE_DONE Sun Java(tm) Enterprise System
f31c7e86a64605bc5b9b629931a30b275a0eb447]
```

プラットフォーム固有の配布ファイルによる状態ファイル ID の生成

この手順では、プラットフォームに固有の Java Enterprise System の配布ファイルを使用して状態ファイル ID を生成します。Java Enterprise System の配布用 DVD には、プラットフォーム別のすべての配布ファイルが含まれています。この手順は、1つのプラットフォーム専用のファイルをダウンロードした場合にも有効です。

▶ **プラットフォーム固有の配布ファイルを使用して状態ファイル ID を生成するには**

1. プラットフォームに固有の .install ディレクトリに移動します。

```
cd platform/.install
```

ここで、*platform* の値は Solaris_sparc または Solaris_x86 です。

2. 次のいずれかのコマンドを実行して、プラットフォームに固有の ID を生成します。
 - Solaris 8: java -classpath . -D"wizard.idInfo" EntsysInstall8
 - Solaris 9: java -classpath . -D"wizard.idInfo" EntsysInstall9
 - Solaris x86: java -classpath . -D"wizard.idInfo" EntsysInstall9

このコマンドにより、暗号化された ID が生成されます。

3. ID をコピーし、STATE_BEGIN パラメータおよび STATE_DONE パラメータの値として状態ファイルに貼り付けます。

次に、状態ファイル内の状態ファイル ID の例を示します。

```
[STATE_BEGIN Sun Java(tm) Enterprise System  
f31c7e86a64605bc5b9b629931a30b275a0eb447]  
.  
.  
.  
[STATE_DONE Sun Java(tm) Enterprise System  
f31c7e86a64605bc5b9b629931a30b275a0eb447]
```

サイレントモードでのインストーラの実行

状態ファイルを生成したマシンと同じオペレーティングシステムがインストールされているマシンで、インストーラを実行します。

▶ サイレントモードでインストーラを実行するには

1. Java Enterprise System のコンポーネントをインストールするホストで端末ウィンドウを開きます。
2. root としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
3. インストーラプログラムが格納されているディレクトリに移動します。

```
cd installer-directory
```

4. 次のオプションを指定してインストーラを起動します。

```
./installer -nodisplay -noconsole -state statefile
```

各オプションの意味は次のとおりです。

-nodisplay	グラフィカル表示を抑制する
-noconsole	ユーザーインタフェースを抑制し、インストーラをサイレントモードで起動する
-state	指定された状態ファイルをサイレントインストールの入力として使用する
<i>statefile</i>	状態ファイルへの絶対または相対パス名を指定する

インストールしようとしているコンポーネントの数とタイプによっては、時間がかかる場合があります。インストーラの実行中、インストールログの変化に注意することによって、進行状況を監視することができます。

▶ **サイレントインストールの進行状況を監視するには**

1. 端末ウィンドウで、`cd` コマンドを使用してログファイルのディレクトリに移動します。

```
cd /var/sadm/install/logs
```

2. 現在のインストールのログファイルを探します。

2つのログファイルがあります。インストールの早い段階で共有コンポーネントがインストールされ、残りのコンポーネントがその後インストールされます。2つのログファイルには、次の形式の名前が付いています。

```
Java_Shared_Component_Install.datetimestamp  
Java_Enterprise_System_install.Bdatetimestamp
```

timestamp 変数は、ログの作成時刻を表します。形式は *MMddhhmm* です。各要素の意味は次のとおりです。

MM 月を示す

dd 日付を示す

hh 時間を示す

mm 分を示す

3. `tail` コマンドを使用して、ログに書き込まれるメッセージを監視します。次の形式で実行します。

```
tail -f log-file-name
```

次の手順

この章を終えた時点で、**Java Enterprise System** のインストールのうち、インストーラで実行する部分は完了しています。コンポーネント製品を環境に合わせて設定する最終的な方法については、[211 ページの「インストール後の設定と起動」](#)を参照してください。

注 インストール時に拡張設定を行なっている場合もありますが、ほとんどのコンポーネント製品では追加設定が必要です。他の作業に進む前に、インストール後の設定要件を参照してください。

インストールイメージを企業内の他の管理者も利用できるようにする方法については、[437 ページの「ネットワークインストールのためのセットアップ方法」](#)を参照してください。

インストール後の設定と起動

この章では、インストールされたコンポーネント製品の設定、およびその製品が動作することを確認するための手順を説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- [インストール後の設定の概要](#)
- [Sun Cluster の設定](#)
- [コンポーネント製品の設定](#)
- [コンポーネント製品の起動と停止](#)
- [次の手順](#)

インストール後の設定の概要

Java Enterprise System インストーラによるインストールが完了したら、いくつかのコンポーネント製品に対しては追加の設定を行う必要があります。設定の内容は、選択した設定の種類 (カスタムまたは最小)、またはコンポーネント製品を Sun Cluster ソフトウェアを使用して設定するかどうかによって異なります。

最小モードでのインストールを完了するために、多くのコンポーネント製品には設定ツールが用意されています。設定ツールを実行した後で、本書および各コンポーネント製品のマニュアルに記載されている手順に従ってさらに変更を加えることもできます。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [カスタム設定モード](#)
- [最小設定モード](#)
- [インストールと設定の確認](#)

カスタム設定モード

カスタム設定モードを選択した場合、コンポーネント製品に関する設定情報の指定がインストール時に必要になります。インストールプロセスの最後に、インストール中に設定された値を記録したサマリレポートが作成されます。このファイルが保存されている `/var/sadm/install/logs` ディレクトリからこのファイルを直接表示することができます。

注 Calendar Server、Instant Messaging、Messaging Server、および Sun Cluster の各コンポーネントを除いて、Java Enterprise System のすべてのコンポーネント製品は、カスタム設定が使用できます。これらの例外製品を設定できるのは、インストール後だけです。

最小設定モード

インストール時に最小設定モードを選択した場合は、Java Enterprise System インストーラによって、コンポーネント製品のパッケージファイルが各ディレクトリに配置されます。パラメータの設定は行われず、実行時サービスを利用できないため、ほとんどのコンポーネント製品はそのままでは機能しません。

Java Enterprise System 環境が機能するには、その前にほとんどのコンポーネント製品で追加の設定が必要です。

注 最小設定によるインストールを行い、コンポーネントとして Identity Server を選択した場合は、インストール中に Identity Server および関連するコンポーネントの設定を行うようにインストーラに指示されます。この場合、(Application Server、Directory Server、Directory Proxy Server、サーバーコンソールおよび管理サーバー、または Web Server などの) コンポーネント製品の多くもインストール時に設定されます。

インストールと設定の確認

設定の大部分が終わっている場合でも、この章の各節を参照し、インストールしたコンポーネント製品に追加設定が必要かどうかを確認してください。追加設定が必要ない場合は、[229 ページの「コンポーネント製品の起動と停止」](#)に進み、コンポーネント製品が動作することを確認します。

- **インストールを確認するには**：この章で説明する手順を実行する前に、`pkginfo` コマンドを使用して、コンポーネント製品のファイルがインストールされていることを確認します。コンポーネント製品に関連するパッケージのリストについては、[414 ページの「コンポーネント製品用にインストールされるパッケージ」](#)を参照してください。
- **設定を確認するには**：この章に記載されている設定作業が完了したら、[229 ページの「コンポーネント製品の起動と停止」](#)に記載されているコンポーネントに固有の手順に従ってインストール後の設定を確認します。

Sun Cluster の設定

次のコンポーネント製品は、Sun Cluster ソフトウェアで使用するよう指定できます。

- 管理サーバー
- Application Server
- Calendar Server
- Directory Server
- Messaging Server
- Message Queue
- Web Server

注 管理サーバー、Calendar Server、Message Queue は、追加設定なしで Sun Cluster ソフトウェアと併用できます。

Sun Cluster のインストールについては、[59 ページの「Sun Cluster ソフトウェアを使用した高可用性」](#)を参照してください。

Java Enterprise System インストーラによって、Sun Cluster パッケージの単純な pkgadd インストールが実行されます。pkginfo コマンドを使用して、Sun Cluster パッケージがインストールされていることを確認できます。Sun Cluster コンポーネントに関連するパッケージのリストについては、419 ページの「Sun Cluster ソフトウェアとエージェント」を参照してください。

インストール中に、Java Enterprise System インストーラによって Sun Cluster パッケージがインストールされ、/usr/cluster/bin ディレクトリがセットアップされます。設定は行われません。パッケージがインストールされたら、クラスタを確立する必要があります。ただし、クラスタを確立する前に次のコンポーネント製品の設定を完了しておく必要があります。

- 218 ページの「最小インストール後の Application Server の設定」
- 220 ページの「最小インストール後の Directory Server の設定」
- 226 ページの「インストール後の Messaging Server の設定」
- 228 ページの「最小インストール後の Web Server の設定」

▶ インストール後に Sun Cluster ソフトウェアを設定するには

1. Sun Cluster のインストールユーティリティ、/usr/cluster/bin/scinstall を起動して、クラスタを確立します。クラスタノードとしてインストールするマシンごとに行う必要があります。
2. scinstall を起動したら、Sun Cluster の設定タスクを完了します。詳細については、『Sun Cluster 3.1 ソフトウェアのインストール』(<http://docs.sun.com/doc/817-1020-10?l=ja>) を参照してください。

この段階で、scinstall ユーティリティによって Sun Cluster パッケージが検証されます。いずれかのパッケージが見つからない場合は、CD に収録されているパッケージを使用できないことを示すエラーメッセージが表示されます。このエラーが表示される場合は、Java Enterprise System インストーラによって正しい Sun Cluster パッケージがインストールされていることを確認する必要があります。

▶ コンポーネント製品のデータサービスの設定

クラスタの設定が完了すると、データサービスの設定準備が整います。

注 コンポーネント製品のデータサービスを設定するには、その前にクラスタを確立し、Sun Cluster コアと Sun Cluster エージェントソフトウェアの両方をインストールする必要があります。

コンポーネント製品のデータサービスの設定方法は、次の場所で参照できます。

- 管理サーバー : Directory Server を参照

- Application Server : 『Sun Cluster 3.1 Data Service for Sun ONE Application Server』(<http://docs.sun.com/doc/817-1530>) を参照
- Calendar Server : 『Sun ONE Calendar Server Administrator's Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6708-10>) の「Setting Up a High Availability Configuration」を参照
- Directory Server : 『Sun ONE Directory Server 5.2 インストールおよびチューニングガイド』(<http://docs.sun.com/doc/816-6847-10?=ja>) を参照
- Message Queue : 『Sun Cluster 3.1 Data Service for Sun ONE Message Queue』(<http://docs.sun.com/doc/817-1531>) を参照
- Messaging Server : 『Sun ONE Messaging Server 6.0 Installation Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6735-10>) の「Configuring High Availability Solutions」を参照してください。
- Web Server : 『Sun Cluster 3.1 Data Service for Sun ONE Web Server』(<http://docs.sun.com/doc/817-1528>) を参照

データサービスおよびサポートされるすべての層 (ボリュームマネージャ、クラスタファイルシステム、リソースグループ情報) が完全に設定されるまでは、Java Enterprise System への Sun Cluster のインストールは完了しません。

コンポーネント製品の設定

ここでは、次の手順について説明します。

- [カスタムインストール後の管理サーバーの設定](#)
- [最小インストール後の管理サーバーの設定](#)
- [カスタムインストール後の Application Server の設定](#)
- [最小インストール後の Application Server の設定](#)
- [インストール後の Calendar Server の設定](#)
- [カスタムインストール後の Directory Server の設定](#)
- [最小インストール後の Directory Server の設定](#)
- [インストール後の Directory Proxy Server の設定](#)
- [インストール後の Identity Server の設定](#)
- [参照整合性検査プラグインの有効化](#)
- [Identity Server インデックスの追加](#)
- [インストール後の Instant Messaging の設定](#)

- インストール後の Message Queue の設定
- インストール後の Messaging Server の設定
- カスタムインストール後の Portal Server の設定
- 最小インストール後の Portal Server の設定
- カスタムインストール後の Web Server の設定
- 最小インストール後の Web Server の設定

管理サーバーの設定

▶ カスタムインストール後の管理サーバーの設定

注 管理サーバーを設定するには、事前に Directory Server の設定を完了しておく必要があります。220 ページの「最小インストール後の Directory Server の設定」を参照してください。

カスタム設定モードでのインストールが完了した時点で、管理サーバーは、1 件の例外を除いて、起動のためのすべての設定が完了しています。管理サーバーを Sun Cluster ソフトウェアで使用する場合に設定を完了する方法については、213 ページの「Sun Cluster の設定」を参照してください。

▶ 最小インストール後の管理サーバーの設定

最小設定でのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、Sun ONE 管理サーバーコンポーネント製品の設定作業を直ちに実行できます。

注 管理サーバーを Identity Server と共にインストールした場合は、手順 3 のほとんどの設定がインストール中に完了しています。

1. 『Sun ONE Directory Server 5.2 インストールおよびチューニングガイド』(<http://docs.sun.com/doc/816-6847-10?=ja>) の「Sun ONE Directory Server のインストール」の章に記載されている「管理サーバーの設定」の手順に従って、管理サーバーの初期設定を行います。
2. 『Sun ONE Directory Server 5.2 インストールおよびチューニングガイド』(<http://docs.sun.com/doc/816-6847-10?=ja>) の「Sun ONE Directory Server のインストール」の章に記載されている「インストールプロセスの完了」の手順を実行します。

3. 82 ページの「共通サーバー設定」に記載されている共通のサーバーの設定、および 84 ページの「管理サーバーの設定」の表に記載されている管理サーバーの設定を確認します。
必要に応じて、設定を更新します。これらの設定の詳細については、『Sun ONE Server Console Server Management Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6704-10>)を参照してください。
4. 可能な場合は、管理サーバーを Sun Cluster ソフトウェアで使用するよう設定します。213 ページの「Sun Cluster の設定」を参照してください。
5. 設定を確認するには、231 ページの「管理サーバーの起動と停止」に進んでください。

Application Server の設定

▶ カスタムインストール後の Application Server の設定

1. PATH 環境変数に `as_svr_base/bin` を追加します。この設定を確認するには、次のように入力します。

```
which asadmin
```

2. MANPATH 環境変数に `as_svr_base/man` を追加します。この設定を確認するには、次のように入力します。

```
man asadmin
```

asadmin マニュアルページが表示されます。

3. 次の asadmin コマンドを使用して、Application Server の初期ドメインを作成します。

```
asadmin create-domain --path domain_path --sysuser sys_user
--passwordfile file_name --adminport port_number --adminuser admin_user
--adminpassword password domain_name asadmin
```

たとえば、次のようにします。

```
asadmin create-domain --adminport 4848 --adminuser MyAdmin
--adminpassword MyPassword MyDomain
```

Application Server の管理の詳細については、『Sun ONE Application Server Administrator's Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-1953-10>)を参照してください。

4. Application Server を Identity Server および Portal Server と共に設定した場合は、インストール時に指定した設定情報を使用できるように、Application Server を再設定する必要があります。

Application Server を再設定するには、次のコマンドを実行します。

```
asadmin -reconfig instance-name
```

たとえば、次のようにします。

```
asadmin -reconfig server1
```

5. Application Server を Sun Cluster ソフトウェアで使用する場合は、設定を完了する方法については、213 ページの「Sun Cluster の設定」を参照してください。
6. 設定を確認するには、232 ページの「Application Server の起動と停止」に進んでください。

▶ 最小インストール後の Application Server の設定

最小設定モードでインストールすると、Application Server パッケージがインストールされ、直ちに設定を開始できます。

1. PATH 環境変数に `as_svr_base/bin` を追加します。この設定を確認するには、次のように入力します。

```
which asadmin
```

2. MANPATH 環境変数に `as_svr_base/man` を追加します。これが動作することを確認するには、次のように入力します。

```
man asadmin
```

asadmin マニュアルページが表示されます。

3. 次の asadmin コマンドを使用して、Application Server の初期ドメインを作成します。

```
asadmin create-domain --path domain_path --sysuser sys_user  
--passwordfile file_name --adminport port_number --adminuser admin_user  
--adminpassword password domain_name asadmin
```

たとえば、次のようにします。

```
asadmin create-domain --adminport 4848 --adminuser MyAdmin  
--adminpassword MyPassword MyDomain
```

Application Server の管理の詳細については、『Sun ONE Application Server Administrator's Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-1953-10>) を参照してください。

4. 可能な場合は、Application Server を Sun Cluster で使用するよう設定します。213 ページの「Sun Cluster の設定」を参照してください。
5. 設定を確認するには、232 ページの「Application Server の起動と停止」に進んでください。

Calendar Server の設定

▶ インストール後の Calendar Server の設定

Java Enterprise System インストーラを使用して、Calendar Server コンポーネント製品を設定することはできません。

1. Messaging Server の設定中にこの手順が完了していない場合、Directory Server のセットアップスクリプト、`/opt/SUNWics5/cal/sbin/comm_dssetup.pl` を実行して Calendar Server 用に Directory Server 上の Sun ONE Directory Server 5.x を設定します。

注 [手順 3](#) でユーザー管理ユーティリティを実行するには、Identity Server がインストールされ、設定が完了している必要があります。

- a. Directory Server が稼動していることを確認します。必要に応じて [235 ページ](#) の「[Directory Server の起動](#)」を参照してください。
- b. 次のコマンドを実行して Directory Server を準備します。
`server-root/cal/sbin/comm_dssetup.pl`
- c. スクリプトを実行するときには、スキーマタイプとして Schema 2 を選択します。

注 Messaging Server、Calendar Server、およびユーザー管理ユーティリティが同じディレクトリサーバーに接続されている場合は、`comm_dssetup.pl` スクリプトを 1 回実行します。

各製品で異なる LDAP ディレクトリサーバーを使用している場合は、各 LDAP ディレクトリでスクリプトを実行する必要があります。

2. 単純なホスト名ではなく、完全修飾ドメイン名 (FQDN) が含まれる `/etc/hosts` ファイルの 2 番目の列を確認します。
例：
`192.18.99.999 mycomputer.company.com loghost`
3. この手順が必要なのは、インストールに Identity Server 6.1 と LDAP Schema 2 が含まれ、Messaging Server の設定時にこの手順を実行しなかった場合だけです。ユーザー管理ユーティリティ `/opt/SUNWcomm/sbin/config-iscli` を実行して、Calendar Server のプロビジョニングを設定します。

ユーティリティの実行手順については、『Sun ONE Messaging and Collaboration User Management Utility Installation and Reference Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-4216-10>) を参照してください。

4. Calendar Server の設定プログラム `/opt/SUNWics5/cal/sbin/csconfigurator.sh` を実行して Calendar Server を設定します。
Calendar Server の設定の詳細については、『Sun ONE Calendar Server Installation Guide for Solaris Operating Systems』(<http://docs.sun.com/doc/816-6707-10>) を参照してください。
5. 可能な場合は、Calendar Server を Sun Cluster ソフトウェアで使用するよう設定します。この設定手順については、213 ページの「Sun Cluster の設定」を参照してください。
6. 設定を確認するには、234 ページの「Calendar Server の起動と停止」に進んでください。

Directory Server の設定

▶ カスタムインストール後の Directory Server の設定

1. `idsktune` コマンドを実行して、Directory Server の使用に関する要件を出力します。
2. 可能な場合は、Directory Server を Sun Cluster ソフトウェアで使用するよう設定します。213 ページの「Sun Cluster の設定」を参照してください。
3. 設定を確認するには、235 ページの「Directory Server の起動と停止」および 231 ページの「管理サーバーの起動と停止」に進んでください。

▶ 最小インストール後の Directory Server の設定

最小設定でのインストールが完了すると、Sun ONE Directory Server コンポーネント製品の設定作業を直ちに実行できます。

注 Directory Server を Identity Server と共にインストールした場合は、手順 3 のほとんどの設定がインストール中に完了しています。

1. 『Sun ONE Directory Server 5.2 インストールおよびチューニングガイド』(<http://docs.sun.com/doc/816-6847-10?=ja>) の「Sun ONE Directory Server のインストール」の章に記載されている「Directory Server の設定」の手順に従って、Directory Server の初期設定を行います。
2. 『Sun ONE Directory Server 5.2 インストールおよびチューニングガイド』(<http://docs.sun.com/doc/816-6847-10?=ja>) の「Sun ONE Directory Server のインストール」の章に記載されている「インストールプロセスの完了」の手順を実行します。

3. 82 ページの「共通サーバー設定」に記載されている共通サーバー設定、および 87 ページの「Directory Server の設定」の表に記載されている Directory Server の設定を確認します。
必要に応じて、設定を更新します。
4. idsktune コマンドを実行して、Directory Server の使用に関する要件を出力します。
5. 可能な場合は、Directory Server を Sun Cluster ソフトウェアで使用するよう設定します。213 ページの「Sun Cluster の設定」を参照してください。
6. 設定を確認するには、235 ページの「Directory Server の起動と停止」および 231 ページの「管理サーバーの起動と停止」に進んでください。

Directory Proxy Server の設定

▶ インストール後の Directory Proxy Server の設定

最小設定でのインストールが完了すると、次に示す Sun ONE Directory Proxy Server コンポーネント製品の設定作業を直ちに実行できます。

注 Directory Proxy Server と Identity Server を同じインストールセッションでインストールした場合は、手順 2 のほとんどの設定がインストール中に完了しています。

1. 『Sun ONE Directory Proxy Server Installation Guide』 (<http://docs.sun.com/doc/816-6390-10>) の「Installation」の章に記載されている「Configuring the Directory Proxy Server Instance」の手順を実行し、Directory Proxy Server の初期設定を行います。
2. 82 ページの「共通サーバー設定」に記載されている共通サーバー設定、および 94 ページの「Directory Proxy Server の設定」の表に記載されている Directory Proxy Server の設定を確認します。
3. 設定を確認するには、236 ページの「Directory Proxy Server の起動と停止」に進んでください。

Identity Server の設定

▶ インストール後の Identity Server の設定

Identity Server の場合は、インストール後ではなく、インストール時にすべての設定を行う必要があります。カスタム設定、最小設定のどちらのモードでインストールを行う場合も、インストール時の設定が必要です。また、Identity Server に自動的に関連付けられるコンポーネント製品についても、インストール時の設定が必要です。

注 Identity Server に自動的に関連付けられるコンポーネント製品には、Application Server、Directory Server、Directory Proxy Server、サーバーコンソールと管理サーバー、および Web Server があります。

Java Enterprise System インストーラを実行した直後に Identity Server を起動してそのコンソールにログインすることはできますが、設定の最後の手順を完了するまで、基本的なユーザー管理操作を実行することはできません。これらの手順は、すでにユーザーデータがプロビジョニングされた Directory Server インスタンスを Identity Server が使用するかどうかによって異なります。

次に、次のような状況でどのような処理が必要になるかについて説明します。

- [Directory Server](#) にすでにユーザーデータがプロビジョニングされている場合
- [Directory Server](#) にユーザーデータがプロビジョニングされていない場合

Directory Server にすでにユーザーデータがプロビジョニングされている場合

Directory Server にすでにユーザーデータがプロビジョニングされている場合、設定の最後の手順については、『Sun ONE Identity Server Migration Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6771-10>) の「Configuring a Provisioned Directory Server」を参照してください。

設定を確認するには、[237 ページ](#)の「[Identity Server の起動と停止](#)」に進んでください。

Directory Server にユーザーデータがプロビジョニングされていない場合

Directory Server にまだユーザーデータがプロビジョニングされていない場合は、次の2つの手順を実行します。

- [参照整合性検査プラグインの有効化](#)
- [Identity Server インデックスの追加](#)

ヒント ここで説明する作業を実行する前に、Directory Server が稼動していることを確認します。Directory Server の稼動状態を確認する方法については、[235 ページの「Directory Server の起動」](#)を参照してください。

▶ **参照整合性検査プラグインの有効化**

参照整合性検査プラグインが有効になっている場合、削除または名前変更の操作を実行した直後に、指定された属性の整合性が更新されます。これにより、関連するエントリー間の関係がデータベース全体で維持されます。

1. Directory Server コンソールで、「設定」をクリックします。
2. ナビゲーションツリーで「プラグイン」をダブルクリックし、プラグインのリストを展開します。
3. 「プラグイン」リストで、「Referential integrity postoperation」をクリックします。
4. プロパティの領域で、「プラグインを有効に」ボックスを選択します。
5. 「保存」をクリックします。
6. Directory Server を再起動して、プラグインを有効にします。

▶ **Identity Server インデックスの追加**

データベースのインデックスによって、Directory Server での検索パフォーマンスが向上します。

1. Directory Server コンソールで、「設定」をクリックします。
2. nsroledn インデックスを追加します。
 - a. ナビゲーションツリーで「データ」アイコンをダブルクリックし、Identity Server で使用するディレクトリエントリが含まれるルートサフィックスをクリックします。
 - b. 「インデックス」タブをクリックします。
 - c. 「追加インデックス」の下で、nsroledn 属性の「等価」、「実在」、および「部分文字列」のチェックボックスを選択します。
 - d. 「保存」をクリックします。
 - e. インデックスの作成が正常に完了したら、「インデックス」ウィンドウで「閉じる」をクリックします。
3. memberof インデックスを追加します。
 - a. 「インデックス」タブで、「属性の追加 ...」をクリックします。

- b. 「属性の追加」 ウィンドウで、属性 memberof を選択し、「了解」をクリックします。
 - c. 「インデックス」 タブで、memberof 属性の「等価」と「実在」のチェックボックスを選択します。
 - d. 「保存」をクリックします。
 - e. インデックスの作成が正常に完了したら、「インデックス」 ウィンドウで「閉じる」をクリックします。
4. iplanet-am-static-group インデックスを追加します。
 - a. 「インデックス」 タブで、「属性の追加 ...」をクリックします。
 - b. 「属性の追加」 ウィンドウで、属性 iplanet-am-static-group を選択し、「了解」をクリックします。
 - c. 「インデックス」 タブで、iplanet-am-static-group 属性の「等価」 チェックボックスを選択します。
 - d. 「保存」をクリックします。
 - e. インデックスの作成が正常に完了したら、「インデックス」 ウィンドウで「閉じる」をクリックします。
5. iplanet-am-modifiable-by インデックスを追加します。
 - a. 「インデックス」 タブで、「属性の追加 ...」をクリックします。
 - b. 「属性の追加」 ウィンドウで、属性 iplanet-am-modifiable-by を選択し、「了解」をクリックします。
 - c. 「インデックス」 タブで、iplanet-am-modifiable-by 属性の「等価」 チェックボックスを選択します。
 - d. 「保存」をクリックします。
 - e. インデックスの作成が正常に完了したら、「インデックス」 ウィンドウで「閉じる」をクリックします。
6. iplanet-am-user-federation-info-key インデックスを追加します。
 - a. 「インデックス」 タブで、「属性の追加 ...」をクリックします。
 - b. 「属性の追加」 ウィンドウで、属性 iplanet-am-user-federation-info-key を選択し、「了解」をクリックします。
 - c. 「インデックス」 タブで、iplanet-am-user-federation-info-key 属性の「等価」 チェックボックスを選択します。
 - d. 「保存」をクリックします。
 - e. インデックスの作成が正常に完了したら、「インデックス」 ウィンドウで「閉じる」をクリックします。

7. Directory Server を再起動します。
8. 設定を確認するには、237 ページの「Identity Server の起動と停止」に進んでください。

Instant Messaging の設定

▶ インストール後の Instant Messaging の設定

Instant Messaging コンポーネント製品は、Java Enterprise System インストーラによって設定することができません。

Instant Messaging の設定ツール、`/opt/SUNWim/configure` を使用方法については、『Sun ONE Instant Messaging Installation Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6676-10>) の「Configuring Sun ONE Instant Messenger」の章を参照してください。

設定を確認するには、240 ページの「Instant Messaging の起動と停止」に進んでください。

▶ インストール後の Message Queue の設定

Message Queue コンポーネント製品は、Sun Cluster ソフトウェアで使用するよう設定されていない限り、追加設定は必要ありません。この場合は、213 ページの「Sun Cluster の設定」を参照してください。

Message Queue の追加設定については、『Sun ONE Message Queue Administrator's Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-0354-10>) を参照してください。たとえば、デフォルトの管理パスワードを変更することができます。

設定を確認するには、240 ページの「Instant Messaging の起動と停止」に進んでください。

Messaging Server の設定

▶ インストール後の Messaging Server の設定

Messaging Server コンポーネント製品は、Java Enterprise System のインストーラによって設定することができません。

1. Calendar Server の設定中にこの手順が完了していない場合、Directory Server のセットアップスクリプト、`/opt/SUNWmsgsr/lib/comm_dssetup.pl` を実行して Messaging Server 用に Directory Server 上の Sun ONE Directory Server 5.x を設定します。
 - a. Directory Server が稼動していることを確認します。方法については、[235 ページの「Directory Server の起動」](#)を参照してください。
 - b. `server-root/lib/comm_dssetup.pl` を実行して Directory Server を準備します。
 - c. スクリプトを実行するときには、スキーマタイプとして Schema 2 を選択します。

注 Messaging Server、Calendar Server、およびユーザー管理ユーティリティが同じディレクトリサーバーに接続されている場合は、`comm_dssetup.pl` スクリプトを 1 回実行します。

各製品で異なる LDAP ディレクトリサーバーを使用している場合は、各 LDAP ディレクトリでスクリプトを実行する必要があります。

2. 単純なホスト名ではなく、完全修飾ドメイン名 (FQDN) が含まれる `/etc/hosts` ファイルの 2 番目の列を確認します。
例：
`192.18.99.1 mycomputer.company.com loghost`
3. この手順が必要なのは、インストールに Identity Server 6.1 と LDAP Schema 2 が含まれ、Calendar Server の設定時にこの手順を実行しなかった場合だけです。ユーザー管理ユーティリティ `/opt/SUNWcomm/sbin/config-iscli` を実行して、Messaging Server のプロビジョニングを設定します。ユーティリティの実行手順については、『Sun ONE Messaging and Collaboration User Management Utility Installation and Reference Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-4216-10>) を参照してください。
4. Messaging Server 設定プログラム `/opt/SUNWmsgsr/sbin/configure` を実行して、Messaging Server を設定します。

Messaging Server の設定の詳細については、『Sun ONE Messaging Server Installation Guide for Solaris Operating Systems』(<http://docs.sun.com/doc/816-6735-10>) を参照してください。

5. 可能な場合は、Sun Cluster ソフトウェアで使用するように設定します。213 ページの「Sun Cluster の設定」を参照してください。
6. 設定を確認するには、241 ページの「Messaging Server の起動と停止」に進んでください。

Portal Server の設定

▶ カスタムインストール後の Portal Server の設定

Portal Server の Web コンテナとして Web Server または Application Server を使用している場合は、そのインスタンスに変更を適用する必要があります。『Sun ONE Portal Server 6.2 インストールガイド』(<http://docs.sun.com/db/doc/817-4634-10?l=ja>) の第 2 章「Sun ONE Portal Server インストール後の作業」に記述されている手順に従ってください。

設定を確認するには、242 ページの「Portal Server の起動と停止」に進んでください。

▶ 最小インストール後の Portal Server の設定

Sun ONE Portal Server コンポーネント製品では、Portal Server, Secure Remote Access コンポーネントを含む、Portal Server のすべてのサブコンポーネントを設定するために使用することができる、共通の設定スクリプトが用意されています。

1. Port Server の設定スクリプト `portal-server-install-dir/lib/configurator` を実行して、Portal Server の実行時設定を行います。

設定スクリプトで使用される設定の説明、および設定スクリプトの実行手順については、『Sun ONE Portal Server 6.2 インストールガイド』(<http://docs.sun.com/db/doc/817-4634-10?l=ja>) の「Sun ONE Portal Server のインストール」を参照してください。120 ページの「Portal Server の設定」の表を参照することもできます。

2. Web Server または Application Server インスタンスに変更を適用します。『Sun ONE Portal Server 6.2 インストールガイド』(<http://docs.sun.com/db/doc/817-4634-10?l=ja>) の第 2 章「Sun ONE Portal Server インストール後の作業」に記述されている手順に従ってください。
3. 設定を確認するには、242 ページの「Portal Server の起動と停止」および 243 ページの「Portal Server, Secure Remote Access の起動と停止」に進んでください。

設定を確認するには、242 ページの「Portal Server の起動と停止」および 243 ページの「Portal Server, Secure Remote Access の起動と停止」に進んでください。

Web Server の設定

▶ カスタムインストール後の Web Server の設定

カスタム設定モードでのインストールが完了した時点で、Web Server は、1 件の例外を除いて、起動のためのすべての設定が完了しています。Web Server を Sun Cluster ソフトウェアで使用する場合に設定を完了する方法については、[213 ページの「Sun Cluster の設定」](#)を参照してください。

設定を確認するには、[243 ページの「Web Server の起動と停止」](#)に進んでください。

▶ 最小インストール後の Web Server の設定

最小設定でのインストールが完了すると、Sun ONE Web Server コンポーネント製品の設定作業を直ちに実行できます。

注 Web Server と Identity Server を同じインストールセッションでインストールした場合は、[手順 2](#) のほとんどの設定がインストール中に完了しています。

1. Web Server の設定プログラム、`ws_svr_base/setup/configure` を実行して、Web Server を設定します。設定プログラムによって、管理サーバーおよびデフォルトインスタンスを含む、実行時設定が行われます。
2. [82 ページの「共通サーバー設定」](#)に記載されている共通サーバー設定、および [143 ページの「Web Server の設定」](#)の表に記載されている Web Server の設定を確認します。
必要に応じて、設定を更新します。これらの設定の詳細については、『Sun ONE Web Server Installation and Migration Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-1830-10>)を参照してください。
3. 可能な場合は、Sun Cluster ソフトウェアで使用するように設定します。[213 ページの「Sun Cluster の設定」](#)を参照してください。
4. 設定を確認するには、[243 ページの「Web Server の起動と停止」](#)に進んでください。

コンポーネント製品の起動と停止

注 コンポーネント製品のデフォルトのインストールディレクトリとポート番号は、80 ページの「インストールディレクトリ」および付録 C 「コンポーネントのポート番号」に記載されています。次に説明する起動と停止の例は、多くの場合、このデフォルト情報に基づいています。コンポーネント製品に指定した内容を思い出せない場合は、これらの例を参照してみてください。

ここで説明する手順を実行することで、コンポーネント製品が正常に稼動するかどうかを確認できます。

- [推奨起動シーケンス](#)
- [管理サーバーの起動と停止](#)
- [Application Server の起動と停止](#)
- [Calendar Server の起動と停止](#)
- [Directory Server の起動と停止](#)
- [Directory Proxy Server の起動と停止](#)
- [Identity Server の起動と停止](#)
- [Instant Messaging の起動と停止](#)
- [Message Queue の起動](#)
- [Messaging Server の起動と停止](#)
- [Portal Server の起動と停止](#)
- [Portal Server, Secure Remote Access の起動と停止](#)
- [Web Server の起動と停止](#)

推奨起動シーケンス

注 コンポーネント製品のサーバーの起動および停止を行うには、そのシステムの管理者権限を持っているユーザーとしてログインする必要があります。

Java Enterprise System コンポーネントセット全体を起動するための一般的なシーケンスは、次の表に示すとおりです。左側の列は起動手順の実行順序、中央の列は作業の内容と対象となるコンポーネント、右側の列は作業の実行手順が解説されている場所をそれぞれ示しています。

表 8-1 Java Enterprise System の推奨起動シーケンス

順序	実行するタスク	説明の場所
1	Directory Server を起動する	235 ページの「Directory Server の起動」
	管理サーバーを起動する	231 ページの「管理サーバーの起動」
	サーバーコンソールを起動する	232 ページの「コンソールサーバーの起動」
2	Web コンテナを起動する。インストールされている場合は、Identity Server および Portal Server を起動する	
	Application Server を起動する (Message Queue も起動する)	232 ページの「Application Server の起動」 238 ページの「Application Server 上の Identity Server と Portal Server の確認」 241 ページの「Message Queue の起動」
	BEA WebLogic Server を起動する (Portal Server と併用する場合のみ)	239 ページの「BEA WebLogic 上の Identity Server と Portal Server の確認」
	IBM WebSphere Server を起動する (Portal Server と併用する場合のみ)	239 ページの「IBM WebSphere 上の Identity Server と Portal Server の確認」
	Web Server を起動する	243 ページの「Web Server の起動」 238 ページの「Web Server 上の Identity Server と Portal Server の確認」
3	Portal Server, Secure Remote Access を起動する	243 ページの「Portal Server, Secure Remote Access の起動」
4	Instant Messaging を起動する	240 ページの「Instant Messaging の起動」
5	Messaging Server を起動する	241 ページの「Messaging Server の起動」
6	Calendar Server を起動する	234 ページの「Calendar Server の起動」

コンポーネントセット全体をシャットダウンするには、通常はシーケンスを逆に実行する方法が適しています。

管理サーバーの起動と停止

管理サーバーを確認するには、管理サーバーとコンソールサーバーを起動します。管理サーバーは Directory Server に依存しています。

▶ 管理サーバーの起動

1. `ds_svr_base` に移動します。
例：
`cd /var/opt/mps/serverroot`
2. 管理サーバーのプロセスを開始します。
`./start-admin`
3. 管理サーバーが稼動していることを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep admin-serv/config
root 2556 2554 0 13:19:07 ? 0:01 ns-httpd -d
/var/opt/mps/serverroot/admin-serv/config
root 2553 1 0 13:19:05 ? 0:00 ./uxwdog -e -d
/var/opt/mps/serverroot/admin-serv/config
root 2570 429 0 13:20:20 pts/1 0:00 grep
admin-serv/config
root 2554 2553 0 13:19:05 ? 0:01 ns-httpd -d
/var/opt/mps/serverroot/admin-serv/config
```

▶ 管理サーバーの停止

1. `ds_svr_base` に移動します。
例：
`cd /var/opt/mps/serverroot`
2. 管理サーバーのプロセスを停止します。
`./stop-admin`
3. Application Server が稼動していないことを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep admin-serv/config
```

▶ **コンソールサーバーの起動**

1. 必要に応じて \$DISPLAY 変数を設定し、マシンでコンソールサーバーを表示します。
2. 管理サーバーが稼動していることを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep admin-serv/config
```

3. *ds_svr_base* に移動します。
例:

```
cd /var/opt/mps/serverroot
```

4. サーバーコンソールを起動します。
./startconsole

▶ **コンソールサーバーの停止**

1. サーバーコンソールを終了するには、グラフィカルインタフェースを終了します。
2. コンソールサーバーが稼動していないことを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep console
```

Application Server の起動と停止

Application Server を確認するには、Application Server のインスタンスを起動し、グラフィカル管理インタフェースを起動してログインします。Application Server は Message Queue に依存しています。

▶ **Application Server の起動**

1. *as_svr_base/bin/asadmin* に移動します。
例:


```
cd /opt/SUNWappserver7/bin
```

- Application Server インスタンスを起動します。

例:

```
asadmin start-domain --domain domain1
```

注

起動失敗に関するメッセージが出力された場合は、設定変更がまだ適用されていない可能性があります。この場合は、`asadmin -reconfig instance-name` コマンドを実行します。

例:

```
asadmin -reconfig server1
```

- Application Server が稼動していることを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep appservd
root 4814      1  0 10:42:22 ?                0:00 ./appservd-wdog -r /SUNWappserver7
-d
/var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1/a root 4815  4814  0 10:42:22 ?
0:00 appservd -r /SUNWappserver7 -d
/var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1/admin-se root 4816  4815  0 10:42:23
?          1:37 appservd -r /SUNWappserver7 -d
/var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1/admin-se root 4819  4816  0 10:42:25
?          0:00
/SUNWappserver7/lib/Cgistub -f /tmp/admin-server-4f378e6f/.cgistub_4816
root 4820  4819  0 10:42:25 ?                0:00
/SUNWappserver7/lib/Cgistub -f /tmp/admin-server-4f378e6f/.cgistub_4816
root 4821  4819  0 10:42:25 ?                0:00
/SUNWappserver7/lib/Cgistub -f /tmp/admin-server-4f378e6f/.cgistub_4816
root 4828      1  0 10:43:09 ?                0:00 ./appservd-wdog -r /SUNWappserver7
-d
/var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1/s root 4829  4828  0 10:43:09 ?
0:00 appservd -r /SUNWappserver7 -d
/var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1/server1/ root 4830  4829  0 10:43:09
?          0:17 appservd -r /SUNWappserver7 -d
/var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1/server1/
```

▶ **Application Server のグラフィカルインタフェースへのアクセス**

ブラウザで、`http://hostname.domain:adminport` という形式で Application Server の管理インタフェースにアクセスします。

例：

```
http://mycomputer.example.com:4848
```

Application Server にログインすることにより、インストールが成功したことを確認できます。

▶ **Application Server の停止**

1. `as_svr_base/bin` に移動します。

例：

```
cd /opt/SUNWappserver7/bin
```

2. Application Server インスタンスを停止します。

```
asadmin stop-domain --domain domain1
```

3. Application Server が稼動していないことを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep appservd
```

Calendar Server の起動と停止

Calendar Server は Directory Server に依存しています。

▶ **Calendar Server の起動**

1. `cal_svr_base/SUNWics5/cal/sbin` に移動します。

例：

```
cd /opt/SUNWics5/cal/sbin
```

2. Calendar Server を起動します。

```
./start-cal
```

3. 次のプロセスがプロセスリストに表示されます。

```
enpd  
csnotifyd  
csadmind  
cshttpd
```

▶ Calendar Server のグラフィカルインタフェースへのアクセス

Calendar Server で指定している LDAP ディレクトリにすでにデータがプロビジョニングされている場合は、Calendar Server にログインできます。ブラウザに次の形式で指定して、Calendar Server にアクセスします。

```
http://hostname.domain[:port]
```

例：

```
http://mycomputer.example.com
```

初めてログインする場合は、Calendar Server によってデフォルトのカレンダーが作成されます。Calendar Server にログインすることにより、インストールが成功したことを確認できます。

▶ Calendar Server の停止

1. `cal_svr_base/SUNWics5/cal/sbin` に移動します。

例：

```
cd /opt/SUNWics5/cal/sbin
```

2. Calendar Server を停止します。

```
./stop-cal
```

Directory Server の起動と停止

Directory Server には依存関係がありません。Directory Server がクラスタの一部である場合は、論理ホストのアクティブノードで作業していることを確認してください。

▶ Directory Server の起動

1. `ds_svr_base/slaped-instance-name` に移動します (`instance-name` は通常はマシン名)。

例：

```
cd /var/opt/mps/serverroot/slaped-host1
```

2. Directory Server を起動します。

```
./start-slaped
```

3. Directory Server が稼働していることを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep slaped
root 1297 1 0 Jul 01 ? 2:27 ./ns-slaped -D
/var/opt/mps/serverroot/slaped-host1 -i /var/opt/mps/serverroot/slaped-host1
```

▶ Directory Server の停止

1. `ds_svr_base/slapd-instance-name` に移動します。
例：
`cd /var/opt/mps/serverroot/slapd-host1`
2. Directory Server を停止します。
`./stop-slapd`
3. Directory Server が稼動していないことを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep slapd
```

Directory Proxy Server の起動と停止

サーバーが 1024 未満のポートで動作している場合は、`root` としてログインします。そうでない場合は、`root` またはサーバーのユーザーアカウントでログインします (デフォルトでは、Directory Proxy Server が `root` によって実行されている場合、そのユーザーが `nobody` に変更される)。

▶ Directory Proxy Server の起動

1. `dps_svr_base/dps-hostID` に移動します。
例：
`cd /var/opt/mps/serverroot/dps-host1`
2. Directory Proxy Server プロセスを開始します。
`./start-dps`
3. Directory Proxy Server が稼動していることを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep dps  
root 13769      1  0   Oct 24 ?           29:40 ./ldapfwd -t  
/var/opt/mps/serverroot/dps-or03/etc/tailor.txt
```

▶ Directory Proxy Server の停止

1. `ds_svr_base/dps-hostID` に移動します。
例：
`cd /var/opt/mps/serverroot/dps-host1`

2. Directory Proxy Server プロセスを停止します。
`./stop-dps`
3. Directory Proxy Server が稼動していないことを確認します。

```
# ps -ef | grep SUNWdps
```

Identity Server の起動と停止

Identity Server を確認するには、Web コンテナ上の Identity Server の特定の配備設定にアクセスします。

- Application Server
- Web Server
- BEA WebLogic (Portal Server がインストールされている場合だけのオプション)
- IBM WebSphere (Portal Server がインストールされている場合だけのオプション)

Identity Server は Directory Server および Web コンテナに依存しています。

ここでは、次の手順について説明します。

- [Identity Server の起動](#)
- [Application Server 上の Identity Server と Portal Server の確認](#)
- [Web Server 上の Identity Server と Portal Server の確認](#)
- [BEA WebLogic 上の Identity Server と Portal Server の確認](#)
- [IBM WebSphere 上の Identity Server と Portal Server の確認](#)
- [Identity Server の停止](#)

► Identity Server の起動

1. `is_svr_base/SUNWam/bin` ディレクトリに移動します。
例：
`cd /opt/SUNWam/bin`
2. Identity Server プロセスを開始します。
`./amserver start`

注 Identity Server を Application Server 上でホストする場合は、Application Server のインスタンスを個別に起動します。

3. Identity Server プロセスが稼動していることを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep SUNWam
root[sh]@icebox25# ps -ef | grep SUNWam
  root 13893      1  0   Oct 24 ?          0:00 /opt/SUNWam/share/bin/amsecuridd
-c 58943
  root 13894      1  0   Oct 24 ?          0:00 /opt/SUNWam/share/bin/amunixd -c
58946
```

► **Application Server 上の Identity Server と Portal Server の確認**

1. 次の URL を指定して、デフォルトページにアクセスします。

`http://appserver-host:port/amconsole`

Identity Server のログインページが表示されます。

2. ログインします。

Identity Server にログインすると、Application Server 上で Identity Server の配備に成功したことを確認できます。

3. 新しいブラウザに次の URL を指定してサンプルデスクトップを表示します。

`http://server:port/portal`

サンプルデスクトップを表示すると、Application Server への Portal Server の配備に成功したことを確認できます。

► **Web Server 上の Identity Server と Portal Server の確認**

1. 次の URL を指定して、デフォルトページにアクセスします。

`http://webserver-host:port/amconsole`

Identity Server のログインページが表示されます。

2. ログインします。

Identity Server にログインすると、Web Server への Identity Server の配備に成功したことを確認できます。

3. 新しいブラウザに次の URL を指定してサンプルデスクトップを表示します。

`http://server:port/portal`

サンプルデスクトップを表示すると、Web Server への Portal Server の配備に成功したことを確認できます。

▶ BEA WebLogic 上の Identity Server と Portal Server の確認

1. 次の URL を指定して、デフォルトページにアクセスします。

```
http://beaweblogic-host:port/amconsole
```

Identity Server のログインページが表示されます。

2. ログインします。

Identity Server にログインすると、BEA WebLogic への Identity Server の配備に成功したことを確認できます。

3. 新しいブラウザに次の URL を指定してサンプルデスクトップを表示します。

```
http://server:port/portal
```

サンプルデスクトップが表示されると、BEA WebLogic への Portal Server の配備に成功したことを確認できます。

▶ IBM WebSphere 上の Identity Server と Portal Server の確認

1. 次の URL を指定して、デフォルトページにアクセスします。

```
http://ibmwebsphere-host:port/amconsole
```

Identity Server のログインページが表示されます。

2. ログインします。

Identity Server にログインすると、IBM WebSphere への Identity Server の配備に成功したことを確認できます。

3. 新しいブラウザに次の URL を指定してサンプルデスクトップを表示します。

```
http://ibmwebsphere-host:port/amconsole
```

サンプルデスクトップを表示すると、IBM WebSphere への Portal Server の配備に成功したことを確認できます。

▶ Identity Server の停止

1. `is_svr_base/bin` に移動します。

例:

```
cd /etc/init.d
```

2. Identity Server プロセスを停止します。

```
./amserver stop
```

3. Identity Server プロセスが稼動していないことを確認します。

```
# ps -ef | grep SUNWam
```

Instant Messaging の起動と停止

Instance Messaging は Directory Server および Identity Server SDK に依存しています。

▶ Instant Messaging の起動

1. リポート時の自動起動を選択しているかどうかを確認します。
 - 選択していない場合は、[手順 2](#)に進みます。
 - 選択している場合は、次の手順に進みます。
 - a. `/etc/init.d`に移動します。
 - b. Instant Messaging プロセスを開始します。

```
./sunwiim start
```
2. リポート時に自動的に起動されない場合は、次の手順を実行します。
 - a. `ims_svr_base/sbin`に移動します。
例：

```
cd /opt/SUNWiim/html/sbin
```
 - b. Instant Messaging を起動します。

```
./imadmin start
```
3. プロセスリストに次のプロセスが表示されます。

```
../../lib/multiplexor -c ../../config/iim.conf  
...  
/usr/j2se/bin/java -server -Xmx256m -cp ../../classes/im
```

▶ Instant Messaging の停止

1. `ims_svr_base/sbin`に移動します。
例：

```
cd /opt/SUNWiim/sbin
```
2. Instant Messaging を停止します。

```
./imadmin stop
```
3. 上記プロセスがプロセスリストに表示されなくなります。

Message Queue の起動

▶ Message Queue の起動

1. `mq_svr_base/bin` ディレクトリに移動します。
例：

```
cd /usr/bin
```

2. Message Queue ブローカを起動します。

```
./imqbrokerd
```

3. Message Queue プロセスが稼働していることを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep imqbrokerd
root 4833      4830  0 10:43:13 ?           0:00 /bin/sh /usr/bin/imqbrokerd
-javahome /usr/j2se -name domain1_server1 -port 328
```

Messaging Server の起動と停止

Messaging Server は Directory Server に依存しています。

▶ Messaging Server の起動

1. Sendmail プログラムを無効にします。

```
/etc/init.d/sendmail stop
```

2. Sendmail 起動スクリプト、`/etc/rc2.d/S88sendmail` をアーカイブディレクトリに移動します。

3. `ms_svr_base/sbin` に移動します。

例：

```
cd /opt/SUNWmsgsr/sbin
```

4. Messaging Server プロセスを開始します。

```
./start-msg
```

5. Messaging Server プロセスが実行中であることを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep SUNWmsgsr
/opt/SUNWmsgsr/lib/enpd
/opt/SUNWmsgsr/lib/stored -d
/opt/SUNWmsgsr/lib/popd -d 5
/opt/SUNWmsgsr/lib/imapd -d 5 -D 6
/opt/SUNWmsgsr/lib/mshttpd -d 5 -D 6
/opt/SUNWmsgsr/lib/dispatcher
/opt/SUNWmsgsr/lib/job_controller
/opt/SUNWmsgsr/lib/tcp_lmtp_server
/opt/SUNWmsgsr/lib/tcp_smtp_server
/opt/SUNWmsgsr/lib/tcp_smtp_server
```

► Messaging Server の停止

1. `ms_svr_base/sbin` に移動します。
例：
`cd /opt/SUNWmsgsr/sbin`
2. Messaging Server プロセスを停止します。
`./stop-msg`
3. Messaging Server プロセスが稼動していないことを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep SUNWmsgsr
```

Portal Server の起動と停止

Portal Server の起動とシャットダウンのメカニズムは、Web コンテナ (Web Server または Application Server のいずれか) の起動とシャットダウンのメカニズムの一部です。Portal Server は Directory Server、Identity Server、および Web コンテナに依存しています。

Portal Server を確認するには、次の情報を参照してください。

- [238 ページの「Application Server 上の Identity Server と Portal Server の確認」](#)
- [238 ページの「Web Server 上の Identity Server と Portal Server の確認」](#)
- [239 ページの「BEA WebLogic 上の Identity Server と Portal Server の確認」](#)
- [239 ページの「IBM WebSphere 上の Identity Server と Portal Server の確認」](#)

Portal Server, Secure Remote Access の起動と停止

▶ Portal Server, Secure Remote Access の起動

1. /etc/init.d に移動します。
2. Portal Server ゲートウェイを起動します。
`./gateway start`
3. Portal Server, Secure Remote Access プロセスが稼働していることを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep entsys  
/usr/jdk/entsys-j2se/bin/java -ms64m -mx128m -classpath  
/opt/SUNWam/lib:/opt
```

▶ Portal Server, Secure Remote Access の停止

1. /etc/init.d に移動します。
2. Portal Server ゲートウェイを停止します。
`./gateway stop`
3. Portal Server, Secure Remote Access プロセスが稼働していないことを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep <tbd>
```

Web Server の起動と停止

Web Server には依存関係がありません。

▶ Web Server の起動

1. `ws_svr_base/https-instance-name` に移動します。
例：
`cd /opt/SUNWwbsvr/https-admserv`
2. Web Server の管理プロセスを開始します。

```
./start
```

3. `ws_svr_base/https-hostname.domain` に移動します。
例:

```
cd /opt/SUNWwbsvr/https-host1.example.com
```

4. Web Server インスタンスを起動します。

```
./start
```

5. Web Server プロセスが稼動していることを確認します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep SUNWwbsvr
root  334      1  0   Jul 01 ?           0:00 ./webservd-wdog -r /opt/SUNWwbsvr -d
/opt/SUNWwbsvr/https-admserv/config -n http
root  352      1  0   Jul 01 ?           0:00 ./webservd-wdog -r /opt/SUNWwbsvr -d
/opt/SUNWwbsvr/https-host1.example.com
root  335     334  0   Jul 01 ?           0:01 webservd -r /opt/SUNWwbsvr -d
/opt/SUNWwbsvr/https-admserv/config -n https-admserv
root  336     335  0   Jul 01 ?           0:14 webservd -r /opt/SUNWwbsvr -d
/opt/SUNWwbsvr/https-admserv/config -n https-admserv
root  689     352  0   Jul 01 ?           0:00 webservd -r /opt/SUNWwbsvr -d
/opt/SUNWwbsvr/https-host1.example.com/config
root  690     689  0   Jul 01 ?          64:34 webservd -r /opt/SUNWwbsvr -d
/opt/SUNWwbsvr/https-host1.example.com/config
```

➤ Web Server のグラフィカルインタフェースへのアクセス

1. ブラウザで、`http://hostname.domain:port` という形式で Web Server の管理インタフェースにアクセスします。

例:

```
http://host1.example.com:80
```

2. ブラウザで、`http://hostname.domain:adminport` という形式で管理サーバーにアクセスします。

例:

```
http://host1.example.com:8888
```

Web Server にログインすることにより、インストールが成功したことを確認できます。

➤ Web Server の停止

1. `ws_svr_base/https-instance-name` に移動します。

例:

- ```
cd /opt/SUNWwbsvr/https-admserv
```
2. Web Server の管理プロセスを停止します。  
`./stop`
  3. `ws_svr_base/https-hostname.domain` に移動します。  
例：  
`cd /opt/SUNWwbsvr/https-host1.example.com`
  4. Web Server インスタンスを停止します。  
`./stop`
  5. Web Server が稼動していないことを確認します。

```
ps -ef | grep SUNWwbsvr
```

## 次の手順

この章を終えると、コンポーネント製品の設定と、それが正常に機能することの確認が完了します。これで Java Enterprise System のインストールが完了しました。

ここからは、次のいずれかのトピックに進むことができます。

- プロビジョニングの手順：第 11 章「組織とユーザーのプロビジョニング」
- シングルサインオンの手順：第 13 章「シングルサインオン (SSO) の設定」
- Sun Cluster ソフトウェアの管理：『Sun Cluster 3.1 System Administration Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-3384>)

コンポーネント製品のすべてのマニュアルについては、『Java Enterprise System Roadmap』(<http://docs.sun.com/doc/817-4715>) の表 2 を参照してください。

次の手順

# インストールに関する問題のトラブルシューティング

この章では、インストールの問題を解決する方法について説明します。この章で説明する内容は、次のとおりです。

- [トラブルシューティングチェックリスト](#)
- [部分的なインストールのクリーンアップ](#)
- [問題と解決策の例](#)
- [トラブルシューティングのためのコンポーネント製品の情報](#)

## トラブルシューティングチェックリスト

ここでは、問題の原因を追跡する方法について説明します。次のトピックが含まれます。

- [「インストールログファイルの検証」](#)
- [「コンポーネント製品のログファイルの検証」](#)
- [「製品の依存関係の検証」](#)
- [「リソースと設定のチェック」](#)
- [「確認手続きの実行」](#)
- [「配布メディアのチェック」](#)
- [「Directory Server の接続性チェック」](#)
- [「パスワードの確認」](#)
- [「prodreg ツールの使用によるコンポーネントの検証とアンインストール」](#)

## インストールログファイルの検証

インストール時またはアンインストール時に問題が発生した場合は、適切なログファイルをチェックします。

インストーラのログファイルは `/var/sadm/install/logs` ディレクトリに格納されています。次の表は、ログファイルとその名前を示しています。ほとんどのログには2つのバージョンがあります。

- ログファイルの A バージョンには完了が記録されます。
- ログファイルの B バージョンには、詳細なログメッセージが保存されます。

表 9-1 Java Enterprise System ログファイル名の形式

| ログに記録される内容        | ログファイル名の形式                                                             |
|-------------------|------------------------------------------------------------------------|
| インストーラ: コンポーネント製品 | <code>Java_Enterprise_System_install.Atimestamp</code>                 |
|                   | <code>Java_Enterprise_System_install.Btimestamp</code>                 |
|                   | <code>Java_Enterprise_System_Config_Log.id</code>                      |
| インストーラ: 共有コンポーネント | <code>Java_Shared_Component_Install.timestamp</code>                   |
| アンインストーラ          | <code>Java_Enterprise_System_uninstall.Atimestamp</code>               |
|                   | <code>Java_Enterprise_System_uninstall.Btimestamp</code>               |
|                   | <code>Java_Enterprise_System_Config_Log.id</code>                      |
| インストールサマリ         | <code>Java_Enterprise_System_Summary_Report_install.timestamp</code>   |
|                   | <code>Java_Enterprise_System_Summary_Report_uninstall.timestamp</code> |

管理サーバー、Application Server、Directory Server、Portal Server、Identity Server など、いくつかのコンポーネント製品のログファイルが同じディレクトリに書き込まれます。コンポーネント製品のログファイルの詳細については、[255 ページの「トラブルシューティングのためのコンポーネント製品の情報」](#)を参照してください。

ログファイルをトラブルシューティングに使用するには、最初に発生した問題を特定します。最初の問題が後続の問題を引き起こしていることがよくあるためです。次の手順を実行します。

1. インストールのサマリファイルを参照します。このファイルには、何がインストールされ、設定されているかについての高レベルの説明が記載されています。問題が発生した場合は、どのコンポーネントが問題の原因であるかを確認します。複数の問題が発生している場合は、最初の問題を特定します。



2. 詳細なログファイルを参照します。

- a. 最初に発生したエラーまたは警告を探し、解決を試みます。1つのエラーを解決すると、関連性がないように見える後続の多数のエラーも解決することがよくあります。
- b. 問題の原因となっているコンポーネントまたはパッケージの名前を探します。

ログファイルによって、次に示すような、次の手順を見極めるためのヒントが与えられることがあります。

- 設定に問題がある場合は、設定のサマ리를参照して使用している設定を調べます。
- ディレクトリが競合している場合は、コンポーネント製品によって予約されているディレクトリを指定していないかどうかチェックします。

## コンポーネント製品のログファイルの検証

コンポーネント製品の起動時に問題が発生する場合は、ログファイルを調べます。255 ページの「[トラブルシューティングのためのコンポーネント製品の情報](#)」のリストに、多数のコンポーネント製品のログファイルが示されています。

## 製品の依存関係の検証

多数のコンポーネントに、インストール時の依存関係があります。1つのコンポーネントに影響を与える問題は、別のコンポーネントにも影響を与える可能性があります。満たされていない相互依存をチェックするには、68 ページの「[コンポーネント製品の依存性](#)」を参照してください。次に、次の項目をチェックします。

- サマリファイルおよびログファイルを参照し、関連付けられている製品に問題が発生していないかどうか確認します。これにより、最初に解決すべきことの手がかりが得られる可能性があります。
- 正しい接続情報を指定しているかどうかチェックします。  
例：
  - Directory Server の設定時に指定した情報は、Directory Server を使用するコンポーネントに指定したディレクトリ情報と一致するか
  - Portal Server または Portal Server SRA に指定した Identity Server の情報は、Identity Server に指定した情報と一致するか

特定のコンポーネント製品の依存関係の簡単な確認方法については、255 ページの「[トラブルシューティングのためのコンポーネント製品の情報](#)」を参照してください。

コンポーネントの相互依存関係のほかに、一部のコンポーネントは Solaris パッケージの存在に依存しています。このようなパッケージがマシンにインストールされていない場合、その不在がインストール失敗の原因となることがあります。詳細については、リリースノート「ソフトウェア要件」の節を参照してください。

## リソースと設定のチェック

次のホストレベルの問題は、インストール時に問題を引き起こす可能性があります。

- **アップデート** : 推奨アップデート (パッチ) は適用されていますか。
- **ディスク容量** : ディスクパーティションをどのように設定し、どのパーティションにインストールディレクトリを作成しますか。インストールディレクトリ /var/sadm および /etc/opt、または独自に指定したデフォルト以外のディレクトリに、十分なディスクの空き容量が必要です。
- **ネットワークポート** : 設定中に、Java Enterprise System コンポーネント製品のポート番号を指定します。次の項目をチェックします。
  - /etc/services ファイルで標準ポート番号を調べる
  - サマリログファイルを参照し、標準の設定と比較する。ポート番号を入力ミスしていないか、あるサーバーに対して、通常は別のサーバーで使用するポートを設定していないか
  - netstat -a コマンドを使用して、現在、システムで使用しているポートを調べる。すでに他で使用中のポート番号を割り当てていないか
- **IP アドレス** : インストール時に、IP アドレスを指定します。正しい IP アドレスを入力したかどうかチェックします。確認する必要があることがいくつかあります。
  - このシステムに複数のネットワークインタフェースがある場合、それぞれに独自の IP アドレスが指定されているか
  - 高可用性設定において、論理ホストの IP アドレス、またはクラスタノードの IP アドレスを指定したか

## 確認手続きの実行

コンポーネントの起動に関する問題のトラブルシューティングを行う場合は、[第 8 章「インストール後の設定と起動」](#)に記載されている確認手順を実行し、そのコンポーネントのプロセスが稼働していることを確認します。

## 配布メディアのチェック

DVD または CD からインストールする場合、メディアに汚れはありませんか。ディスクに汚れがあると、インストール時に問題が発生する可能性があります。

## Directory Server の接続性チェック

Directory Server に依存するコンポーネントをインストールする場合、次のいずれかの問題によって問題が発生する可能性があります。

- Directory Server に対して不正なユーザー ID およびパスワードを指定した
- 不正な LDAP ポートを指定した
- Directory Server に接続できない

対話形式のインストーラによるインストール時には Directory Server の接続性がチェックされますが、サイレントモードではチェックされません。Directory Server を使用できないときにサイレントインストールを実行する場合は、次の問題が発生する可能性があります。

- インストール時に Identity Server または Portal Server で問題が発生する
- 設定時に Calendar Server、Instant Messaging、Messaging Server、および Sun Cluster ソフトウェアで問題が発生する

## Web Server のファイルおよびディレクトリの削除

編集済みの設定ファイルなど、カスタマイズされたファイルの上書きを防ぐために、そのファイルが格納されるディレクトリには Web Server をインストールできません。

Web Server を再インストールする場合、インストールディレクトリをチェックして、それが空であることを確認します。空ではない場合は、どこか別の場所にファイルをアーカイブしてからインストールを再実行します。

## パスワードの確認

インストーラは、コンポーネント製品ごとにパスワードの入力を求めます。複数のマシンに複数のコンポーネントをインストールする場合、各マシンで正しいパスワードを入力することが重要です。

パスワードの問題を解決するには、いったんアンインストールしてから再インストールすることが必要となる場合があります。アンインストールに失敗した場合は、[252 ページの「部分的なインストールのクリーンアップ」](#)を参照してください。

## prodreg ツールの使用によるコンポーネントの検証とアンインストール

コンポーネントをインストールしたものの、問題があり、再インストールまたはアンインストールを実行できない場合、prodreg ツールが役立ちます。このツールは、Solaris 製品のレジストリへのグラフィカルインタフェースを提供し、pkg ユーティリティの代わりに、各コンポーネントおよびそのパッケージの両者への、簡単なインタフェースを提供します。

prodreg を起動するには、コマンド行でコマンド名を入力します。詳細については、prodreg(1) マニュアルページを参照してください。

## 部分的なインストールのクリーンアップ

アンインストーラが正常に実行できなかった場合、コンポーネントまたはパッケージが削除されずに残ってしまう可能性があります。このような場合、再インストールするために、コンポーネントまたはパッケージを手動で削除する必要があります。この問題には、次のものが該当します。

- アンインストーラで問題が発生し、アンインストールに失敗したパッケージの名前が表示される
- コンポーネントをインストールしようとしたが、インストーラによってそのコンポーネントがすでにインストールされていることがレポートされた

### ▶ 部分的なインストールをクリーンアップするには:

1. 次のコマンドを使用して、一部だけがインストールされたパッケージがないかどうか調べます。

```
pkginfo -p
```

コマンドの出力で、一部だけがインストールされたパッケージのリストが表示されます。返されたパッケージ名を使用して、付録 D 「インストール可能なパッケージの一覧」を参照し、パッケージが属しているコンポーネントを調べます。

2. コンポーネントまたはパッケージを削除します。
  - Solaris 9 では、prodreg というツールを使用します。

prodreg ツールを使用すると、マシン上のパッケージベースのコンポーネントを管理できます。コンポーネントおよびそのパッケージについて、相互依存を含む完全な情報を参照できます。prodreg ツールを使用して、安全にコンポーネントをアンインストールし、パッケージを削除することができます。prodreg ツールでコンポーネントを削除すると、再インストールできるようになります。

- Solaris 8 では、`pkgrm` コマンドを使用します。

`pkgrm` コマンドを使用する場合、コンポーネントとパッケージを個別に削除する必要があります。このコマンドによって、製品のレジストリが更新されることはありません。どのようなことが発生したかによって、アーカイブされた製品のレジストリファイルのリストアを行うことも、削除されたコンポーネントを参照しないように、手動で製品のレジストリファイルを編集することもできます。

製品のレジストリファイルを編集するには、`/var/sadm/install/productregistry` ファイルを開きます。この XML ファイルは、各コンポーネントについて説明しています。各コンポーネントの説明は、`<compid>` タグで始まり、`</compid>` タグで終わります。コンポーネントのエントリ全体を削除します。

3. Web Server のインストールディレクトリが存在する場合は、それを削除します。
4. インストーラをもう一度実行します。

次の表は、削除が必要なコンポーネント製品のファイルとディレクトリを示しています。

## 問題と解決策の例

ここでは、問題のサンプルを取り上げ、それらを解決するための説明とアプローチを提供します。

### IBM WebSphere を Identity Server の Web コンテナとして設定する際の問題

**原因：** WebSphere を実行していない、または WebSphere のネイティブ設定と一致していない WebSphere 値を指定した。

**解決方法：** まず、WebSphere を実行しているかどうか確認します。

次に、次の 2 つのフィールドの値を調べます。

- WebSphere 仮想ホスト (状態ファイル内の `PS_IBM_VIRTUAL_HOST`)
- Application Server 名 (状態ファイル内の `PS_IBM_APPSERV_NAME`)

WebSphere ツールを使用して設定をチェックし、入力する値と一致しているかどうかを確認して、再試行します。

もう 1 つの方法は、次に示すように、WebSphere エンティティの新しいインスタンスを作成して再試行することです。

1. `adminclient.sh` を使用して、WebSphere コンソールを起動します。

2. 新しい仮想ホストのインスタンスおよび新しいアプリケーションサーバーのインスタンス名を作成します。
3. ノード (通常はホスト名) の下のエントリをクリックし、Regen WebServer Plugin を選択します。

このプロセスにより、plugin 設定ファイルに新しいエントリが保存されます。インストーラによって、その正式名称がチェックされます。

4. インストーラに戻り、作成した値を入力します。

#### 予期しない外部エラーが発生した

**原因：**電源障害またはシステム障害が発生した可能性があります。または CTRL/C を入力して、インストーラのプロセスを停止した可能性もあります。

**解決方法：**インストール中または設定プロセスで障害が発生した場合は、おそらくインストールの一部だけが残ります。インストーラを実行します。アンインストールに失敗した場合は、[252 ページの「部分的なインストールのクリーンアップ」](#)の手順を実行します。

#### グラフィカル インストーラが応答しない

**原因：**イメージが入力を受け付けるようになる前に、インストーラによって画面上にイメージが作成されることがあります。待ちきれずにインストールウィザードで何度も「次へ」をクリックすることは避けてください。

**解決方法：**デフォルトの選択肢を表すボタンには、青い四角形が表示されます。この四角形は、ボタンが表示された後に表示されることがあります。ボタンをクリックするときは、青い四角形が表示されるまで待ってください。

#### 「State File is Incompatible or Corrupted」というエラーメッセージが表示され、サイレントインストールに失敗する

**原因：**使用しているプラットフォームで作成された状態ファイルを使用している場合、ファイルが壊れ、原因不明であるというエラーが発生する可能性があります。

別のプラットフォームまたは別のバージョンで作成した状態ファイルを使用している場合、問題は、その状態ファイルが、作成したときと同じタイプのプラットフォームだけで実行できることです。状態ファイルを Solaris 9 で作成した場合、そのファイルは Solaris 8 では使用できません。また、x86 プラットフォームで作成したファイルは、Sparc プラットフォームでは使用できません。

**解決方法：**使用しているのと同じプラットフォームで状態ファイルを作成した場合は、新しい状態ファイルを生成して再インストールします。

状態ファイルを作成したプラットフォームが、そのファイルを使用しているプラットフォームと異なる場合、新たに、プラットフォームに適した ID をファイルに対して作成することによって問題を解決します。この方法については、[206 ページの「プラットフォームに適した ID の作成」](#)を参照してください。

### サイレントインストールに失敗した

**原因：** 状態ファイルを編集した場合、それによってエラーが発生した可能性があります。たとえば、次の項目をチェックします。

- すべてのローカルホストパラメータが設定され、矛盾のない値が設定されているか
- パラメータ値の大文字、小文字の区別は適切か
- 目的のパラメータを入力せずに、必須のパラメータを削除してしまっていないか
- 使用するすべてのポート番号は有効であり、かつ割り当て済みではないか

**解決方法：** [203 ページの「状態ファイルの生成」](#) で説明しているように、グラフィカルインストーラを使用して、状態ファイルを再生成し、その値を保存します。

## トラブルシューティングのためのコンポーネント製品の情報

ここでは、コンポーネント製品についてのさまざまなヒントを提供し、役立つマニュアルを紹介します。

このマニュアルに記載されている次の追加情報は、トラブルシューティングに役立ちます。

- 第2章「インストールの準備」には、コンポーネントの相互依存性に関する情報が記載されています。詳細については、[68 ページの表 2-4](#) を参照してください。
- 第8章「インストール後の設定と起動」の [229 ページの「コンポーネント製品の起動と停止」](#) を参照してください。ここには、コンポーネントプロセスの起動、停止、確認について、コンポーネントごとの実行方法が記載されています。

## 管理サーバー

### ログファイル

インストールログのディレクトリ：

```
/var/sadm/install/logs
```

設定ログファイル：

```
Administration_Server_install.Atimestamp
```

```
Administration_Server_install.Btimestamp
```

ログオプションの詳細については、『Sun ONE Server Console 5.2 Server Management Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6704-10>)の第6章「Administration Server Basics」を参照してください。

#### トラブルシューティング情報

『Sun ONE Server Console 5.2 Server Management Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6704-10>)の第1章「Installing Sun ONE Directory Server」を参照してください。

## Application Server

### ログファイル

ログファイルのディレクトリ:

- `/var/sadm/install/logs/`

ログファイル名:

- `Sun_ONE_Application_Server_install.log`
- `Sun_ONE_Application_Server_uninstall.log`

Application Server インスタンスのログディレクトリ (最初に作成するインスタンスのデフォルトの場所):

- `/var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1/server1/logs`

メッセージログのファイル名:

- `server.log` (サーバーインスタンスごとに存在する)

管理サーバーのログディレクトリ (最初に作成する管理ドメインのデフォルトの場所):

- `/var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1/admin-server/logs`

管理サーバーのログファイル:

- `server.log`

### 設定ファイル

設定ファイルのディレクトリ: `/var`



# Calendar Server

## ログファイル

管理サービス (csadmin): admin.log  
分散データベースサービス (csdwpd): dwp.log  
HTTP サービス (cshttpd): http.log  
イベント通知サービス (csnotifyd): notify.log

デフォルトのログディレクトリ: /var/opt/SUNWics5/logs

詳細については、『Sun ONE Calendar Server Administrator's Guide』  
(<http://docs.sun.com/doc/816-6708-10>) の第 3 章「Managing Calendar Server」を参照してください。

## 設定ファイル

/opt/SUNWics5/cal/config/ics.conf

## デバッグモード

デバッグモードを使用するには、Calendar Server の管理者が ics.conf ファイルで logfile.loglevel 設定パラメータを設定します。

例:

```
logfile.loglevel = "debug"
```

詳細については、『Sun ONE Calendar Server Administrator's Guide』  
(<http://docs.sun.com/doc/816-6708-10>) を参照してください。次の章に関連情報が記載されています。

- 第 3 章「Managing Calendar Server」
- 第 12 章「Calendar Server Configuration Parameters」

## トラブルシューティング情報

詳細については、『Sun ONE Calendar Server Administrator's Guide』  
(<http://docs.sun.com/doc/816-6708-10>) を参照してください。次の章に関連情報が記載されています。

- start-cal ユーティリティおよび stop-cal ユーティリティのトラブルシューティングについては、第 3 章「Managing Calendar Server」
- 高可用性設定のトラブルシューティングについては、第 10 章「Setting Up a High Availability (HA) Configuration」

## Directory Proxy Server

### ログ

デフォルトのログファイル: `dps_svr_base/dps-hostname/logs/fwd.log`

詳細については、『Directory Proxy Server Administration Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6391-10>) の第 10 章「Configuring and Monitoring Logs」を参照してください。

### トラブルシューティング

『Directory Proxy Server Administration Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6391-10>) の付録 B「Directory Proxy Server FAQ, Features, and Troubleshooting」を参照してください。

## Directory Server

### ログファイル

インストールログファイル:

`/var/sadm/install/log`

設定ログファイル:

`Directory_Server_install.Atimestamp`

`Directory_Server_install.Btimestamp`

ログファイルの管理については、『Sun ONE Directory Server 管理者ガイド』(<http://docs.sun.com/source/816-6851-10/logs.html>) の第 12 章「ログファイルの管理」を参照してください。

アクセスログの分析に役立つ `logconv.ps` ツールについては、『Sun ONE Directory Server Resource Kit Tools Reference』(<http://docs.sun.com/doc/816-6400-10/logconv.html>) の第 24 章「logconv.pl」を参照してください。

### トラブルシューティング

『Sun ONE Directory Server インストールおよびチューニングガイド』(<http://docs.sun.com/db/doc/816-6847-10?l=ja>) の第 1 章「Sun ONE Directory Server のインストール」を参照してください。

## Identity Server

### 設定ファイル

/opt/SUNWam/lib/AMConfig.properties

### デバッグモード

詳細については、『Sun ONE Identity Server 6.1 Customization and API Guide』

(<http://docs.sun.com/doc/816-6774-10>) を参照してください。次の章に関連情報が記載されています。

- ログへの記録を有効にする方法については、付録 A 「AMConfig.properties File」
- デバッグファイルについては、第 10 章「Auditing Features」

## Instant Messaging

### 有用なマニュアル

『Instant Messaging Administrator's Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-4113-10>) を参照してください。

## Message Queue

### ログファイル

詳細については、『Sun ONE Message Queue Administrator's Guide』

(<http://docs.sun.com/doc/817-0354-10>) を参照してください。次の章に関連情報が記載されています。

- ログ記録の概要については、第 2 章「The MQ Messaging System」
- ログ記録を設定する方法については、第 5 章「Starting and Configuring a Broker」

Sun ONE Message Queue のトラブルシューティングについては、次の場所からアクセスできる MQ Forum で説明されています。

<http://swforum.sun.com/jive/forum.jspa?forumID=24>

また、<http://developers.sun.com/prodtech/msgqueue/reference/techart/index.html> からアクセスできる知識データベースにも関連記事が掲載されています。

## Messaging Server

トラブルシューティングについてのマニュアル  
詳細については、『Sun ONE Messaging Server Administrator's Guide』  
(<http://docs.sun.com/doc/816-6738-10>) を参照してください。

実行ファイルの場所  
/opt/SUNWmsgsr/lib/

## Portal Server

### ログファイルとデバッグファイル

Portal Server では、Identity Server と同じログファイルおよびデバッグファイルを使用します。これらのディレクトリは、次のとおりです。

ログファイル: /var/opt/SUNWam/logs  
デバッグファイル: /var/opt/SUNWam/debug

Portal Server のログファイルおよびデバッグファイルの管理の詳細については、『Portal Server Administrator's Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6748-10>) を参照してください。

Portal Server Desktop の場合、デバッグファイルは次の場所にあります。

/var/opt/SUNWam/debug/desktop.debug  
/var/opt/SUNWam/debug/desktop.dpadmin.debug

これらのファイルの管理の詳細については、『Portal Server Administration Guide』の「Administering the Desktop Service」を参照してください。

dpadmin、par、rdmgr、および sendrdm という Portal Server コマンド行ユーティリティには、デバッグメッセージを生成するためのオプションがあります。オプションについては、『Portal Server Administrator's Guide』を参照してください。

## Portal Server, Secure Remote Access

### デバッグログ

Portal Server のデバッグログは次のディレクトリに格納されます。

```
/var/opt/SUNWam/debug
/var/opt/SUNWps/debug
```

Portal Gateway のデバッグログは次のディレクトリに格納されます。

```
/var/opt/SUNWps/debug
```

## Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster エージェント

Sun Cluster ソフトウェア、Sun Cluster 用のエージェントの詳細については、『Sun Cluster 3.1 ソフトウェアのインストール』(<http://docs.sun.com/doc/817-1020-10?l=ja>) を参照してください。

## Web Server

### ログファイル

Web Server のログファイルには、errors ログファイルと access ログファイルの 2 種類があり、どちらも /opt/SUNWwbsvr/server\_root/https-server\_name/logs ディレクトリに格納されます。

errors ログファイルには、サーバーで発生したすべてのエラーがリストされます。access ログファイルには、サーバーに対する要求と、サーバーからの応答に関する情報が記録されます。詳細については、『Sun ONE Web Server 6.1 Administrator's Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-1831-10>) の第 10 章「Using Log Files」を参照してください。

### トラブルシューティング情報

詳細については、『Sun ONE Web Server 6.1 Installation and Migration Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-1830-10>) を参照してください。

### 設定ファイルのディレクトリ：

```
/opt/SUNWwbsvr/http-instance-name/config
```

### デバッグモード

次のオプションを使用できます。

- ログ出力は、診断とデバッグに利用できる可能性があります。  
`/server_root/https-server_name/config/server.xml` ファイルの LOG 要素にある `loglevel` の値を `fine`、`finer`、または `finest` に設定できます。これらの値は、デバッグメッセージの詳細度を示し、`finest` で詳細度が最大になります。LOG 要素の詳細については、『Sun ONE Web Server 6.1 Administrator's Configuration File Reference』(<http://docs.sun.com/doc/817-1834-10>) を参照してください。
- デバッグフラグを有効化してサーバーの Web コンテナをデバッグモードで起動し、JPDA (Java Platform Debugger Architecture) デバッガとの連携準備を整えることができます。これを行うには、  
`/server_root/https-server_name/config/server.xml` ファイルの JAVA 要素にある `jvm.debug` フラグを `true` に設定します。詳細については、『Sun ONE Web Server 6.1 Administrator's Configuration File Reference』(<http://docs.sun.com/doc/817-1834-10>) を参照してください。
- Sun™ ONE Studio 5, Standard Edition のプラグインは、Web アプリケーションのデバッグに利用できます。詳細については、『Sun ONE Web Server 6.1 Programmer's Guide to Web Applications』(<http://docs.sun.com/doc/817-1833-10>) の第 7 章「Debugging Web Applications」を参照してください。

# ソフトウェアのアンインストール

この章では、Java Enterprise System アンインストーラを使用して Java Enterprise System コンポーネント製品をシステムから削除する方法について説明します。Java Enterprise System ソフトウェアをアンインストールする前に、この章の全体に目を通してください。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- [アンインストールの概要](#)
- [アンインストーラの実行](#)
- [アンインストール後に実行する作業](#)
- [アンインストールのトラブルシューティング](#)

## アンインストールの概要

Java Enterprise System アンインストーラには、次のアンインストールモードが用意されています。

- グラフィカルインタフェースによる対話式アンインストール
- 端末ウィンドウによる対話式アンインストール
- パラメータファイルを指定して実行するサイレントアンインストール

これらのアンインストールモードは、Java Enterprise System のインストール時に利用可能なモードに対応しています。アンインストールモードの選択方法については、[72 ページの「インストールモードの選択」](#)を参照してください。

インストール時に、Java Enterprise System インストールプログラムは次の場所に Java Enterprise System アンインストーラを格納します。

```
/var/sadm/prod/entsys/uninstall
```

## アンインストーラについて

Java Enterprise System アンインストーラの動作は、Java Enterprise System のインストール状況に応じて変わります。アンインストーラを実行する際には次の点に注意してください。

- アンインストーラの実行は、Java Enterprise System コンポーネントがインストールされている個々のホストごとに行う必要があります。

アンインストーラを実行する各ホスト上では、削除対象のコンポーネント製品を1つ以上選択できます。

- アンインストーラは Java Enterprise System 共有コンポーネントを削除しません。共有コンポーネントは、システムに対するアップグレードとみなされ、将来のインストールに備えてシステム上に残ります。共有コンポーネントの詳細については、[265 ページの「共有コンポーネント」](#)を参照してください。
- アンインストーラによって削除されるのは、Java Enterprise System インストーラによってインストールされたコンポーネント製品だけです。

Java Enterprise System インストーラを使用せずにインストールしたコンポーネント製品の削除については、各コンポーネント製品のマニュアルを参照してください。

- アンインストーラは、製品の依存関係をチェックし、依存が検出された場合は警告メッセージを出力します。ただし、そのチェック対象は、アンインストーラが実行されているシステムだけです。

ソフトウェアの削除に影響する依存の詳細については、[265 ページの「製品の相互依存性」](#)を参照してください。

- アンインストーラによって、設定ファイルとユーザーデータファイルが削除される場合があります。

アンインストーラによって実際に削除される設定ファイルとユーザーデータファイルは、コンポーネント製品ごとに異なります。アンインストールの完了後に、一部のファイルとディレクトリを手動で削除することが必要になる場合もあります。製品別の情報については、[268 ページの「コンポーネント製品の詳細」](#)を参照してください。



## 共有コンポーネント

Java Enterprise System アンインストーラは、Java Enterprise System インストーラによってインストールまたはアップグレードされた共有コンポーネントを削除しません。

たとえば J2SE コンポーネントなどの一部の共有コンポーネントは、Java Enterprise System コンポーネント以外のソフトウェアによって使用されている可能性があります。その他の共有コンポーネントは、Java Enterprise System の外部にインストールされている Sun ソフトウェア製品によって使用されている可能性があります。

通常、共有コンポーネントは削除しません。ただし、Java Enterprise System 共有コンポーネントをシステムから削除しなければならない場合は、`pkgrm` コマンドを使用します。Java Enterprise System インストーラによってインストールまたはアップグレードされるコンポーネントの一覧については、[付録 D の 421 ページの「共有コンポーネント用にインストールされるパッケージ」](#)を参照してください。

---

|           |                                                                              |
|-----------|------------------------------------------------------------------------------|
| <b>警告</b> | 共有コンポーネントを削除すると、その共有コンポーネントを使用するシステム上のその他のアプリケーションやソフトウェアの動作に影響が生じる可能性があります。 |
|-----------|------------------------------------------------------------------------------|

---

## 製品の相互依存性

コンポーネント製品をアンインストールする前に、次の製品相互依存性について考慮する必要があります。

- アンインストールする製品に依存するコンポーネント製品
- アンインストールする製品がサポートするコンポーネント製品

次の図は、製品 A (Portal Server)、B (Identity Server)、C (Directory Server) の各コンポーネント製品間の相互依存の例を示しています。

図 10-1 製品の相互依存性



## 認識される依存

Java Enterprise System アンインストーラは、両方の製品が同じホストにインストールされている場合に限り、一方のコンポーネント製品が他方に依存する関係を認識します。同じホスト上に依存関係を持つコンポーネントをアンインストールしようとする、アンインストーラはアンインストール処理を続行する前に警告を出力します。

たとえば、[図 10-1](#) に示すすべてのコンポーネントが同じホスト上に存在すると仮定します。ホストから Identity Server をアンインストールしようとする、アンインストーラは Portal Server が Identity Server に依存することを警告します。

この例で説明を続けます。Identity Server をアンインストールしようとしても、アンインストーラは Directory Server が Identity Server をサポートしていることを認識しません。このため、アンインストーラは Directory Server が Identity Server をサポートしていることを警告しません。このような認識されない相互依存については、次にさらに詳しく説明します。

## 認識されない依存

Java Enterprise System アンインストーラは、次の相互依存関係を認識しません。

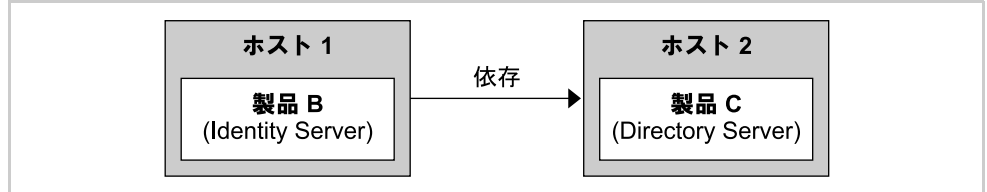
- リモートホストからの製品依存
- その他のコンポーネント製品をサポートする製品
- 設定による製品の依存関係

次に、これらの認識されない依存のそれぞれにおいて、インストーラがどのように動作するかを詳しく説明します。各コンポーネント製品の具体的な相互依存関係については、[268 ページの「コンポーネント製品の詳細」](#)を参照してください。

## リモートホストからの製品依存

別のホストに配備された製品を利用してコンポーネント製品の依存要件を満たすことができます。たとえば、[図 10-2](#) は別のホストに配備された製品を利用した Identity Server と Directory Server の依存関係を示しています。

図 10-2 リモートホストからの製品依存



製品が同じホストに配備されている場合は認識されますが、アンインストーラは、これらの製品の依存関係を認識できません。

たとえば、両方の製品が同じホストに配備されている場合でも、Directory Server をアンインストールしようとした場合にアンインストーラは Identity Server が Directory Server に依存することを警告しません。これは、Directory Server のアンインストール後に Identity Server をサポートする別のホスト上の別の Directory Server インスタンスを設定することができるためです。

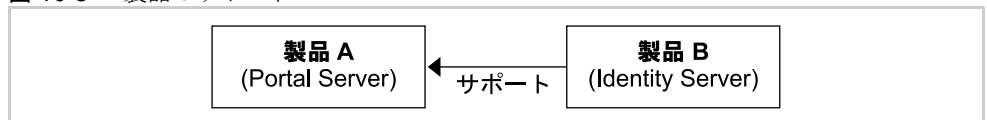
次のコンポーネント製品の依存関係は、別のホストに配備された製品を利用して満たすことができます。

- Directory Server に依存する Identity Server
- Directory Server に依存する管理サーバー
- Directory Server に依存する Calendar Server

### その他のコンポーネント製品をサポートする製品

次の図に示すように、あるコンポーネント製品が別のコンポーネント製品をサポートする場合、アンインストーラはその関係を認識しません。

図 10-3 製品のサポート



たとえば、Identity Server は Portal Server をサポートします。Portal Server をアンインストールしようとしても、アンインストーラは Identity Server が Portal Server をサポートすることを警告せずにアンインストール処理を続けます。

### 警告

コンポーネント製品をアンインストールするときは、どの製品がそのコンポーネントをサポートするかを調べ、適切に対処する必要があります。この対処を怠ると、システムに存在しなくなった製品をサポートするように設定された状態でコンポーネント製品がシステムに取り残される可能性があります。

### 設定による製品の依存関係

あるコンポーネント製品が別のコンポーネント製品に依存する場合でも、その依存関係が製品のインストール後の設定による場合は、アンインストーラは製品の依存関係を認識しません。

たとえば、同じホストに Portal Server と Calendar Server をインストールし、Portal Server のカレンダーチャネルとして Calendar Server を使用するよう Portal Server を設定したとします。この例では、Portal Server は Calendar Server に依存することになります。次に、Calendar Server をアンインストールしようとしても、アンインストーラは Portal Server が Calendar Server に依存することを警告しません。

---

**警告**      設定によって生じた製品の依存関係を調べ、コンポーネント製品のデータをバックアップしたり、サポートする側の製品から依存製品の設定を解除する、または適切な順序でコンポーネントをアンインストールするなど、適切な対応を行う必要があります。

---

## コンポーネント製品の詳細

ここでは、アンインストールを続行する前に考慮する必要があるコンポーネント製品の情報を示します。

表 10-1      管理サーバーのアンインストールに関する詳細

| 項目    | 詳細                                                                                                                                              |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データ | アンインストール時に他のサーバーを管理するためのプロキシング情報が失われる<br><br>他のサーバーを管理するために管理サーバーが使用する設定データは、Directory Server の設定ディレクトリに残される。この情報は、以後の管理サーバーのインストールで再利用することができる |
| 依存    | Directory Server                                                                                                                                |

表 10-1 管理サーバーのアンインストールに関する詳細 ( 続き )

| 項目           | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| サポートの必要性     | <p>Directory Proxy Server および Messaging Server は、管理サーバーを必要とする</p> <p>Directory Server は、管理サーバーを必要とするように設定できる</p> <p><b>注:</b>管理サーバーを削除し、Directory Server を削除しなかった場合、Directory Server に付属するその他のユーティリティを使用して Directory Server を管理する必要があります。詳細については、Directory Server のマニュアル (<a href="http://docs.sun.com/db/prod/S1.S1dirs?l=ja">http://docs.sun.com/db/prod/S1.S1dirs?l=ja</a>) を参照してください。</p> |
| アンインストール前の作業 | <p>設定ディレクトリをホストする Directory Server インスタンスが稼動していることを確認し、管理者ユーザー ID とパスワードを指定できるように準備する。詳細については、300 ページの「アンインストーラが設定ディレクトリサーバーに接続できない場合」を参照</p>                                                                                                                                                                                                                                                 |
| アンインストール後の作業 | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |

表 10-2 Application Server のアンインストールに関する詳細

| 項目            | 詳細                                                                                                                                                               |
|---------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データとユーザーデータ | <p>アンインストール時には、すべての管理サーバーインスタンスと Application Server インスタンスを含め、設定されている管理ドメインは削除されない</p> <p>アンインストールが完了するまでに、すべての管理サーバーインスタンスと Application Server インスタンスは停止される</p> |
| 依存            | 同一システム上に Message Queue が必要                                                                                                                                       |
| サポートの必要性      | <p>Identity Server (Application Server を使用するよう設定されている場合)</p> <p>Portal Server (Application Server を使用するよう設定されている場合)</p>                                          |
| アンインストール前の作業  | 設定データを保存するために、管理ドメインディレクトリのコピーを作成する                                                                                                                              |

表 10-2 Application Server のアンインストールに関する詳細 ( 続き )

| 項目           | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|--------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| アンインストール後の作業 | <p>システムから Application Server を完全に削除するには、残っている Application Server ログファイルとディレクトリを削除する。Application Server ディレクトリのデフォルトの場所は次のとおり</p> <p>/etc/opt/SUNWappserver7<br/>/var/opt/SUNWappserver7<br/>/opt/SUNWappserver7</p> <p>Message Queue のアンインストール後の作業については、<a href="#">274 ページの表 10-9</a> を参照</p> |

表 10-3 Calendar Server のアンインストールに関する詳細

| 項目            | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|---------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データとユーザーデータ | <p>設定データとユーザーデータは、アンインストール後もすべて残されるが、以後のインストール時に上書きされる</p> <p>Calendar Server のカスタマイズ情報はアンインストール時に削除される</p>                                                                                                                                                                                          |
| 依存            | <p>Directory Server</p> <p>Identity Server ( シングルサインオン用に設定されている場合、または Schema 2 を使用する場合 )</p> <p>Messaging Server ( またはその他のメールサーバー、Calendar Server の電子メール通知サービスを使用する場合 )</p>                                                                                                                          |
| サポートの必要性      | <p>Portal Server (Portal Server のカレンダーチャンネルに Calendar Server を使用するように設定されている場合 )</p>                                                                                                                                                                                                                 |
| アンインストール前の作業  | <p>設定データとユーザーデータを再利用する場合は、『Sun ONE Calendar Server 6.0 Installation Guide for Solaris Operating Systems』の付録 C 「Calendar Server 5.x to 6.0 Upgrade/Migration Process」に記載されている手順に従ってデータを移行する。このマニュアルは、<a href="http://docs.sun.com/doc/816-6707-10">http://docs.sun.com/doc/816-6707-10</a> で入手できる</p> |
| アンインストール後の作業  | <p>不要なログファイルと Calendar Server ディレクトリを削除する</p>                                                                                                                                                                                                                                                        |

表 10-4 Directory Server のアンインストールに関する詳細

| 項目            | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|---------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データとユーザーデータ | <p>設定ディレクトリをホストする Directory Server をアンインストールする場合、設定ディレクトリの情報はアンインストール時に削除される</p> <p>ユーザーデータをホストする Directory Server をアンインストールする場合、Directory Server の LDAP データベースはアンインストール時に削除される</p> <p><b>注意:</b> データの喪失を避けるために、アンインストール前に Directory Server 情報をバックアップする必要がある。Directory Server には、Directory Server をバックアップしたり、設定データを移行したりするためのツールやユーティリティが、いくつか用意されている。詳細については、Directory Server のマニュアル (<a href="http://docs.sun.com/db/prod/S1.S1dirs?l=ja">http://docs.sun.com/db/prod/S1.S1dirs?l=ja</a>) を参照</p> <p><b>注意:</b> o=NetScapeRoot サフィックスの下にある、設定情報を含む設定ディレクトリをアンインストールする場合、警告は出力されない。その他のディレクトリの設定情報も含む中央の設定ディレクトリをアンインストールすると、アンインストール後にそれらのディレクトリを管理できなくなる</p> |
| 依存            | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| サポートの必要性      | 管理サーバー<br>Calendar Server<br>Directory Proxy Server<br>Identity Server<br>Instant Messaging<br>Messaging Server<br>Portal Server                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| アンインストール前の作業  | <p>必要に応じて Directory Server の設定ディレクトリと Directory Server LDAP データベースのバックアップを行う</p> <p>設定ディレクトリをホストする Directory Server インスタンスが稼働していることを確認し、管理者ユーザー ID とパスワードを指定できるように準備する。詳細については、300 ページの「アンインストーラが設定ディレクトリサーバーに接続できない場合」を参照</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| アンインストール後の作業  | Directory Server のアンインストールでは、残りのファイルとディレクトリの手動削除が必要となる場合がある                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |

表 10-5 Directory Proxy Server のアンインストールに関する詳細

| 項目           | 詳細                                                                                                                                                                            |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データ        | アンインストールする Directory Proxy Server インスタンスの設定データはアンインストール時に削除される<br><br>Directory Proxy Server の複数のインスタンスで共有される設定データはアンインストール後も残される<br><br>Directory Proxy Server はユーザーデータを持たない |
| 依存           | Directory Server<br>管理サーバー                                                                                                                                                    |
| サポートの必要性     | なし                                                                                                                                                                            |
| アンインストール前の作業 | なし                                                                                                                                                                            |
| アンインストール後の作業 | なし                                                                                                                                                                            |

表 10-6 Identity Server のアンインストールに関する詳細

| 項目           | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                |
|--------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データ        | Identity Server の設定データはアンインストール時に削除される                                                                                                                                                                                                            |
| 依存           | Directory Server<br>Web Server または Application Server (IBM WebSphere または BEA WebLogic に依存するように設定することもできる)                                                                                                                                         |
| サポートの必要性     | Portal Server<br>Calendar Server ( シングルサインオン (SSO) を使用するよう<br>に設定されている場合 )<br>Instant Messaging (SSO を使用するよう<br>に設定されている<br>場合 )<br>Messaging Server (SSO を使用するよう<br>に設定されている<br>場合 )<br><br>Identity Server は Portal Server と同じホストに配備する<br>必要がある |
| アンインストール前の作業 | Identity Server が IBM WebSphere または BEA WebLogic<br>に配備されている場合、Java Enterprise System アンイン<br>ストーラを起動する前に IBM WebSphere または BEA<br>WebLogic が稼働している必要がある                                                                                          |



表 10-6 Identity Server のアンインストールに関する詳細 ( 続き )

| 項目           | 詳細                                                                                                                                                                                        |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| アンインストール後の作業 | <p>アンインストールが完了したら、Identity Server が配備されていた Web コンテナから Identity Server エントリの設定を解除する必要がある</p> <p>さらに、次のファイルが /var/sadm/install ディレクトリに格納されている場合は、それを削除する</p> <p>.lockfile<br/>.pkg.lock</p> |

表 10-7 Messaging Server のアンインストールに関する詳細

| 項目            | 詳細                                                                                    |
|---------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データとユーザーデータ | <p>設定データは、アンインストール後もすべて残されるため、以後のインストールで再利用できる</p> <p>すべてのユーザーデータはアンインストール時に削除される</p> |
| 依存            | <p>Directory Server<br/>Identity Server SDK</p>                                       |
| サポートの必要性      | <p>Portal Server (Instant Messaging チャンネルを使用するように設定されている場合)</p>                       |
| アンインストール前の作業  | なし                                                                                    |
| アンインストール後の作業  | なし                                                                                    |

表 10-8 Messaging Server のアンインストールに関する詳細

| 項目            | 詳細                                                                                                                                 |
|---------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データとユーザーデータ | <p>すべての設定データとカスタマイズ情報はアンインストール後も残されるため、以後のインストールで再利用できる</p>                                                                        |
| 依存            | <p>Directory Server<br/>管理サーバー ( 同じホストに配備する必要がある )<br/>Web Server ( フィルタなどのメール機能用 )<br/>Identity Server ( Schema 2 を使用している場合 )</p> |

表 10-8 Messaging Server のアンインストールに関する詳細 ( 続き )

| 項目           | 詳細                                                                                                   |
|--------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| サポートの必要性     | Calendar Server<br>Portal Server ( メッセージングチャネルを使用するように設定されている場合 )                                    |
| アンインストール前の作業 | なし                                                                                                   |
| アンインストール後の作業 | 状況によっては、 <a href="#">294 ページ</a> の「 <b>Messaging Server で必要となる作業</b> 」に記載されているアンインストール後作業が必要になることがある |

表 10-9 Message Queue のアンインストールに関する詳細

| 項目           | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データ        | インスタンス固有の設定データはアンインストール後も残されるため、以後のインストールで再利用できる<br><br>Message Queue のユーザーリポジトリとアクセス制御ファイルはアンインストール時に削除される                                                                                                                                                                                                           |
| 依存           | Directory Server ( オプション )                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| サポートの必要性     | Application Server<br><br>Application Server と Message Queue は同一ホスト上にインストールする必要がある                                                                                                                                                                                                                                    |
| アンインストール前の作業 | Message Queue の再インストールまたはアップグレード後に復元できるようにフラットファイルユーザーリポジトリと Message Queue アクセス制御ファイルを維持するときは、次のファイルのバックアップコピーを作成する<br><br>/etc/imq/passwd<br>/etc/imq/accesscontrol.properties<br><br>Message Queue の再インストールを考えていない場合は、稼動しているすべてのブローカと、その Message Queue クライアントを停止する。これらをクリーンアップするには、コンポーネント製品のマニュアルで説明されているコマンドを使用する |
| アンインストール後の作業 | Message Queue の再インストールを考えていない場合は、コンポーネント製品のマニュアルで説明されているコマンドを実行してシステムをクリーンアップする。Message Queue のマニュアルは、 <a href="http://docs.sun.com/coll/S1_MessageQueue_301_SP2">http://docs.sun.com/coll/S1_MessageQueue_301_SP2</a> で入手できる                                                                                         |

表 10-10 Portal Server のアンインストールに関する詳細

| 項目            | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|---------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データとユーザーデータ | <p>設定データはアンインストール時に削除される。設定の解除には、Portal Server によって Identity Server 内に作成されたサービスの削除も含まれる</p> <p>カスタマイズ設定データは、アンインストールによって削除されない。カスタマイズデータには、ディスプレイプロファイル、プロパティファイル、リソース文字列などがある</p> <p>ユーザーチャネルのプロバイダは、アンインストール中に削除されない。プロバイダは以後のインストール時に再利用できる。詳細については、Portal Server のマニュアル (<a href="http://docs.sun.com/coll/S1_PortalServer_62">http://docs.sun.com/coll/S1_PortalServer_62</a>) を参照</p> <p>カスタマイズ設定データは以後のインストールで再利用できるが、それには、Portal Server を同一ホスト上に同じ設定で再インストールする必要がある。詳細については、Portal Server のマニュアル (<a href="http://docs.sun.com/coll/S1_PortalServer_62">http://docs.sun.com/coll/S1_PortalServer_62</a>) を参照</p> |
| 依存            | <p>Directory Server</p> <p>Application Server または Web Server (IBM WebSphere または BEA WebLogic に依存するように設定することもできる)</p> <p>Identity Server</p> <p>Portal Server のチャネルを使用するように設定されている場合</p> <p>Calendar Server</p> <p>Messaging Server</p> <p>Instant Messaging</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
| サポートの必要性      | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| アンインストール前の作業  | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| アンインストール後の作業  | <p>Portal Server が Web Server 内で実行されており、その Portal Server だけを削除する場合、Identity Server を再起動する必要がある。詳細については、294 ページの「Portal Server のアンインストールと Identity Server の再起動」を参照</p> <p>IBM WebSphere Web コンテナに配備されている場合、追加のアンインストール作業が必要となる場合がある</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |

表 10-11 Portal Server, Secure Remote Access のアンインストールに関する詳細

| 項目           | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|--------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データ        | <p>Portal Server, Secure Remote Access サポートコンポーネントのすべての設定データは、アンインストール時に削除される</p> <p>配備されているすべての Web アプリケーションは配備が解除される</p> <p>Portal Server SRA のゲートウェイ、Netlet プロキシ、Rewriter プロキシの各コンポーネントの設定データには、ユーザーはアクセスできない</p>                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| 依存           | <p>Portal Server SRA は Portal Server に依存する</p> <p>Portal Server SRA ゲートウェイ、Netlet プロキシ、Rewriter プロキシの各コンポーネントは、Identity Server SDK に依存する</p> <p>Portal Server と Portal Server SRA サポートは、同一ホスト上の同一ディレクトリ内に存在している必要がある</p> <p>Identity Server は、ゲートウェイ、Netlet プロキシ、および Rewriter プロキシと同じホスト上に存在している必要がある。ゲートウェイ、Netlet プロキシ、および Rewriter プロキシが同一ディレクトリ内に存在してはならない</p> <p>Portal Server SRA のどのコンポーネントを削除する場合も、それに依存するコンポーネントを削除する必要はない</p> <p>ゲートウェイを削除しても、Identity Server SDK をホスト上に残すことができる</p> |
| サポートの必要性     | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| アンインストール前の作業 | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| アンインストール後の作業 | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |

表 10-12 Sun Cluster ソフトウェアのアンインストールに関する詳細

| 項目           | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|--------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データ        | Sun Cluster ソフトウェアをインストールしたが、クラスタノードの設定に使用しなかった、というまれな状況を除き、Sun Cluster ソフトウェアの削除には Java Enterprise System アンインストーラを使用しない。詳細については、295 ページの「Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster のエージェント」を参照                                                                               |
| 依存           | Sun Cluster コアと Sun Cluster エージェントは、同時に削除する必要がある                                                                                                                                                                                                                     |
| サポートの必要性     | なし                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| アンインストール前の作業 | Sun Cluster ソフトウェアのアンインストールには、Sun Cluster のインストール時に提供されるユーティリティだけを使用する<br><br>Sun Cluster ソフトウェアをインストールしたが、クラスタノードの設定に使用しなかった、というまれな状況を除き、Sun Cluster ソフトウェアの削除には Java Enterprise System アンインストーラを使用しない。詳細については、295 ページの「Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster のエージェント」を参照 |
| アンインストール後の作業 | Sun Cluster ソフトウェアのアンインストール後に、productregistry ファイルをアップデートする必要がある。詳細については、295 ページの「Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster のエージェント」を参照                                                                                                                                        |

表 10-13 Web Server のアンインストールに関する詳細

| 項目            | 詳細                                                                                                                                                                                                                        |
|---------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データとユーザーデータ | 設定データとユーザーデータはアンインストール時に削除されない<br><br>Web Server の管理サーバーインスタンスと設定済みの Web Server インスタンスディレクトリは、インストールディレクトリ内に維持される。また、初期設定によるドキュメントルートディレクトリも維持される<br><br>Web Server 管理サーバーインスタンスと Web Server インスタンスは、アンインストールが完了する前に停止される |
| 依存            | なし                                                                                                                                                                                                                        |

表 10-13 Web Server のアンインストールに関する詳細 ( 続き )

| 項目           | 詳細                                                                                                                                                                                                  |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| サポートの必要性     | Identity Server (Web Server 内で実行されるように設定されている場合)<br>Portal Server (Web Server 内で実行されるように設定されている場合)                                                                                                  |
| アンインストール前の作業 | なし                                                                                                                                                                                                  |
| アンインストール後の作業 | 設定データを維持する場合は、インストールディレクトリ内の管理サーバーインスタンスと Web Server インスタンスのディレクトリのバックアップを行う<br><br>アンインストール後に同じ場所に Web Server をインストールする場合は、インストールディレクトリが存在してはならない。同じ場所に再インストールする前に、インストールディレクトリとすべてのカスタム設定を手動で削除する |

## アンインストール前の作業

ここでは、Java Enterprise System アンインストーラを実行する前に必要な作業について説明します。

- 次のいずれかの方法で、アンインストール前にシステムにインストールされている Java Enterprise System コンポーネントを確認します。
  - Java Enterprise System アンインストーラを実行し、システムにインストールされているコンポーネント製品をリスト表示します (ソフトウェアのアンインストールは行わない)。Java Enterprise System コンポーネントのリストを確認したら、アンインストーラを終了できます。
  - prodreg ユーティリティを実行し、システムにインストールされている Java Enterprise System コンポーネントを含むすべてのパッケージに関する情報を参照します。prodreg は、インストールされているすべてのパッケージに関する広範な情報を示すグラフィカルウィンドウを表示します。この情報は、次の [手順 4](#) に示す製品の依存関係のチェックに役立ちます。また、prodreg は特別な取り扱いを必要とする、システム上の不完全なパッケージも示します。prodreg は、Solaris 9 オペレーティングシステムと、Solaris 8 オペレーティングシステムの一部のバージョンに用意されています。
  - pkginfo および関連コマンドを使用すると、システムにインストールされているパッケージの情報が表示されます。pkginfo によって得られるリストと、[413 ページの付録 D](#) に示されるパッケージのリストを比較し、システムにどの Java Enterprise System コンポーネントがインストールされているかを確認します。
- 製品レジストリをバックアップします。

製品レジストリは次の場所にあります。

```
/var/sadm/install/productregistry
```

アンインストールが失敗した場合、クリーンな製品レジストリを使用してアンインストールを再試行することができます。

3. 以後のインストールでデータの再利用を考えている場合は、アンインストールするコンポーネント製品の設定データまたはユーザーデータをバックアップまたはアーカイブします。

設定データおよびユーザーデータのバックアップについては、各コンポーネント製品のマニュアルを参照してください。

4. [265 ページの「製品の相互依存性」](#)で説明されている、アンインストールする製品とその他のコンポーネント製品間の相互依存関係を確認します。

---

### 警告

別のホストに配備されているコンポーネント製品や、コンポーネントがサポートする製品の依存関係、および設定によって生じる製品の依存関係について理解することは特に重要です。これらの状況についてアンインストーラは警告を出力しません。

---

5. 管理サーバー、**Directory Server**、および **Identity Server** への管理者アクセス権をアンインストーラに付与するための情報を準備します。詳細については、[280 ページの「アンインストーラへの管理者アクセス権の付与」](#)を参照してください。
6. アンインストーラを起動する前に、設定ディレクトリをホストする **Directory Server** インスタンスが稼働していることを確認します。

アンインストールするコンポーネント製品の設定をインストーラが正しく解除するには、この **Directory Server** インスタンスが稼働している必要があります。

## アンインストーラへの管理者アクセス権の付与

アンインストール対象として選択したコンポーネントによっては、管理サーバー、Directory Server、および Identity Server への管理者アクセス権を、アンインストーラに付与する必要があります。ここでは、管理者アクセス権をアンインストーラに付与するための情報を説明する表を示します。各表の左の列は、指定が必要な情報のラベルと状態ファイルのパラメータを示します。右の列は、指定が必要な情報について説明しています。

ラベルは、グラフィカルモードのアンインストーラページに表示される入力フィールドです。状態ファイルのパラメータは、サイレントアンインストール用の状態ファイルで情報を識別するためのキーとなります。

### 管理サーバー

次の表は、管理サーバーに管理者アクセス権を付与するために必要な情報を示しています。アンインストール時に設定ディレクトリのデータを管理するには、管理者アクセス権が必要です。

表 10-14 管理サーバーの設定情報

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                 | 説明                                                           |
|--------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|
| 管理者ユーザー ID<br>ADMINSERV_CONFIG_ADMIN_USER        | 設定ディレクトリ管理者のユーザー ID。<br>管理サーバーは、この ID を使用して設定ディレクトリのデータを管理する |
| 管理者のユーザーパスワード<br>ADMINSERV_CONFIG_ADMIN_PASSWORD | 設定ディレクトリ管理者のパスワード                                            |

### Directory Server

次の表は、Directory Server に管理者アクセス権を付与するために必要な情報を示しています。アンインストール時に設定ディレクトリを管理するには、管理者アクセス権が必要です。

表 10-15 Directory Server の管理に関する設定情報

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                  | 説明                                                                                               |
|-----------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 管理者ユーザー ID<br>CONFIG_DIR_ADM_USER | 設定ディレクトリに対して管理者権限を持つユーザー<br><br>このユーザーは、サフィックスの作成や削除など、Directory Server の設定を変更できるが、アクセス制御の制約を受ける |



表 10-15 Directory Server の管理に関する設定情報 ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                  | 説明        |
|-----------------------------------|-----------|
| 管理者パスワード<br>CONFIG_DIR_ADM_PASSWD | 管理者のパスワード |

## Identity Server

次の表は、Identity Server に管理者アクセス権を付与するために必要な情報を示しています。Sun ONE Application Server への Identity Server Web アプリケーションの配備を取り消したり、Identity Server のスキーマを削除したりするには、管理者アクセス権が必要です。

表 10-16 Identity Server 用の管理情報

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                    | 説明                                                                                 |
|-------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|
| 管理者ユーザー ID<br>IS_IAS7_ADMIN         | Sun ONE Application Server 管理者のユーザー ID                                             |
| 管理者パスワード<br>IS_IAS7_ADMINPASSWD     | Sun ONE Application Server 管理者のパスワード                                               |
| ディレクトリマネージャ<br>IS_DIRMGRDN          | Directory Server に対して無制限のアクセス権を持つユーザーの識別名 (DN)<br><br>デフォルト値は cn=Directory Manager |
| ディレクトリマネージャパスワード<br>IS_DIRMGRPASSWD | ディレクトリマネージャのパスワード                                                                  |

# アンインストーラの実行

Java Enterprise System のインストール時に、インストーラによって Java Enterprise System アンインストーラが作成され、次の場所に格納されます。

```
/var/sadm/prod/entsys/uninstall
```

アンインストーラを実行するには、ルートであるか、ルート権限を持っている必要があります。

次に、アンインストーラを GUI モードで実行する方法について説明します。

アンインストーラをコンソールモードで実行する方法については、[287 ページの「テキストベースインタフェースによるアンインストール」](#)を参照してください。

サイレントアンインストールをセットアップおよび実行する方法については、[290 ページの「サイレントモードでのソフトウェアのアンインストール」](#)を参照してください。

## グラフィカルインタフェースによるアンインストール

ここでは、アンインストーラの対話式グラフィカルインタフェースを使用して Java Enterprise System ソフトウェアをアンインストールする方法について説明します。

### アンインストーラの起動

#### ▶ アンインストーラを起動するには

1. [278 ページの「アンインストール前の作業」](#)で説明しているアンインストール前の作業を行います。

慎重な準備を行えば、誤ってデータを失う危険性も低くなります。

2. ローカルディスプレイにアクセスできることを確認します。

リモートマシンにログインする、または su コマンドを使用してローカルマシンの superuser になる場合は、ローカルマシンで xhost コマンドを実行し、ローカルディスプレイにアクセスできるようにします。たとえば、すべてのユーザーにアクセスを許可するには、次のコマンドを使用します。

```
xhost +
```

リモートマシンにログインするときは、DISPLAY 環境変数がローカルディスプレイに適切に設定されていることを確認します。DISPLAY 変数が正しく設定されていないと、アンインストーラはテキストベースで実行されます。たとえば、マシン名が myhost である場合は、次のように設定します。

```
(C Shell) % setenv DISPLAY myhost:0.0
(Korn Shell) $ DISPLAY=myhost:0.0
```

3. root としてログインしていない場合は、superuser になります。
4. 次のディレクトリに移動します。  
`cd /var/sadm/prod/entsys/`
5. アンインストーラを実行します。  
`./uninstall [-no]`

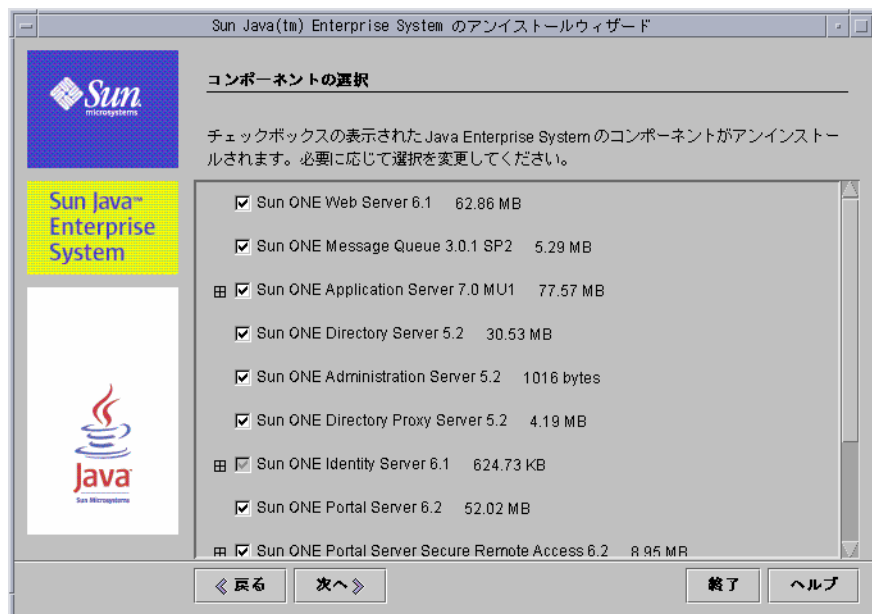
オプションの `-no` パラメータを指定した場合、アンインストーラは実行されますが、ソフトウェアはアンインストールされません。このオプションは、アンインストーラの動作に慣れるために有用であり、また、続けて実行するサイレントアンインストール用の状態ファイルを作成する場合に便利です。

アンインストーラが起動し、「ようこそ」画面が表示されます。「次へ」をクリックしてアンインストールするコンポーネントの選択に進みます。

## アンインストールするコンポーネントの選択

「コンポーネントの選択」ページには、システム上で選択可能なすべての Java Enterprise System コンポーネントが一覧表示されます。

図 10-4 「コンポーネントの選択」ページ



システムにインストールされているコンポーネント製品は、自動的に削除対象として選択されます。システムにインストールされていないコンポーネント製品は選択できません。

コンポーネント製品によっては、サブコンポーネントを含むものもあります。それらのコンポーネントを展開すると、対応するサブコンポーネントが表示されます。

コンポーネントのすべてのサブコンポーネントが選択されている場合、それらすべての選択を解除するには、その親コンポーネントの選択を解除します。

コンポーネントとそのサブコンポーネントのすべてを選択するには、コンポーネントを展開し、サブコンポーネントを個別に選択する必要があります。単純に親コンポーネントを選択しただけでは、そのサブコンポーネントは選択されません。

いずれかのサブコンポーネントを選択すると、その親コンポーネントも選択されます。

### ▶ アンインストールするコンポーネント製品を選択するには

1. 以降の手順に進む前に、[265 ページ](#)の「製品の相互依存性」で説明している製品の依存関係を確実に把握します。
2. デフォルトの選択を確認し、アンインストールしないコンポーネント製品の選択を解除します。

サブコンポーネントを含むコンポーネントの選択を解除する場合、必ずそのコンポーネントを展開し、選択内容を確認してください。

3. 選択が完了したら、「次へ」をクリックします。

アンインストーラは、削除対象として選択された製品間の依存関係を検出すると、設定データが失われる可能性があることを知らせる警告メッセージを出力します。

- a. アンインストールを続行するには、「続行」をクリックします。
- b. 「コンポーネントの選択」ページに戻るには、「閉じる」をクリックします。

### 管理者アクセス権の付与

削除対象として選択したコンポーネント製品によっては、アンインストーラは管理者の ID とパスワードを要求します。要求された情報を提供すると、次のことを実行できます。

- 設定ディレクトリの管理
- 設定ディレクトリのデータの管理
- Identity Server Web アプリケーションの配備取り消し
- Identity Server スキーマの削除

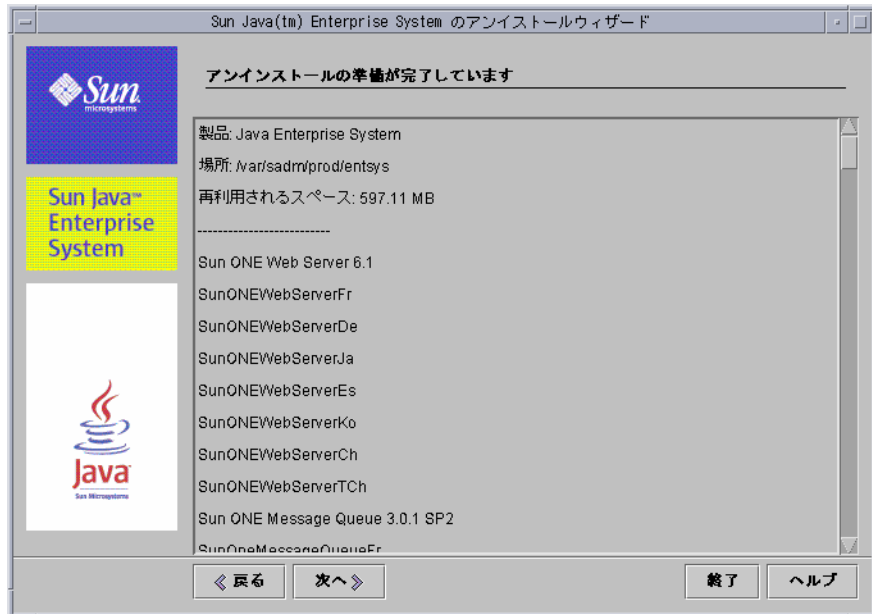
アンインストーラに必要な情報の詳細については、[280 ページ](#)の「アンインストーラへの管理者アクセス権の付与」を参照してください。

いずれにしても、要求された情報を入力した後、「次へ」をクリックしてアンインストーラを続行します。

## アンインストーラの準備完了

アンインストーラは、ソフトウェアをシステムから削除する前に、サマリページを表示します。このページには、削除対象として選択されたコンポーネントと回復される合計ディスク容量が表示されます。次の図はサマリページの一例です。

図 10-5 「アンインストーラの準備が完了しています」画面



この時点で、選択内容の確認と必要な変更を行えます。選択内容に問題がなければ、「次へ」をクリックします。アンインストーラは、システムからのソフトウェアの削除を開始します。

### ▶ コンポーネントの選択を変更するには

1. 「戻る」を何度かクリックして「コンポーネントの選択」ページを表示します。
2. 「コンポーネントの選択」ページの情報を必要に応じて変更します。
3. 「次へ」をクリックし、アンインストーラページを再び先に進めます。

アンインストーラは、ユーザーが以前に指定した値を記憶しています。ユーザーが以前に指定した値は変更可能です。

4. 「アンインストーラの準備が完了しています」ページで「次へ」をクリックします。

アンインストーラは、システムからのソフトウェアの削除を開始します。

## コンポーネントのアンインストール

アンインストール中は、次の情報が表示されます。

- 全体的な完了割合を示す進捗状況バー
- 現在削除しているパッケージの名前

すべてのコンポーネント製品ソフトウェアの削除が完了すると、アンインストーラは「アンインストールが完了しました」ページを表示します。

「サマリの表示」ボタンまたは「ログの表示」ボタンをクリックすると、アンインストールに関する情報が表示されます。

- アンインストールのサマリには、アンインストールされたコンポーネントがリスト表示され、アンインストールと設定解除の状態が示されます。
- アンインストールログには、アンインストーラのログメッセージが記録されています。

アンインストールのサマリファイルとログファイルは、次の場所でも確認できます。

```
/var/sadm/install/logs
```

## アンインストーラの終了

アンインストールが完了したら、「閉じる」をクリックしてアンインストーラを終了します。

アンインストールを完了するための手作業が、いくつか残っています。詳細については、[294 ページの「アンインストール後に実行する作業」](#)を参照してください。

## テキストベースインタフェースによるアンインストール

ここでは、アンインストーラの対話形式のテキストベースインタフェースを使用して Java Enterprise System ソフトウェアをアンインストールする方法について説明します。テキストベースインタフェースを使用すると、端末ウィンドウ内に表示されるプロンプトに順次応答することで、端末ウィンドウからアンインストーラを直接実行できます。

次の表は、Java Enterprise System アンインストーラのプロンプトで要求される応答について説明しています。

表 10-17 アンインストーラのプロンプトに対する応答

| 処理                            | 入力                             |
|-------------------------------|--------------------------------|
| デフォルト値を受け入れる                  | Return キーを押す                   |
| デフォルト値は角かっこ ([ ]) で囲んで示される    |                                |
| リストから項目を選択する                  | 項目に関連する番号を入力する<br>Return キーを押す |
| リストの選択を受け入れる                  | 数値 0 を入力し、Return キーを押す         |
| たとえば、リストからの選択を終え、作業を継続する      |                                |
| テキストフィールドに値を指定する              | 値を入力する<br>Return キーを押す         |
| たとえば、ユーザー名やポート番号の指定が求められた場合など |                                |
| パスワードを指定する                    | パスワードを入力する<br>Return キーを押す     |
|                               | パスワードは端末ウィンドウにエコー表示されない        |
| アンインストーラの直前のページに戻る            | < を入力し、Return キーを押す            |
| インストーラを終了する                   | ! を入力し、Return キーを押す            |

**注** テキストベースモードの操作方法は、アンインストーラとインストーラとで、若干の違いがあります。

## アンインストーラの起動

### ▶ アンインストーラを起動するには

1. 278 ページの「アンインストール前の作業」で説明しているアンインストール前の作業を行います。

慎重な準備を行えば、誤ってデータを失う危険性も低くなります。

2. root としてログインしていない場合は、superuser になります。
3. 次のディレクトリに移動します。

```
cd /var/sadm/prod/entsys/
```

4. アンインストーラを実行します。

```
./uninstall -nodisplay [-no]
```

オプションの `-no` パラメータを指定した場合、アンインストーラは実行されますが、ソフトウェアはアンインストールされません。このオプションは、アンインストーラの動作に慣れるために有用であり、また、続けて実行するサイレントアンインストール用の状態ファイルを作成する場合に便利です。

## アンインストールするコンポーネントの選択

アンインストーラは起動に成功したことを示すメッセージを表示し、次にシステム上でアンインストールの対象となるすべての Java Enterprise System コンポーネントをリスト表示します。

システムにインストールされているコンポーネント製品は、自動的に削除対象として選択されます。コンポーネント製品によっては、サブコンポーネントを含むものもあります。コンポーネントのすべてのサブコンポーネントが選択されている場合、それらすべての選択を解除するには、その親コンポーネントの選択を解除します。

コンポーネントとそのサブコンポーネントのすべてを選択するには、サブコンポーネントを個別に選択する必要があります。単純に親コンポーネントを選択しただけでは、そのサブコンポーネントは選択されません。

いずれかのサブコンポーネントを選択すると、その親コンポーネントも選択されます。

### ▶ アンインストールするコンポーネント製品を選択するには

1. 以降の手順に進む前に、265 ページの「製品の相互依存性」で説明している製品の相互依存関係を確実に把握します。
2. デフォルトの選択を確認し、アンインストールしないコンポーネント製品の選択を解除します。

サブコンポーネントを含むコンポーネントの選択を解除する場合、必ずリストの内容を確認し、選択内容を確認してください。

3. 選択が完了したら、数値 0 を入力し、Return キーを押します。



アンインストーラは、削除対象として選択された製品間の依存関係を検出すると、設定データが失われる可能性があることを知らせる警告メッセージを出力します。

- a. アンインストーラを続行するには、Yes と入力し、Return キーを押します。
- b. 「コンポーネントの選択」ページに戻るには、No と入力し、Return キーを押します。
- c. アンインストーラを終了するには、!を入力し、Return キーを押します。

## 管理者アクセス権の付与

削除対象として選択したコンポーネント製品によっては、アンインストーラは管理者の ID とパスワードを要求します。要求された情報を提供すると、次のことを実行できます。

- 設定ディレクトリの管理
- 設定ディレクトリのデータの管理
- Identity Server Web アプリケーションの配備取り消し
- Identity Server スキーマの削除

アンインストーラに必要な情報の詳細については、[280 ページの「アンインストーラへの管理者アクセス権の付与」](#)を参照してください。

いずれにしても、要求された情報を入力し、アンインストーラを続行します。

## アンインストーラの準備完了

アンインストーラは、ソフトウェアをシステムから削除する前に、サマリページを表示します。このページには、削除対象として選択されたコンポーネントが表示されます。

この時点で、選択内容の確認と必要な変更を行えます。

選択内容に問題がなければ、数値 1 を入力し、Return キーを押します。アンインストーラは、システムからのソフトウェアの削除を開始します。

### ▶ コンポーネントの選択を変更するには

1. 「コンポーネントの選択」画面が表示されるまで、< 文字を入力し、Return キーを押します。
2. 「コンポーネントの選択」画面の情報を必要に応じて変更します。
3. アンインストーラ画面を再び先に進めます。
4. 「アンインストーラの準備が完了しています」画面で、数値 1 を入力し、Return キーを押します。

アンインストーラは、システムからのソフトウェアの削除を開始します。

## コンポーネントのアンインストール

アンインストール時に、アンインストーラは全体的な完了割合を示す進捗状況バーを表示します。

すべてのコンポーネント製品ソフトウェアが削除されたら、アンインストールサマリオよびログを表示することができます。

### ▶ アンインストールサマリオよびログを表示するには

1. アンインストールサマリを表示するには、1 と入力し、**Return** キーを押します。

アンインストーラは、アンインストールしたコンポーネント製品のリストを表示し、次に各コンポーネントの設定情報をリスト表示します。

2. アンインストールログを表示するには、2 と入力し、**Return** キーを押します。

アンインストーラは、アンインストール時にアンインストーラから出力されたすべてのメッセージをリスト表示します。

アンインストールのサマリファイルとログファイルは、次の場所でも確認できます。

```
/var/sadm/install/logs
```

## アンインストーラの終了

アンインストーラを終了するには、! を入力し、**Return** キーを押します。

アンインストールを完了するための手作業が、いくつか残っています。詳細については、[294 ページの「アンインストール後に実行する作業」](#)を参照してください。

## サイレントモードでのソフトウェアのアンインストール

サイレントアンインストールは、設定内容が似ている複数のホスト上の **Java Enterprise System** コンポーネントを自動的にアンインストールする場合に便利です。サイレントアンインストールを実行するには、ユーザーの入力値を「状態ファイル」に格納できるように、アンインストーラを一度実行する必要があります。状態ファイル内では、ユーザーの応答が対応する状態ファイル変数に関連付けられ、名前と値のペアが形成されています。サイレントアンインストールを実行すると、アンインストーラは、状態ファイル内の名前と値のペアを使用して **Java Enterprise System** コンポーネントのアンインストールと設定解除を行います。

通常は、生成された状態ファイルを編集し、アンインストールを実行する各ホストに固有の値に書き換えます。続いて、ホストに固有の状態ファイルを入力情報として使用して、複数のホスト上でアンインストーラを実行します。

サイレントモードでのアンインストール手順は、サイレントモードでのインストール手順に似ています。サイレントモードの使用については、[第7章「サイレントモードでのソフトウェアのインストール」](#)を参照してください。

## 状態ファイルの生成

アンインストーラをサイレントモードで実行するには、まず、状態ファイルを生成する必要があります。ここではその手順について説明します。この手順では、アンインストーラをグラフィカルモードまたはコンソールベースモードのいずれかで実行する必要があります。これらの手順については、すでに [282 ページの「グラフィカルインタフェースによるアンインストール」](#) と [287 ページの「テキストベースインタフェースによるアンインストール」](#) で説明しています。

### ▶ 状態ファイルを生成するには

1. root としてログインしていない場合は、superuser になります。
2. 次のディレクトリに移動します。

```
cd /var/sadm/prod/entsys/
```

3. アンインストーラのグラフィカルインタフェースを使用する場合は、ディスプレイへのアクセスを確保します。

リモートマシンにログインする、または su コマンドを使用してローカルマシンの superuser になる場合は、ローカルマシンで xhost コマンドを実行し、ローカルディスプレイにアクセスできるようにします。たとえば、すべてのユーザーにアクセスを許可するには、次のコマンドを使用します。

```
xhost +
```

リモートマシンにログインするときは、DISPLAY 環境変数がローカルディスプレイに適切に設定されていることを確認します。DISPLAY 変数が正しく設定されていないと、アンインストーラはテキストベースで実行されます。たとえば、マシン名が myhost である場合は、次のように設定します。

```
(C Shell) % setenv DISPLAY myhost:0.0
(Korn Shell) $ DISPLAY=myhost:0.0
```

4. 次のコマンドを使用してアンインストーラを実行します。

```
./uninstall [-no] [-nodisplay] -saveState statefile
```

ここで、

```
-no アンインストーラがソフトウェアをアンインストールするのを防止する
```

- nodisplay アンインストーラを対話的なテキストベースモードで起動する。このオプションを指定しない場合、アンインストーラはグラフィカルモードで起動される
- saveState *statefile* によって指定される場所に状態ファイルを生成するようにアンインストーラに指示する。生成する状態ファイルへの絶対パスまたは相対パスを指定する
- statefile* 生成する状態ファイルへの絶対パスまたは相対パスを指定する

5. アンインストーラを最後まで実行します。

ユーザーがアンインストーラに応答するたびに、アンインストーラはその内容を指定された状態ファイルに記録します。アンインストーラが完了すると、指定された場所に状態ファイルが保存されます。

6. サイレントアンインストールを実行するホストごとに、この状態ファイルのコピーを編集し、各ホストに固有の情報を準備します。

状態ファイルの編集については、[204 ページの「状態ファイルの編集」](#)を参照してください。また、状態ファイルの編集には、状態ファイル ID の生成も含まれる可能性があります。これについては、[206 ページの「プラットフォームに適した ID の作成」](#)を参照してください。

## アンインストーラのサイレントモードでの実行

状態ファイルの生成と編集が完了したら、サイレントモードを使ってソフトウェアをアンインストールする準備が整ったことになります。

### ▶ サイレントモードでアンインストーラを実行するには

1. 状態ファイルを正しく準備および編集できたことを確認します。詳細については、前の [291 ページの「状態ファイルの生成」](#)を参照してください。
2. Java Enterprise System のコンポーネントをアンインストールするホストで端末ウィンドウを開きます。
3. root としてログインしていない場合は、superuser になります。
4. 次のディレクトリに移動します。

```
cd /var/sadm/prod/entsys/
```
5. アンインストーラを次の形式で起動します。

```
./uninstall -noconsole -state statefile
```

各オプションの意味は次のとおりです。

|                         |                                                 |
|-------------------------|-------------------------------------------------|
| <code>-nodisplay</code> | グラフィカル表示を抑制する                                   |
| <code>-noconsole</code> | ユーザーインタフェースを抑制し、アンインストーラをサイレントモードで起動する          |
| <code>-state</code>     | 指定された <i>statefile</i> をサイレントアンインストールの入力として使用する |
| <i>statefile</i>        | 状態ファイルへの絶対または相対パス名を指定する                         |

アンインストーラの実行中にその進捗を監視するには、アンインストールログを参照します。

### ▶ サイレントアンインストールの進行状況を監視するには

1. 端末ウィンドウで、ログファイルのディレクトリに移動します。

```
cd /var/sadm/install/logs
```

2. 現在のアンインストールに関するログファイルを探します。

監視対象のログファイルは、次のとおりです。

```
Java_Enterprise_System_uninstall.Btimestamp
```

*timestamp* 変数は、ログの作成時刻を表します。形式は *MMddhhmm* です。各要素の意味は次のとおりです。

|           |       |
|-----------|-------|
| <i>MM</i> | 月を示す  |
| <i>dd</i> | 日付を示す |
| <i>hh</i> | 時間を示す |
| <i>mm</i> | 分を示す  |

3. `tail` コマンドを使用して、ログに書き込まれるメッセージを監視します。

例:

```
tail -f log-file-name
```

# アンインストール後に実行する作業

ここでは、システムから Java Enterprise System コンポーネント製品をアンインストールした後で実行が必要となる作業について説明します。実際に実行する作業は、アンインストールしたコンポーネントによって異なります。

## Messaging Server で必要となる作業

場合によっては、インストールファイルの一部またはすべてが削除されないことがあります。最終的なクリーンアップを行うには、Messaging Server のベースディレクトリとその内容を削除します。デフォルトのベースディレクトリは、次の場所です。

```
/opt/SUNWmsgsr
```

また、Messaging Server の設定ディレクトリも削除できます。Messaging Server のデフォルトの設定ディレクトリは、次の場所です。

```
/var/opt/SUNWmsgsr
```

### sendmail の設定

Messaging Server をアンインストールしたあと、Messaging Server 用の sendmail の設定をすべて元に戻してください。

## Portal Server のアンインストールと Identity Server の再起動

Portal Server が Web Server 上で実行されており、その Portal Server だけをアンインストールする場合、Identity Server を再起動する必要があります。Portal Server ソフトウェアのアンインストール後、Identity Server にアクセスする前に、次の手順を実行します。

次の手順は、単一のインスタンスでインストールされている Identity Server を再起動する方法を示しています。

▶ **単一のインスタンスでインストールされている Identity Server を再起動するには**

1. 次のコマンドを実行して Identity Server を停止します。

```
/etc/init.d/amserver stop
```

2. 次のコマンドを実行して Identity Server を起動します。

```
/etc/init.d/amserver start
```

次の手順は、複数のインスタンスでインストールされている Identity Server を再起動する方法を示しています。Portal Server が配備された作成済みインスタンスごとに、この手順を実行しますが、元のインスタンスは pssetup スクリプトによって ClassCache が削除されるため、除外します。

▶ **複数のインスタンスでインストールされている Identity Server を再起動するには**

1. ClassCache ディレクトリに移動し、次のコマンドでインスタンスを削除します。

```
cd ${BASEDIR}/SUNWam/servers/https-Instance_Name/ClassCache
rm -rf https-Instance_Name/* https-Deploy_Instance/*
```

2. 作成済みのサーバーインスタンスごとに、手順 1 を繰り返します。
3. 追加インスタンスの ClassCache をすべて削除したら、次のコマンドを使ってすべてのインスタンスを停止します。
4. /etc/init.d/amserver stopall
5. 次のコマンドを使ってすべてのインスタンスを再起動します。

```
/etc/init.d/amserver startall
```

## Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster のエージェント

Sun Cluster ソフトウェアのアンインストールには、Sun Cluster のインストール時に提供されるユーティリティだけを使用します。Sun Cluster コアと Sun Cluster エージェントは、同時に削除する必要があります。

Sun Cluster ソフトウェアをインストールしたが、クラスタノードの設定に使用しなかった、というまれな状況を除き、Sun Cluster ソフトウェアの削除には Java Enterprise System アンインストーラを使用しません。

---

|          |                                                                                                                                                                                                                                 |
|----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>注</b> | <p>クラスタの設定後に Java Enterprise System アンインストーラを使用して Sun Cluster ソフトウェアをマシンからアンインストールしようとしても、アンインストーラはアンインストール処理を実行しません。</p> <p>Sun Cluster ソフトウェアをアンインストールできないことを示し、アンインストールする製品から Sun Cluster ソフトウェアを除外するように求めるメッセージが表示されます。</p> |
|----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

---

Sun Cluster ソフトウェアの設定解除とアンインストールについては、Sun Cluster ソフトウェアのマニュアル (<http://docs.sun.com/db/prod/8689?l=ja#hic>) を参照してください。

Sun Cluster ソフトウェアをアンインストールしたら、次の場所にある Java Enterprise System productregistry ファイルから Sun Cluster ソフトウェアに対する参照を削除する必要があります。

```
/var/sadm/install/productregistry
```

---

**警告** productregistry ファイルを編集する前に、ファイルのバックアップを行うことをお勧めします。このファイルには、Java Enterprise System が正常に稼動する上で重要な情報が記録されています。

---

## アンインストールのトラブルシューティング

この節では、Java Enterprise System ソフトウェアのアンインストール時に発生する問題の解決方法について説明します。ここにある情報は、[第9章「インストールに関する問題のトラブルシューティング」](#)にある一般的なトラブルシューティング情報の補足事項です。次の項目について説明します。

ここでは、次の項目について説明します。

- [「アンインストールの手順と依存関係の確認」](#)
- [「ログファイルの検証」](#)
- [「パスワードの確認」](#)
- [「アンインストールのクリーンアップ」](#)
- [「製品レジストリ」](#)
- [「アンインストーラが設定ディレクトリサーバーに接続できない場合」](#)
- [「アンインストーラが見つからない場合」](#)

## アンインストールの手順と依存関係の確認

Java Enterprise System アンインストーラを実行する前に、この章で説明した方法に従ってアンインストールを慎重に準備する必要があります。失敗したアンインストールのトラブルシューティングを行うときは、アンインストーラを起動する前に、1つでも手順を見落としていないか確認するため、以下に示す節をもう一度確認してください。

- [「アンインストーラについて」](#)  
アンインストーラの動作と、アンインストーラの制約について説明します。
- [「共有コンポーネント」](#)



Java Enterprise System の共有コンポーネントに関するアンインストーラの動作について説明します。

- [「製品の相互依存性」](#)

別のコンポーネントのサポートに必要なコンポーネント製品と、別のコンポーネントに依存するコンポーネント製品に関するアンインストーラの動作について説明します。

- [「コンポーネント製品の詳細」](#)

Java Enterprise System の各コンポーネント製品をアンインストールする前に考慮すべき事項について説明します。

- [「アンインストール前の作業」](#)

アンインストーラを実行する前に実行が必要な手順について説明します。

## ログファイルの検証

失敗したアンインストールのトラブルシューティングを行うには、アンインストーラのログファイルと、その他の関連ログファイルを調べることができます。アンインストーラのログファイルは、次の場所に保存されます。

```
/var/sadm/install/logs
```

アンインストーラとインストーラのログファイル、および Java Enterprise System の設定ログとコンポーネント製品のログを調べることは、アンインストールが失敗した原因の特定に役立ちます。

たとえば、インストールログに記録されているパッケージと、アンインストールログに記録されているパッケージを比較することができます。

Java Enterprise System のログファイルについては、[248 ページの「インストールログファイルの検証」](#)を参照してください。

## パスワードの確認

[280 ページの「アンインストーラへの管理者アクセス権の付与」](#)で説明したように、アンインストール時にアンインストーラに管理者アクセス権を付与する必要があります。アンインストール時に指定したユーザー ID とパスワードが正しいことを確認してください。

## アンインストーラが見つからない場合

Java Enterprise System のインストールプログラムは、システム上の次の場所に Java Enterprise System アンインストーラを格納します。

```
/var/sadm/prod/entsys/uninstall
```

アンインストーラがこの場所に存在しない場合は、次のような原因が考えられます。

- このホストには **Java Enterprise System** がインストールされていない
- **Java Enterprise System** アンインストーラが、アンインストーラも含めてすべてのコンポーネント製品をこのホストから削除してしまった  
アンインストール時に、アンインストーラがホスト上の **Java Enterprise System** コンポーネントを検出しなくなった場合は、アンインストーラはホストからアンインストーラ自体をアンインストールする
- インストールが失敗し、アンインストーラがホストにインストールされていない  
この場合は、[298 ページの「アンインストールのクリーンアップ」](#)で説明する方法でシステムを手動でクリーンアップする必要がある
- 失敗したアンインストールの実行中にアンインストーラが削除され、**Java Enterprise System** の一部のコンポーネントがホストに残った  
この場合は、[298 ページの「アンインストールのクリーンアップ」](#)で説明する方法でシステムを手動でクリーンアップする必要がある

## アンインストールのクリーンアップ

アンインストールが失敗した場合は、`pkginfo` コマンドまたは `prodreg` ツールを使用して、インストールされているパッケージを確認することができます。その結果を、[付録 D 「インストール可能なパッケージの一覧」](#)に記載されている **Java Enterprise System** パッケージのリストと比較します。

---

**注**            [278 ページの「アンインストール前の作業」](#)の手順 1 は、システムにインストールされているパッケージを確認する方法について、追加情報を示しています。

---

次に `pkgrm` コマンドを使用して、パッケージを手動で削除することができます。また、アンインストールする **Java Enterprise System** コンポーネント製品によっては、ディレクトリとファイルの削除も必要になります。詳細は、コンポーネント製品のマニュアルを参照してください。

手動クリーンアップが必要であると判断した場合は、次の手順を実行してシステムから Java Enterprise System パッケージを削除します。

### ▶ パッケージを手動でクリーンアップするには

1. 削除が必要なパッケージを特定します。

システム上のパッケージと、付録 D 「インストール可能なパッケージの一覧」に記載されている Java Enterprise System パッケージのリストと比較します。システムにインストールされているパッケージを特定するには、pkginfo または prodreg ユーティリティを使用できます。

2. Java Enterprise System コンポーネント製品の実行中のすべてのプロセスを停止します。

各コンポーネントで停止するプロセスを探す方法については、各コンポーネント製品のマニュアルを参照してください。255 ページの「トラブルシューティングのためのコンポーネント製品の情報」には、各コンポーネント製品に関する情報と、その製品のマニュアルへのリンクが記載されています。

3. 以後のインストールで再利用を考えているカスタム設定データとユーザーデータをバックアップします。

268 ページの「コンポーネント製品の詳細」には、バックアップが必要な設定データとユーザーデータに関する情報が記載されています。詳細については、各コンポーネント製品のマニュアルを参照してください。

4. pkgrm コマンドを使用して、Java Enterprise System コンポーネントパッケージを削除します。
5. 残されているコンポーネント製品ディレクトリと、そこに含まれる以後のインストールで使用しないコンテンツを削除します。
6. 次の場所にある製品レジストリファイルを更新します。

```
/var/sadm/install/productregistry
```

Java Enterprise System のインストーラおよびアンインストーラプログラムは、ホストにインストールされているコンポーネントを特定する上で、このレジストリを使用しています。インストーラとアンインストーラは、インストールまたはアンインストールの完了時に製品レジストリを更新します。

パッケージを手動で削除した場合は、システムにインストールされているソフトウェアを製品レジストリが正しく反映するように、このファイルを手動で更新する必要があります。

7. 次の場所にあるシステムのログファイルをクリーンアップします。

```
/var/sadm/logs
```

ログファイルは、パッケージを手動削除した後のシステムの状態を正しく反映していない可能性があります。

## 製品レジストリ

アンインストールを行う前に、次の場所にある製品レジストリをバックアップします。

```
/var/sadm/install/productregistry
```

Java Enterprise System アンインストーラは、アンインストール時に製品レジストリに基づいてアンインストール対象を決定します。アンインストーラが失敗した場合、クリーンな製品レジストリを使用してアンインストールを再試行しなければならない可能性があります。

### パッケージの手動削除

パッケージを手動で削除した場合、製品レジストリは更新されません。製品レジストリがシステムの状態を正しく反映していないため、あとでアンインストーラを実行したときに問題が生じる可能性があります。このような場合は、Java Enterprise System アンインストーラを使用して再インストールを行い、そのあと Java Enterprise System アンインストーラを再実行します。

## アンインストーラが設定ディレクトリサーバーに接続できない場合

管理サーバーまたは Directory Server をアンインストールする場合、アンインストーラはアンインストーラの実行時にすでに指定されている管理者のユーザー ID とパスワードを使用して設定ディレクトリサーバーに接続しようとします。

アンインストーラが設定ディレクトリサーバーに接続できない、または管理者のユーザー ID とパスワードが無効な場合、アンインストーラは次のエラー通知を表示してアンインストールを続行できないことを示します。

```
指定した管理者 ID とパスワードで設定ディレクトリサーバーに接続できませんでした
```

このエラー通知が表示されたときは、次の手順を実行して問題のトラブルシューティングを行い、アンインストールを完了します。この手順を完了する上で、Java Enterprise System アンインストーラを終了する必要はありません。

---

**注** 次の手順は、Directory Server インスタンスを次の場所に設定したことを前提としています。

```
/var/opt/mps/serverroot/slapd-Dir_Svr_Instance_Name
```

別の場所を指定した場合は、それに合わせて手順の記述を変更してください。

---

▶ **管理サーバーまたは Directory Server のアンインストールに関するトラブルシューティングとアンインストールの完了**

1. 設定ディレクトリをホストしている Directory Server が稼動していることを確認します。たとえば、次のように `slapd` プロセスを検索します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep slapd
```

2. 設定ディレクトリサーバーが稼動していなければ、次の手順を行います。

設定ディレクトリホストにルートとしてログインし、次のコマンドを使用して設定ディレクトリサーバーを起動します。

```
cd /var/opt/mps/serverroot/slapd-Dir_Svr_Instance_Name
./start-slapd
```

3. 設定ディレクトリサーバーが稼動していれば、管理者のユーザー ID とパスワードが正しいことを確認します。

設定ディレクトリサーバーが稼動していて管理者のユーザー ID とパスワードが有効であれば、アンインストール処理を続行することができます。

管理者のユーザー ID とパスワードが無効な場合は、前述のように Java Enterprise System アンインストーラはエラー通知を表示し、処理が中断されます。

4. 管理者の有効なユーザー ID とパスワードが分からないままアンインストールを継続するには、次の方法で Directory Server、管理サーバー、または両方の設定を手動で解除します。

- a. 設定ディレクトリをホストする Directory Server インスタンスを停止します。たとえば、ルート権限を使用して次のように実行します。

```
cd /var/opt/mps/serverroot/slapd-Dir_Svr_Instance_Name
./stop-slapd
```

- b. 管理サーバーと Directory Server のそれぞれに対して次の設定解除プログラムを実行します。

```
/usr/sbin/mpsadmserver unconfigure
/usr/sbin/directoryserver unconfigure
```

設定解除中に、設定ディレクトリサーバーに接続できないことが通知されます。

- c. 「次へ」をクリックして設定解除を続行します。

5. 設定解除プログラムを実行したら、Java Enterprise System アンインストーラに戻ってアンインストール処理を続行します。

管理者のユーザー ID とパスワードの確認があれば、任意の値を入力します。アンインストール中は、これらの値は無視されます。

完了するまでアンインストール処理を続けます。



- 第 11 章 「組織とユーザーのプロビジョニング」
- 第 12 章 「Messaging Server 6.0 のプロビジョニングとスキーマの概念」
- 第 13 章 「シングルサインオン (SSO) の設定」





# 組織とユーザーのプロビジョニング

この章では、Java Enterprise System の組織とユーザーを作成および管理するための作業について、概念レベル (概要レベル) で説明します。これらの組織とユーザーの情報は、Sun ONE コンポーネント製品を使用およびアクセスする際に必要となります。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- [Directory Server](#) について
- [プロビジョニングインタフェースの概要](#)
- [ディレクトリ情報ツリー \(DIT\) について](#)
- [Java Enterprise System ユーザーの管理](#)
- [ユーザーのプロビジョニング、スキーマ、ツールに関する参照情報](#)

## Directory Server について

ここでは、Directory Server と、Java Enterprise System コンポーネント製品のユーザーのプロビジョニングの関係を理解するための基本的な情報を提供します。また、すべてのコンポーネント製品に共通のユーザーをプロビジョニングするという概念について説明するとともに、「システム全体の Java Enterprise System ユーザーアカウント」という概念を紹介します。

## 組織とユーザーのディレクトリの概要

Portal Server、Messaging Server、Calendar Server などの Java Enterprise System コンポーネント製品は、Directory Server 内に、ユーザー情報を LDAP エントリとして格納します。Java Enterprise System の Directory Server は、階層構造を持つ LDAP データベースです。この階層は通常、DIT (ディレクトリ情報ツリー) と呼ばれます。LDAP ディレクトリサーバー内の基本構築ブロックは、「エントリ」と呼ばれます。

DIT は、大半のファイルシステムで使用されているツリーモデルに基づいており、階層の最上位にツリーのルート ( 最初のエントリ ) が配置されます。インストール時に、Directory Server によってデフォルトのディレクトリツリーが作成されます。

ツリーのルートは「ルートサフィックス」と呼ばれます。インストール時に、ディレクトリのルートサフィックスの下に、次の 3 つのサブツリーが格納されます。

- `cn=config`  
ここでの `cn` は **Common Name ( 共通名 )** を表します。このサブツリーには、サーバーの内部設定に関する情報が格納されます。
- `o=NetscapeRoot`  
ここでの `o` は **Organization ( 組織 )** を表します。このサブツリーには、**Sun ONE Administration Server** など、その他の **Sun ONE** コンポーネント製品の設定情報が格納されます。管理サーバーは、認証を行うほか、**Directory Server** の開始と停止など、LDAP 経由では実行できないすべてのアクションを行います。このサブツリーの名前は、この製品の旧バージョンに由来しています。
- `o=userRoot`  
インストール中に、ユーザーデータベースがデフォルトで作成されます。ユーザーデータベースのデフォルト名は、`o=userRoot` です。このデータベースへのデータの追加は、インストール時とインストール後のどちらの段階でも実行できます。

---

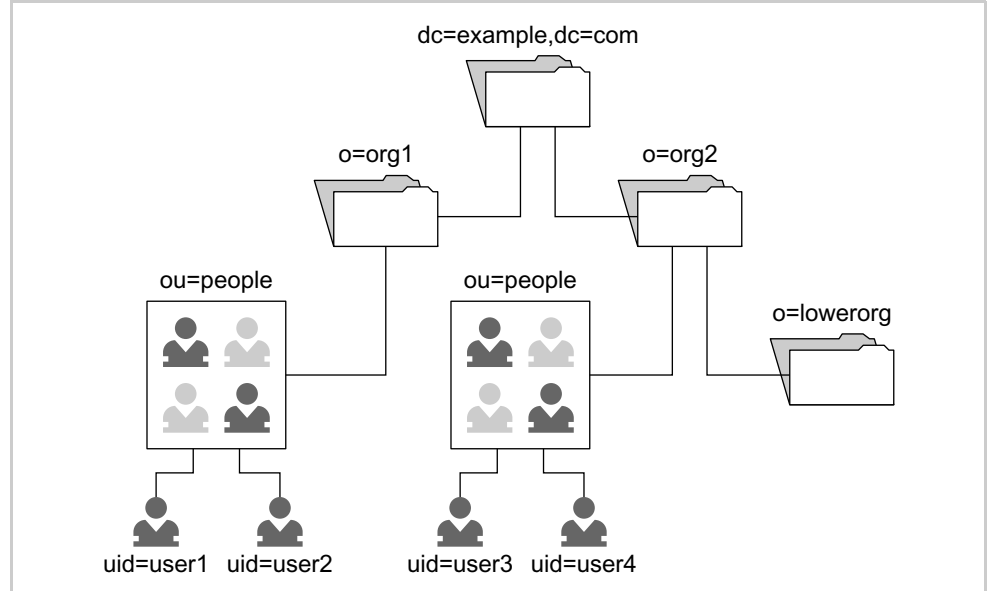
**注**      **Messaging Server** と **Calendar Server** のインストールでは、**Directory Server** セットアップスクリプト、`comm_dssetup.pl` を実行してディレクトリを準備します。このスクリプトは、ユーザー、グループベースのサフィックスの設定、スキーマの種類を選択、DC ルートの設定、ディレクトリに対するその他の処理を行います。

詳細については、[219 ページの「インストール後の Calendar Server の設定」](#) および [226 ページの「インストール後の Messaging Server の設定」](#) を参照してください。

---

次の図は、DIT の例を示しています。この図では、`o=userRoot` サフィックスが `dc=example,dc=com` に変更され、組織の実際の階層を反映するように、別のサブツリーが追加されています。

図 11-1 DIT 構造の例



前の図に示したツリーは、Identity Server と Messaging Server が共有する基本的な Sun ONE LDAP Schema v.2 DIT を表しています。Sun ONE LDAP Schema v.2 は Sun ONE LDAP Schema v.1 に比べ、Identity Server およびその他のサードパーティ製 LDAP 対応アプリケーションとの統合が容易になっています。Sun ONE LDAP Schema v.2 の詳細については、第 12 章「Messaging Server 6.0 のプロビジョニングとスキーマの概念」を参照してください。

Java Enterprise System ユーザーアカウント情報は「ユーザーエントリ」内に格納されます。ユーザーエントリは、307 ページの図 11-1 では uid= で示されています。ユーザーエントリは、dc= で表されるドメインコンポーネントによって組織化されます。組織は o= で示され、組織単位は ou= で示されます。

## Java Enterprise System ユーザーの記述

Java Enterprise System ユーザーという概念には、次の内容が含まれています。

- Identity Server、Portal Server、Messaging Server、Calendar Server、Instant Messaging Server の各アプリケーションを使用できる個人エンドユーザー
- LDAP データベースエン트리内に格納されるエンドユーザーデータ。すべてのコンポーネント製品が同じユーザーエントリを読み書きする、というのが最も単純なシナリオである
- ユーザーエントリに適切な値が設定されている場合にだけコンポーネント製品アプリケーションにアクセスできるエンドユーザー
- コンポーネント製品アプリケーションが必要とするすべてのユーザーデータが収められたユーザーアカウント、つまり 1 つまたは複数の LDAP ユーザーエントリ

### 共通の組織ツリー構造

Java Enterprise System では、すべてのコンポーネント製品が LDAP ユーザーエントリの共通セットを共有することができます。各アプリケーション機能へのアクセス制御が、同じエントリによって実現できます。共通ユーザーエントリとの対話には、Identity Server コンソールおよびその他のプロビジョニングツール、ユーザー管理ツールを使用します。

### Java Enterprise System の利点

Java Enterprise System では、すべてのコンポーネント製品アプリケーションをサポートする 1 つのユーザーアカウントを LDAP に作成することができます。このようなユーザーアカウントにより、重複する情報を持つ複数のユーザーディレクトリを管理する必要がなくなり、そのようなディレクトリの同期も必要なくなるため、システムのコストは大きく削減されます。その結果、管理がより簡単に行えるようになり、システム所有コストの削減が図れます。

# プロビジョニングインタフェースの概要

ユーザーのプロビジョニングとは、Directory Server でエントリの追加、変更、削除を行うことです。ディレクトリエントリ用として用意されているプロビジョニングインタフェースは、次のとおりです。

- Identity Server のコンソールおよびコマンド行ユーティリティ (Sun ONE LDAP Schema v.2 用)
- LDAP コマンド行ユーティリティ
- Directory Server への Sun ONE 管理サーバーのユーザーインタフェース

コンポーネント別のプロビジョニングツールの一覧については、[321 ページの「ユーザーのプロビジョニング、スキーマ、ツールに関する参照情報」](#)を参照してください。

## ディレクトリ情報ツリー (DIT) について

ここでは、Java Enterprise System の配備全体の一部として DIT を計画する場合に必要な情報について説明します。

### コンポーネント製品の DIT に関する考慮点

大規模な Java Enterprise System 配備を計画する場合は、各コンポーネント製品の LDAP 要件を理解する必要があります。ここでは、これを理解するための背景情報を提供します。

Java Enterprise System は、ディレクトリサーバーに対応した、次の 2 つの基本テクノロジーが結合することによって生まれました。

- Sun ONE Calendar Server と Sun ONE Messaging Server を含む通信コンポーネント製品
- Sun ONE Portal Server, Secure Remote Access と Sun ONE Instant Messaging を含む Sun ONE Portal Server テクノロジーと Sun ONE Identity Server テクノロジー

これらのテクノロジーとコンポーネント製品の間には、Directory Server の使用方法に関して微妙な違いがあります。次の表を参考にしながら、この微妙な違いに対する理解を深め、配備計画を立ててください。

表 11-1 DIT の計画に関する考慮点

| 考慮点                                               | Identity Server, Portal Server, Secure Remote Access、および Instant Messaging                                                                              | Messaging Server および Calendar Server                                                                                                                                        |
|---------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 通信                                                | Directory Server を抽象化する Identity Server API 層を通じて通信する                                                                                                   | Directory Server と直接通信する                                                                                                                                                    |
| アイデンティティ依存                                        | 実行時要件の 1 つ。アイデンティティはこれらすべてのコンポーネント製品の基盤となっている                                                                                                           | シングルサインオン使用時のみ。両製品は実行時に、Directory Server と直接通信する                                                                                                                            |
| 継承                                                | Identity Server の組織およびロールの属性値継承メカニズムを積極的に活用している。ディレクトリレベルの COS ( サービスクラス ) およびロールには、Identity Server API 経由で間接的にアクセスする                                   | Identity Server の意味での継承は存在しない。ただし両製品は、Directory Server の COS ( サービスクラス ) およびロールを明示的に使用する                                                                                    |
| セッション管理                                           | すべての製品が同一の Identity Server ユーザーセッションを共有する                                                                                                               | 両製品は、内部ユーザーセッションを保持し、それらの内部セッションと Identity Server SSO メカニズムとの同期を取る                                                                                                          |
| アクセス制御                                            | Directory Server アクセス制御ルールを抽象化する Identity Server ポリシー層を通じて処理される                                                                                         | 明示的な Directory Server アクセス制御ルールを使って管理される                                                                                                                                    |
| 組織の考慮点                                            | 機能するには、Identity Server 管理による People コンテナが必要となる (ou=People)                                                                                              | 特定の組織で「メールアドレス」の概念が必要                                                                                                                                                       |
| ディレクトリルート                                         | 単一の DIT ルートだけを認識する                                                                                                                                      | 複数の DIT ルートを認識する                                                                                                                                                            |
| DIT                                               | 1 つのディレクトリルートにある単一の DIT 上で動作する                                                                                                                          | 異なるディレクトリルートにある複数の DIT 上で動作する (たとえば、アドレス帳や Sun ONE LDAP Schema v.1 のドメインなど)                                                                                                 |
| Sun ONE LDAP Schema v.1 対 Sun ONE LDAP Schema v.2 | Identity Server は単一の DIT を持つ Schema v.2 を使用し、Schema v.2 互換オブジェクトクラスおよび属性を追加すると、Schema v.1 スタイルの DIT もサポートできる。ただし、Schema v.2 は、単一 DIT への統合を念頭において設計されている | 両方のスキーマモデルとハイブリッド互換モデルを完全にサポートする。スキーマモデルは、Directory Server におけるメールアドレスの設定方法、Messaging Server と Calendar Server によるメールアドレスの解決方法、および管理される DIT の数に影響する。この章で示す例は Schema v.2 である |

表 11-1 DIT の計画に関する考慮点 (続き)

| 考慮点      | Identity Server, Portal Server, Secure Remote Access、および Instant Messaging                                    | Messaging Server および Calendar Server                                                                                                                                                                                                            |
|----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ユーザーの一意性 | ユーザーの検索は、Identity Server のログインページではかの組織を指定しない限り、デフォルトの組織内で実行される。ユーザーは、一意な DN を持つ場合に Identity Server 内で真に一意となる | 一意性はドメイン内で常に評価される。Schema v.1 と Schema v.2 の両方で、各ドメインは最終的にはディレクトリ内のサブツリーに解決される。各ドメインのサブツリー内で、特定の一意の ID は 1 つのユーザーエントリ以上に表れてはならず、そのドメイン内の特定の電子メールアドレスも 1 つのユーザーエントリ以上に表れてはならない。Schema v.2 プロビジョニングツールでは、一意の ID 属性の一意性を確実にするために、明示的に指定した名前空間が必要となる |

## シングルサインオン (SSO) とユーザー

コンポーネント製品間の SSO をテストするには、各アプリケーションでテストユーザーをプロビジョニングする必要があります。ユーザーは、ログインしてアプリケーションを使用できる場合にだけ SSO を利用できます。

共有ディレクトリ構造でなくても、Java Enterprise System サーバー間で SSO を有効にすることができます。ただし、共有エントリと共有属性値を持つことで、システムの複雑さが軽減され、SSO の扱いも容易になります。異なるディレクトリサーバーを使用する Sun One アプリケーション間でも、SSO は正常に動作します。ただし、共有属性値 (つまり、ユーザーネーミング属性である cn=、uid= など) が 2 つのデータベース間で異なっている場合、ネーミングの問題を回避するための処置を施す必要があります。

# Java Enterprise System ユーザーの管理

新しいユーザーを作成するには、新しいユーザーエントリを LDAP データベースに追加し、次に各 Sun ONE アプリケーションを操作できるようにそのエントリを設定します。

---

**注** ユーザーエントリを作成しただけでは、その新しいユーザーはアプリケーションを利用できません。特定のアプリケーションを利用できるようにするには、そのアプリケーション用にエントリを設定する必要があります。各 Sun ONE アプリケーションにはそれぞれ独自の要件があります。ここでは、それらの要件について簡単にまとめます。

---

すべてのアプリケーションで利用可能なユーザーエントリを作成および設定するためのグラフィカルツールおよびコマンド行ツールが、各種用意されています。詳細については、[321 ページの「ユーザーのプロビジョニング、スキーマ、ツールに関する参照情報」](#)を参照してください。

Java Enterprise System ユーザーを管理するには、LDAP で組織ツリー構造を作成し、その組織ツリーにユーザーを追加し、さまざまな Sun ONE アプリケーションにアクセスできるようにそのエントリを設定する必要があります。

基本的な集中ユーザー管理の場合、次の 4 つの手順を実行します。

1. ユーザーと組織の計画
  - a. ユーザーの組織構造の決定
  - b. ユーザーがアクセスするアプリケーションの決定
  - c. 各アプリケーションのデータ要件の確認
2. ユーザーのインストール (適切な LDAP ツリーの作成)
3. ユーザーの設定 (組織エントリをマーキングすることで、アプリケーションが LDAP ツリーを正しく使用できるようにする)
4. ユーザーの管理
  - a. ユーザーエントリの作成
  - b. アプリケーションに正しくアクセスできるようにするためのユーザーエントリのマーキング

次に、これらの各手順について、より詳しく説明します。



## ユーザーと組織の計画

ユーザーと組織を計画するには、次の概要レベルの手順を実行します。

1. 次の重要な LDAP ルールを確認します。
  - **LDAP データベース**：組織とユーザーの情報が格納されたデータストアとその関連プロセス
  - **ツリー構造**：LDAP データベースは、組織、ドメインコンポーネント、リソース、およびユーザーからなる階層構造である
  - **エントリ**：データはエントリ内に格納される
  - **スキーマ**：LDAP エントリに設定可能な値の型を定義する
  - **オブジェクトクラス**：エントリの目的とそのエントリで有効な属性を定義する特殊なデータ型
  - **属性**：不可分なデータ型
  - **ユーザーのプロビジョニング**：ディレクトリ構造を計画した後で、オブジェクトクラスと属性値をエントリに割り当てる処理

2. 詳細については、『Sun ONE Directory Server 5.2 Getting Started Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6696-10>) を参照してください。

3. Sun ONE コンポーネント製品による LDAP の使用方法を確認します。

すべてのコンポーネント製品は、特定のオブジェクトクラスと属性値に本質的に依存しています。製品ごとに特定のオブジェクトクラスを、組織エントリ (o=) とユーザーエントリ (uid=) に追加する必要があります。オブジェクトクラスには、次の 2 つの目的があります。

- 特定のエントリをアプリケーションから利用可能なエントリとして「マーキング」します。
- 特定のエントリ内に新しい属性を設定できるようにします。

次の状態になるまで、ユーザーはアプリケーションにアクセスできません。

- 親組織のエントリに必要な値が追加される (通常は、インストーラによって 1 度実行される)

ホストされた組織とドメインの場合、Identity Server 内に新しい組織を作成するたびに、対応するサービスをドメインに割り当て、そのサービスに固有のオブジェクトクラスと属性を使用してそのドメインをマーキングする必要がある。インストーラがこの処理を行うのは、デフォルトの (最初の) 組織に対してだけである

- 各自のユーザーエントリに必要な値が追加される (これは各ユーザーによって行われる)

次の表は、正しいオブジェクトクラスを特定のユーザーエントリに追加した場合の効果を示しています。ここでは、異なるオブジェクトクラスを持つ、2つのユーザーエントリを前提としています。Identity Server、Messaging Server、および Portal Server を利用するための正しいエントリ値を持つのは、user2 だけです。

表 11-2 ユーザーエントリとオブジェクトクラスの例

| ユーザー<br>エントリ | 一般的なオブジェクトクラス                                                                                                    | 利用可能なサービス |           |          |        |
|--------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|-----------|----------|--------|
|              |                                                                                                                  | Identity  | Messaging | Calendar | Portal |
| user1        | 基本となるディレクトリ<br>サーバーのオブジェクトク<br>ラス                                                                                |           |           |          |        |
| user2        | 基本となるディレクトリ<br>サーバーのオブジェクトク<br>ラス、および Identity<br>Server、Messaging Server、<br>Portal Server の各サーバー<br>のオブジェクトクラス | ○         | ○         |          | ○      |

各コンポーネント製品が LDAP から必要とする情報については、それぞれの製品のマニュアルを参照してください。317 ページの表 11-4 は、これらの要件を示しています。

#### 4. 組織を決定します。

Java Enterprise System のインストール時とインストール後の設定時に、ルートサフィックス、LDAP ルート、またはユーザーグループ組織を指定する必要があります。すべてのコンポーネント製品を同じユーザーエントリで動作させるには、すべての製品が同じディレクトリツリーを共有するように設定する必要があります。

ほとんどの製品では、組織名やディレクトリツリーの深さは自由に設定できます。

#### 5. インストールするコンポーネント製品を決定します。

インストールする製品を選択するときには、選択した共有ツリー構造に注意してください。コンポーネント製品の種類に応じて、Java Enterprise System インストーラまたはコンポーネント製品のインストール後の設定スクリプトに LDAP 値を入力します。

**注** インストーラの値を調整する必要があります。Java Enterprise System のインストール後設定ツールを使用することで、ほかのコンポーネント製品とは異なる独自の DIT 構造を、自由に指定できます。すべての製品が共通のユーザーエントリを共有するようにインストールする場合は、個々のコンポーネントの設定段階で DIT 固有値を調整する必要があります。

次の表は、インストーラの LDAP 値の例を示しています。「入力値の例」の列で、ルートサフィックスがすべてのコンポーネント製品で同じになっている点に注意してください。この表では、Default Organization の値は default domain によって置き換えられます。

表 11-3 インストーラの入力値の例

| コンポーネント製品         | 設定方法                          | 入力フィールド                   | デフォルト                     | 入力値の例                              |
|-------------------|-------------------------------|---------------------------|---------------------------|------------------------------------|
| Identity Server   | Java Enterprise System インストーラ | ベース DN                    | デフォルトの DNS ドメイン           | dc=example,dc=com                  |
| Portal Server     | Java Enterprise System インストーラ | (Identity Server から継承)    | Identity Server のベース DN   | dc=example,dc=com                  |
| Instant Messaging | コンポーネント製品のスクリプト               | (暗黙で Identity Server と同じ) | (暗黙で Identity Server と同じ) | (暗黙で Identity Server と同じ)          |
| Messaging Server  | コンポーネント製品のスクリプト               | ベース DN                    | ルート                       | dc=example,dc=com                  |
| Messaging Server  | コンポーネント製品のスクリプト               | ユーザーグループ組織                | デフォルトのメール組織               | o=default domain,dc=example,dc=com |
| Calendar Server   | コンポーネント製品のスクリプト               | ユーザーグループ組織                | デフォルトの組織                  | o=default domain,dc=example,dc=com |

- 
- 注** configure ユーティリティは、2 レベルの組織ツリー `o=Default Organization,dc=example,dc=com` を提供します。Messaging Server、Calendar Server はどちらも、このタイプの組織ツリーを必要としません。
- これら 2 つのレベルが必要となるのは、同じ配備で追加のメールアドレスやカレンダードメインを計画している場合です。ルートノードでドメインを定義すると、そのルートの下に追加のドメインを作成できなくなります。それを許可すると、Sun ONE LDAP Schema v.2 で禁止されているネストされた名前空間が生じるためです。
- 初期の設定手順が終了すると、任意の LDAP 構造を定義できます。
- 

## コンポーネント製品のインストールと設定

前述の DIT の固有値は、インストール時とインストール後の作業で指定します。この値は、潜在的には次の 6 箇所指定されます。

1. Java Enterprise System インストーラの実行
2. `/opt/SUNWmsgsr/lib` ディレクトリ内の `comm_dssetup.pl` スクリプトの実行
3. `ms_svr_base/sbin/` ディレクトリ内の Messaging Server configure スクリプトの実行
4. `cs_svr_base/SUNWics5/cal/sbin` ディレクトリ内の Calendar Server `csconfigurator.sh` ユーティリティの実行
5. `ims_svr_base/SUNWiim/opt` ディレクトリ内の Instant Messaging 設定ツールの実行
6. 管理サーバー内の Messaging 用 (設定ツールの要件)

コンポーネント製品のインストールと設定については、このマニュアルを参照してください。

## ユーザーのプロビジョニング

ユーザーのプロビジョニングでは、ユーザーおよび組織でアプリケーションを操作できるように、データベースエントリに必要な値を設定します。エントリに必要なオブジェクトクラスや属性値が設定されていない場合、そのユーザーはアプリケーションを利用できません。

各製品に対してプロビジョニングを行うには、次の2つの概要レベルの手順を実行する必要があります。

1. すべてのアプリケーションから利用できるデータベース構造を準備します。
2. 各アプリケーションの利用に必要なすべてのデータがユーザーエントリに設定されていることを確認します。具体的には、次のLDAP データベース操作を行います。
  - a. 組織エントリをマーキングします。また必要であれば、その他の組織も作成します。
  - b. ユーザーエントリをマーキングします。これは、新しいユーザーエントリを作成するか、既存のユーザーエントリを変更するかで行えます。

### データ要件の確認

次の表は、各コンポーネント製品のオブジェクトクラスと属性の要件を示しています。ユーザーが特定のアプリケーションを利用できるようにするには、そのアプリケーションの欄にチェックマークが付いているすべてのオブジェクトクラスを、そのユーザーのエントリに追加する必要があります。

表 11-4 コンポーネント製品ごとのオブジェクトクラスと属性の要件

| エントリの種類      | オブジェクトクラス                   | Messaging Server      | Calendar Server       | Identity Server       |
|--------------|-----------------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 組織<br>dc=、o= | Domain                      | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |                       |
|              | InetDomain                  | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
|              | Organization                | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |                       |
|              | SunManagedOrganization      | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
|              | SunNameSpace                | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
|              | MailDomain                  | <input type="radio"/> |                       |                       |
| 組織単位<br>ou=  | IcsCalendarDomain           |                       | <input type="radio"/> |                       |
|              | Iplanet-am-managed-org-unit |                       |                       | <input type="radio"/> |

表 11-4 コンポーネント製品ごとのオブジェクトクラスと属性の要件 ( 続き )

| エントリの種類     | オブジェクトクラス                   | Messaging Server | Calendar Server | Identity Server |
|-------------|-----------------------------|------------------|-----------------|-----------------|
| People      | Iplanet-am-managed-org-unit |                  |                 | ○               |
| ou=people   |                             |                  |                 |                 |
| ユーザー        | person                      | ○                | ○               |                 |
| cn=,uid= など | InetUser                    | ○                | ○               | ○               |
|             | OrganizationalPerson        | ○                | ○               |                 |
|             | InetOrgPerson               | ○                | ○               | ○               |
|             | IpUser                      | ○                | ○               |                 |
|             | UserPresenceProfile         | ○                |                 |                 |
|             | InetMailUser                | ○                |                 |                 |
|             | InetLocalMailRecipient      | ○                |                 |                 |
|             | IcsCalendarUser             |                  | ○               |                 |
|             | Inetadmin                   |                  |                 | ○               |
|             | Iplanet-am-managed-person   |                  |                 | ○               |
|             | Iplanet-am-user-service     |                  |                 | ○               |
|             | iplanetPreferences          |                  |                 | ○               |

**注** Portal Server と Instant Messaging は、Identity Server に基づいているため、自動的にすべての Identity Server 属性を必要とします。

Portal Server はユーザーデータを同じ LDAP エントリ内に保存しますが、Portal Server ユーザーをプロビジョニングするために推奨される方法は、Identity Server コンソール、または amadmin コマンドと Portal Server dpadmin コマンドを使う方法です。

Portal Server は Identity Server の組織およびロールの継承メカニズムを活用するため、ユーザーごとの設定は、ほとんど必要ありません。LDAP または Identity Server を使用していったん Identity Server ユーザーが作成されると、ユーザーエントリはほとんどの属性値をそれらのロールまたは組織から継承します。

大半のアプリケーションでは、上記のオブジェクトクラスのほかに追加の属性を設定しないと、ユーザーが「アクティブ」になりません。

これらのオブジェクトクラスの一部は、コンポーネント製品によって定義されます。それ以外のオブジェクトクラスは Directory Server 自体と共に提供されるインターネット標準です。たとえば、InetOrgPerson はユーザーエントリベースのオブジェクトクラスで、uid、mail、givenName などの属性を定義します。

すべての製品がコアクラスまたは共有クラスを必要とするわけではありません。各製品で最低限必要なオブジェクトクラスとそれらの使用方法については、次の各コンポーネント製品のマニュアルを参照してください。

- 『Sun ONE Messaging and Collaboration 6.0 Schema Reference Manual』  
(<http://docs.sun.com/doc/816-6710-10>)
- 『Sun ONE Identity Server 6.1 Installation and Configuration Guide』  
(<http://docs.sun.com/doc/816-6771-10>) の第 5 章「Installing Identity Server Against an Existing Directory Server」
- 『Sun ONE Portal Server 6.2 Administrator's Guide』  
(<http://docs.sun.com/doc/816-6748-10>)

## はじめに - LDAP 管理オプションの選択

317 ページの表 11-4 に示すオブジェクトクラスは、LDAP データベース内の適切なエントリに追加する必要があります。すべての製品が同じディレクトリ構造に対してインストールされるように設定した場合、必要な値の大部分は組織エントリに追加されます。ただし、インストールの順序によっては、すべてのユーザーをサポートするために必要な値の一部が追加されていない可能性があります。ユーザーのプロビジョニングを開始する前に、組織ツリーが正しくプロビジョニングされていることを必ず確認してください。

次の表は、LDAP エントリを表示、作成、変更するための 4 つの選択肢を示しています。ldapmodify コマンドによるユーザーの変更方法の具体例については、451 ページの「LDAP 変更コマンドによるユーザーのプロビジョニング」を参照してください。

表 11-5 LDAP エントリを表示、作成、変更するための選択肢

| 複雑さのレベル | ツールおよび方法                                            | 最少のツールセット数 <sup>1</sup> | 参照する Sun ONE マニュアル                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|---------|-----------------------------------------------------|-------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 初級      | Identity Server コンソール、<br>または amadmin と<br>comadmin | 2                       | 『Sun ONE Identity Server 6.1 Administration Guide』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/816-6773-10">http://docs.sun.com/doc/816-6773-10</a> )<br>と『Sun ONE Messaging and Collaboration 1.0 User Management Utility Installation and Reference Guide』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/817-4216-10">http://docs.sun.com/doc/817-4216-10</a> ) |

表 11-5 LDAP エントリを表示、作成、変更するための選択肢 ( 続き )

| 複雑さのレベル | ツールおよび方法                                                         | 最少のツール<br>セット数 <sup>1</sup> | 参照する Sun ONE マニュアル                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|---------|------------------------------------------------------------------|-----------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 中級      | Sun ONE Administration Server (LDAP データベース エントリを直接操作するグラフィカルツール) | 1                           | 『Sun ONE Directory Server 5.2 Getting Started Guide』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/816-6696-10">http://docs.sun.com/doc/816-6696-10</a> )<br>の第 3 章「A Quick Look at Directory Server Console」に記載されている「Managing Entries」                                                                                                                                                                                                                                |
| 上級      | <code>ldapmodify ldif_input_file</code>                          | 1                           | 『Sun ONE Directory Server 5.2 Getting Started Guide』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/816-6696-10">http://docs.sun.com/doc/816-6696-10</a> )<br>の第 4 章「A Quick Look at Directory Server Command-Line Utilities」に記載されている「Adding, Changing and Deleting Entries」                                                                                                                                                                                            |
| エキスパート  | Identity Server とカスタム サービス                                       | 1                           | 『Sun ONE Identity Server 6.1 Administration Guide』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/816-6773-10">http://docs.sun.com/doc/816-6773-10</a> )<br>と『Sun ONE Identity Server 6.1 Customization and API Guide』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/816-6774-10">http://docs.sun.com/doc/816-6774-10</a> )<br>の第 6 章「Service Management」に記載されている「Service Definition」<br><br>詳細については、445 ページの「Identity Server サービスによる Java Enterprise System ユーザープロビジョニングの例」を参照 |

1. 各コンポーネント製品のツールセットは、そのコンポーネント製品に関係するユーザーエントリだけを変更する。この方法で Java Enterprise System ユーザーエントリを管理するには、複数の製品のツールを実行する必要がある

**注** Identity Server では、ユーザーエントリ以外に対する `ldif` 操作は推奨されていません。



# ユーザーのプロビジョニング、スキーマ、ツールに関する参照情報

ここでは、Calendar Server、Identity Server、Messaging Server、Portal Server 向けに用意されている、プロビジョニングとスキーマに関するマニュアルとツールの参照情報を提供します。

## コンポーネント製品のマニュアル

表 11-6 は、Java Enterprise System および Sun ONE コンポーネント製品の各マニュアルに含まれる情報のうち、ユーザーのプロビジョニングとスキーマに関する問題の理解に必要な情報とその場所を示しています。

表 11-6 コンポーネント製品のプロビジョニングとスキーマに関するマニュアル

| マニュアルのタイトル                                                                                                                                             | 章と節                                                             | 内容                                                                                                                                                                                       |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 『Sun ONE Identity Server 6.1 Migration Guide』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/816-6771-10">http://docs.sun.com/doc/816-6771-10</a> )             | 第 3 章「Configuring Identity Server with a Provisioned Directory」 | ユーザーデータが格納された既存のディレクトリに対して Identity Server をインストールする手順について説明している。また、既存のディレクトリ情報ツリー (DIT) に正しくアクセスできるように Identity Server を設定する方法や、既存の Directory Server やディレクトリエントリに必要な変更を加える方法についても説明している |
| 『Sun ONE Identity Server 6.1 Customization and API Guide』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/816-6774-10">http://docs.sun.com/doc/816-6774-10</a> ) | 第 6 章「Service Management」                                       | サービスの定義方法、XML ファイルの構造、およびサービス管理アプリケーションプログラミングインタフェース (API) について説明している                                                                                                                   |

表 11-6 コンポーネント製品のプロビジョニングとスキーマに関するマニュアル (続き)

| マニュアルのタイトル                                                                                                                                                                                      | 章と節                                                                                               | 内容                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 『Sun ONE Messaging and Collaboration 1.0 User Management Utility Installation and Reference Guide』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/817-4216-10">http://docs.sun.com/doc/817-4216-10</a> ) | 第3章「Command-Line Utilities」                                                                       | このマニュアルは、Sun ONE Messaging and Collaboration 用のユーザー管理ユーティリティをインストールおよび設定する方法について説明している。また、ユーザー管理ユーティリティのコマンド (commadmin) についても説明しており、各コマンドの構文や例が含まれている。ユーザー管理ユーティリティは、Identity Server 6.1 を使用する Messaging Server と Calendar Server のユーザー、グループ、ドメイン、リソースをプロビジョニングするためのコマンド行ツールのセットである。                                                                               |
| 『Sun ONE Messaging and Collaboration 6.0 Schema Reference Manual』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/816-6710-10">http://docs.sun.com/doc/816-6710-10</a> )                                  | 第1章「Overview」に記載されている「Data Model for Sun ONE LDAP Schema, v.2」                                    | Sun ONE Messaging Server または Sun ONE Calendar Server を LDAP を使ってプロビジョニングする必要がある場合は、このマニュアルを参照する。このマニュアルの対象読者は次のとおり <ul style="list-style-type: none"> <li>• LDAP ディレクトリ内のメッセージングおよび共同作業製品エントリと、ユーザー、グループ、ドメインの既存情報源 (企業データベースや勘定システムなど) との間のインタフェースとして機能するカスタムプロビジョニングツールを開発するシステム設計者</li> <li>• ドメイン、ユーザー、グループ、またはリソースのエントリを LDAP を使って作成する方法を知りたいサイト管理者</li> </ul> |
| 『Sun ONE Calendar Server 6.0 Administrator's Guide』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/816-6708-10">http://docs.sun.com/doc/816-6708-10</a> )                                                | 第2章「Managing Calendar Server Users and Calendars」に記載されている「Provisioning New Calendar Server Users」 | 新しい Calendar Server ユーザーのプロビジョニングについて次の情報を提供している <ul style="list-style-type: none"> <li>• ディレクトリサーバー要件</li> <li>• カレンダの識別子 (calid)</li> <li>• 特定ユーザーがカレンダー機能に対して有効になっているかどうかのチェック</li> <li>• 新しいユーザーのプロビジョニング</li> <li>• 新しいカレンダーの作成</li> </ul>                                                                                                                     |

表 11-6 コンポーネント製品のプロビジョニングとスキーマに関するマニュアル ( 続き )

| マニュアルのタイトル                                                                                                                                    | 章と節                   | 内容                                                                                     |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------|----------------------------------------------------------------------------------------|
| 『Sun ONE Calendar Server 6.0 リリースノート』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/817-4615-10?l=ja">http://docs.sun.com/doc/817-4615-10?l=ja</a> )  | 「新しいバージョンの LDAP スキーマ」 | このマニュアルは、Schema v.2 のサポートの存在を指摘し、『Messaging Server 6.0 Schema Reference Manual』を参照している |
| 『Sun ONE Messaging Server 6.0 リリースノート』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/817-4622-10?l=ja">http://docs.sun.com/doc/817-4622-10?l=ja</a> ) | リリースノート全体             | このマニュアルは、commadmin ユーティリティの最新の開発について説明している                                             |

## コンポーネント製品のプロビジョニングツール

次の表は、Sun ONE コンポーネント製品のプロビジョニングツールについて説明しています。

表 11-7 コンポーネント製品のプロビジョニングツール

| コンポーネント製品                            | ツール                  | 説明                                                                                                                                                               |
|--------------------------------------|----------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Calendar Server および Messaging Server | commadmin            | ユーザー、グループ、ドメイン、組織の異なる通信サービスを管理できる。手動プロビジョニングでは、ldapmodify および Identity Server サービスも利用できる                                                                         |
| Directory Server                     | ldapmodify           | ldapmodify コマンドを使用することで、ディレクトリコンテンツを追加、編集、削除することができる。サーバーの設定エン트리と、ユーザーエン트리内のデータを管理するときは、ldapmodify を使用する。ldapmodify を使用して、1 つまたは複数のディレクトリを一括管理するスクリプトを記述することができる |
|                                      | Sun ONE Server コンソール | Sun ONE Server コンソールを使用して、組織で使用する Sun ONE ソフトウェアをグラフィカルインタフェースを通じて管理することができる                                                                                     |

表 11-7 コンポーネント製品のプロビジョニングツール ( 続き )

| コンポーネント製品       | ツール                   | 説明                                                                                                                                                              |
|-----------------|-----------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Identity Server | amadmin               | amadmin コマンドを使用して XML サービスファイルを Directory Server にロードし、DIT を更新することができる。また、amadmin コマンドを使用して、DIT のバッチ管理タスクを実行することもできる                                            |
|                 | Identity Server コンソール | Identity Server コンソールを使用して、DIT の更新に使用する XML をグラフィカルに表示することができる<br><br>注 ) amadmin コマンドの代わりに ldapmodify コマンドを使用することもできる                                          |
| Portal Server   | dpadmin               | ディスプレイプロファイルドキュメントからのディスプレイプロファイルオブジェクトの取得、追加、変更、削除を有効にする。ディスプレイプロファイルオブジェクトとの対話は、すべてネイティブ XML 形式で行う必要がある<br><br>dpadmin コマンドは、常に Identity Server ツールと併用する必要がある |

# Messaging Server 6.0 のプロビジョニング とスキーマの概念

この章では、Messaging Server 6.0 用のプロビジョニングの選択について説明し、Sun ONE LDAP Schema v.2 の概念とテクノロジーの理解に役立つ情報を提供します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- LDAP ディレクトリ情報ツリー (DIT) と Messaging Server
- Messaging Server 6.0 用のスキーマの選択
- 適切なプロビジョニングツールの確認
- Schema v.2 のネイティブモードと互換モードの選択
- ネイティブモードと互換モードのデータモデル
- 名前空間の宣言
- 検索テンプレート
- グループ (メーリングリスト)
- サービスクラス (CoS)

# LDAP ディレクトリ情報ツリー (DIT) と Messaging Server

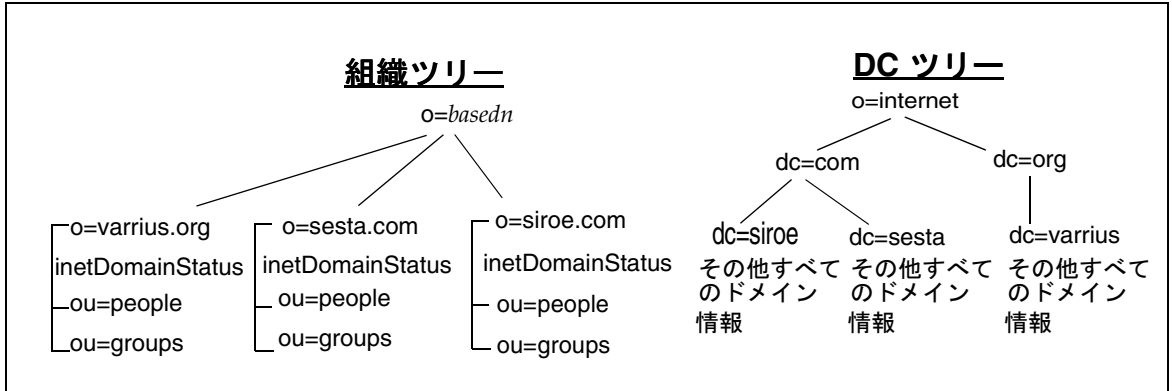
DIT は、ドメイン、サブドメイン、ユーザー、グループのノードを持つツリー構造で LDAP エントリを組織化する方法の 1 つです。Messaging Server の従来のバージョンでは、関連するすべてのドメイン属性を持つドメインノードを含んだ DC ツリーと、ユーザーとグループのすべての属性を持つドメインノードを含んだ組織ツリーの 2 つのツリー構造を使用していました。327 ページの図 12-1 の上半分は、このような DIT 構造を示しています。この構造を利用することで、DC ツリーに定義されているエイリアスによって、複数の DC ツリーノードが同じ組織ツリードメインノードを参照することができました。

Messaging Server 6.0 では、DC ツリーが存在しない 1 つのツリー構造が導入されました。さらに、すべてのドメイン情報は組織ツリー内のドメインノードに保持されます。2 ツリーのモデルもサポートされますが、333 ページの「[Schema v.2 のネイティブモードと互換モードの選択](#)」で説明する変更が加えられました。

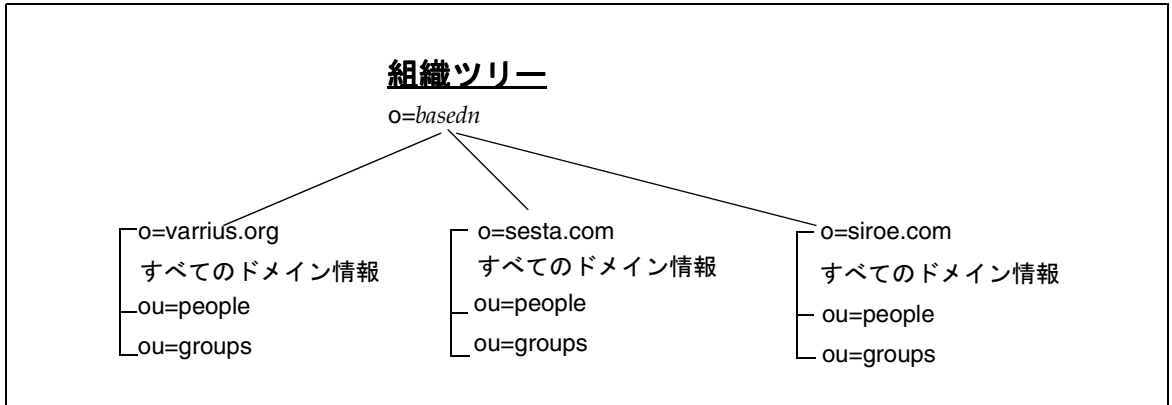
327 ページの図 12-1 の下半分は、1 ツリーによる LDAP 構造を示しています。新しい 1 DIT の構造では、エイリアス設定は全体的に異なる方法で処理されます。特に、1 ツリーの表現では、ドメイン情報がどこに配置されるかに注意してください。

図 12-1 LDAP 構造のネイティブモードと互換モードの比較

## 2 ツリーの構造



## 1 ツリーの構造



# Messaging Server 6.0 用のスキーマの選択

Messaging Server 6.0 では、次の 3 種類のスキーマを選択できます。

- [Sun ONE LDAP Schema v.2 のネイティブモード](#)
- [Sun ONE LDAP Schema v.2 の互換モード](#)
- [Sun ONE LDAP Schema v.1](#)

---

**注** Java Enterprise System インストーラには、Sun ONE LDAP Schema v1 または v2 のサポートをユーザーが選択するオプションが用意されていません。Messaging Server 6.0 で Sun ONE LDAP Schema v.2 サポートを利用するには、Identity Server と Directory Server をインストールする必要があります。現在、Directory Server に v.2 サポートを組み込む唯一の方法は、Identity Server をインストールすることです。

---

## Sun ONE LDAP Schema v.2 のネイティブモード

既存の iPlanet™ Messaging Server がインストールされていない場合の新しいカスタマイズインストールのデフォルトのモードは、Sun ONE LDAP Schema v.2 です。これは、Messaging Server 6.0 をインストールする前に Identity Server 6.1 がインストールされていることを前提としています。

既存の iPlanet Messaging Server がインストールされている環境でもこのモードを選択できますが、LDAP データベースを 1 ツリーの設計に移行する必要があります。

プロビジョニングと管理のためのコマンド行インタフェースが用意されています。LDAP プロビジョニングを行うこともできます。

## Sun ONE LDAP Schema v.2 の互換モード

既存の iPlanet Messaging Server がインストールされている環境では、Sun ONE LDAP Schema v.2 の互換モードを代わりに使用することができます。このモードでは、1 ツリーの設計に移行する必要はありません。すでに使用している 2 ツリーの設計をそのまま利用できます。この場合も、Messaging Server 6.0 をインストールする前に Identity Server 6.1 がインストールされていることが前提となります。

プロビジョニングと管理のためのコマンド行インタフェースが用意されています。LDAP プロビジョニングを行うこともできます。



# Sun ONE LDAP Schema v.1

Identity Server がインストールされていない場合、新しいカスタマイズインストールのデフォルトのモードは Sun ONE LDAP Schema v.1 となります。Sun ONE LDAP Schema v.1 では、2 ツリーの LDAP 設計をインストールする必要があります。

既存の iPlanet Messaging Server がインストールされている場合は、Sun ONE LDAP Schema v.1 を使用し続け、プロビジョニングと管理、または LDAP プロビジョニングにグラフィカルユーザーインターフェースをそのまま利用することができます。

---

注 このマニュアルでは、Sun ONE LDAP Schema v.2 の LDAP プロビジョニングだけについて説明します。

---

## 適切なプロビジョニングツールの確認

使用するスキーマモデルを決定したら、次の説明を参考に、適切なプロビジョニングツールと参照するマニュアルを決定します。

ここでは、次の項目について説明します。

- [プロビジョニングの組み合わせ](#)
- [スキーマモデルの決定](#)
- [プロビジョニングツールの決定](#)
- [プロビジョニングに関する情報の参照先](#)

## プロビジョニングの組み合わせ

[330 ページの表 12-1](#) は、選択したスキーマ、使用できるプロビジョニングツール、それぞれに適したマニュアルの組み合わせを示しています。表の後の各項では、それぞれの選択肢について説明します。

この表の最初の列は、Messaging Server の従来のバージョン (iPlanet Messaging Server 5.0、5.1、5.2) がインストールされているかどうか、2 番目の列は Identity Server がすでにインストールされているかどうか、またはプロビジョニング前にインストールするかどうかを確認します。

表 12-1 プロビジョニングの組み合わせ

| iPlanet Messaging Server (5.0、5.1、5.2) はインストールされているか | Identity Server はインストールされているか | Messaging Server 6.0 によってインストールされるスキーマの種類 | プロビジョニングツール               | 参照するマニュアル                                                                                                                                                                                                |
|------------------------------------------------------|-------------------------------|-------------------------------------------|---------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| いいえ                                                  | いいえ                           | Sun ONE LDAP Schema v.1 (デフォルト)           | Delegated Administrator   | 『iPlanet Delegated Administrator for Messaging and Collaboration 1.2 Installation and Administration Guide』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/816-6011-10">http://docs.sun.com/doc/816-6011-10</a> ) |
|                                                      |                               |                                           | LDAP プロビジョニング             | 『iPlanet Messaging Server 5.2 Provisioning Guide』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/816-6018-10">http://docs.sun.com/doc/816-6018-10</a> )                                                           |
| いいえ                                                  | はい                            | Sun ONE LDAP Schema v.2 のネイティブモード (デフォルト) | ユーザー管理ユーティリティ (commadmin) | 『Sun ONE Messaging and Collaboration 1.0 User Management Utility Installation and Reference Guide』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/817-4216-10">http://docs.sun.com/doc/817-4216-10</a> )          |
|                                                      |                               |                                           | LDAP プロビジョニング             | このマニュアルの第 11 章「組織とユーザーのプロビジョニング」を参照                                                                                                                                                                      |
| はい                                                   | いいえ                           | Sun ONE LDAP Schema v.1                   | Delegated Administrator   | 『iPlanet Delegated Administrator for Messaging and Collaboration 1.2 Installation and Administration Guide』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/816-6011-10">http://docs.sun.com/doc/816-6011-10</a> ) |
|                                                      |                               |                                           | LDAP プロビジョニング             | 『iPlanet Messaging Server 5.2 Provisioning Guide』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/816-6018-10">http://docs.sun.com/doc/816-6018-10</a> )                                                           |

表 12-1 プロビジョニングの組み合わせ (続き)

| iPlanet Messaging Server (5.0、5.1、5.2) はインストールされているか | Identity Server はインストールされているか | Messaging Server 6.0 によってインストールされるスキーマの種類               | プロビジョニングツール                                        | 参照するマニュアル                                                                                                                                                                                                                                  |
|------------------------------------------------------|-------------------------------|---------------------------------------------------------|----------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| はい                                                   | はい                            | Sun ONE LDAP Schema v.2 のネイティブモード<br>または互換モード (ユーザーが選択) | ユーザー管理<br>ユーティリティ (commadmin)<br><br>LDAP プロビジョニング | 『Sun ONE Messaging and Collaboration User Management Utility 1.0 Installation and Reference Guide』<br>( <a href="http://docs.sun.com/doc/817-4216-10">http://docs.sun.com/doc/817-4216-10</a> )<br><br>このマニュアルの第 11 章「組織とユーザーのプロビジョニング」を参照 |

## スキーマモデルの決定

従来バージョンの Messaging Server がインストールされていない状態で、最初に Identity Server をインストールした場合は、Messaging Server 6.0 の新しいインストールが自動的に Sun ONE LDAP Schema v.2 のネイティブモードを使用して行われます。Identity Server をインストールしていない場合は、Messaging Server のデフォルトは Sun ONE LDAP Schema v.1 となります。

Messaging Server の従来バージョンがインストールされている場合に新しい Sun ONE LDAP Schema v.2 を使用するときは、次のいずれかの方法を決定する必要があります。

- 従来の 2 ツリーの LDAP 構造と (互換モード) 従来の RFC 2247 ルックアップアルゴリズムを使用する
- 新しいネイティブモードの LDAP 構造 (1 ツリー) に変換する (推奨される方法)

選択内容に応じて、システムによる LDAP ルックアップ時に次の 2 種類のデフォルト検索テンプレートのいずれかが使用されます。

- ネイティブモードのルックアップをサポートする検索テンプレート
- Sun ONE LDAP Schema v.1 で使用される RFC 2247 互換ルックアップアルゴリズムをサポートする互換モードの検索テンプレート

**注** 1つの LDAP ディレクトリでスキーマの両方の種類を併用することはできません。

Sun ONE LDAP Schema v.2 の 2 つのモードの詳細については、[333 ページの「Schema v.2 のネイティブモードと互換モードの選択」](#)を参照してください。

## プロビジョニングツールの決定

Sun ONE LDAP Schema v.2 では、Sun ONE ユーザー管理ユーティリティ (comadmin) を使用するか、LDAP に LDIF レコードを直接書き込んで LDAP プロビジョニングを行うことができます。

Sun ONE LDAP Schema v.1 では、iPlanet™ Delegated Administrator を使用するか、LDAP プロビジョニングを行うことができます。

## プロビジョニングに関する情報の参照先

Sun ONE LDAP Schema v.2 (ネイティブモードと互換モードの両方) での LDAP プロビジョニングについては、このマニュアルを参照してください。詳細については、[第 11 章「組織とユーザーのプロビジョニング」](#)を参照してください。Sun ONE LDAP Schema v.1 での LDAP プロビジョニングについては、『iPlanet Messaging Server 5.2 Provisioning Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6018-10>) を参照してください。

Sun ONE LDAP Schema v.2 用のユーザー管理ユーティリティプロビジョニングツールを使用する場合は、『Sun ONE Messaging and Collaboration User Management Utility 1.0 Installation and Reference Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-4216-10>) を参照してください。Sun ONE LDAP Schema v.1 用の Delegated Administrator プロビジョニングツールを使用する場合は、『iPlanet Messaging Server 5.2 Provisioning Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6018-10>) を参照してください。

# Schema v.2 のネイティブモードと互換モードの選択

Sun ONE Schema v.2 では、組織ツリーだけを使用するネイティブモード (推奨される方法) と、DC ツリー (ドメインコンポーネントツリー) と組織ツリーを使用する互換モード (Sun ONE または iPlanet LDAP ベース製品の従来バージョンとの逆互換性を維持するためのモード) の 2 つの方法で LDAP 構造を構築できます。LDAP のプロビジョニングは、選択したモデルによって異なります。

Sun ONE Schema v.2 のどちらのモードを使用するかを決定する前に、次の点を考慮してください。

- LDAP 構造が変更された理由
- ネイティブモードの利点と制約
- ネイティブモードへの変換
- 2 ツリーの構造をサポートし続ける互換モード

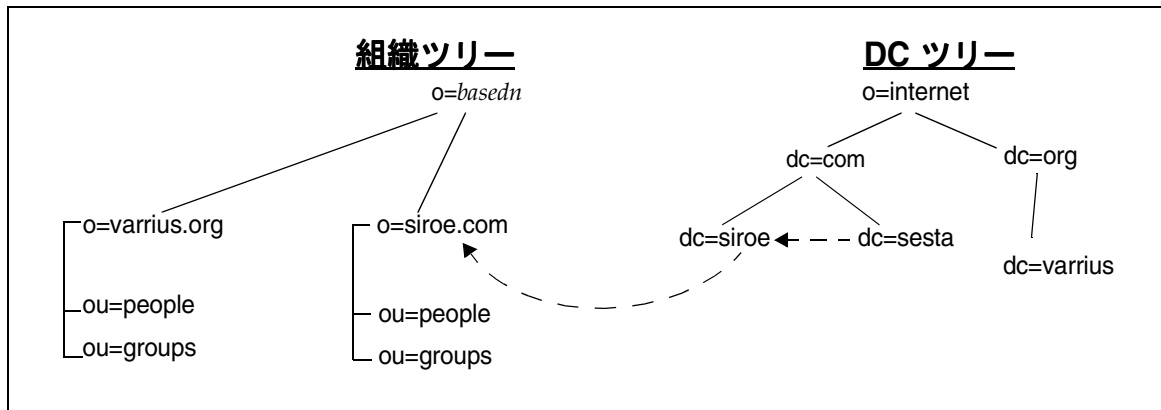
## LDAP 構造が変更された理由

Java Enterprise System では、1 ツリー構造を実装したことで、LDAP の構造が根本的に変更されました。1 ツリー構造 (ネイティブモード) を使用することには、次の 2 つの大きな利点があります。

- Identity Server と Portal Server の統合
- 1 ツリーの LDAP 構造は 2 ツリーの構造と比較して極めて単純である

1 ツリーの LDAP 構造では 2 ツリーの構造と比較して複雑さが大きく軽減されます。次の図に示すように、2 ツリーの構造では一部のノードが組織ツリー内のノードを直接ポイントしています (inetDomainBaseDN 属性を使用)。その他のノードはエイリアスノードで、組織ツリーのノードを直接ポイントする代わりに、aliasedObjectName 属性を使用して別の DC ツリーノードをポイントしています。

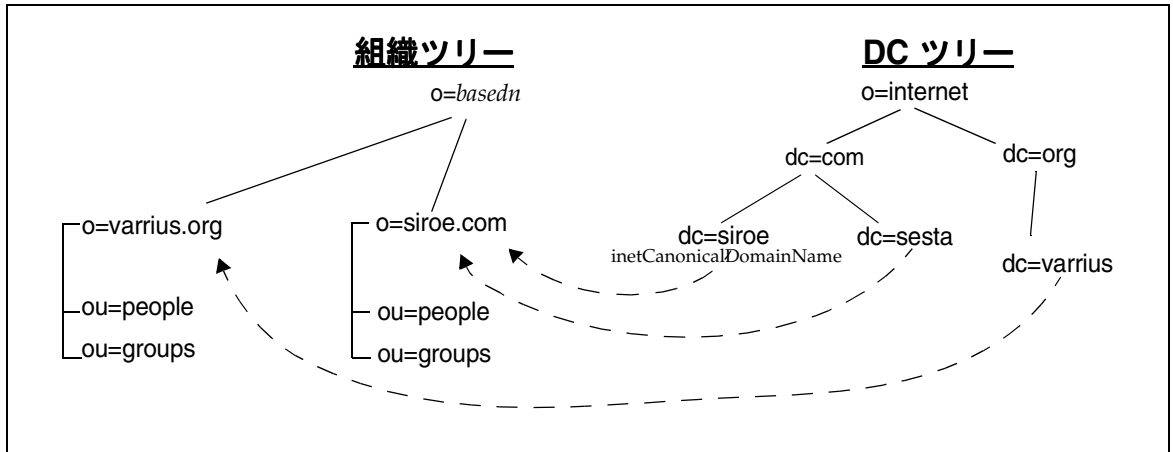
図 12-2 2 ツリー構造での `aliasedDomainName` と `inetDomainBaseDN` によるエイリアス設定



この図では、DC ツリーの `sesta.com` は `aliasedObjectName` を使用して DC ツリー上の `siroe.com` をポイントし、`siroe.com` は `inetDomainBaseDN` を使用して組織ツリー上の同じ名前のノードをポイントしています。

さらに次の図では、DC ツリー上の 1 つまたは複数のノードが `inetDomainBaseDN` を使用して組織ツリー上の同じノードを直接ポイントすることも考えられます。この場合は、どちらが「本当の」ドメイン名であるかを特定するために、DC ツリー上のいずれかのノードに「同点の場合に勝者を決定する」属性である `inetCanonicalDomainName` が必要となります。本当のドメイン名とは、メールが実際に存在し、また、メールのルーティング先にもなるドメインの名前を指します。

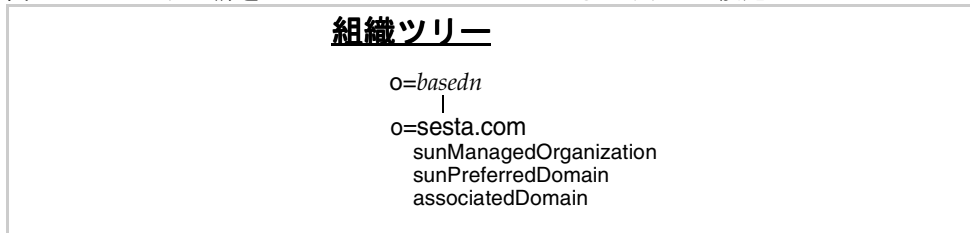
図 12-3 2 ツリー構造での inetCanonicalDomainName によるエイリアス設定



一方、336 ページの図 12-4 に示すように、組織ツリーだけを持つ 1 ツリーの新しい LDAP 構造では、複雑さが大きく軽減されます。

1 ツリーの構造では、これまで DC ツリーに存在したすべてのドメイン属性が組織ツリー上のドメインノードに含まれます。各ドメインノードは、`sunManagedOrganization` オブジェクトクラスと、DNS ドメイン名を含む `sunPreferredDomain` 属性によって特定されます。また、ドメイン名はこのドメインの既知のエイリアス名を含む 1 つまたは複数の `associatedDomain` 属性を持つこともできます。2 ツリーの構造とは異なり、エイリアス名が重複するノードは存在しません。

図 12-4 1 ツリー構造での associatedDomain によるエイリアス設定



## ネイティブモードの利点と制約

Messaging Server の新たな開発により、LDAP 情報は1つのディレクトリ情報ツリー (DIT) 構造を使用して組織化されることになりました。Messaging Server の単一 DIT を特に組織ツリーと呼びます。これには、ユーザー、グループ、ドメインのエントリと、検索テンプレートが含まれます。

### 1 ツリー DIT の利点

1 ツリーの DIT 構造は、組織に固有のアクセス制御に合わせてデータをパーティショニングする場合に便利です。つまり、組織ごとに異なるサブツリーを DIT 内に用意し、そこにユーザーとグループのエントリを含めることができます。あるデータへのアクセスは、サブツリーのその部分に属するユーザーだけに限定されます。これにより、ローカライズしたアプリケーションを安全に運用することができます。

さらに、Messaging Server 6.0 で新たに開発された 1 ツリーの構造は既存の単一 DIT LDAP アプリケーションとのマッピングにも優れています。

### ネイティブモードの制約

2 ツリーの構造では、2 つの DC ツリードメインノードが組織ツリー上の同じドメインノードをポイントすることができました。2 つの DC ツリードメインのそれぞれが、異なるルーティング属性値を持つことができます。これにより、同じ組織ツリードメインに対しても、指定されているドメインエイリアスに応じて、異なる処理や異なるメール配信を行うことができました。1 ツリーの構造では、このようなエイリアス設定は行えなくなったため、この機能は失われます。

エイリアス設定は associatedDomain 属性を使用して行われるようになりました。これは、aliasedObjectName 属性によって指定されるエイリアスドメインが互換モードで機能する方法に似ています。つまり、エイリアスドメインはドメインのルーティング属性を含まずに、エイリアス指定されたドメインを指定する属性に依存していました (エイリアス指定されたドメインの dn は aliasedObjectName 属性内に指定される)。これにより、エイリアスドメインへのメッセージのルーティングは、エイリアス指定されたドメインと同じになります。



## ネイティブモードへの変換

Sun ONE Schema v.1 の既存の 2 ツリー の LDAP 構造があり、これをネイティブモードに変換する場合は、組織ツリーに次の変更を加える必要があります。

- すべてのドメインノードに `sunISManagedOrganization` および `sunManagedOrganization` オブジェクトクラスと適切な属性を追加する
- 適切なすべてのドメインノードに `sunNameSpace` オブジェクトクラスを追加する (340 ページの「名前空間の宣言」を参照)
- 関連するすべてのドメイン属性を DC ツリーから対応する組織ツリードメインノードにコピーする
- すべてのエイリアスを DC ツリーから `associatedDomain` 属性に「集約」する
- 組織ツリーノードに ACI を追加する
- Identity Server がグローバル検索テンプレートをルートノード (`basedn`) に追加する。優先されるプライベートテンプレートを個々のノードに追加することもできる

オブジェクトクラスと属性の詳細については、『Sun ONE Messaging and Collaboration 6.0 Schema Reference Manual』(<http://docs.sun.com/doc/816-6710-10>) を参照してください。

---

注 DC ツリーは使われなくなりますが、LDAP データベースから削除する必要はありません。

---

## 2 ツリーの構造をサポートし続ける互換モード

Messaging Server の従来バージョンの構造を維持する場合に備え、Messaging Server 6.0 は 2 ツリーの構造もサポートします。その他のアプリケーションなどが 2 ツリーの LDAP 構造に依存している場合などは、2 ツリーの構造を維持する必要があります。

2 ツリーの構造を維持する場合、Messaging Server はユーザーエントリのルックアップに RFC 2247 互換検索テンプレートを使用します。

Sun ONE Schema v1 から Sun ONE Schema v.2 の互換モードへの移行の要件は次のとおりです。

- `inetDomainStatus` 属性は、DC ツリーノードから対応する組織ツリーノードにコピーされます。両方のノードが `inetDomainStatus` を含む場合、DC ツリーノードで検出される状態に優先して組織ツリーノードで検出される状態が適用されます。

- 2 ツリー構造のデフォルトの検索テンプレートには、LDAP を検索するすべてのアプリケーションが従来バージョンの Messaging Server と同様に DC ツリーを使用して組織ツリー内の正しいノードにアクセスできるように、rfc2247Flag 属性が設定されている必要があります。
- すべての組織ツリーノードには、適切な Identity Server マーカーオブジェクトクラスと属性が必要です。
- 各ノードに Identity Server 用の適切な ACI が必要です。
- ドメイン、ユーザー、グループのグローバル検索テンプレートは、Identity Server によってルートノード上に提供されます。ただし、特定ノードの検索に合わせてカスタマイズが必要になることがあります。カスタマイズを行うには、優先して適用されるテンプレートを該当ノードに追加する必要があります。

## ネイティブモードと互換モードのデータモデル

Sun ONE オブジェクトクラスの基本的なデータモデルは、コアオブジェクトクラスによって作成される LDAP エントリのタイプ (ユーザー、グループ、ドメインなど) に共有クラス (オブジェクトクラスは複数のサービスで共有可能) とサービス固有のオブジェクトクラス (特定種類のサーバーに固有のクラス) を重ねて拡張したものです。

次の表は、この関係を示しています。1 つの組織ツリーを持つネイティブモードの LDAP については、次の表を参照してください。DC ツリーと組織ツリーを持つ互換モードの LDAP については、[339 ページの表 12-3](#) を参照してください。

表 12-2 ネイティブモードのエントリタイプと対応するオブジェクトクラス

| タイプ  | コアクラス                  | 共有クラス                     | サーバー固有クラス              |
|------|------------------------|---------------------------|------------------------|
| ドメイン | organization           |                           | mailDomain             |
|      | domain                 |                           | icsCalendarDomain      |
|      | sunManagedOrganization |                           |                        |
|      | sunNameSpace           |                           |                        |
| ユーザー | person                 | ipUser                    | inetMailUser           |
|      | inetUser               | userPresenceProfile       | inetLocalMailRecipient |
|      | organizationalPerson   | iplanet-am-managed-person |                        |
|      | inetOrgPerson          |                           |                        |

表 12-2 ネイティブモードのエントリタイプと対応するオブジェクトクラス (続き)

| タイプ  | コアクラス                    | 共有クラス                               | サーバー固有クラス               |
|------|--------------------------|-------------------------------------|-------------------------|
| グループ | groupOfUniqueNames       | iplanet-am-managed-filtered-group   | inetMailGroup           |
|      | iplanet-am-managed-group | iplanet-am-managed-assignable-group | inetLocalRecipient      |
|      |                          | iplanet-am-managed-static-group     | inetMailGroupManagement |
|      |                          |                                     |                         |

表 12-3 互換モードのエントリタイプと対応するオブジェクトクラス

| タイプ            | コアクラス                | 共有クラス               | サーバー固有クラス               |
|----------------|----------------------|---------------------|-------------------------|
| DC ツリー<br>ドメイン | domain               |                     | mailDomain              |
|                | inetDomain           |                     | icsCalendarDomain       |
| 組織ツリー<br>ドメイン  | organization         |                     |                         |
| ユーザー           | person               | ipUser              | inetMailUser            |
|                | inetUser             | userPresenceProfile | inetLocalMailRecipient  |
|                | organizationalPerson |                     |                         |
|                | inetOrgPerson        |                     |                         |
| グループ           | groupOfUniqueNames   |                     | inetMailGroup           |
|                |                      |                     | inetLocalRecipient      |
|                |                      |                     | inetMailGroupManagement |

ユーザーエントリタイプを例とした場合、次のオブジェクトクラスは次の種類の属性を提供します。

**person.** 人物を特定する属性を提供します。

**organizationalPerson.** 組織に所属する人物を特定する属性を提供します。

**inetOrgPerson.** 基本的なインターネットユーザーの属性を提供します。

**ipUser.** 個人的なアドレス帳の属性、サービスクラステンプレート、該当する場合はファミリアカウントの DN を保持します。

**inetUser.** ユーザーアカウントを表し、メールアカウントを作成するために inetMailUser と ipUser が併用されます。

**inetSubscriber.** 加入者アカウントを表すオプションのオブジェクトクラスです。アカウント ID と challenge/response 属性を提供します。

**inetMailUser.** メールアカウントを表し、ユーザー固有のほとんどのメールアカウント属性を提供します。

**inetLocalMailRecipient.** 受信者の電子メールアドレスを指定し、その受信者に関連するルーティング情報を提供することで、ローカル (組織間) 電子メール受信者を表します。

---

**注** Identity Server マーカークラスは、通常は iplanet-am- または sun から始まります。Identity Server の一部のオブジェクトクラスと属性は Messaging Server 自体では使用されませんが、Identity Server が正しく機能するには、ドメイン、グループ、ユーザーの各エントリにそれを含める必要があります。

---

## 名前空間の宣言

名前空間は組織エンティティを定義し、すべてのエントリ間で1つまたは複数の属性が一意である必要があります。

組織 (通常はドメイン) が名前空間になるようにプロビジョニングするには、組織のエントリに sunNameSpace オブジェクトクラスを追加します。これにより、一意の名前空間としてマークはされますが、「一意性」の機能は有効になりません。つまり、sunNameSpace オブジェクトクラス自体はシステムの動作に影響しません。

一意性の機能を有効にするには、組織のエントリに sunNameSpaceUniqueAttrs 属性を追加する必要があります。この属性には、この組織内の一意のエントリを識別するための属性の名前が含まれます。一意性の識別には複数の属性を使用できます。

ドメインに一意性の機能を追加するということは、ドメイン内のどのサブツリーも同じ属性を使用して名前空間を宣言できないことを意味します。

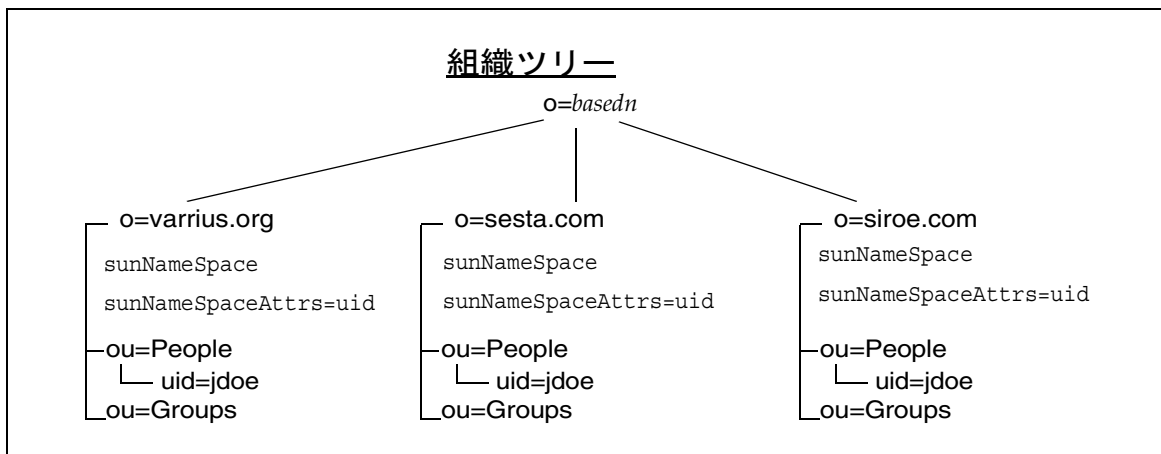
一意性は、コマンド行ユーティリティプロビジョニングツール `comadmin` を使用して強制できます。このツールは、一意性の機能に違反する重複エントリの追加を許可しません。ただし、LDAP を直接プロビジョニングする場合は、一意性をユーザー自身が強制する必要があります。LDAP コマンド `ldapmodify` は一意性を強制しません。このコマンドは、重複レコードの入力を許可します。

属性の一意性は、Messaging Server が使用する Identity Server の機能です。Identity Server が LDAP データベースを管理するには、`sunNameSpace` および `sunNameSpaceUniqueAttrs` によって生じる一意性の制約を満たすようにプロビジョニングを行う必要があります。

**注** Messaging Server の従来のバージョンでは、すべてのドメインがそれぞれ異なる名前空間であることが暗黙的な前提となっていたため、明示的な宣言は必要ありませんでした。ここで説明したように、これは Messaging Server 6.0 では変更されました。

次の図は、名前空間としてのドメインの例を示しています。

図 12-5 名前空間としてのドメイン



この図には3つのドメインがあり、それぞれに `sunNameSpace` オブジェクトクラスが指定され、`sunNameSpaceUniqueAttrs` 属性は `uid` に設定されています。各ドメインが名前空間であり、その中で2つのドメインが同じ `uid` を持つことはありません。ここでは、異なるドメインの一意性の制約に違反することなく、複数のドメインが同じ一意の ID を持つエントリを持つことができます。たとえば、3つのドメインのそれぞれが `jdoe` という `uid` を持つエントリを持つことができます。これが可能であるのは、各組織が別々の名前空間であるためです。この例で特定の `jdoe` を探すには、検索テンプレートに組織 (ドメイン) の名前を指定する必要があります。

各ドメインに異なる追加属性を割り当てることができます。たとえば、1つのドメインのそれぞれのユーザーに一意的な `telephoneNumber` 属性を持たせることができます。そのドメインでは、エントリーは `sunNameSpaceUniqueAttrs=telephoneNumber` のように指定されるようになり、2人のユーザーが同じ電話番号を持つことはできなくなります。

## 名前空間の重複とルートノード

Sun ONE LDAP Schema v.2 では名前空間の重複は許可されないため、ルートノードを名前空間にしないでください。

ルートの下すべてのドメインで、ルートエントリーと同じ属性名を使用して一意性を強制することができなくなるため、インストール内に複数のドメインを持つことを計画している場合は、ルートサフィックスノード (この章の例では `basedn`) に `sunNameSpaceUniqueAttrs` 属性を指定しないでください。

たとえば、ルートノードに `sunNameSpaceUniqueAttrs=uid` を指定した場合、その他のドメインは各ドメインの一意性の強制に `uid` を使用できなくなります。

Identity Server はルートノードに自動的に `sunNameSpace` をプロビジョニングしますが、これには属性を追加しないでください。`sunNameSpaceUniqueAttrs` が指定されるまで一意性の機能は有効にならないため、ユーザーが属性を追加するまでルートノードは名前空間として機能しません。

---

**注**            Messaging Server のためにルートノードに `sunNameSpaceUniqueAttrs` を追加しないでください。

---

# 検索テンプレート

ここでは、検索テンプレートの機能と形式について説明します。

---

**注** 検索テンプレートの形式は変更の対象となります。Identity Server を使用して検索テンプレートを管理してください。

---

## 検索テンプレートの概要

テンプレートは、組織ツリーの特殊なエントリです。これは、ドメイン、ユーザー、グループの LDAP エントリを特定するために、Messaging Server によって次のように使用されます。

- ネイティブモードでは、Messaging Server は BasicOrganizationSearch テンプレートを使用し、テンプレートに指定されている検索フィルタを使用して検索を実行します。
- 互換モードでは、Messaging Server は BasicDomainSearch テンプレートを使用し、rfc2247Flag の設定を参照します。このフラグが true に設定されている場合は検索フィルタは無視され、従来バージョンの Messaging Server のように DC ツリーを使用して適切な組織ツリーノードを検索します。

検索テンプレートには次の 2 種類があります。

- グローバル検索テンプレート：組織ツリー全体の検索に使用されるテンプレートで、DIT 内の次の場所に格納される

```
ou=templates,ou=default,ou=GlobalConfig,ou=1.0,ou=DAI,
ou=services,basedn
```

ここで、*basedn* はこのインストールの組織ツリーのルートを表す

- プライベート検索テンプレート：各組織は、その組織内で利用するプライベートテンプレートを保持できる。これらのプライベートテンプレートは、各組織の DIT 内の次の場所に格納される

```
ou=default,ou=OrganizationConfig,ou=1.0,ou=DAI,ou=services,orgdn
```

ここで、*orgdn* は組織の場所を表す

組織の最上位エントリは、その組織でテンプレートが変更されているかどうかを示す、sunAdditionalTemplates 属性、sunOverrideTemplates 属性、または両方を持つ必要がある

オブジェクトクラスと属性については、『Sun ONE Messaging and Collaboration 6.0 Schema Reference Manual』(<http://docs.sun.com/doc/816-6710-10>)を参照してください。

## 検索テンプレートの形式

検索テンプレートには次の要素が含まれます。

- name  
テンプレートの名前
- searchfilter  
特定の種類のエントリを検索するためのフィルタ
- attrs  
特定したエントリから取得する属性の種類のリスト
- rfc2247Flag  
指定された検索フィルタを使用せずに RFC 2247 アルゴリズムを使用して、検索する LDAP エントリの DN を構築するようにアプリケーションに指示するブール (true、false) 変数。(これは、iPlanet Messaging Server 5.2 のインストールのように既存の互換モード LDAP 構造を持つインストールとの逆互換性のために用意されている。)この要素は、組織ツリー内の正しい組織ノードをポイントする inetDomainBaseDN 属性との一致について DC ツリーを検索するようにシステムに強制する。DC ツリーの詳細については、『iPlanet Messaging Server 5.2 Provisioning Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6018-10>) を参照
- BaseDN  
rfc2247Flag が true に設定されている場合に、ターゲットエントリの DN を取得するために、アルゴリズムによって生成される DN にこの属性の値が付加される (指定されている場合)



## グループ(メーリングリスト)

グループは **Messaging Server** ではメーリングリストと呼ばれます。グループを使用することで、サービスのユーザーは名前を個別に指定せずに、他のユーザーグループに連絡をとることができます。**Messaging Server** では、これは電子メールアドレスを個別に指定せずに、複数のメールボックスに電子メールを送信することを意味します。**Messaging Server** は、スタティックとダイナミックの両方のメーリングリスト(グループ)をサポートしています。それぞれの種類のリストは、`inetMailGroup` オブジェクトクラスがサポートする LDAP エントリを持ちます。

スタティックメーリングリストでは、リストのメンバーはグループの LDAP エントリによって直接指定されます。ダイナミックメーリングリストでは、LDAP 検索フィルタ(RFC-2254)を使用してメンバーが指定されます。

ダイナミックグループは、さらに割り当て可能なダイナミックグループとフィルタ処理されたダイナミックグループのいずれかに分けることができます。また、各種グループには、オープン(配信可能)とクローズ(配信不可能)のいずれかを指定することができます。フィルタ処理されたダイナミックグループは例外で、オープンを指定することはできません。

次の表は、各種組み合わせを示しています。

| オープン/クローズ   | スタティック | 割り当て可能なダイナミック | フィルタ処理されたダイナミック |
|-------------|--------|---------------|-----------------|
| オープン(配信可能)  | 可      | 可             | 不可              |
| クローズ(配信不可能) | 可      | 可             | 可               |

## グループの種類

グループには、次の3種類があります。

- スタティック**: スタティックグループには、内部メンバーの場合は `uniqueMember` 属性、外部メンバーの場合は `mgrpRFC822MailMember` 属性を使用して作成された、すべてのメンバーを示す LDAP エントリが含まれます。
- 割り当て可能なダイナミック**: 割り当て可能なダイナミックグループの LDAP エントリには、`mgrpDeliverTo` 属性に設定されている検索フィルタが含まれます。フィルタ処理される属性は、よく知られている属性である必要があります。**Messaging Server** のデフォルトのよく知られている属性は `memberOf` です。これは、`inetAdmin` オブジェクトクラスを使用して **Identity Server** で新たにサポートされるようになった属性です。

たとえば、`HRStaff` というダイナミックグループでは、`mgrpDeliverTo` 属性の値は次のようになります。

## グループ (メーリングリスト)

```
(&(objectclass=inetAdmin) (memberof=cn=HRStaff, ou=Groups, o=sesta.com, o=basedn))
```

さらに、各メンバーのユーザーエン트리には次の行が含まれます。

```
objectClass: inetAdmin
```

```
memberof: HRStaff
```

- **フィルタ処理されたダイナミック** : フィルタ処理されたダイナミックグループの LDAP エントリには、`mgrpDeliverTo` 属性によって指定されている検索フィルタが含まれます。ただし、この場合は1つまたは複数の属性をフィルタリングすることでグループのメンバーを決定できます。たとえば、次のようなフィルタを指定できます。

```
(&((objectclass=inetMailUser) (city=tokyo)&(objectclass=inetOrgPerson) (uid=jdoe)))
```

また、スタティックグループの LDAP エントリに `mgrpDeliverTo` 属性を追加することで、スタティックグループにダイナミックメンバーを追加することができます。

---

**注** LDAP 検索フィルタで使用される属性にインデックスが付けられていることを確認してください。インデックスが付けられていない場合、ダイナミックメンバーのリストの評価に時間がかかり、**Directory Server** に負荷がかかることがあります。

---

グループのそれぞれの種類には専用の **Identity Server** オブジェクトクラスがあります。次の表は、グループの種類と、それぞれのプロビジョニングに使用される **Identity Server** オブジェクトクラスを示しています。

| グループの種類         | Identity Server オブジェクトクラス                        |
|-----------------|--------------------------------------------------|
| スタティック          | <code>iplanet-am-manged-static-group</code>      |
| 割り当て可能なダイナミック   | <code>iplanet-am-managed-assignable-group</code> |
| フィルタ処理されたダイナミック | <code>iplanet-am-managed-filtered-group</code>   |

---

---

**注** `iplanet-am-managed-group` オブジェクトクラスは、これら3つすべてのクラスに優先されるクラスですが、グループの LDAP エントリ内での使用はオプションです。

---

## オープングループとクローズグループ

オープングループは、どのユーザーも自由にメールを配信できるグループです。グループの LDAP エントリに `iplanet-am-group-subscribable` 属性が含まれ、その値が `true` であれば、そのグループはオープン (配信可能) です。これはオプションの属性です。この属性が指定されていない場合、そのグループはクローズ (配信不可能) と見なされます。また、属性の値として `false` が指定されている場合もグループはクローズ (配信不可能) となります。

## サービスクラス (CoS)

高度なエントリ管理メカニズムである サービスクラス (CoS) を使用すると、エントリに格納されない仮想属性を作成することができます。属性値は、エントリがクライアントアプリケーションに送信される時に、CoS メカニズムによって生成されます。グループやロールと同様に、CoS はディレクトリ内のヘルパエントリに依存します。

次の 3 種類のメカニズムが用意されています。

- ポインタ CoS
- 間接 CoS
- クラシック CoS

Messaging Server CoS のプロビジョニングではクラシック CoS が推奨されます。ここでは、この CoS について説明します。

これらの高度なエントリ管理メカニズムの詳細については、『Sun ONE Directory Server 5.2 管理ガイド』および『Sun ONE Directory Server 5.2 Reference Manual』を参照してください。これらのマニュアルは、次に示す Sun のマニュアル Web サイトで入手できます。

<http://docs.sun.com/prod/sldirsrv?l=ja>

## Messaging Server の CoS

CoS 機能を利用することで、特定のユーザーに適用する固定の機能と属性を組み合わせ、名前を付けたセットとして作成できます。CoS 機能により、単一の属性を持つユーザーエントリに追加することができる、属性のテンプレートを作成できます。たとえば、インターネットサービスプロバイダであれば、次のように、MS1 および MS2 という 2 つのレベルのメールサービスを作成できます。

- MS1 サービスクラスは、IMAP、セキュリティ保護された IMAP、POP3、HTTP (Web メール) のメールサービスと、5G バイトのメッセージ格納用ディスク容量をユーザーに提供する
- MS2 サービスクラスは、POP3 メールサービスと、5M バイトのメッセージ格納用ディスク容量をユーザーに提供する

---

**注** サービスクラスによって定義される属性を参照するフィルタを含む LDAP 検索要求は処理されません。たとえば、mailquota という属性がサービスクラステンプレートだけに定義され、ユーザーエントリに定義されていない場合は、mailquota 属性に対する検索は正しく行われません。このような要求を受け取ると、サーバーは実行不可能を示すエラーメッセージを返します。

この制約、およびその他の制約については、前述の『Sun ONE Directory Server 5.2 管理ガイド』(<http://docs.sun.com/doc/816-6851-10?l=ja>) を参照してください。

---

## Messaging Server での CoS の設定

サービスクラス機能を追加する手順の概要は、次のとおりです。

1. サービスクラスプラグインを有効にします。

サービスクラスプラグインは、Directory Server のインストール時に同時にインストールされます。このプラグインを有効にする、つまり CoS を有効にするには、SLAPD 設定ファイルを編集します。

サービスクラスプラグインの設定方法については、『Sun ONE Directory Server 5.2 管理ガイド』(<http://docs.sun.com/doc/816-6851-10?l=ja>) を参照してください。

2. Directory Server を再起動します。
3. CoS のテンプレートと定義用に CoS コンテナを作成します。
4. CoS コンテナ内に CoS メールスキーマを作成します。

それぞれのメールスキーマには次の内容が含まれます。

- CoS メールスキーマエントリ DN (ou:CoS を含む)
- サービスクラススキーマエントリを定義するオブジェクトクラス (objectClass:cosClassicDefinition)
- このスキーマの CoS テンプレートエントリが格納されるサブツリー (ディレクトリ名) を含む、複数の値をとる属性 (cosTemplateDN)
- CoS スキーマの適用先となるサブツリーを含む、複数の値をとる属性 (cosTargetTree)

- ユーザーエントリに適用される CoS テンプレートの指定に使用される属性の名前 (cosSpecifier:inetCOS)
  - テンプレートエントリで使用される属性 (複数の値をとる cosAttribute)
5. CoS テンプレート用のコンテナを作成します。
  6. CoS テンプレートを作成します。
  7. ユーザーエントリにサービスクラスを割り当てます。

### ▶ CoS の作成例

この例は、CoS プラグインがすでにインストール、設定され、Directory Server が稼動していることを前提としています。この例は、sesta.com というドメインにホストされる、2つのサービスクラス (MS1、MS2) 用のメールサービスを作成する方法を示しています。2つのサービスクラスには、次の目的があります。

- MS1 サービスクラスは、IMAP、セキュリティ保護された IMAP、POP3、HTTP (Web メール) のメールサービスと、5G バイトのメッセージ格納用ディスク容量をユーザーに提供する
- MS2 サービスクラスは、POP3 メールサービスと、5M バイトのメッセージ格納ディスク容量をユーザーに提供する

1. CoS のスキーマとテンプレート用にコンテナを作成します。

このエントリは、organizationalUnit (ou) としてコンテナを定義します。

次のコード例は、CoS コンテナを作成するための LDIF エントリを示しています。

```
dn: ou=CoS,o=sesta.com, o=basedn
changetype: modify
add:organizationalUnit
ou: CoS
```

2. 次の LDIF エントリの例を使用して、CoS メールスキーマを作成します。

```
dn: uid=mailscheme,ou=CoS,o=sesta.com, o=basedn
objectClass: top
objectClass: ldapsubentry
objectClass: cossuperdefinition
objectClass: cosdefinition
objectClass: cosClassicDefinition
cosTemplateDn: ou=MailSchemeClasses,ou=CoS,o=sesta.com, o=basedn
```

```
cosSpecifier: inetCoS
cosAttribute: mailQuota
cosAttribute: mailAllowedServiceAccess
```

3. メールスキーマテンプレート用にコンテナを作成します。

次の LDIF 文の例を使用して、コンテナを作成します。

```
dn: ou=MailSchemeClasses,ou=CoS,o=sesta.com, o=basedn
changetype: modify
add: organizationalunit
ou: MailSchemeClasses
```

4. CoS テンプレートを作成します。

次の LDIF の例を使用して、MS1 および MS2 テンプレート用の 2 つのテンプレートエントリを作成します。

```
dn: cn=MS2,ou=MailSchemeClasses,ou=CoS,o=sesta.com, o=basedn
objectClass: top
objectClass: costemplate
objectClass: extensibleobject
objectClass: ldapsubentry
mailQuota: 5000000
mailAllowedServiceAccess: +pop3:*
```

```
dn: cn=MS1,ou=MailSchemeClasses,ou=CoS,o=sesta.com, o=basedn
objectClass: top
objectClass: costemplate
objectClass: extensibleobject
objectClass: ldapsubentry
mailQuota: 5000000000
mailAllowedServiceAccess: +imap, imaps, pop3, http:*
```

5. ユーザーエントリにサービスクラスを追加します。

# シングルサインオン (SSO) の設定

この章では、インストール処理が完了した後にシングルサインオン (SSO) を設定する方法について説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- [Java Enterprise System](#) での SSO の概要
- SSO をサポートするように [Messaging Server](#) と [Calendar Server](#) を設定するには
- [Portal Mail](#) チャネルと [Calendar](#) チャネル用の SSO の設定

## Java Enterprise System での SSO の概要

SSO とは、Java Enterprise System のユーザーがユーザー ID とパスワードを使って一度ログオンするだけで、複数の Sun ONE コンポーネント製品アプリケーションにアクセスできるようになる機能です。

Java Enterprise System の内蔵サービスを使用する場合、Identity Server が公式の SSO ゲートウェイになります。つまり、ユーザーは、Identity Server 6.1 にログインしないと、SSO 用に設定されたその他のサービスにアクセスできません。Identity Server 6.1 SSO の詳細については、『Sun ONE Identity Server 6.1 Customization and API Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6774-10>) の第 4 章「Single Sign-on and Sessions」を参照してください。

Java Enterprise System の SSO は、3 種類に分けられます

- **内蔵サービス**：このカテゴリに分類されるのは、Calendar Server、Instant Messaging、Messaging Server、Portal Server です。これらの製品については、設定を行うだけで SSO を有効にできます。

- **社内アプリケーションサーバーサービス** : 社内で独自のアプリケーションサーバーサービスを開発した場合、ポリシーエージェントをダウンロードし、インストールおよび設定する必要があります (ただし、使用するプラットフォーム用のポリシーエージェントが存在する場合のみ)。
- **アプリケーションサーバーを使用しない社内アプリケーション** : このカテゴリに分類されるのは、SSO を有効にするために Identity Server SDK を使用する必要がある、社内開発の Java および Java 以外のアプリケーションです。

この章では、SSO で動作するように Java Enterprise System の内蔵サービスを設定する方法について説明します。このような SSO を、この章では Identity Server 6.1 SSO と呼びます。

サポートされているアプリケーションサーバー上の社内開発サービスについては、次のマニュアルを参照してください。

- 『Sun ONE Identity Server 6.1 Customization and API Guide』  
(<http://docs.sun.com/doc/816-6774-10>)
- 『Sun ONE Identity Server Policy Agent 2.1 J2EE Policy Agents Guide』  
(<http://docs.sun.com/doc/816-6884-10>)
- 『Sun ONE Identity Server Policy Agent 2.1 Web Policy Agents Guide』  
(<http://docs.sun.com/doc/816-6772-10>)

Java または Java 以外の社内開発アプリケーションについては、次のマニュアルを参照してください。

- 『Sun ONE Identity Server 6.1 Customization and API Guide』  
(<http://docs.sun.com/doc/816-6774-10>)
- 『Sun ONE Identity Server 6.1 Administrator's Guide』  
(<http://docs.sun.com/doc/816-6773-10>)

## ポリシーエージェント

Identity Server がサポートするポリシーエージェントには、Web エージェントと J2EE/Java エージェントの 2 種類があります。Web エージェントが URL ベースのポリシーを適用するのに対し、J2EE/Java エージェントは J2EE ベースのセキュリティとポリシーを適用します。

どちらの種類も、Identity Server とは別にインストールすることができ、次の場所からダウンロードできます。

[http://www.sun.com/software/download/inter\\_ecom.html](http://www.sun.com/software/download/inter_ecom.html)



## Calendar Server と Messaging Server での SSO の使用

Calendar Server および Messaging Server 用に SSO を設定するときは、次の点に注意する必要があります。

- WebMail またはカレンダーセッションが有効なのは、Identity Server のセッションが有効になっている期間に限ります。ユーザーが Identity Server からログアウトすると、そのユーザーの WebMail またはカレンダーセッションは自動的に閉じられます (シングルサインオフ)。
- SSO アプリケーションは、同一の DNS ドメイン (Cookie ドメイン) 内に存在している必要があります。
- SSO アプリケーションは、Identity Server の検証 URL (ネーミングサービス) にアクセスする必要があります。
- ブラウザは、Cookie をサポートしている必要があります。

## SSO をサポートするように Messaging Server と Calendar Server を設定するには

Messaging Server と Calendar Server で SSO を使用するには、次の 2 つの設定方法があります。

- Identity Server 6.1 を使用する方法
- Communications Server の「信頼されたサークル」テクノロジーを使用する方法

信頼されたサークルは、従来の SSO 実装法です。この方法では、Identity Server SSO では利用できない機能がいくつか利用できますが、この方法の使用は、お勧めできません。今後の開発はすべて、Identity Server を使用して進められます。

次の手順は、Identity Server 6.1 を使用する方法を説明しています。信頼されたサークルの SSO については、『Sun ONE Messaging Server 6.0 Administrator's Guide』 (<http://docs.sun.com/doc/816-6738-10>) および『Sun ONE Calendar Server 6.0 Administrator's Guide』 (<http://docs.sun.com/doc/816-6708-10>) を参照してください。

### ▶ SSO をサポートするように Messaging Server を設定するには

1. 次の `configutil` コマンドを使用して、Messaging Server 用の 4 つの SSO パラメータを設定します。これら 4 つのうち、Messaging Server で SSO を有効にするために必要なパラメータは、`local.webmail.sso.amnamingurl` だけです。SSO を有効にするには、Identity Server のネーミングサービスが実行されている URL を、このパラメータに設定します。

SSO をサポートするように Messaging Server と Calendar Server を設定するには

```
./configutil -o local.webmail.sso.amnamingurl -v
http://host:port/amserver/namingservice
./configutil -o local.webmail.sso.amcookie -v iPlanetDirectoryPro
./configutil -o local.webmail.sso.singlesignoff -v 1
./configutil -o service.http.ipsecurity -v no
```

次の表は、これらの SSO パラメータについて説明しています。

表 13-1 Messaging Server の SSO パラメータ

| パラメータ                           | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|---------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| local.webmail.sso.amnamingurl   | Identity Server の SSO ネーミングサービスの URL を指定する<br><br>デフォルトは、<br>http://IdentityServer:port/amserver/namingservice<br><br>ここで、 <i>IdentityServer</i> は Identity Server の完全修飾名、 <i>port</i> は Identity Server のポート番号である                                                                                                                     |
| local.webmail.sso.amcookie      | Identity Server の Cookie 名。Identity Server が別の Cookie 名を使うように設定されている場合、その名前を Messaging Server の local.webmail.sso.amcookieName に設定する必要がある。そうしないと、コンポーネント製品は SSO 実行時に検索先を判断できない。デフォルト値は iPlanetDirectoryPro であるが、Identity Server の設定がデフォルトのままである場合、この値を変更してはならない<br><br>デフォルト : iPlanetDirectoryPro                                     |
| local.webmail.sso.singlesignoff | Messaging Server から Identity Server へのシングルサインオフを有効 ("yes") または無効 ("no") にする<br><br>有効にした場合、ユーザーが Messaging Server からログアウトすると、そのユーザーは Identity Server からログアウトされる。また、そのユーザーが Identity Server 経由で開始したすべてのセッションも切断される<br><br>Identity Server は認証ゲートウェイであるため、Identity Server から Messaging Server へのシングルサインオフは、常に有効になっている<br><br>デフォルト : yes |

表 13-1 Messaging Server の SSO パラメータ (続き)

| パラメータ                   | 説明                                                                                                                                                        |
|-------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| service.http.ipsecurity | セッションアクセスをログイン IP アドレスに制限するかどうかを設定する。yes に設定した場合、サーバーは、ユーザーがログイン時に使用した IP アドレスを記憶しておき、それ以降、ユーザーに発行したセッション Cookie の使用をその IP アドレスにだけ許可する<br><br>デフォルト : yes |

2. Messaging Server を再起動します。
3. プロキシ認証を設定する方法については、[363 ページ](#)の「プロキシ認証の設定」を参照してください。

▶ SSO をサポートするように Calendar Server を設定するには

1. Calendar Server の場合は、`cal_svr_base/etc/opt/SUNWics5/config/ics.conf` ファイル内の次のパラメータを編集します。

```
local.calendar.sso.amnamingurl="http://host:port/amserver/naming-service"
local.calendar.sso.amcookieName="iPlanetDirectoryPro"
local.calendar.sso.logname="am_sso.log"
local.calendar.sso.singleSignoff="yes"
service.http.ipsecurity="no"
render.xslonclient.enable="no"
```

次の表は、これらの Calendar Server 用の SSO パラメータについて説明しています。

表 13-2 Calendar Server の SSO パラメータ

| パラメータ                          | 説明                                                                                                                                                                                                                            |
|--------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| local.calendar.sso.amnamingurl | Identity Server の SSO ネーミングサービスの URL を指定する<br><br>デフォルトは、 <code>http://IdentityServer:port/amserver/naming-service</code><br><br>ここで、 <i>IdentityServer</i> は Identity Server の完全修飾名、 <i>port</i> は Identity Server のポート番号である |

表 13-2 Calendar Server の SSO パラメータ ( 続き )

| パラメータ                                         | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|-----------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>local.calendar.sso.amcookiename</code>  | <p>Identity Server の Cookie 名。Identity Server が別の Cookie 名を使うように設定されている場合、その名前を Calendar Server の <code>local.calendar.sso.amcookiename</code> に設定する必要がある。そうしないと、コンポーネント製品は SSO 実行時に検索先を判断できない。デフォルト値は <code>iPlanetDirectoryPro</code> であるが、Identity Server の設定がデフォルトのままである場合、この値を変更してはならない</p> <p>デフォルト : <code>iPlanetDirectoryPro</code></p>        |
| <code>local.calendar.sso.singlesignoff</code> | <p>Calendar Server から Identity Server へのシングルサインオフを有効 ("yes") または無効 ("no") にする</p> <p>有効にした場合、ユーザーが Calendar Server からログアウトすると、そのユーザーは Identity Server からログアウトされる。また、そのユーザーが Identity Server 経由で開始したすべてのセッションも切断される</p> <p>Identity Server は認証ゲートウェイであるため、Identity Server から Calendar Server へのシングルサインオフは、常に有効になっている</p> <p>デフォルト : <code>yes</code></p> |
| <code>service.http.ipsecurity</code>          | <p>セッションアクセスをログイン IP アドレスに制限するかどうかを設定する。yes に設定した場合、サーバーは、ユーザーがログイン時に使用した IP アドレスを記憶しておき、それ以降、ユーザーに発行したセッション Cookie の使用をその IP アドレスにだけ許可する</p> <p>デフォルト : <code>yes</code></p>                                                                                                                                                                           |
| <code>render.xslonclient.enable</code>        | <p>クライアント側のレンダリングを制御する ( 現時点では Internet Explorer 6.0 以降のみをサポート )。このパラメータにはデフォルトで "yes" が設定される。クライアント側のレンダリングをオフにするには、このパラメータを "no" に設定してから Calendar Server を再起動する</p> <p>注 : このパラメータを "no" に設定した場合、Internet Explorer のスタイルシートが無効になります。それ以外の場合、Calendar Server は Identity Server 経由で動作しません。</p>                                                          |

## 2. Calendar Server を再起動します。

3. プロキシ認証を設定する方法については、363 ページの「プロキシ認証の設定」を参照してください。

### ▶ SSO をサポートするように Instant Messaging を設定するには

Instant Messaging は、Identity Server SSO を標準でサポートします。Instant Messaging をインストールする際の設定ページで、この配備で SSO を使用するかどうかの確認が求められます。問題は、Identity Server SDK がシステム上で検出されるかどうかです。

次の表は、Instant Messaging の `ims_svr_base/SUNWiim/iim.conf` ファイルに指定される SSO パラメータを示しています。

表 13-3 Instant Messaging の SSO パラメータ

| パラメータ                               | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    | 値                                                                                                                                                                        |
|-------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>iim_server.usesso</code>      | このパラメータは、認証時に SSO プロバイダを使用するかどうかをサーバーに通知する。SSO プロバイダは、サーバーが SSO サービスを使用してセッション ID を検証する際に使用されるモジュールである<br><br>ポータルを配備する場合、クライアントから送られてきたセッション ID を検証する機能が Portal Server Session API によって、Instant Messaging に提供される<br><br><code>iim_server.usesso</code> パラメータは、 <code>iim_server.ssoprovider</code> パラメータと組み合わせて使用される | このパラメータの値は、0、1、-1 のいずれかである<br><br>0: SSO プロバイダを使用しない (デフォルト)<br><br>1: SSO プロバイダをまず使用するが、SSO 検証が失敗した場合は LDAP を使用する<br><br>-1: SSO プロバイダだけを使用する。SSO 検証が失敗しても LDAP 認証を試みない |
| <code>iim_server.sso.update</code>  | セッションの終了と有効期限を有効にするかどうかを定義する                                                                                                                                                                                                                                                                                          | true または false                                                                                                                                                           |
| <code>iim_server.ssoprovider</code> | このパラメータは、SSO プロバイダを実装しているクラスを指定する。 <code>iim_server.usesso</code> が 0 以外でかつ、このオプションが設定されていない場合、サーバーはデフォルトの Portal Server ベースの SSO プロバイダを使用する (詳細については、Instant Messaging の API マニュアルを参照)                                                                                                                               | SSO プロバイダ実装のクラス名                                                                                                                                                         |

詳細については、『Sun ONE Instant Messaging 6.1 Administrator's Guide』  
(<http://docs.sun.com/doc/817-4113-10>) の付録 A 「Instant Messaging Configuration Parameters」を参照してください。

▶ **Messaging Server、Calendar Server、および Instant Messaging の SSO 動作を確認するには**

1. ポータルデスクトップに有効なユーザーとしてログインします。
2. ブラウザに Messaging Server の URL を入力します。  
Messaging Server のログインプロンプトは表示されないはずです。
3. ブラウザに Calendar Server の URL を入力します。  
Calendar Server のログインプロンプトは表示されないはずです。
4. ポータルデスクトップを使用するか、ブラウザに Instant Messaging サーバーの URL を入力し、Instant Messenger クライアントを起動します。  
Instant Messaging のログインプロンプトは表示されないはずです。

▶ **SSO のトラブルシューティング**

1. SSO に関する問題が発生した場合、まず、WebMail のログファイル `msg_svr_base/log/http` を開き、エラーがないか確認します。
2. ログインレベルを上げます。  

```
configutil -o logfile.http.loglevel -v debug
```
3. `msg_svr_base/log/http_sso` ファイル内の `amsdk` メッセージを確認した後、`amsdk` のログインレベルを上げます。  

```
configutil -o local.webmail.sso.amloglevel -v 5
```

新しいログインレベルは、サーバーを再起動しないと有効になりません。
4. Identity Server と Messaging Server の両方で、ログイン時に完全修飾ホスト名を使用していることを確認します。Cookie は同一ドメインのサーバー間でしか共有されておらず、ブラウザはローカルサーバー名に対するドメインを判断できないため、ブラウザで完全修飾名を使用しない限り SSO は正常に動作しません。

# Portal Mail チャネルと Calendar チャネル用の SSO の設定

Portal Server は、Messaging Server と Calendar Server 用に設計された Mail チャネルと Calendar チャネルの両方を提供します。同じポータルデスクトップでメールとカレンダーの両方のコンテンツを表示するために、これらのチャネルはそれぞれのバックエンドサービスに接続し、デスクトップをリロードするたびに関連情報を取得します。

どちらのチャネルも、SSO アダプタサービスと呼ばれる Portal Server、Messaging Server、Calendar Server の既存の SSO 機能とプロキシ認証を利用します。SSO アダプタサービスは、Identity Server と Portal Server から得られます。プロキシ認証は、Messaging Server と Calendar Server の両方の機能です。

## SSO アダプタサービス

Portal Server の前回のリリースでは、ポータルチャネルは独自のメカニズムで SSO をアーカイブしていました。基本となる実装は Identity Server SSO アダプタサービスに基づいており、Identity Server コンソールを通じてチャネルごとに設定を行う必要がありました。Portal Server チャネルを使用する場合は、この従来のポータルチャネル SSO メカニズムだけが必要となります。

---

**注** SSO アダプタサービスの実装は、現時点では Portal Server だけをサポートしています。SSO アダプタサービスと Identity Server 6.1 SSO を混同しないように注意してください。

SSO アダプタサービスを利用することで、エンドユーザーは Portal Server プロバイダやその他の Web アプリケーションなどのアプリケーションを使用し、1 度のサインオンでさまざまなリソースサーバーに認証アクセスすることができます。アクセスできるリソースサーバーは、システムで利用できる SSO アダプタインタフェースの実装によって異なります。

現在、Portal Server はアドレス帳、カレンダー、メールのリソースサーバー用の SSO アダプタを提供しています。

---

## プロキシ認証の概要

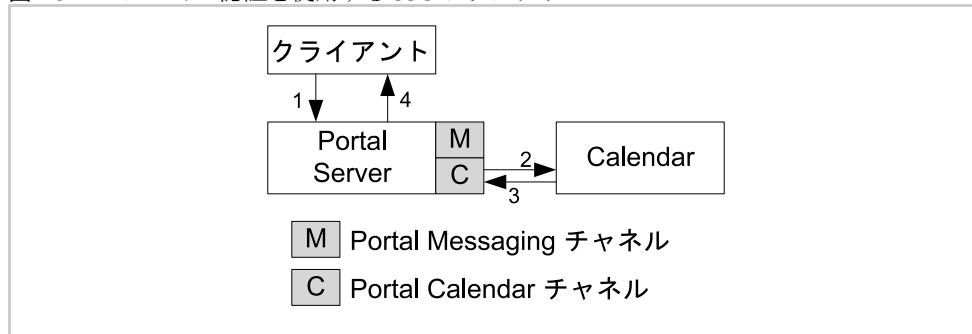
プロキシ認証では、ユーザーの代わりに信頼されたエージェントとして機能するプロキシユーザーアカウントが必要です。Messaging Server と Calendar Server のプロキシユーザーは、エンドユーザーパスワードなしでエンドユーザー認証を得るために存在します。

Messaging Server と Calendar Server の現在のチャンネルは、Portal Server 用の SSO アダプタサービスを利用して、それぞれのバックエンドサーバーへの認証を行なっています。Portal Server Mail および Calendar チャンネルの SSO アダプタテンプレートにプロキシユーザーの名前とパスワードを登録することで、ユーザーはユーザー名とパスワードを指定する必要がなくなります。

これが機能するには、Messaging Server と Calendar Server の両方にプロキシユーザーを定義する必要があります。

次の図は、SSO アダプタサービスが Calendar サーバーへのプロキシ認証を使用する方法を示しています。

図 13-1 プロキシ認証を使用する SSO アダプタサービス



上の図では、次の処理が行われます。

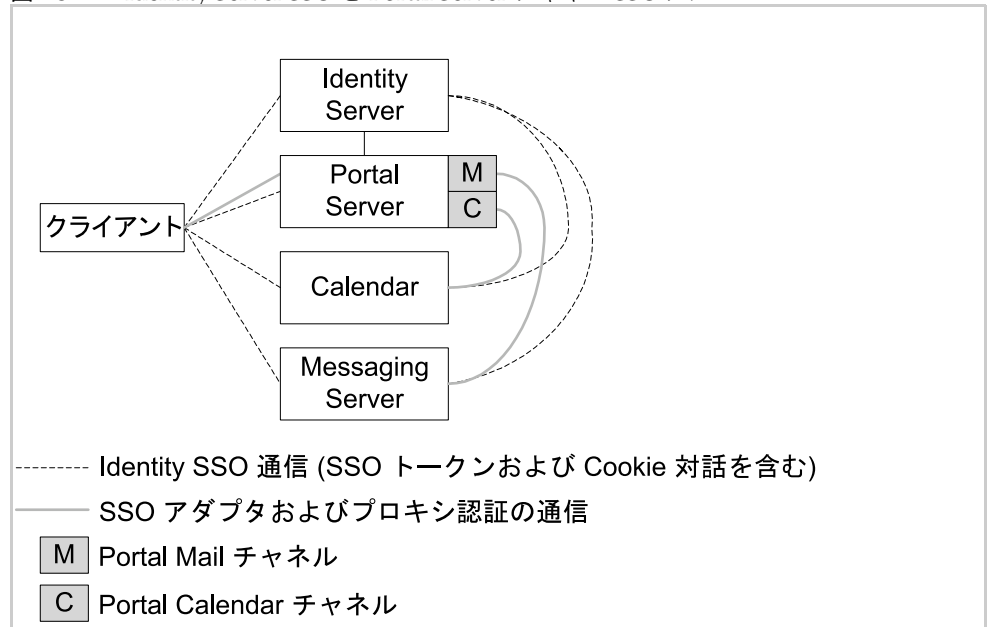
1. ユーザーが Portal Server デスクトップにログインします。
2. デスクトップカレンダーチャンネルが Calendar Server に対する認証を行います。ユーザーの代わりにプロキシユーザーが認証されます。
3. プロキシユーザーは、ユーザーの代わりにカレンダー情報を取得します。
4. カレンダーチャンネルは情報を HTML 形式で表示し、デスクトップに戻ります。



プロキシ認証と SSO アダプタサービスの設定が必要になるのは、メールとカレンダーのポータルチャンネルだけです。新しい Identity Server 6.1 SSO メカニズムは、プロキシ認証と SSO アダプタサービスのどちらの代替機能でもありません。システム全体の SSO が正常に機能するには、Messaging Server と Calendar Server の両方で Identity Server 6.1 SSO を有効にする必要があります。

次の図は、Identity Server 6.1 SSO と Portal Server チャンネル SSO メカニズムのすべての関係を示しています。

図 13-2 Identity Server SSO と Portal Server チャンネル SSO メカニズム

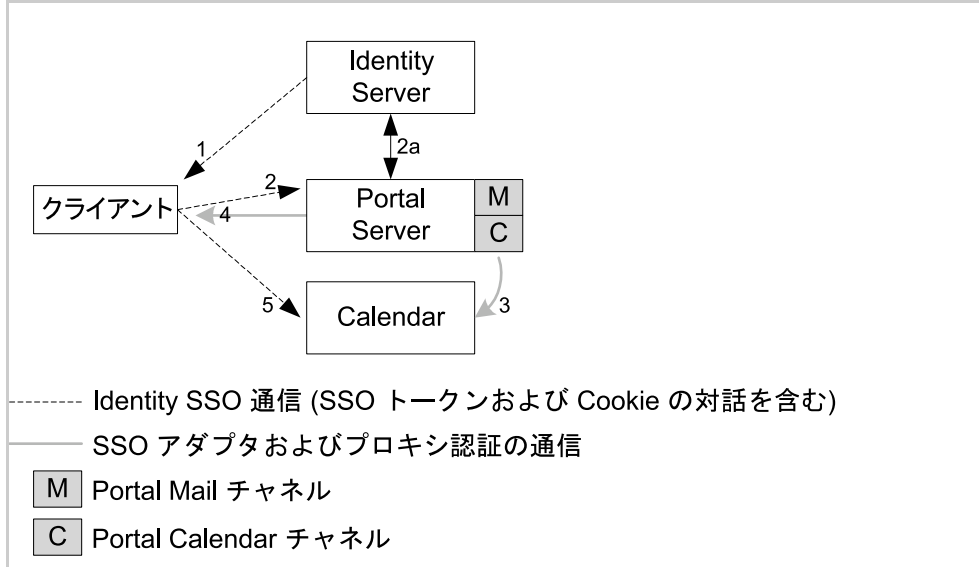


上の図では、次の処理が行われます。

- 点線は、エンドユーザーと Identity Server、Portal Server、Calendar Server、Messaging Server の間で行われる Identity SSO 通信を示しています。Identity SSO 通信は、Identity Server と、Calendar Server および Messaging Server の間で行われます。
- 実線は、メールおよびカレンダーチャンネルと、それぞれのバックエンド Messaging Server サービスおよび Calendar Server サービスの間で行われる、SSO アダプタとプロキシ認証の通信を示しています。

次の図は、カレンダーチャンネルの使用例を示しています。

図 13-3 Identity Server SSO とカレンダーチャンネルの通信



上の図では、次の処理が行われます。

1. ユーザーは Identity Server に対する認証を完了します。
2. ユーザーは Identity Server cookie を使用してポータルデスクトップにアクセスします。
  - a. Portal Server は、Identity Server に対して cookie を検証します。
3. カレンダーチャンネルがカレンダーコンテンツを要求します。
  - プロキシ信用情報が SSO アダプタ設定テンプレートから読み出されます。
  - ユーザーの代わりにプロキシユーザーが認証されます。
4. デスクトップコンテンツが返され、カレンダーチャンネルがレンダリングされます。
5. ユーザーが Calendar Server にアクセスします。Calendar Server は、Identity Server に対して Identity セッション cookie を確認します。Identity Server はセッション cookie を検証し、カレンダーセッションを開始するための適切なユーザー情報を提供します。

## プロキシ認証の設定

カレンダーおよびメールチャネルのプロキシ認証を設定するには、Identity Server 管理コンソール経由での SSO アダプタテンプレートへのアクセスと、Sun ONE 通信サーバーへのアクセスが必要となります。プロキシ認証の設定には、次の処理が関連します。

- SSO アダプタテンプレートを編集する
- Messaging Server にアクセスし、メールチャネルのプロキシ認証を有効にする
- Calendar Server にアクセスし、カレンダーチャネルのプロキシ認証を有効にする
- プロキシ認証が機能することを確認する

### ▶ SSO アダプタテンプレートを編集するには

- SSO アダプタテンプレートを編集するには、Identity Server コンソールを使用します。カレンダーチャネルとメールチャネルに適用される文字列を編集する必要があります。これらの文字列間で異なる要素として、使用するプロトコルが挙げられます。
  - カレンダーチャネルは HTTP プロトコルを使用する
  - メールチャネルは IMAP プロトコルまたは POP プロトコルを使用する

この手順の詳細な実行方法については、『Sun ONE Portal Server 6.2 Administrator's Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6748-10>) の第 13 章「Configuring the Communication Channels」を参照してください。

### ▶ Portal Server で Messaging Server と Calendar Server のプロキシ認証を設定するには

1. Messaging Server の場合は、`ms_svr_base/sbin` ディレクトリに移動します。  
(例)  

```
cd /opt/SUNWmsgsr/sbin
```
2. `store.admin` ファイルに `admin` が含まれていることを確認します。  

```
./configutil -o store.admins
```
3. 次のように入力します。  

```
./configutil -o service.http.allowadminproxy -v yes
```
4. Messaging Server を再起動します。
5. Calendar Server の場合は、`cal_svr_base/etc/opt/SUNWics5/config/ics.conf` ファイルを編集します。

```
< 次のパラメータのコメントを外し、値を変更します >
service.http.allowadminproxy="yes"
```

```
< 次のパラメータが正しく設定されていることを確認します >
service.admin.calmaster.userid="calmaster"
service.admin.calmaster.cred="password"
```

6. Calendar Server を再起動します。

▶ **プロキシ認証が機能することを確認するには**

カレンダーチャンネルとメッセージングチャンネルが正しく機能することを Portal Server デスクトップから確認するには、次の手順を実行します。

1. ポータルデスクトップに有効なユーザーとしてログインします。
2. カレンダーチャンネルとメッセージングチャンネルを確認します。  
これらのチャンネルに適切な情報が表示されるはずです。
3. カレンダーチャンネルをカスタマイズして表示を見やすくします。

「このチャンネルの表示設定を編集」を選択し、「カレンダー表示」を「日」から「週」に変更します。

# 付録

- 付録 A 「情報収集用ワークシート」
- 付録 B 「インストーラのコマンド行オプション」
- 付録 C 「コンポーネントのポート番号」
- 付録 D 「インストール可能なパッケージの一覧」
- 付録 E 「配布内容のディレクトリ構造」
- 付録 F 「ネットワークインストールのためのセットアップ方法」
- 付録 G 「Identity Server によるユーザーのプロビジョニング」



# 情報収集用ワークシート

この付録には、Java Enterprise System コンポーネント製品に関する設定データを収集するための、次のワークシートが含まれます。

- 共通サーバー設定用ワークシート
- 管理サーバーのワークシート
- Application Server のワークシート
- Calendar Server のワークシート
- Directory Server のワークシート
- Directory Proxy Server のワークシート
- Identity Server と Portal Server のワークシート
- Instant Messaging のワークシート
- Messaging Server のワークシート
- Portal Server, Secure Remote Access のワークシート
- Web Server のワークシート

ここに示すワークシートは、インストーラを使用して設定されるコンポーネント製品だけを対象としています。次のコンポーネント製品は対象とされません。

- Message Queue
- Sun Cluster
- Sun Cluster エージェント

# 共通サーバー設定用ワークシート

このワークシートの各フィールドの詳細については、[82 ページ](#)の「共通サーバー設定」の表を参照してください。

表 A-1 共通サーバー設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ               | データ                                   |
|--------------------------------|---------------------------------------|
| ホスト名<br>CMN_HOST_NAME          | データ: _____<br>例) thismachine.         |
| DNS ドメイン名<br>CMN_DOMAIN_NAME   | データ: _____<br>例) subdomain.domain.com |
| ホスト IP アドレス<br>CMN_IPADDRESS   | データ: _____<br>例) 127.51.91.192        |
| 管理者ユーザー ID<br>CMN_ADMIN_USER   | データ: _____<br>例) /admin               |
| 管理者パスワード<br>CMN_ADMIN_PASSWORD | データ: _____<br>制限: 8 文字以上              |
| システムユーザー<br>CMN_SYSTEM_USER    | データ: _____<br>例) /root                |
| システムグループ<br>CMN_SYSTEM_GROUP   | データ: _____<br>例) other                |



# 管理サーバーのワークシート

このワークシートの各フィールドの詳細については、84 ページの「管理サーバーの設定」の表を参照してください。

表 A-2 管理サーバーの設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                           | データ                                        |
|--------------------------------------------|--------------------------------------------|
| サーバールート<br>ADMINSERV_ROOT                  | データ : _____<br>例 ) /var/opt/mps/serverroot |
| 管理ポート<br>ADMINSERV_PORT                    | データ : _____<br>例 ) 390                     |
| 管理ドメイン<br>ADMINSERV_DOMAIN                 | データ : _____<br>例 ) admin                   |
| 設定サーバー管理 ID<br>ADMINSERV_CONFIG_ADMIN_USER | データ : _____<br>例 ) admin                   |
| パスワード<br>ADMINSERV_CONFIG_ADMIN_PASSWORD   | データ : _____<br>制限 : 8 文字以上                 |
| システムユーザー<br>ADMINSERV_SYSTEM_USER          | データ : _____<br>例 ) root                    |
| システムグループ<br>ADMINSERV_SYSTEM_GROUP         | データ : _____<br>例 ) other                   |
| ディレクトリサーバーホスト<br>ADMINSERV_CONFIG_DIR_HOST | データ : _____                                |
| ディレクトリサーバーポート<br>ADMINSERV_CONFIG_DIR_PORT | データ : _____<br>例 ) 389                     |

# Application Server のワークシート

このワークシートの各フィールドの詳細については、[86 ページ](#)の「[Application Server の設定](#)」の表を参照してください。

表 A-3 Application Server の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                             | データ                                            |
|----------------------------------------------|------------------------------------------------|
| Application Server<br>CMN_AS_INSTALLDIR      | データ : _____<br>例 ) /var/opt/SUNWappserver7     |
| アプリケーションサーバーの<br>サーバー設定<br>CMN_AS_DOMAINSDIR | データ : _____<br>例 ) /opt/SUNWappserver7/domains |
| アプリケーションサーバー製品<br>設定<br>CMN_AS_CONFIGDIR     | データ : _____<br>例 ) /etc/opt/SUNWappserver7     |
| 管理者ユーザー ID<br>AS_ADMIN_USER                  | データ : _____<br>例 ) admin                       |
| 管理者パスワード<br>AS_ADMIN_PASSWORD                | データ : _____<br>制限 : 8 文字以上                     |
| 管理サーバーポート<br>AS_ADMIN_PORT                   | データ : _____<br>例 ) 4848.                       |
| HTTP サーバーポート<br>AS_HTTP_PORT                 | データ : _____<br>例 ) 80                          |

# Calendar Server のワークシート

Java Enterprise System インストーラを使用して、Calendar Server コンポーネント製品を設定することはできません。設定手順については、219 ページの「インストール後の Calendar Server の設定」を参照してください。

表 A-4 Calendar Server の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                     | データ                         |
|--------------------------------------|-----------------------------|
| Calendar Server<br>CMN_CS_INSTALLDIR | データ : _____<br>例 ) /var/opt |

# Directory Server のワークシート

このワークシートの各フィールドの詳細については、87 ページの「Directory Server の設定」の表を参照してください。

表 A-5 Directory Server の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                            | データ                                        |
|---------------------------------------------|--------------------------------------------|
| ディレクトリサーバー、サーバー<br>ルート<br>CMN_DS_INSTALLDIR | データ : _____<br>例 ) /var/opt/mps/serverroot |
| <b>管理情報</b>                                 |                                            |
| 管理者ユーザー ID<br>DS_ADMIN_USER                 | データ : _____<br>例 ) admin                   |
| 管理者パスワード<br>DS_ADMIN_PASSWORD               | データ : _____<br>制限 : 8 文字以上                 |
| ディレクトリマネージャ<br>DS_DIR_MGR_USER              | データ : _____<br>例 ) cn=Directory Manager    |
| ディレクトリマネージャパスワード<br>DS_DIR_MGR_PASSWORD     | データ : _____<br>デフォルトなし                     |
| <b>サーバー設定情報</b>                             |                                            |
| サーバー識別子<br>DS_SERVER_IDENTIFIER             | データ : _____                                |
| サーバーポート<br>DS_SERVER_PORT                   | データ : _____<br>例 ) 389                     |

表 A-5 Directory Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                                                                   | データ                                     |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|
| サフィックス<br>DS_SUFFIX                                                                                | データ : _____<br>例 ) dc=example,dc=com    |
| 管理ドメイン<br>DS_ADM_DOMAIN                                                                            | データ : _____                             |
| システムユーザー<br>DS_SYSTEM_USER                                                                         | データ : _____<br>例 ) root                 |
| システムグループ<br>DS_SYSTEM_GROUP                                                                        | データ : _____<br>例 ) other                |
| <b>設定情報</b>                                                                                        |                                         |
| このサーバーに設定データを保存します。<br>このサーバーの設定データをディレクトリサーバーの次のインスタンスに保存します。<br>USE_EXISTING_CONFIG_DIR          | 詳細については、89 ページの表 3-7 を参照                |
| ホスト名<br>CONFIG_DIR_HOST                                                                            | データ : _____<br>例 )                      |
| ディレクトリサーバーポート<br>CONFIG_DIR_PORT                                                                   | データ : _____<br>例 ) 389                  |
| ディレクトリマネージャ<br>CONFIG_DIR_ADM_USER                                                                 | データ : _____<br>例 ) cn=Directory Manager |
| ディレクトリマネージャパスワード<br>CONFIG_DIR_ADM_PASSWD                                                          | データ : _____<br>ディレクトリマネージャのパスワード        |
| <b>データ格納場所の情報</b>                                                                                  |                                         |
| このサーバーにユーザー / グループデータを保存します。<br>ディレクトリサーバーの次のインスタンスにユーザー / グループデータを保存します。<br>USE_EXISTING_USER_DIR | データ : _____                             |
| ホスト名<br>USER_DIR_HOST                                                                              | データ : _____                             |
| ディレクトリサーバーポート<br>USER_DIR_PORT                                                                     | データ : _____<br>例 ) 389                  |
| ディレクトリマネージャ<br>USER_DIR_ADM_USER                                                                   | データ : _____<br>例 ) cn=Directory Manager |

表 A-5 Directory Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                                      | データ                                       |
|-----------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------|
| ディレクトリマネージャパスワード<br>USER_DIR_ADM_PASSWD                               | データ : _____                               |
| サフィックス<br>USER_DIR_SUFFIX                                             | データ : _____<br>例 ) dc=example,dc=com      |
| データの取り込み情報                                                            |                                           |
| サンプル組織構造の読み込み<br>DS_ADD_SAMPLE_ENTRIES                                | データ : _____<br>例 ) 1 または 0 (ゼロ)           |
| データの読み込み<br>DS_POPULATE_DATABASE                                      | データ : _____<br>例 ) 1 または 0 (ゼロ)           |
| サンプルデータあるいは自分のデータ (LDIF ファイル)                                         | 詳細については、 <a href="#">92 ページの表 3-9</a> を参照 |
| ファイル名<br>DS_POPULATE_DATABASE_FILE_NAME                               | 詳細については、 <a href="#">92 ページの表 3-9</a> を参照 |
| データのインポートにかかる時間を短縮するため、スキーマチェックを無効にします。<br>DS_DISABLE_SCHEMA_CHECKING | データ : _____<br>例 ) 1 または 0 (ゼロ)           |

## Directory Proxy Server のワークシート

このワークシートの各フィールドの詳細については、[94 ページの「Directory Proxy Server の設定」](#)の表を参照してください。

表 A-6 Directory Proxy Server の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                             | データ                    |
|----------------------------------------------|------------------------|
| Directory Proxy Server<br>CMN_DPS_INSTALLDIR | データ : _____<br>例 ) /   |
| ディレクトリプロキシサーバーポート<br>DPS_PORT                | データ : _____<br>例 ) 489 |
| 管理サーバールートディレクトリ<br>DPS_SERVERROOT            | データ : _____            |
| 管理者ユーザー ID<br>DPS_CDS_ADMIN                  | データ : _____            |

表 A-6 Directory Proxy Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ        | データ                        |
|-------------------------|----------------------------|
| 管理者パスワード<br>DPS_CDS_PWD | データ : _____<br>制限 : 8 文字以上 |

## Identity Server と Portal Server のワークシート

Identity Server と Portal Server のワークシートは統合化されていますが、これは、これらの製品が互いに依存し合っているためです。これらのワークシートの各フィールドの詳細については、96 ページの「Identity Server の設定」および 120 ページの「Portal Server の設定」の表を参照してください。ここで提供するワークシートは、次のとおりです。

- Application Server に配備された Identity Server
- Web サーバーに配備された Identity Server
- Application Server に配備された Identity Server と Portal Server
- Web Server に配備された Identity Server と Portal Server
- BEA WebLogic に配備された Identity Server と Portal Server
- IBM WebSphere に配備された Identity Server と Portal Server
- Identity Server の配備後に Application Server に配備された Portal Server
- Identity Server の配備後に Web サーバーに配備された Portal Server

### Application Server に配備された Identity Server

このワークシートの各フィールドの詳細については、表 3-14、表 3-17、表 3-21、表 3-25、表 3-27 を参照してください。

表 A-7 Application Server に配備された Identity Server の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                     | データ                                           |
|--------------------------------------|-----------------------------------------------|
| Identity Server<br>CMN_IS_INSTALLDIR | データ : _____<br>例 ) /opt                       |
| 登録のための情報                             |                                               |
| 管理者ユーザー ID<br>IS_ADMIN_USER_ID       | データ : _____<br>例 ) 共通サーバー設定から指定する。変更することはできない |

表 A-7 Application Server に配備された Identity Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                              | データ                                                                                                 |
|-----------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 管理者パスワード<br>IS_ADMINPASSWD                    | データ : _____<br>例 ) 共通サーバー設定から指定する<br>制限 : 8 文字以上                                                    |
| LDAP ユーザー ID<br>IS_LDAP_USER                  | データ : _____<br>例 ) amldapuser ( デフォルト ) 。 変更することはできない                                               |
| LDAP パスワード<br>IS_LDAPUSERPASSWD               | データ : _____<br>制限 : amadmin とは異なる必要がある                                                              |
| パスワードの暗号鍵<br>AM_ENC_PWD                       | データ : _____<br>状態ファイルの例 ) LOCK ( デフォルト )<br>対話インストールの例 ) デフォルトが生成される                                |
| <b>Web コンテナ用の情報</b>                           |                                                                                                     |
| インストールディレクトリ<br>IS_APPSERVERBASEDIR           | データ : _____<br>例 ) /opt/SUNWappserver7 ( デフォルト )                                                    |
| 構成ディレクトリ<br>IS_AS_CONFIG_DIR                  | データ : _____<br>例 ) /etc/opt/SUNWappserver7 ( デフォルト )                                                |
| アイデンティティサーバー実行時インスタンス<br>IS_IAS7INSTANCE      | データ : _____<br>例 ) /server1 ( デフォルト )                                                               |
| インスタンスディレクトリ<br>IS_IAS7INSTANCEDIR            | データ : _____<br>例 ) /var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1/server1 ( デフォルト )                        |
| アイデンティティサーバーインスタンスポート<br>IS_IAS7INSTANCE_PORT | データ : _____<br>例 ) 80 ( デフォルト )                                                                     |
| 管理者ユーザー ID<br>IS_IAS7_ADMIN                   | データ : _____<br>例 ) 共通サーバー設定から指定する。変更することはできない                                                       |
| 管理者パスワード<br>IS_IAS7_ADMINPASSWD               | データ : _____<br>例 ) 共通サーバー設定から指定する                                                                   |
| 管理ポート<br>IS_IAS7_ADMINPORT                    | データ : _____<br>例 ) 4848 ( デフォルト )                                                                   |
| ドキュメントルート<br>IS_SUNAPPSERVER_DOCS_DIR         | データ : _____<br>例 ) .../server1/docroot ( デフォルトは Application Server インスタンスディレクトリに /docroot を追加したもの ) |

表 A-7 Application Server に配備された Identity Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                              | データ                                                                                                    |
|---------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| サーバーインスタンスポートはセキュリティ保護されていますか<br>IS_PROTOCOL                  | データ : _____<br>対話インストーラの例 ) セキュリティ保護されていない場合は http、セキュリティ保護されている場合は https<br>状態ファイルの例 ) http ( デフォルト ) |
| Administration Server ポートはセキュリティ保護されていますか<br>ASADMIN_PROTOCOL | データ : _____<br>対話インストーラの例 ) セキュリティ保護されていない場合は http、セキュリティ保護されている場合は https<br>状態ファイルの例 ) http ( デフォルト ) |
| <b>サービスに関する情報、例 1</b>                                         |                                                                                                        |
| ホスト<br>SERVER_HOST                                            | データ : _____<br>例 ) ローカルシステムの FQDN                                                                      |
| サービス配備 URI<br>SERVER_DEPLOY_URI                               | データ : _____<br>例 ) amserver ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない                                        |
| 共通ドメイン配備 URI<br>CDS_DEPLOY_URI                                | データ : _____<br>例 ) amcommon ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない                                        |
| クッキードメイン<br>COOKIE_DOMAIN_LIST                                | データ : _____<br>例 ) 現在のドメインの直前にドットを追加したもの ( デフォルト )                                                     |
| このサービスにコンソールを配備しますか?<br>USE_DSAME_SERVICES_WEB_CONTAINER      | データ : _____<br>対話インストーラの例 ) yes または no<br>状態ファイルの例 ) true または false                                    |
| コンソールホスト<br>CONSOLE_HOST                                      | データ : _____<br>例 ) 既存のコンソールをホストするサーバーの FQDN                                                            |
| コンソールポート<br>CONSOLE_PORT                                      | データ : _____<br>例 ) 選択したコンテナの Web コンテナポート                                                               |
| コンソール配備 URI<br>CONSOLE_DEPLOY_URI                             | データ : _____<br>例 ) amconsole ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない                                       |
| パスワード配備 URI<br>PASSWORD_SERVICE_DEPLOY_URI                    | データ : _____<br>例 ) ampassword ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない                                      |
| <b>Directory Server に関する情報</b>                                |                                                                                                        |
| ディレクトリサーバーホスト<br>IS_DS_HOSTNAME                               | データ : _____<br>例 ) ローカルシステムの FQDN                                                                      |



表 A-7 Application Server に配備された Identity Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                  | データ                                                     |
|---------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|
| ディレクトリサーバーポート<br>IS_DS_PORT                       | データ : _____<br>例 ) 389 ( デフォルト )                        |
| アイデンティティサーバーディレク<br>トリルートサフィックス<br>IS_ROOT_SUFFIX | データ : _____<br>例 ) Identity Server ルートサフィックスとして設定される DN |
| ディレクトリマネージャ<br>IS_DIRMGRDN                        | データ : _____<br>例 ) cn=Directory Manager ( デフォルト )       |
| ディレクトリマネージャパスワード<br>IS_DIRMRPWD                   | データ : _____<br>例 ) Directory Manager のパスワード             |
| プロビジョニングされた既存のディレクトリが見つからない場合のための情報               |                                                         |
| ディレクトリサーバーにユーザー<br>データが準備されていますか?<br>IS_LOAD_DIT  | データ : _____<br>例 ) no ( デフォルト )                         |
| 組織マーカーオブジェクトクラス<br>IS_ORG_OBJECT_CLASS            | データ : _____<br>例 ) SunManagedOrganization ( デフォルト )     |
| 組織ネーミング属性<br>CONFIG_IDENT_NA4ORG                  | データ : _____<br>例 ) o ( デフォルト )                          |
| ユーザーマーカーオブジェクトクラ<br>ス<br>IS_USER_OBJECT_CLASS     | データ : _____<br>例 ) intorgperson ( デフォルト )               |
| ユーザーネーミング属性<br>CONFIG_IDENT_NA4USER               | データ : _____<br>例 ) uid ( デフォルト )                        |

## Web サーバーに配備された Identity Server

このワークシートの各フィールドの詳細については、表 3-14、表 3-16、表 3-21、表 3-25、表 3-27 を参照してください。

表 A-8 Web Server に配備された Identity Server の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                             | データ                                                                                                |
|----------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Identity Server<br>CMN_IS_INSTALLDIR         | データ : _____<br>例) /opt                                                                             |
| <b>登録のための情報</b>                              |                                                                                                    |
| 管理者ユーザー ID<br>IS_ADMIN_USER_ID               | データ : _____<br>例) 共通サーバー設定から指定する。変更することはできない                                                       |
| 管理者パスワード<br>IS_ADMINPASSWD                   | データ : _____<br>例) 共通サーバー設定から指定する<br>制限: 8 文字以上                                                     |
| LDAP ユーザー ID<br>IS_LDAP_USER                 | データ : _____<br>例) amldapuser (デフォルト)。変更することはできない                                                   |
| LDAP パスワード<br>IS_LDAPUSERPASSWD              | データ : _____<br>制限: amadmin とは異なる必要がある                                                              |
| パスワードの暗号鍵<br>AM_ENC_PWD                      | データ : _____<br>状態ファイルの例) LOCK (デフォルト)<br>対話インストールの例) デフォルトが生成される                                   |
| <b>Web コンテナ用の情報</b>                          |                                                                                                    |
| ホスト名<br>IS_WS_HOST_NAME                      | データ : _____<br>例) 現在のホストの FQDN (デフォルト)                                                             |
| Web サーバーポート<br>IS_WS_INSTANCE_PORT           | データ : _____<br>例) 80 (デフォルト)                                                                       |
| Web サーバーインスタンスディレクトリ<br>IS_WS_INSTANCE_DIR   | データ : _____<br>例) /opt/SUNWwbsvr (デフォルト)                                                           |
| ドキュメントルートディレクトリ<br>IS_WS_DOC_DIR             | データ : _____<br>例) /opt/SUNWwbsvr (デフォルト)                                                           |
| サーバーインスタンスポートはセキュリティ保護されていますか<br>IS_PROTOCOL | データ : _____<br>対話インストールの例) セキュリティ保護されていない場合は http、セキュリティ保護されている場合は https<br>状態ファイルの例) http (デフォルト) |
| <b>サービスに関する情報、例 1</b>                        |                                                                                                    |

表 A-8 Web Server に配備された Identity Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                         | データ                                                                 |
|----------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|
| ホスト<br>SERVER_HOST                                       | データ : _____<br>例 ) ローカルシステムの FQDN                                   |
| サービス配備 URI<br>SERVER_DEPLOY_URI                          | データ : _____<br>例 ) amserver ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない     |
| 共通ドメイン配備 URI<br>CDS_DEPLOY_URI                           | データ : _____<br>例 ) amcommon ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない     |
| クッキードメイン<br>COOKIE_DOMAIN_LIST                           | データ : _____<br>例 ) 現在のドメインの直前にドットを追加したもの ( デフォルト )                  |
| このサービスにコンソールを配備しますか?<br>USE_DSAME_SERVICES_WEB_CONTAINER | データ : _____<br>対話インストールの例 ) yes または no<br>状態ファイルの例 ) true または false |
| コンソールホスト<br>CONSOLE_HOST                                 | データ : _____<br>例 ) 既存のコンソールをホストするサーバーの FQDN                         |
| コンソールポート<br>CONSOLE_PORT                                 | データ : _____<br>例 ) 選択したコンテナの Web コンテナポート                            |
| コンソール配備 URI<br>CONSOLE_DEPLOY_URI                        | データ : _____<br>例 ) amconsole ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない    |
| パスワード配備 URI<br>PASSWORD_SERVICE_DEPLOY_URI               | データ : _____<br>例 ) ampassword ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない   |
| <b>Directory Server に関する情報</b>                           |                                                                     |
| ディレクトリサーバーホスト<br>IS_DS_HOSTNAME                          | データ : _____<br>例 ) ローカルシステムの FQDN                                   |
| ディレクトリサーバーポート<br>IS_DS_PORT                              | データ : _____<br>例 ) 389 ( デフォルト )                                    |
| アイデンティティサーバーディレクトリルートサフィックス<br>IS_ROOT_SUFFIX            | データ : _____<br>例 ) Identity Server ルートサフィックスとして設定される DN             |
| ディレクトリマネージャ<br>IS_DIRMGRDN                               | データ : _____<br>例 ) cn=Directory Manager ( デフォルト )                   |
| ディレクトリマネージャパスワード<br>IS_DIRMGRPASSWD                      | データ : _____<br>例 ) Directory Manager のパスワード                         |

表 A-8 Web Server に配備された Identity Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                             | データ                                                 |
|----------------------------------------------|-----------------------------------------------------|
| プロビジョニングされた既存のディレクトリが見つからない場合のための情報          |                                                     |
| ディレクトリサーバーにユーザーデータが準備されていますか?<br>IS_LOAD_DIT | データ : _____<br>例 ) no ( デフォルト )                     |
| 組織マーカーオブジェクトクラス<br>IS_ORG_OBJECT_CLASS       | データ : _____<br>例 ) SunManagedOrganization ( デフォルト ) |
| 組織ネーミング属性<br>CONFIG_IDENT_NA4ORG             | データ : _____<br>例 ) o ( デフォルト )                      |
| ユーザーマーカーオブジェクトクラス<br>IS_USER_OBJECT_CLASS    | データ : _____<br>例 ) intorgperson ( デフォルト )           |
| ユーザーネーミング属性<br>CONFIG_IDENT_NA4USER          | データ : _____<br>例 ) uid ( デフォルト )                    |

## Application Server に配備された Identity Server と Portal Server

このワークシートの各フィールドの詳細については、[表 3-14](#)、[表 3-17](#)、[表 3-21](#)、[表 3-25](#)、[表 3-27](#)、[表 3-33](#) を参照してください。

表 A-9 Application Server に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                     | データ                                                 |
|--------------------------------------|-----------------------------------------------------|
| Identity Server<br>CMN_IS_INSTALLDIR | データ : _____<br>例 ) /opt                             |
| Portal Server<br>CMN_PS_INSTALLDIR   | データ : _____<br>例 ) /opt                             |
| 登録のための情報                             |                                                     |
| 管理者ユーザー ID<br>IS_ADMIN_USER_ID       | データ : _____<br>例 ) 共通サーバー設定から指定する。変更することはできない       |
| 管理者パスワード<br>IS_ADMINPASSWD           | データ : _____<br>例 ) 共通サーバー設定から指定する<br>制限 : 8 文字以上    |
| LDAP ユーザー ID<br>IS_LDAP_USER         | データ : _____<br>例 ) amldapuser ( デフォルト )。変更することはできない |

表 A-9 Application Server に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                              | データ                                                                                                    |
|-----------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| LDAP パスワード<br>IS_LDAPUSERPASSWD               | データ : _____<br>制限 : amadmin とは異なる必要がある                                                                 |
| パスワードの暗号鍵<br>AM_ENC_PWD                       | データ : _____<br>状態ファイルの例 ) LOCK ( デフォルト )<br>対話インストールの例 ) デフォルトが生成される                                   |
| <b>Web コンテナ用の情報</b>                           |                                                                                                        |
| インストールディレクトリ<br>IS_APPSERVERBASEDIR           | データ : _____<br>例 ) /opt/SUNWappserver7 ( デフォルト )                                                       |
| 構成ディレクトリ<br>IS_AS_CONFIG_DIR                  | データ : _____<br>例 ) /etc/opt/SUNWappserver7 ( デフォルト )                                                   |
| アイデンティティサーバー実行時インスタンス<br>IS_IAS7INSTANCE      | データ : _____<br>例 ) /server1 ( デフォルト )                                                                  |
| インスタンスディレクトリ<br>IS_IAS7INSTANCEDIR            | データ : _____<br>例 ) /var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1/server1 ( デフォルト )                           |
| アイデンティティサーバーインスタンスポート<br>IS_IAS7INSTANCE_PORT | データ : _____<br>例 ) 80 ( デフォルト )                                                                        |
| 管理者ユーザー ID<br>IS_IAS7_ADMIN                   | データ : _____<br>例 ) 共通サーバー設定から指定する。変更することはできない                                                          |
| 管理者パスワード<br>IS_IAS7_ADMINPASSWD               | データ : _____<br>例 ) 共通サーバー設定から指定する                                                                      |
| 管理ポート<br>IS_IAS7_ADMINPORT                    | データ : _____<br>例 ) 4848 ( デフォルト )                                                                      |
| ドキュメントルート<br>IS_SUNAPPSERVER_DOCS_DIR         | データ : _____<br>例 ) .../server1/docroot ( デフォルトは Application Server インスタンスディレクトリに /docroot を追加したもの )    |
| サーバーインスタンスポートはセキュリティ保護されていますか<br>IS_PROTOCOL  | データ : _____<br>対話インストールの例 ) セキュリティ保護されていない場合は http、セキュリティ保護されている場合は https<br>状態ファイルの例 ) http ( デフォルト ) |
| 管理サーバーポートはセキュリティ保護されていますか<br>ASADMIN_PROTOCOL | データ : _____<br>対話インストールの例 ) セキュリティ保護されていない場合は http、セキュリティ保護されている場合は https<br>状態ファイルの例 ) http ( デフォルト ) |

表 A-9 Application Server に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                          | データ                                                                 |
|-----------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|
| <b>サービスに関する情報、例 1</b>                                     |                                                                     |
| ホスト<br>SERVER_HOST                                        | データ : _____<br>例 ) ローカルシステムの FQDN                                   |
| サービス配備 URI<br>SERVER_DEPLOY_URI                           | データ : _____<br>例 ) amserver ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない     |
| 共通ドメイン配備 URI<br>CDS_DEPLOY_URI                            | データ : _____<br>例 ) amcommon ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない     |
| クッキードメイン<br>COOKIE_DOMAIN_LIST                            | データ : _____<br>例 ) 現在のドメインの直前にドットを追加したもの ( デフォルト )                  |
| このサービスにコンソールを配備しますか ?<br>USE_DSAME_SERVICES_WEB_CONTAINER | データ : _____<br>対話インストールの例 ) yes または no<br>状態ファイルの例 ) true または false |
| コンソールホスト<br>CONSOLE_HOST                                  | データ : _____<br>例 ) 既存のコンソールをホストするサーバーの FQDN                         |
| コンソールポート<br>CONSOLE_PORT                                  | データ : _____<br>例 ) 選択したコンテナの Web コンテナポート                            |
| コンソール配備 URI<br>CONSOLE_DEPLOY_URI                         | データ : _____<br>例 ) amconsole ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない    |
| パスワード配備 URI<br>PASSWORD_SERVICE_DEPLOY_URI                | データ : _____<br>例 ) ampassword ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない   |
| <b>Directory Server に関する情報</b>                            |                                                                     |
| ディレクトリサーバーホスト<br>IS_DS_HOSTNAME                           | データ : _____<br>例 ) ローカルシステムの FQDN                                   |
| ディレクトリサーバーポート<br>IS_DS_PORT                               | データ : _____<br>例 ) 389 ( デフォルト )                                    |
| アイデンティティサーバーディレクトリルートサフィックス<br>IS_ROOT_SUFFIX             | データ : _____<br>例 ) Identity Server ルートサフィックスとして設定される DN             |
| ディレクトリマネージャ<br>IS_DIRMGRDN                                | データ : _____<br>例 ) cn=Directory Manager ( デフォルト )                   |

表 A-9 Application Server に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                 | データ                                                 |
|--------------------------------------------------|-----------------------------------------------------|
| ディレクトリマネージャパスワード<br>IS_DIRMGRPASSWD              | データ : _____<br>例 ) Directory Manager のパスワード         |
| <b>プロビジョニングされた既存のディレクトリが見つからない場合のための情報</b>       |                                                     |
| ディレクトリサーバーにユーザー<br>データが準備されていますか?<br>IS_LOAD_DIT | データ : _____<br>例 ) no ( デフォルト )                     |
| 組織マーカーオブジェクトクラス<br>IS_ORG_OBJECT_CLASS           | データ : _____<br>例 ) SunManagedOrganization ( デフォルト ) |
| 組織ネーミング属性<br>CONFIG_IDENT_NA4ORG                 | データ : _____<br>例 ) o ( デフォルト )                      |
| ユーザーマーカーオブジェクトクラス<br>IS_USER_OBJECT_CLASS        | データ : _____<br>例 ) intorgperson ( デフォルト )           |
| ユーザーネーミング属性<br>CONFIG_IDENT_NA4USER              | データ : _____<br>例 ) uid ( デフォルト )                    |
| <b>Portal Server に関する情報</b>                      |                                                     |
| 配備 URI<br>PS_DEPLOY_URI                          | データ : _____<br>例 ) /portal ( デフォルト )                |
| サンプルポータル<br>PS_SAMPLE_PORTAL                     | データ : _____<br>例 ) y ( デフォルト )                      |

# Web Server に配備された Identity Server と Portal Server

このワークシートの各フィールドの詳細については、表 3-14、表 3-16、表 3-21、表 3-25、表 3-27、表 3-33 を参照してください。

表 A-10 Web Server に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ     | データ                                                   |
|----------------------|-------------------------------------------------------|
| Identity Server      | データ : _____                                           |
| CMN_IS_INSTALLDIR    | 例 ) /opt                                              |
| Portal Server        | データ : _____                                           |
| CMN_PS_INSTALLDIR    | 例 ) /opt                                              |
| <b>登録のための情報</b>      |                                                       |
| 管理者ユーザー ID           | データ : _____                                           |
| IS_ADMIN_USER_ID     | 例 ) 共通サーバー設定から指定する。変更することはできない                        |
| 管理者パスワード             | データ : _____                                           |
| IS_ADMINPASSWD       | 例 ) 共通サーバー設定から指定する<br>制限 : 8 文字以上                     |
| LDAP ユーザー ID         | データ : _____                                           |
| IS_LDAP_USER         | 例 ) amldapuser ( デフォルト )。変更することはできない                  |
| LDAP パスワード           | データ : _____                                           |
| IS_LDAPUSERPASSWD    | 制限 : amadmin とは異なる必要がある                               |
| パスワードの暗号鍵            | データ : _____                                           |
| AM_ENC_PWD           | 状態ファイルの例 ) LOCK ( デフォルト )<br>対話インストールの例 ) デフォルトが生成される |
| <b>Web コンテナ用の情報</b>  |                                                       |
| ホスト名                 | データ : _____                                           |
| IS_WS_HOST_NAME      | 例 ) 現在のホストの FQDN ( デフォルト )                            |
| Web サーバーポート          | データ : _____                                           |
| IS_WS_INSTANCE_PORT  | 例 ) 80 ( デフォルト )                                      |
| Web サーバーインスタンスディレクトリ | データ : _____                                           |
| IS_WS_INSTANCE_DIR   | 例 ) /opt/SUNWwbsvr ( デフォルト )                          |
| ドキュメントルートディレクトリ      | データ : _____                                           |
| IS_WS_DOC_DIR        | 例 ) /opt/SUNWwbsvr ( デフォルト )                          |



表 A-10 Web Server に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                         | データ                                                                                                    |
|----------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| サーバーインスタンスポートはセキュリティ保護されていますか<br>IS_PROTOCOL             | データ : _____<br>対話インストールの例 ) セキュリティ保護されていない場合は http、セキュリティ保護されている場合は https<br>状態ファイルの例 ) http ( デフォルト ) |
| <b>サービスに関する情報、例 1</b>                                    |                                                                                                        |
| ホスト<br>SERVER_HOST                                       | データ : _____<br>例 ) ローカルシステムの FQDN                                                                      |
| サービス配備 URI<br>SERVER_DEPLOY_URI                          | データ : _____<br>例 ) amserver ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない                                        |
| 共通ドメイン配備 URI<br>CDS_DEPLOY_URI                           | データ : _____<br>例 ) amcommon ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない                                        |
| クッキードメイン<br>COOKIE_DOMAIN_LIST                           | データ : _____<br>例 ) 現在のドメインの直前にドットを追加したもの ( デフォルト )                                                     |
| このサービスにコンソールを配備しますか？<br>USE_DSAME_SERVICES_WEB_CONTAINER | データ : _____<br>対話インストールの例 ) yes または no<br>状態ファイルの例 ) true または false                                    |
| コンソールホスト<br>CONSOLE_HOST                                 | データ : _____<br>例 ) 既存のコンソールをホストするサーバーの FQDN                                                            |
| コンソールポート<br>CONSOLE_PORT                                 | データ : _____<br>例 ) 選択したコンテナの Web コンテナポート                                                               |
| コンソール配備 URI<br>CONSOLE_DEPLOY_URI                        | データ : _____<br>例 ) amconsole ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない                                       |
| パスワード配備 URI<br>PASSWORD_SERVICE_DEPLOY_URI               | データ : _____<br>例 ) ampassword ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない                                      |
| <b>Directory Server に関する情報</b>                           |                                                                                                        |
| ディレクトリサーバーホスト<br>IS_DS_HOSTNAME                          | データ : _____<br>例 ) ローカルシステムの FQDN                                                                      |
| ディレクトリサーバーポート<br>IS_DS_PORT                              | データ : _____<br>例 ) 389 ( デフォルト )                                                                       |

表 A-10 Web Server に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                              | データ                                                     |
|-----------------------------------------------|---------------------------------------------------------|
| アイデンティティサーバーディレクトリルートサフィックス<br>IS_ROOT_SUFFIX | データ : _____<br>例 ) Identity Server ルートサフィックスとして設定される DN |
| ディレクトリマネージャ<br>IS_DIRMGRDN                    | データ : _____<br>例 ) cn=Directory Manager ( デフォルト )       |
| ディレクトリマネージャパスワード<br>IS_DIRMGRPASSWD           | データ : _____<br>例 ) Directory Manager のパスワード             |
| <b>プロビジョニングされた既存のディレクトリが見つからない場合のための情報</b>    |                                                         |
| ディレクトリサーバーにユーザーデータが準備されていますか?<br>IS_LOAD_DIT  | データ : _____<br>例 ) no ( デフォルト )                         |
| 組織マーカーオブジェクトクラス<br>IS_ORG_OBJECT_CLASS        | データ : _____<br>例 ) SunManagedOrganization ( デフォルト )     |
| 組織ネーミング属性<br>CONFIG_IDENT_NA4ORG              | データ : _____<br>例 ) o ( デフォルト )                          |
| ユーザーマーカーオブジェクトクラス<br>IS_USER_OBJECT_CLASS     | データ : _____<br>例 ) intorgperson ( デフォルト )               |
| ユーザーネーミング属性<br>CONFIG_IDENT_NA4USER           | データ : _____<br>例 ) uid ( デフォルト )                        |
| <b>Portal Server に関する情報</b>                   |                                                         |
| 配備 URI<br>PS_DEPLOY_URI                       | データ : _____<br>例 ) /portal ( デフォルト )                    |
| サンプルポータル<br>PS_SAMPLE_PORTAL                  | データ : _____<br>例 ) y ( デフォルト )                          |

# BEA WebLogic に配備された Identity Server と Portal Server

このワークシートの各フィールドの詳細については、表 3-14、表 3-18、表 3-21、表 3-25、表 3-27、表 3-33 を参照してください。

表 A-11 BEA WebLogic に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ      | データ                                               |
|-----------------------|---------------------------------------------------|
| Identity Server       | データ : _____                                       |
| CMN_IS_INSTALLDIR     | 例) /opt                                           |
| Portal Server         | データ : _____                                       |
| CMN_PS_INSTALLDIR     | 例) /opt                                           |
| <b>登録のための情報</b>       |                                                   |
| 管理者ユーザー ID            | データ : _____                                       |
| IS_ADMIN_USER_ID      | 例) 共通サーバー設定から指定する。変更することはできない                     |
| 管理者パスワード              | データ : _____                                       |
| IS_ADMINPASSWD        | 例) 共通サーバー設定から指定する<br>制限: 8 文字以上                   |
| LDAP ユーザー ID          | データ : _____                                       |
| IS_LDAP_USER          | 例) amldapuser (デフォルト)。変更することはできない                 |
| LDAP パスワード            | データ : _____                                       |
| IS_LDAPUSERPASSWD     | 制限: amadmin とは異なる必要がある                            |
| パスワードの暗号鍵             | データ : _____                                       |
| AM_ENC_PWD            | 状態ファイルの例) LOCK (デフォルト)<br>対話インストールの例) デフォルトが生成される |
| <b>Web コンテナ用の情報</b>   |                                                   |
| インストールディレクトリ          | データ : _____                                       |
| IS_BEA_INSTALLDIR     | 例) /bea/wlserver6.1 (デフォルト)                       |
| 管理パスワード               | データ : _____                                       |
| IS_BEA_ADMIN_PASSWORD | 例) BEA WebLogic の管理パスワード                          |
| 管理ポート                 | データ : _____                                       |
| IS_BEA_ADMIN_PORT     | 例) 7001 (デフォルト)                                   |
| ドメイン                  | データ : _____                                       |
| IS_BEA_DOMAIN         | 例) mydomain (デフォルト)                               |
| インスタンス                | データ : _____                                       |
| IS_BEA_INSTANCE       | 例) myserver (デフォルト)                               |

表 A-11 BEA WebLogic に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                             | データ                                                                                                    |
|--------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ドキュメントルートディレクトリ<br>IS_BEA_DOC_ROOT_DIR                       | データ : _____<br>例 )<br>/bea/wlserver6.1/config/mydomain/applications/DefaultWebApp ( デフォルト )            |
| WebLogic 用の Java ホームディレクトリ<br>IS_BEA_WEB_LOGIC_JAVA_HOME_DIR | データ : _____<br>例 ) /bea/jdk131 ( デフォルト )                                                               |
| 管理サーバー<br>IS_BEA_MANAGED_SERVER                              | データ : _____<br>状態ファイルの例 ) yes ( デフォルト )                                                                |
| サーバーインスタンスポートはセキュリティ保護されていますか<br>IS_PROTOCOL                 | データ : _____<br>対話インストールの例 ) セキュリティ保護されていない場合は http、セキュリティ保護されている場合は https<br>状態ファイルの例 ) http ( デフォルト ) |
| <b>サービスに関する情報、例 1</b>                                        |                                                                                                        |
| ホスト<br>SERVER_HOST                                           | データ : _____<br>例 ) ローカルシステムの FQDN                                                                      |
| サービス配備 URI<br>SERVER_DEPLOY_URI                              | データ : _____<br>例 ) amserver ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない                                        |
| 共通ドメイン配備 URI<br>CDS_DEPLOY_URI                               | データ : _____<br>例 ) amcommon ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない                                        |
| クッキードメイン<br>COOKIE_DOMAIN_LIST                               | データ : _____<br>例 ) 現在のドメインの直前にドットを追加したもの ( デフォルト )                                                     |
| このサービスにコンソールを配備しますか?<br>USE_DSAME_SERVICES_WEB_CONTAINER     | データ : _____<br>対話インストールの例 ) yes または no<br>状態ファイルの例 ) true または false                                    |
| コンソールホスト<br>CONSOLE_HOST                                     | データ : _____<br>例 ) 既存のコンソールをホストするサーバーの FQDN                                                            |
| コンソールポート<br>CONSOLE_PORT                                     | データ : _____<br>例 ) 選択したコンテナの Web コンテナポート                                                               |
| コンソール配備 URI<br>CONSOLE_DEPLOY_URI                            | データ : _____<br>例 ) amconsole ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない                                       |

表 A-11 BEA WebLogic に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                  | データ                                                              |
|---------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|
| パスワード配備 URI<br>PASSWORD_SERVICE_DEPLOY_URI        | データ : _____<br>例 ) ampasword ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない |
| <b>Directory Server に関する情報</b>                    |                                                                  |
| ディレクトリサーバーホスト<br>IS_DS_HOSTNAME                   | データ : _____<br>例 ) ローカルシステムの FQDN                                |
| ディレクトリサーバーポート<br>IS_DS_PORT                       | データ : _____<br>例 ) 389 ( デフォルト )                                 |
| アイデンティティサーバーディレク<br>トリルートサフィックス<br>IS_ROOT_SUFFIX | データ : _____<br>例 ) Identity Server ルートサフィックスとして設定される DN          |
| ディレクトリマネージャ<br>IS_DIRMGRDN                        | データ : _____<br>例 ) cn=Directory Manager ( デフォルト )                |
| ディレクトリマネージャパスワード<br>IS_DIRMRPASSWD                | データ : _____<br>例 ) Directory Manager のパスワード                      |
| <b>プロビジョニングされた既存のディレクトリが見つからない場合のための情報</b>        |                                                                  |
| ディレクトリサーバーにユーザー<br>データが準備されていますか?<br>IS_LOAD_DIT  | データ : _____<br>例 ) no ( デフォルト )                                  |
| 組織マーカーオブジェクトクラス<br>IS_ORG_OBJECT_CLASS            | データ : _____<br>例 ) SunManagedOrganization ( デフォルト )              |
| 組織ネーミング属性<br>CONFIG_IDENT_NA4ORG                  | データ : _____<br>例 ) o ( デフォルト )                                   |
| ユーザーマーカーオブジェクトクラ<br>ス<br>IS_USER_OBJECT_CLASS     | データ : _____<br>例 ) intorgperson ( デフォルト )                        |
| ユーザーネーミング属性<br>CONFIG_IDENT_NA4USER               | データ : _____<br>例 ) uid ( デフォルト )                                 |
| <b>Portal Server に関する情報</b>                       |                                                                  |
| 配備 URI<br>PS_DEPLOY_URI                           | データ : _____<br>例 ) /portal ( デフォルト )                             |
| サンプルポータル<br>PS_SAMPLE_PORTAL                      | データ : _____<br>例 ) y ( デフォルト )                                   |

# IBM WebSphere に配備された Identity Server と Portal Server

このワークシートの各フィールドの詳細については、表 3-14、表 3-19、表 3-21、表 3-25、表 3-27、表 3-33 を参照してください。

表 A-12 IBM WebSphere に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ    | データ                                               |
|---------------------|---------------------------------------------------|
| Identity Server     | データ : _____                                       |
| CMN_IS_INSTALLDIR   | 例) /opt                                           |
| Portal Server       | データ : _____                                       |
| CMN_PS_INSTALLDIR   | 例) /opt                                           |
| <b>登録のための情報</b>     |                                                   |
| 管理者ユーザー ID          | データ : _____                                       |
| IS_ADMIN_USER_ID    | 例) 共通サーバー設定から指定する。変更することはできない                     |
| 管理者パスワード            | データ : _____                                       |
| IS_ADMINPASSWD      | 例) 共通サーバー設定から指定する<br>制限: 8 文字以上                   |
| LDAP ユーザー ID        | データ : _____                                       |
| IS_LDAP_USER        | 例) amldapuser (デフォルト)。変更することはできない                 |
| LDAP パスワード          | データ : _____                                       |
| IS_LDAPUSERPASSWD   | 制限: amadmin とは異なる必要がある                            |
| パスワードの暗号鍵           | データ : _____                                       |
| AM_ENC_PWD          | 状態ファイルの例) LOCK (デフォルト)<br>対話インストールの例) デフォルトが生成される |
| <b>Web コンテナ用の情報</b> |                                                   |
| インストールディレクトリ        | データ : _____                                       |
| IS_IBM_INSTALLDIR   | 例) /opt/WebSphere/AppServer (デフォルト)               |
| 仮想ホスト               | データ : _____                                       |
| IS_IBM_VIRTUAL_HOST | 例) default_host                                   |
| ノード名                | データ : _____                                       |
| IS_WAS40_NODE       | 例) 共通サーバー設定からの CMN_HOST_NAME                      |
| アプリケーションサーバー名       | データ : _____                                       |
| IS_IBM_APPSERV_NAME | 例) Default_Server (デフォルト)                         |
| アプリケーションサーバーポート     | データ : _____                                       |
| IS_IBM_APPSERV_PORT | 例) 9080 (デフォルト)                                   |

表 A-12 IBM WebSphere に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                                | データ                                                                                                    |
|-----------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ドキュメントルートディレクトリ<br>IS_IBM_DOC_DIR_HOST                          | データ : _____<br>例 ) /opt/IBMHTTPS/htdocs/en_US ( デフォルト )                                                |
| Web サーバーポート<br>IS_IBM_WEB_SERV_PORT                             | データ : _____<br>例 ) 80 ( デフォルト )                                                                        |
| IBM Websphere の Java Home ディレクトリ<br>IS_IBM_WEBSPPHERE_JAVA_HOME | データ : _____<br>例 ) /opt/WebSphere/AppServer/java ( デフォルト )                                             |
| サーバーインスタンスポートはセキュリティ保護されていますか<br>IS_PROTOCOL                    | データ : _____<br>対話インストールの例 ) セキュリティ保護されていない場合は http、セキュリティ保護されている場合は https<br>状態ファイルの例 ) http ( デフォルト ) |
| <b>サービスに関する情報、例 1</b>                                           |                                                                                                        |
| ホスト<br>SERVER_HOST                                              | データ : _____<br>例 ) ローカルシステムの FQDN                                                                      |
| サービス配備 URI<br>SERVER_DEPLOY_URI                                 | データ : _____<br>例 ) amserver ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない                                        |
| 共通ドメイン配備 URI<br>CDS_DEPLOY_URI                                  | データ : _____<br>例 ) amcommon ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない                                        |
| クッキードメイン<br>COOKIE_DOMAIN_LIST                                  | データ : _____<br>例 ) 現在のドメインの直前にドットを追加したもの ( デフォルト )                                                     |
| このサービスにコンソールを配備しますか?<br>USE_DSAME_SERVICES_WEB_CONTAINER        | データ : _____<br>対話インストールの例 ) yes または no<br>状態ファイルの例 ) true または false                                    |
| コンソールホスト<br>CONSOLE_HOST                                        | データ : _____<br>例 ) 既存のコンソールをホストするサーバーの FQDN                                                            |
| コンソールポート<br>CONSOLE_PORT                                        | データ : _____<br>例 ) 選択したコンテナの Web コンテナポート                                                               |
| コンソール配備 URI<br>CONSOLE_DEPLOY_URI                               | データ : _____<br>例 ) amconsole ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない                                       |
| パスワード配備 URI<br>PASSWORD_SERVICE_DEPLOY_URI                      | データ : _____<br>例 ) ampassword ( デフォルト )<br>注 ) 先頭にスラッシュを入力してはならない                                      |

表 A-12 IBM WebSphere に配備された Identity Server と Portal Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                  | データ                                                     |
|---------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|
| <i>Directory Server</i> に関する情報                    |                                                         |
| ディレクトリサーバーホスト<br>IS_DS_HOSTNAME                   | データ : _____<br>例 ) ローカルシステムの FQDN                       |
| ディレクトリサーバーポート<br>IS_DS_PORT                       | データ : _____<br>例 ) 389 ( デフォルト )                        |
| アイデンティティサーバーディレク<br>トリルートサフィックス<br>IS_ROOT_SUFFIX | データ : _____<br>例 ) Identity Server ルートサフィックスとして設定される DN |
| ディレクトリマネージャ<br>IS_DIRMGRDN                        | データ : _____<br>例 ) cn=Directory Manager ( デフォルト )       |
| ディレクトリマネージャパスワード<br>IS_DIRMGRPASSWD               | データ : _____<br>例 ) Directory Manager のパスワード             |
| プロビジョニングされた既存のディレクトリが見つからない場合のための情報               |                                                         |
| ディレクトリサーバーにユーザー<br>データが準備されていますか?<br>IS_LOAD_DIT  | データ : _____<br>例 ) no ( デフォルト )                         |
| 組織マーカーオブジェクトクラス<br>IS_ORG_OBJECT_CLASS            | データ : _____<br>例 ) SunManagedOrganization ( デフォルト )     |
| 組織ネーミング属性<br>CONFIG_IDENT_NA4ORG                  | データ : _____<br>例 ) o ( デフォルト )                          |
| ユーザーマーカーオブジェクトクラ<br>ス<br>IS_USER_OBJECT_CLASS     | データ : _____<br>例 ) intorgperson ( デフォルト )               |
| ユーザーネーミング属性<br>CONFIG_IDENT_NA4USER               | データ : _____<br>例 ) uid ( デフォルト )                        |
| <i>Portal Server</i> に関する情報                       |                                                         |
| 配備 URI<br>PS_DEPLOY_URI                           | データ : _____<br>例 ) /portal ( デフォルト )                    |
| サンプルポータルへの配備<br>PS_SAMPLE_PORTAL                  | データ : _____<br>例 ) y ( デフォルト )                          |



# Identity Server の配備後に Application Server に配備された Portal Server

このワークシートの各フィールドの詳細については、表 3-32、表 3-33、表 3-35 を参照してください。

表 A-13 Identity Server の配備後に Application Server に配備された Portal Server の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                    | データ                                                                                                             |
|-----------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Portal Server<br>CMN_PS_INSTALLDIR                  | データ : _____<br>例) /opt                                                                                          |
| <i>Identity Server</i> に関する情報                       |                                                                                                                 |
| LDAP パスワード<br>PS_IS_LDAP_AUTH_PASSWORD              | データ : _____<br>Identity Server LDAP ユーザーのパスワード                                                                  |
| 管理者パスワード<br>PS_IS_ADMIN_PASSWORD                    | データ : _____<br>Identity Server の最上位管理者のパスワード                                                                    |
| ディレクトリマネージャ<br>PS_DS_DIRMGR_DN                      | データ : _____<br>例) cn=Directory Manager (デフォルト)                                                                  |
| ディレクトリマネージャパスワード<br>PS_DS_DIRMGR_PASSWORD           | データ : _____<br>Directory Manager のパスワード                                                                         |
| <i>Portal Server</i> に関する情報                         |                                                                                                                 |
| 配備 URI<br>PS_DEPLOY_URI                             | データ : _____<br>例) /portal (デフォルト)                                                                               |
| サンプルポータル<br>PS_SAMPLE_PORTAL                        | データ : _____<br>例) y (デフォルト)                                                                                     |
| <i>Web コンテナ (Sun ONE Application Server)</i> に関する情報 |                                                                                                                 |
| インストールディレクトリ<br>PS_DEPLOY_DIR                       | データ : _____<br>例) /opt/SUNWappserver7 (デフォルト)                                                                   |
| ドメインディレクトリ<br>PS_DEPLOY_DOMAIN                      | データ : _____<br>例) /var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1 (デフォルト)                                               |
| サーバーインスタンス<br>PS_DEPLOY_INSTANCE                    | データ : _____<br>例) Identity Server 実行時インスタンスの値 (デフォルト)<br>注) 状態ファイルに IS_IAS7INSTANCE の値が存在しない場合、この値は server1 となる |
| ドキュメントルートディレクトリ<br>PS_DEPLOY_DOCROOT                | データ : _____<br>例) PS_DEPLOY_INSTANCE によって指定される Application Server インスタンスディレクトリに /docroot を追加したもの (デフォルト)        |

表 A-13 Identity Server の配備後に Application Server に配備された Portal Server の設定用ワークシート (続き)

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                          | データ                                                                        |
|-------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|
| 管理サーバーポート番号<br>PS_DEPLOY_ADMIN_PORT       | データ : _____<br>例) 4848 (デフォルト)                                             |
| 管理者ユーザー ID<br>PS_DEPLOY_ADMIN             | データ : _____<br>例) admin (デフォルト)                                            |
| 管理者のユーザーパスワード<br>PS_DEPLOY_ADMIN_PASSWORD | データ : _____<br>Portal Server が Application Server に管理者としてアクセスする際に使用するパスワード |

## Identity Server の配備後に Web サーバーに配備された Portal Server

このワークシートの各フィールドの詳細については、表 3-32、表 3-33、表 3-35 を参照してください。

表 A-14 Identity Server の配備後に Web Server に配備された Portal Server の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                            | データ                                            |
|---------------------------------------------|------------------------------------------------|
| Portal Server<br>CMN_PS_INSTALLDIR          | データ : _____<br>例) /opt                         |
| <b>Identity Server に関する情報</b>               |                                                |
| LDAP パスワード<br>PS_IS_LDAP_AUTH_PASSWORD      | データ : _____<br>Identity Server LDAP ユーザーのパスワード |
| 管理者パスワード<br>PS_IS_ADMIN_PASSWORD            | データ : _____<br>Identity Server の最上位管理者のパスワード   |
| ディレクトリマネージャ<br>PS_DS_DIRMGR_DN              | データ : _____<br>例) cn=Directory Manager (デフォルト) |
| ディレクトリマネージャパスワード<br>PS_DS_DIRMGR_PASSWORD   | データ : _____<br>Directory Manager のパスワード        |
| <b>Portal Server に関する情報</b>                 |                                                |
| 配備 URI<br>PS_DEPLOY_URI                     | データ : _____<br>例) /portal (デフォルト)              |
| サンプルポータル<br>PS_SAMPLE_PORTAL                | データ : _____<br>例) y (デフォルト)                    |
| <b>Web コンテナ (Sun ONE Web Server) に関する情報</b> |                                                |

表 A-14 Identity Server の配備後に Web Server に配備された Portal Server の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                   | データ                                                                                                                                                          |
|------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| インストールディレクトリ<br>PS_DEPLOY_DIR      | データ : _____<br>例 ) /opt/SUNWwbsvr ( デフォルト )                                                                                                                  |
| サーバーインスタンス<br>PS_DEPLOY_INSTANCE   | データ : _____<br>例 ) Identity Server Web コンテナのホスト名の値 ( デフォルト )<br>注 ) 状態ファイルでは、IS_WS_HOST_NAME に値が指定されない場合、共通サーバー設定に指定されているホスト名 ( CMN_HOST_NAME ) がデフォルトの名前となる |
| サーバードキュメントルート<br>PS_DEPLOY_DOCROOT | データ : _____<br>例 ) /opt/SUNWwbsvr/docs ( デフォルト )                                                                                                             |

## Instant Messaging のワークシート

Instant Messaging コンポーネント製品は、Java Enterprise System インストーラによって設定することができません。設定手順については、[225 ページの「インストーラ後の Instant Messaging の設定」](#)を参照してください。

表 A-15 Instant Messaging の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                   | データ                                  |
|----------------------------------------------------|--------------------------------------|
| Instant Messaging Server<br>CMN_IIM_INSTALLDIR     | データ : _____<br>例 ) /opt              |
| Instant Messaging Server ドキュメント<br>CMN_IIM_DOCSDIR | データ : _____<br>例 ) /opt/SUNWiim/html |

## Messaging Server のワークシート

Messaging Server コンポーネント製品は、Java Enterprise System のインストーラによって設定することができません。設定手順については、[226 ページの「インストール後の Messaging Server の設定」](#)を参照してください。

表 A-16 Messaging Server の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                      | データ                               |
|---------------------------------------|-----------------------------------|
| Messaging Server<br>CMN_MS_INSTALLDIR | データ : _____<br>例 ) /opt/SUNWmsgsr |

## Portal Server, Secure Remote Access のワークシート

このワークシートの各フィールドの詳細については、[125 ページの「Portal Server, Secure Remote Access の設定」](#)の表を参照してください。

次のワークシートが用意されています。

- [表 A-17, 単一セッションインストールでの Portal Server SRA Support の設定用ワークシート](#)
- [表 A-18, 複数セッションインストールでの Portal Server SRA Support の設定用ワークシート](#)
- [表 A-19, Portal Server, SRA ゲートウェイの設定用ワークシート](#)
- [表 A-20, Portal Server, SRA Netlet プロキシの設定用ワークシート](#)
- [表 A-21, Portal Server, SRA Rewriter プロキシの設定用ワークシート](#)

次の表は、Secure Remote Access Support と Portal Server を同時にインストールする場合に、Portal Server Secure Remote Access Support の設定用に指定する情報を示しています。

表 A-17 単一セッションインストールでの Portal Server SRA Support の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                    | 説明          |
|-------------------------------------|-------------|
| ポータルサーバードメイン<br>SRA_SERVER_DOMAIN   | データ : _____ |
| ゲートウェイプロトコル<br>SRA_GATEWAY_PROTOCOL | データ : _____ |

表 A-17 単一セッションインストールでの Portal Server SRA Support の設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                      | 説明          |
|---------------------------------------|-------------|
| ゲートウェイドメイン<br>SRA_GATEWAY_DOMAIN      | データ : _____ |
| ゲートウェイポート<br>SRA_GATEWAY_PORT         | データ : _____ |
| ゲートウェイプロファイル名<br>SRA_GATEWAY_PROFILE  | データ : _____ |
| ログのユーザーパスワード<br>SRA_LOG_USER_PASSWORD | データ : _____ |

次の表は、すでに Portal Server がインストールされているマシンに SRA Support をインストールする場合に、Portal Server, SRA Support の設定用に指定する情報を示しています。

表 A-18 複数セッションインストールでの Portal Server SRA Support の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                        | 説明          |
|---------------------------------------------------------|-------------|
| <i>Web コンテナに関する情報</i>                                   |             |
| 配備 URI<br>SRA_DEPLOY_URI                                | データ : _____ |
| <i>Identity Server に関する情報</i>                           |             |
| LDAP パスワード<br>SRA_IS_LDAP_AUTH_PASSWORD                 | データ : _____ |
| 管理者パスワード<br>PS_DEPLOY_ADMIN_PASSWORD                    | データ : _____ |
| <i>Sun ONE Application Server または BEA WebLogic 用の情報</i> |             |
| 管理者のユーザーパスワード<br>PS_DEPLOY_ADMIN_PASSWORD               | データ : _____ |

次の表は、Portal Server, Secure Remote Access ゲートウェイの設定時に指定する情報を示しています。

表 A-19 Portal Server, SRA ゲートウェイの設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                      | 説明         |
|---------------------------------------|------------|
| <i>Web コンテナに関する情報</i>                 |            |
| 配備 URI<br>SRA_DEPLOY_URI              | データ: _____ |
| <i>Identity Server に関する情報</i>         |            |
| インストールディレクトリ<br>SRA_IS_INSTALLDIR     | データ: _____ |
| <i>ゲートウェイに関する情報</i>                   |            |
| プロトコル<br>SRA_GW_PROTOCOL              | データ: _____ |
| ホスト名<br>SRA_GW_HOSTNAME               | データ: _____ |
| サブドメイン<br>SRA_GW_SUBDOMAIN            | データ: _____ |
| ドメイン<br>SRA_GW_DOMAIN                 | データ: _____ |
| IP アドレス<br>SRA_GW_IPADDRESS           | データ: _____ |
| アクセスポート<br>SRA_GW_PORT                | データ: _____ |
| ゲートウェイプロファイル名<br>SRA_GW_PROFILE       | データ: _____ |
| ログのユーザーパスワード<br>SRA_LOG_USER_PASSWORD | データ: _____ |
| インストール後ゲートウェイの開始<br>SRA_GW_START      | データ: _____ |
| <i>証明書に関する情報</i>                      |            |
| 組織<br>SRA_CERT_ORGANIZATION           | データ: _____ |
| 部署<br>SRA_CERT_DIVISION               | データ: _____ |
| 市 / 地域<br>SRA_CERT_CITY               | データ: _____ |

表 A-19 Portal Server, SRA ゲートウェイの設定用ワークシート (続き)

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                    | 説明         |
|-------------------------------------|------------|
| 州 / 都道府県名<br>SRA_CERT_STATE         | データ: _____ |
| 国名コード<br>SRA_CERT_COUNTRY           | データ: _____ |
| 証明書データベースパスワード<br>SRA_CERT_PASSWORD | データ: _____ |

次の表は、Portal Server, Secure Remote Access Netlet プロキシの設定時に指定する情報を示しています。

表 A-20 Portal Server, SRA Netlet プロキシの設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                         | 説明         |
|------------------------------------------|------------|
| <i>Web コンテナに関する情報</i>                    |            |
| 配備 URI<br>SRA_DEPLOY_URI                 | データ: _____ |
| <i>Identity Server に関する情報</i>            |            |
| インストールディレクトリ<br>SRA_IS_INSTALLDIR        | データ: _____ |
| <i>Netlet プロキシに関する情報</i>                 |            |
| ホスト名<br>SRA_NLP_HOSTNAME                 | データ: _____ |
| サブドメイン<br>SRA_NLP_SUBDOMAIN              | データ: _____ |
| ドメイン<br>SRA_NLP_DOMAIN                   | データ: _____ |
| IP アドレス<br>SRA_NLP_IPADDRESS             | データ: _____ |
| アクセスポート<br>SRA_NLP_PORT                  | データ: _____ |
| ゲートウェイプロファイル名<br>SRA_NLP_GATEWAY_PROFILE | データ: _____ |
| ログのユーザーパスワード<br>SRA_NLP_USER_PASSWORD    | データ: _____ |

表 A-20 Portal Server, SRA Netlet プロキシの設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                             | 説明          |
|----------------------------------------------|-------------|
| インストール後 Netlet プロキシの開始<br>SRA_NLP_START      | データ : _____ |
| <b>Portal に関する情報</b>                         |             |
| 別のホスト上でポータルサーバーで作業<br>SRA_IS_CREATE_INSTANCE | データ : _____ |
| プロトコル<br>SRA_SERVER_PROTOCOL                 | データ : _____ |
| ポータルホスト名<br>SRA_SERVER_HOST                  | データ : _____ |
| ポータルサーバーポート<br>SRA_SERVER_PORT               | データ : _____ |
| ポータルサーバー配備 URI<br>SRA_DEPLOY_URI             | データ : _____ |
| 組織 DN<br>SRA_IS_ORG_DN                       | データ : _____ |
| アイデンティティサーバーサービス URI<br>SRA_IS_SERVICE_URI   | データ : _____ |
| アイデンティティサーバーパスワードの暗号鍵<br>SRA_IS_PASSWORD_KEY | データ : _____ |
| <b>証明書に関する情報</b>                             |             |
| 組織<br>SRA_CERT_ORGANIZATION                  | データ : _____ |
| 部署<br>SRA_CERT_DIVISION                      | データ : _____ |
| 市 / 地域<br>SRA_CERT_CITY                      | データ : _____ |
| 州 / 都道府県名<br>SRA_CERT_STATE                  | データ : _____ |
| 国名コード<br>SRA_CERT_COUNTRY                    | データ : _____ |



表 A-20 Portal Server, SRA Netlet プロキシの設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                    | 説明          |
|-------------------------------------|-------------|
| 証明書データベースパスワード<br>SRA_CERT_PASSWORD | データ : _____ |

次の表は、Portal Server, Secure Remote Access Rewriter プロキシの設定時に指定する情報を示しています。

表 A-21 Portal Server, SRA Rewriter プロキシの設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                          | 説明          |
|-------------------------------------------|-------------|
| <i>Web コンテナに関する情報</i>                     |             |
| 配備 URI<br>SRA_DEPLOY_URI                  | データ : _____ |
| <i>Identity Server に関する情報</i>             |             |
| インストールディレクトリ<br>SRA_IS_INSTALLDIR         | データ : _____ |
| <i>Rewriter プロキシに関する情報</i>                |             |
| ホスト名<br>SRA_RWP_HOSTNAME                  | データ : _____ |
| サブドメイン<br>SRA_RWP_SUBDOMAIN               | データ : _____ |
| ドメイン<br>SRA_RWP_DOMAIN                    | データ : _____ |
| IP アドレス<br>SRA_RWP_IPADDRESS              | データ : _____ |
| アクセスポート<br>SRA_RWP_PORT                   | データ : _____ |
| ゲートウェイプロファイル名<br>SRA_RWP_GATEWAY_PROFILE  | データ : _____ |
| ログのユーザーパスワード<br>SRA_LOG_USER_PASSWORD     | データ : _____ |
| インストール後 Rewriter プロキシの開始<br>SRA_RWP_START | データ : _____ |

表 A-21 Portal Server, SRA Rewriter プロキシの設定用ワークシート ( 続き )

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                             | 説明         |
|----------------------------------------------|------------|
| <i>Portal</i> に関する情報                         |            |
| 別のホスト上でポータルサーバーで作業<br>SRA_IS_CREATE_INSTANCE | データ: _____ |
| プロトコル<br>SRA_SERVER_PROTOCOL                 | データ: _____ |
| ポータルホスト名<br>SRA_SERVER_HOST                  | データ: _____ |
| ポータルサーバーポート<br>SRA_SERVER_PORT               | データ: _____ |
| ポータルサーバー配備 URI<br>SRA_DEPLOY_URI             | データ: _____ |
| 組織 DN<br>SRA_IS_ORG_DN                       | データ: _____ |
| アイデンティティサーバーサービス URI<br>SRA_IS_SERVICE_URI   | データ: _____ |
| アイデンティティサーバーパスワードの暗号鍵<br>SRA_IS_PASSWORD_KEY | データ: _____ |
| 証明書に関する情報                                    |            |
| 組織<br>SRA_CERT_ORGANIZATION                  | データ: _____ |
| 部署<br>SRA_CERT_DIVISION                      | データ: _____ |
| 市 / 地域<br>SRA_CERT_CITY                      | データ: _____ |
| 州 / 都道府県名<br>SRA_CERT_STATE                  | データ: _____ |
| 国名コード<br>SRA_CERT_COUNTRY                    | データ: _____ |
| 証明書データベースパスワード<br>SRA_CERT_PASSWORD          | データ: _____ |

# Web Server のワークシート

このワークシートの各フィールドの詳細については、143 ページの「Web Server の設定」の表を参照してください。

表 A-22 Web Server の設定用ワークシート

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                     | データ         |
|--------------------------------------|-------------|
| Web Server<br>CMN_WS_INSTALLDIR      | データ : _____ |
| <b>管理情報</b>                          |             |
| 管理者ユーザー ID<br>WS_ADMIN_USER          | データ : _____ |
| 管理者パスワード<br>WS_ADMIN_PASSWORD        | データ : _____ |
| Web サーバーのドメイン名<br>WS_ADMIN_HOST      | データ : _____ |
| 管理ポート<br>WS_ADMIN_PORT               | データ : _____ |
| 管理実行時ユーザー ID<br>WS_ADMIN_SYSTEM_USER | データ : _____ |



# インストーラのコマンド行オプション

この付録では、Java Enterprise System のインストールプログラムとアンインストールプログラムのコマンド行オプションについて説明します。

## Java Enterprise System インストーラ

インストーラのコマンド行は、次の形式で指定します。

```
installer [option]...
```

次の表は、Java Enterprise System インストーラのオプションを示しています。

表 B-1 Java Enterprise System インストーラのコマンド行オプション

| オプション      | 説明                                                                                                   |
|------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| -help      | インストーラに使用できるコマンド行オプションを表示し、定義する                                                                      |
| -id        | 状態ファイル ID を画面上に出力する                                                                                  |
| -no        | ソフトウェアをインストールしないでインストーラを実行する                                                                         |
| -noconsole | ユーザーインタフェースを抑制し、インストーラをサイレントモードで起動する。サイレントモードでインストーラを起動するには、このオプションと <code>-state</code> を組み合わせて指定する |
| -nodisplay | インストーラをテキストベースモードで起動する (グラフィカルインタフェースを起動しない)                                                         |

表 B-1 Java Enterprise System インストーラのコマンド行オプション ( 続き )

| オプション                           | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|---------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| -saveState [ <i>statefile</i> ] | <p><i>statefile</i> によって指定される場所に状態ファイルを生成するようにインストーラに指示する。状態ファイルは、サイレントインストールの実行に使用される</p> <p>指定されたファイルが存在しない場合、このファイルは自動的に作成される</p> <p><i>statefile</i> の値を省略すると、インストーラはデフォルトの <i>statefile.out</i> ファイルに書き込みを行う</p> <p>連続するインストールセッションで同じ状態ファイルを指定することができる。初回のインストールセッションが終了すると、ファイル名に <i>n</i> が追加される。この <i>n</i> はゼロ (0) から始まる整数で、セッションが開始されるたびに増える</p> |
| -state <i>statefile</i>         | <p>指定された状態ファイルをサイレントインストールの入力として使用する。サイレントインストールを起動するには、このオプションと <code>-noconsole</code> を組み合わせて指定する</p>                                                                                                                                                                                                                                                    |

次の表は、さまざまなインストール例で使用されるオプションを示しています。

表 B-2 インストーラオプションの使用

| 実行するタスク                                  | 使用するオプション                                                  |
|------------------------------------------|------------------------------------------------------------|
| インストーラをテキストベースモードで実行する                   | <code>-nodisplay</code>                                    |
| インストーラをグラフィカルモードで実行する                    | なし                                                         |
| ソフトウェアをインストールせずにインストーラを実行する              | <code>-no</code>                                           |
| ソフトウェアをインストールせずに状態ファイルを作成する              | <code>-no -nodisplay -saveState [<i>statefile</i>]</code>  |
| ソフトウェアをグラフィカルモードでインストールすると同時に状態ファイルを作成する | <code>-saveState [<i>statefile</i>]</code>                 |
| インストーラをサイレントモードで実行する                     | <code>-nodisplay -noconsole -state <i>statefile</i></code> |

# Java Enterprise System アンインストーラ

アンインストーラのコマンド行は、次の形式で指定します。

```
uninstall [option]...
```

次の表は、Java Enterprise System アンインストーラのオプションを示しています。

表 B-3 Java Enterprise System アンインストーラのコマンド行オプション

| オプション                  | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| -help                  | アンインストーラに使用できるコマンド行オプションを表示し、定義する                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| -id                    | 状態ファイル ID を画面上に出力する                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| -no                    | ソフトウェアを削除せずにアンインストーラを実行する                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| -noconsole             | ユーザーインタフェースを抑制し、アンインストーラをサイレントモードで起動する。サイレントモードでアンインストーラを起動するには、このオプションと <code>-state</code> を組み合わせて指定する                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| -nodisplay             | アンインストーラをテキストベースモードで起動する (グラフィカルインタフェースを起動しない)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| -saveState [statefile] | <p><code>statefile</code> によって指定される場所に状態ファイルを生成するようにアンインストーラに指示する。状態ファイルは、サイレントアンインストールの実行に使用される</p> <p>指定されたファイルが存在しない場合、このファイルは自動的に作成される</p> <p><code>statefile</code> の値を省略すると、アンインストーラはデフォルトの <code>statefile.out</code> ファイルに書き込みを行う</p> <p>連続するアンインストールセッションで同じ状態ファイルを指定することができる。初回のアンインストールセッションが終了すると、ファイル名に <code>n</code> が追加される。この <code>n</code> はゼロ (0) から始まる整数で、セッションが開始されるたびに増える</p> |
| -state statefile       | 指定された状態ファイルをサイレントアンインストールの入力として使用する。サイレントアンインストールを行うには、このオプションと <code>-noconsole</code> を組み合わせて指定する                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |

次の表は、さまざまなアンインストール例で使用されるオプションを示しています。

表 B-4 アンインストーラオプションの使用

| 実行するタスク                                    | 使用するオプション                                 |
|--------------------------------------------|-------------------------------------------|
| アンインストーラをテキストベースモードで実行する                   | -nodisplay                                |
| アンインストーラをグラフィカルモードで実行する                    | なし                                        |
| ソフトウェアを削除せずにアンインストーラを実行する                  | -no                                       |
| ソフトウェアをアンインストールせずに状態ファイルを作成する              | -no -nodisplay -saveState<br>[statefile]  |
| ソフトウェアをグラフィカルモードでアンインストールすると同時に状態ファイルを作成する | -saveState [statefile]                    |
| アンインストーラをサイレントモードで実行する                     | -nodisplay -noconsole -state<br>statefile |



# コンポーネントのポート番号

この付録では、コンポーネント製品が使用するデフォルトのポート番号に関する情報を提供します。コンポーネント間でポート番号の割り当てを計画するときは、この情報を使用してください。

次の表は、コンポーネント、使用されるポート番号、各ポート番号の目的を示しています。Identity Server と Portal Server は、それぞれが配備される Web コンテナのポート番号を使用するため、この表には含まれません。

表 C-1 コンポーネント製品のポート番号

| コンポーネント                | ポート   | 目的                    |
|------------------------|-------|-----------------------|
| 管理サーバー                 | 390   | 標準の HTTP ポート          |
| Application Server     | 80    | 標準の HTTP ポート          |
|                        | 443   | HTTP over SSL         |
|                        | 3700  | 標準の IIOP ポート          |
|                        | 4848  | 管理サーバーのポート            |
|                        | 7676  | 標準の Message Queue ポート |
| Calendar Server        | 80    | 標準の HTTP ポート          |
|                        | 389   | LDAP ポート              |
|                        | 1080  | 管理ポート                 |
|                        | 57997 | ENS                   |
|                        | 59779 | DWP                   |
| Directory Proxy Server | 489   | LDAP リスナ              |
| Directory Server       | 389   | 標準の LDAP リスナ          |
|                        | 636   | LDAPS over SSL        |
| Instant Messaging      | 49909 | マルチプレクサポート            |

表 C-1 コンポーネント製品のポート番号 ( 続き )

| コンポーネント                             | ポート   | 目的                                                    |
|-------------------------------------|-------|-------------------------------------------------------|
|                                     | 49916 | セキュアモード、Netlet の送信ポート                                 |
|                                     | 49917 | セキュアモード、Netlet の受信ポート                                 |
|                                     | 49999 | Instant Messaging のポート                                |
|                                     | 49999 | Instant Messaging のポート                                |
| Message Queue                       | 80    | 標準の HTTP ポート                                          |
|                                     | 443   | HTTP over SSL                                         |
|                                     | 7676  | ポートマップ                                                |
| Messaging Server                    | 25    | 標準の SMTP ポート                                          |
|                                     | 80    | Messaging Express (HTTP) のポート                         |
|                                     | 110   | 標準の POP3 ポート / MMP POP3 プロキシ                          |
|                                     | 143   | 標準の IMAP4 ポート / MMP IMAP プロキシ                         |
|                                     | 443   | HTTP over SSL                                         |
|                                     | 992   | POP3 over SSL                                         |
|                                     | 993   | IMAP over SSL または MMP IMAP プロキシ over SSL              |
|                                     | 7997  | イベント通知サービスのポート                                        |
|                                     | 27442 | 製品の内部通信のために Job Controller によって使用される                  |
|                                     | 49994 | 製品の内部通信のために Watcher によって使用される                         |
| Portal Server, Secure Remote Access | 80    | 標準の HTTP ポート                                          |
|                                     | 443   | HTTP over SSL                                         |
|                                     | 10443 | Rewriter プロキシポート                                      |
|                                     | 10555 | Netlet プロキシポート                                        |
| Sun Cluster                         | 23    | Sun Fire 15000 システムコントローラ用に Telnet ポート 23 を使用する       |
|                                     | 161   | SNMP (Simple Network Management Protocol) エージェント通信ポート |

表 C-1 コンポーネント製品のポート番号 ( 続き )

| コンポーネント    | ポート           | 目的                               |
|------------|---------------|----------------------------------|
|            | 3000          | デフォルトの SunPlex Manager のポート      |
|            | 5000 ... 5010 | 物理ポート番号に 5000 を追加する、コンソールアクセスポート |
|            | 6789          | Sun Management Center Web コンソール  |
| Web Server | 80            | 標準の HTTP ポート                     |
|            | 443           | HTTP over SSL                    |
|            | 8888          | 標準の管理ポート                         |



# インストール可能なパッケージの一覧

この付録では、Java Enterprise System のインストールプログラムによってインストールされるパッケージの一覧を示します。この付録で説明する内容は、次のとおりです。

- アンインストーラのパッケージ
- コンポーネント製品用にインストールされるパッケージ
- 共有コンポーネント用にインストールされるパッケージ
- コンポーネント製品用のローカライズされたパッケージ

## アンインストーラのパッケージ

次の表は、Java Enterprise System のアンインストーラのパッケージを示しています。

表 D-1 アンインストーラのパッケージ

| コンポーネント                   | パッケージ                    |
|---------------------------|--------------------------|
| アンインストーラ                  | SUNWentsys-uninstall     |
| アンインストーラ (ローカライズされたパッケージ) | SUNWentsys110n-uninstall |

# コンポーネント製品用にインストールされる パッケージ

ここでは、Java Enterprise System の各コンポーネント製品用にインストールされるパッケージを示します。

## 管理サーバー

次の表は、管理サーバーのインストールパッケージを示しています。

表 D-2 管理サーバーのパッケージ

| コンポーネント | パッケージ                                         |
|---------|-----------------------------------------------|
| 管理サーバー  | SUNWasvc<br>SUNWasvcp<br>SUNWasvr<br>SUNWasvu |

## Application Server

次の表は、Application Server のインストールパッケージを示しています。

表 D-3 Application Server のパッケージ

| コンポーネント                                                     | パッケージ                                                      |
|-------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------|
| Application Server<br>(Platform Edition と Standard Edition) | SUNWascmo<br>SUNWasdmo<br>SUNWasdvo<br>SUNWaso<br>SUNWasro |
| 管理クライアント                                                    | SUNWasaco                                                  |
| Point Base サーバー                                             | SUNWasdbo                                                  |

## Calendar Server

次の表は、Calendar Server のインストールパッケージを示しています。

表 D-4 Calendar Server のパッケージ

| コンポーネント         | パッケージ                |
|-----------------|----------------------|
| Calendar Server | SUNWica5<br>SUNWics5 |

## Directory Server

次の表は、Directory Server のインストールパッケージを示しています。

表 D-5 Directory Server のパッケージ

| コンポーネント                    | パッケージ                                                                               |
|----------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| SPARC 環境の Directory Server | SUNWdsvcp<br>SUNWdsvh<br>SUNWdsvhx<br>SUNWdsvpl<br>SUNWdsvr<br>SUNWdsvu<br>SUNWdsvx |
| X86 環境の Directory Server   | SUNWdsvcp<br>SUNWdsvpl<br>SUNWdsvr<br>SUNWdsvu                                      |

## Identity Server

次の表は、Identity Server のインストールパッケージを示しています。

表 D-6 Identity Server のパッケージ

| コンポーネント                                  | パッケージ     |           |
|------------------------------------------|-----------|-----------|
| Identity Server                          | SUNWamcom | SUNWamsci |
|                                          | SUNWamdoc | SUNWamsws |
|                                          | SUNWamdsc | SUNWamutl |
|                                          | SUNWamext | SUNWamwlp |
|                                          | SUNWampwd | SUNWamwls |
|                                          | SUNWamrsa | SUNWamwsp |
|                                          | SUNWamsap | SUNWamwss |
|                                          | SUNWamsas |           |
| アイデンティティ管理とポリシーサービスコア<br>連携管理の共有ドメインサービス | SUNWamsvc |           |
|                                          | SUNWamfcd |           |
|                                          | SUNWamsai |           |
|                                          | SUNWamwli |           |
| Identity Server 管理コンソール                  | SUNWamsac |           |
|                                          | SUNWamwlc |           |
|                                          | SUNWamwsc |           |
|                                          | SUNWamwsc |           |
| Identity Server SDK                      | SUNWamcom |           |
|                                          | SUNWamsam |           |
|                                          | SUNWamsdk |           |

## Instant Messaging

次の表は、Instant Messaging のインストールパッケージを示しています。

表 D-7 Instant Messaging のパッケージ

| コンポーネント                  | パッケージ     |
|--------------------------|-----------|
| Instant Messaging サーバーコア | SUNWiim   |
|                          | SUNWiimin |
|                          | SUNWiimjd |
|                          | SUNWiimm  |



表 D-7 Instant Messaging のパッケージ ( 続き )

| コンポーネント                                | パッケージ                |
|----------------------------------------|----------------------|
| Instant Messaging リソース                 | SUNWiimc<br>SUNWiimd |
| Identity Server Instant Messaging サービス | SUNWiimid            |

## Message Queue

次の表は、Message Queue のインストールパッケージを示しています。

表 D-8 Message Queue のパッケージ

| コンポーネント                                                  | パッケージ                                                                                                     |
|----------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Message Queue<br>(Enterprise Edition と Platform Edition) | SUNWiqdoc<br>SUNWiqfs<br>SUNWiqjx<br>SUNWiqlen<br>SUNWiqtpl<br>SUNWiqr<br>SUNWiqu<br>SUNWiquc<br>SUNWiqum |

## Messaging Server

次の表は、Messaging Server のインストールパッケージを示しています。

表 D-9 Messaging Server のパッケージ

| コンポーネント                    | パッケージ                                                                                                                                    |
|----------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| SPARC 環境の Messaging Server | SUNWmsgco      SUNWmsgmp<br>SUNWmsgen      SUNWmsgmt<br>SUNWmsgin      SUNWmsgst<br>SUNWmsglb      SUNWmsgvc<br>SUNWmsgmf      SUNWmsgwm |

表 D-9 Messaging Server のパッケージ ( 続き )

| コンポーネント                  | パッケージ     |           |
|--------------------------|-----------|-----------|
| X86 環境の Messaging Server | SUNWmsgco | SUNWmsgmp |
|                          | SUNWmsgen | SUNWmsgmt |
|                          | SUNWmsgin | SUNWmsgst |
|                          | SUNWmsglb | SUNWmsgwm |
|                          | SUNWmsgmf |           |

## Portal Server

次の表は、Portal Server のインストールパッケージを示しています。

表 D-10 Portal Server のパッケージ

| コンポーネント       | パッケージ      |            |
|---------------|------------|------------|
| Portal Server | SUNWiimps  | SUNWpsnm   |
|               | SUNWps     | SUNWpsoh   |
|               | SUNWpsap   | SUNWpsp    |
|               | SUNWpsc    | SUNWpsps   |
|               | SUNWpscfcg | SUNWpsrw   |
|               | SUNWpscp   | SUNWpsrwa  |
|               | SUNWpsdis  | SUNWps sdk |
|               | SUNWpsdt   | SUNWpsse   |
|               | SUNWpsdta  | SUNWpssea  |
|               | SUNWpsdtc  | SUNWpssep  |
|               | SUNWpsdtm  | SUNWps sp  |
|               | SUNWpsdtp  | SUNWps sso |
|               | SUNWpsdtx  | SUNWps sub |
|               | SUNWpsmp   | SUNWps tlj |

## Portal Server, Secure Remote Access

次の表は、Portal Server, Secure Remote Access のインストールパッケージを示しています。

表 D-11 Portal Server SRA のパッケージ

| コンポーネント                | パッケージ      |
|------------------------|------------|
| Portal Server SRA サポート | SUNWpscfcg |
|                        | SUNWpsgwa  |
|                        | SUNWpsgwm  |
|                        | SUNWpsgws  |
|                        | SUNWpsmig  |
|                        | SUNWpsnf   |
|                        | SUNWpsnl   |
|                        | SUNWpsss   |
|                        | SUNWpsks   |
| ゲートウェイ                 | SUNWpsgw   |
| Netlet プロキシ            | SUNWpsnlp  |
| Rewriter プロキシ          | SUNWpsrwp  |

## Sun Cluster ソフトウェアとエージェント

次の表は、Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster エージェントのインストールパッケージを示しています。

表 D-12 Sun Cluster ソフトウェアとエージェントのパッケージ

| コンポーネント            | パッケージ     |           |
|--------------------|-----------|-----------|
| Sun Cluster ソフトウェア | SUNWmdm   | SUNWscsam |
|                    | SUNWscdev | SUNWscu   |
|                    | SUNWscgds | SUNWscva  |
|                    | SUNWscman | SUNWscvm  |
|                    | SUNWscnm  | SUNWscvr  |
|                    | SUNWscr   | SUNWscvw  |
|                    | SUNWscsal |           |

表 D-12 Sun Cluster ソフトウェアとエージェントのパッケージ ( 続き )

| コンポーネント                           | パッケージ      |           |
|-----------------------------------|------------|-----------|
| Sun Cluster ソフトウェア<br>( 追加パッケージ ) | SUNWpscfab | SUNWsci   |
|                                   | SUNWpschw  | SUNWscid  |
|                                   | SUNWpscraf | SUNWscidx |
|                                   | SUNWscfab  | SUNWscrdt |
|                                   | SUNWpschw  | SUNWscraf |
|                                   |            | SUNWscrif |
|                                   |            | SUNWscshl |
|                                   |            | SUNWscssv |
|                                   | SUNWsdocs  |           |

表 D-13 Sun Cluster ソフトウェアエージェントのパッケージ

| コンポーネント                    | パッケージ      |
|----------------------------|------------|
| 管理サーバー                     | SUNWasha   |
| Application Server データサービス | SUNWscslas |
| Calendar Server            | SUNWscics  |
| Directory Server           | SUNWdsha   |
| Message Queue データサービス      | SUNWscslmq |
| Messaging Server データサービス   | SUNWscims  |
| Web Server                 | SUNWschtt  |

## Web Server

次の表は、Web Server のインストールパッケージを示しています。

表 D-14 Web Server のパッケージ

| コンポーネント    | パッケージ      |
|------------|------------|
| Web Server | SUNWawbsvr |
|            | SUNWwbsvr  |

# 共有コンポーネント用にインストールされるパッケージ

表 D-15 は、各共有コンポーネント用に配布されるパッケージを示しています。最初の列はコンポーネント名、2 番目の列はそのコンポーネント用にインストールされるパッケージの名前が示されています。

表 D-15 共有コンポーネントのパッケージ

| コンポーネント                                                             | パッケージ                                                                                  |
|---------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------|
| Ant                                                                 | SUNWant                                                                                |
| Apache Common Logging                                               | SUNWaclg                                                                               |
| ICU (International Components for Unicode)                          | SUNWicu<br>SUNWicux                                                                    |
| Sun ONE Presentation Framework (Java Activation Framework、または JATO) | SUNWjato                                                                               |
| Sun ONE Application Framework                                       | SUNWjaf                                                                                |
| JavaHelp Runtime                                                    | SUNWjhrt                                                                               |
| Java Mail Runtime                                                   | SUNWjmail                                                                              |
| Java API for XML Parsing 1.2                                        | SUNWjaxp                                                                               |
| JAX-RPC Runtime                                                     | SUNWxrpcrt                                                                             |
| JAXR Runtime                                                        | SUNWxrgrt                                                                              |
| Java 2 Standard Edition, JDK 1.4.1                                  | SUNWj3dev<br>SUNWj3dmo<br>SUNWj3dvx<br>SUNWj3jmp<br>SUNWj3man<br>SUNWj3rt<br>SUNWj3rtx |
| Java Security Services (JSS)                                        | SUNWjss                                                                                |
| KT Search Engine (KTSE)                                             | SUNWktse                                                                               |
| LDAP C SDK                                                          | SUNWldk<br>SUNWldkx                                                                    |
| Netscape Portable Runtime (NSPR)                                    | SUNWpr<br>SUNWprd<br>SUNWprx                                                           |

表 D-15 共有コンポーネントのパッケージ ( 続き )

| コンポーネント                                     | パッケージ     |
|---------------------------------------------|-----------|
| Netscape Security Services (NSS)            | SUNWt1s   |
|                                             | SUNWt1su  |
|                                             | SUNWt1sx  |
| Netscape Security Services Utilities (NSSU) | SUNWt1su  |
| Simple Authentication Security Layer (SASL) | SUNWsas1  |
|                                             | SUNWsas1x |
| SOAP runtime                                | SUNWxsrt  |
| WebNFS                                      | SUNWebnfs |

## コンポーネント製品用のローカライズされたパッケージ

ここでは、Java Enterprise System の各コンポーネント製品用のローカライズされたパッケージを示します。言語別の構成となっており、ローカライズされたパッケージが作成された言語ごとに分かれています。各言語のセクションでは、Java Enterprise System コンポーネント製品ごとにローカライズされたパッケージを示します。また、表にはローカライズされたコンポーネント製品のバージョン番号も示されます。

ローカライズされたパッケージの名前には、言語を識別するための文字が含まれます。一部のパッケージでは、パッケージ名に含まれる「SUNW」の後に 1 文字が挿入されています。たとえば、日本語にローカライズされた Web Server のパッケージ名は SUNWjwbsvr で、このパッケージの韓国語バージョンの名前は SUNWkwbsvr です。

それ以外のパッケージでは、パッケージ名全体にローカライズバージョンを識別するための 2 文字が追加されています。たとえば、日本語にローカライズされた Messaging Server のパッケージ名は SUNWmsgja で、このパッケージの韓国語バージョンの名前は SUNWmsgko です。

次の表は、ローカライズされたパッケージ名の識別に使用される 1 文字と 2 文字の略号を示しています。

表 D-16 パッケージ名に含まれる言語略号

| 言語     | 1 文字の略号 | 2 文字の略号 |
|--------|---------|---------|
| 簡体字中国語 | c       | zh      |
| 繁体字中国語 | h       | tw      |
| フランス語  | f       | fr      |

表 D-16 パッケージ名に含まれる言語略号 (続き)

| 言語    | 1 文字の略号 | 2 文字の略号 |
|-------|---------|---------|
| ドイツ語  | d       | de      |
| 日本語   | j       | ja      |
| 韓国語   | k       | ko      |
| スペイン語 | e       | es      |

## 簡体字中国語パッケージ

次の表は、簡体字中国語にローカライズされたパッケージを示しています。

表 D-17 簡体字中国語にローカライズされたパッケージ

| コンポーネント製品                  | パッケージ       |
|----------------------------|-------------|
| Application Server 7.0 U1  | SUNWcasaco  |
|                            | SUNWcascmo  |
|                            | SUNWcasdmo  |
|                            | SUNWcaso    |
|                            | SUNWcjafo   |
|                            | SUNWcjmailo |
| Calendar Server 6.0        | SUNWzhics   |
| Directory Server 5.2       | SUNWcasvc   |
|                            | SUNWcasvcp  |
|                            | SUNWcasvu   |
|                            | SUNWcdsvcp  |
|                            | SUNWcdsvu   |
| Directory Proxy Server 5.2 | SUNWcdpsg   |
| Identity Server 6.1        | SUNWamlzh   |
| Instant Messaging 6.0.1    | SUNWciimc   |
|                            | SUNWciimd   |
|                            | SUNWciimin  |
|                            | SUNWcimid   |
| Message Queue 3.0.1        | SUNWiqczh   |
|                            | SUNWiqdzh   |
|                            | SUNWiqizh   |
| Messaging Server 6.0       | SUNWmsgzh   |

表 D-17 簡体字中国語にローカライズされたパッケージ ( 続き )

| コンポーネント製品              | パッケージ                |
|------------------------|----------------------|
| Portal Server 6.2      | SUNWcpsab SUNWcpsnf  |
| Portal SRA 6.2         | SUNWcpsca SUNWcpsnl  |
|                        | SUNWcpsda SUNWcpsnm  |
|                        | SUNWcpsdm SUNWcpsoh  |
|                        | SUNWcpsds SUNWcpsp   |
|                        | SUNWcpsdt SUNWcpsps  |
|                        | SUNWcpsdx SUNWcpsr   |
|                        | SUNWcpsg SUNWcpsra   |
|                        | SUNWcpsga SUNWcpsrp  |
|                        | SUNWcpsgm SUNWcpss   |
|                        | SUNWcpsgw SUNWcpssa  |
|                        | SUNWcpsgwc SUNWcpsse |
|                        | SUNWcpsim SUNWcpsso  |
|                        | SUNWcpsm SUNWcpsp    |
|                        | SUNWcpsma SUNWcpssu  |
|                        | SUNWcpsn             |
| Sun Cluster エージェント     | なし                   |
| Sun Cluster 3.1 ソフトウェア | SUNWcccon            |
|                        | SUNWcsc              |
|                        | SUNWcscshl           |
|                        | SUNWcscssv           |
|                        | SUNWcscvw            |
| Web Server 6.1         | SUNWcwbsvr           |

## 繁体字中国語パッケージ

次の表は、繁体字中国語にローカライズされたパッケージを示しています。

表 D-18 繁体字中国語にローカライズされたパッケージ

| コンポーネント製品                 | パッケージ       |
|---------------------------|-------------|
| Application Server 7.0 U1 | SUNWhasaco  |
|                           | SUNWhascmo  |
|                           | SUNWhasdm   |
|                           | SUNWhaso    |
|                           | SUNWhjafo   |
|                           | SUNWhjmailo |
| Calendar Server 6.0       | SUNWtwics   |



表 D-18 繁体字中国語にローカライズされたパッケージ ( 続き )

| コンポーネント製品                  | パッケージ      |           |
|----------------------------|------------|-----------|
| Directory Server 5.2       | SUNWhasvc  |           |
|                            | SUNWhasvcp |           |
|                            | SUNWhasvu  |           |
|                            | SUNWhdsvcp |           |
|                            | SUNWhdsvu  |           |
| Directory Proxy Server 5.2 | SUNWhdpsg  |           |
| Identity Server 6.1        | SUNWamltw  |           |
| Instant Messaging 6.0.1    | SUNWhiimc  |           |
|                            | SUNWhiimd  |           |
|                            | SUNWhiimin |           |
|                            | SUNWhimid  |           |
| Message Queue 3.0.1        | SUNWiqctw  |           |
|                            | SUNWiqitw  |           |
| Messaging Server 6.0       | SUNWmsgtw  |           |
| Portal Server 6.2          | SUNWhpsab  | SUNWhpsnf |
| Portal SRA 6.2             | SUNWhpsca  | SUNWhpsnl |
|                            | SUNWhpsda  | SUNWhpsnm |
|                            | SUNWhpsdm  | SUNWhpsoh |
|                            | SUNWhpsds  | SUNWhpsp  |
|                            | SUNWhpsdt  | SUNWhpsps |
|                            | SUNWhpsdx  | SUNWhpsr  |
|                            | SUNWhpsg   | SUNWhpsra |
|                            | SUNWhpsga  | SUNWhpsrp |
|                            | SUNWhpsgm  | SUNWhpss  |
|                            | SUNWhpsgw  | SUNWhpssa |
|                            | SUNWhpsgwc | SUNWhpsse |
|                            | SUNWhpsim  | SUNWhpsso |
|                            | SUNWhpsm   | SUNWhpssp |
|                            | SUNWhpsma  | SUNWhpssu |
|                            | SUNWhpsn   |           |
| Sun Cluster エージェント         | なし         |           |
| Sun Cluster 3.1 ソフトウェア     | SUNWhscshl |           |
|                            | SUNWhscvw  |           |
| Web Server 6.1             | SUNWhwbsvr |           |

## フランス語のパッケージ

次の表は、フランス語にローカライズされたパッケージを示しています。

表 D-19 フランス語にローカライズされたパッケージ

| コンポーネント製品                  | パッケージ       |
|----------------------------|-------------|
| Application Server 7.0 U1  | SUNWfasaco  |
|                            | SUNWfascmo  |
|                            | SUNWfasdmo  |
|                            | SUNWfaso    |
|                            | SUNWfjafo   |
|                            | SUNWfjmailo |
| Calendar Server 6.0        | SUNWfoics   |
| Directory Server 5.2       | SUNWfasvc   |
|                            | SUNWfasvcp  |
|                            | SUNWfasvu   |
|                            | SUNWfdsvcp  |
|                            | SUNWfdsvu   |
| Directory Proxy Server 5.2 | SUNWfdpsg   |
| Identity Server 6.1        | SUNWamlfr   |
| Instant Messaging 6.0.1    | SUNWfiimc   |
|                            | SUNWfiimd   |
|                            | SUNWfiimin  |
|                            | SUNWfimid   |
| Message Queue 3.0.1        | SUNWfscs1mq |
|                            | SUNWiqcfr   |
|                            | SUNWiqifr   |
|                            | SUNWfscs1mq |
| Messaging Server 6.0       | SUNWmsgfr   |

表 D-19 フランス語にローカライズされたパッケージ (続き)

| コンポーネント製品              | パッケージ       |
|------------------------|-------------|
| Portal Server 6.2      | SUNWfpsab   |
| Portal SRA 6.2         | SUNWfpsc    |
|                        | SUNWfpsda   |
|                        | SUNWfpsdm   |
|                        | SUNWfpsds   |
|                        | SUNWfpsdt   |
|                        | SUNWfpsdx   |
|                        | SUNWfpsg    |
|                        | SUNWfpsga   |
|                        | SUNWfpsgm   |
|                        | SUNWfpsgw   |
|                        | SUNWfpsgc   |
|                        | SUNWfpsim   |
|                        | SUNWfpsm    |
|                        | SUNWfpsma   |
|                        | SUNWfpsn    |
| Sun Cluster エージェント     | SUNWfschtt  |
|                        | SUNWfscslas |
| Sun Cluster 3.1 ソフトウェア | SUNWfcon    |
|                        | SUNWfsc     |
|                        | SUNWfscshl  |
|                        | SUNWfscssv  |
|                        | SUNWfscvw   |
| Web Server 6.1         | SUNWfwbsvr  |

## ドイツ語のパッケージ

次の表は、ドイツ語にローカライズされたパッケージを示しています。

表 D-20 ドイツ語にローカライズされたパッケージ

| コンポーネント製品                 | パッケージ       |
|---------------------------|-------------|
| Application Server 7.0 U1 | SUNWdasaco  |
|                           | SUNWdascmo  |
|                           | SUNWdasdmo  |
|                           | SUNWdaso    |
|                           | SUNWdjafo   |
|                           | SUNWdjmailo |
| Calendar Server 6.0       | SUNWdeics   |

表 D-20 ドイツ語にローカライズされたパッケージ ( 続き )

| コンポーネント製品                  | パッケージ      |           |
|----------------------------|------------|-----------|
| Directory Server 5.2       | SUNWdasvc  |           |
|                            | SUNWdasvcp |           |
|                            | SUNWdasvu  |           |
|                            | SUNWddsvcp |           |
|                            | SUNWddsvu  |           |
| Directory Proxy Server 5.2 | SUNWddpsg  |           |
| Identity Server 6.1        | SUNWamlde  |           |
| Instant Messaging 6.0.1    | SUNWdiimc  |           |
|                            | SUNWdiimd  |           |
|                            | SUNWdiimin |           |
|                            | SUNWdimid  |           |
| Message Queue 3.0.1        | SUNWiqcde  |           |
|                            | SUNWiqide  |           |
| Messaging Server 6.0       | SUNWmsgde  |           |
| Portal Server 6.2          | SUNWdpsab  | SUNWdpsnf |
| Portal SRA 6.2             | SUNWdpsca  | SUNWdpsnl |
|                            | SUNWdpsda  | SUNWdpsnm |
|                            | SUNWdpsdm  | SUNWdpsoh |
|                            | SUNWdpsds  | SUNWdpsp  |
|                            | SUNWdpsdt  | SUNWdpsps |
|                            | SUNWdpsdx  | SUNWdpsr  |
|                            | SUNWdpsg   | SUNWdpsra |
|                            | SUNWdpsga  | SUNWdpsrp |
|                            | SUNWdpsgm  | SUNWdpsr  |
|                            | SUNWdpsgw  | SUNWdpsra |
|                            | SUNWdpsgwc | SUNWdpsra |
|                            | SUNWdpsim  | SUNWdpsra |
|                            | SUNWdpsm   | SUNWdpsra |
|                            | SUNWdpsma  | SUNWdpsra |
| SUNWdpsn                   | SUNWdpsra  |           |
| Sun Cluster エージェント         | なし         |           |
| Sun Cluster 3.1 ソフトウェア     | なし         |           |
| Web Server 6.1             | SUNWdwbsvr |           |

## 日本語のパッケージ

次の表は、日本語にローカライズされたパッケージを示しています。

表 D-21 日本語にローカライズされたパッケージ

| コンポーネント製品                  | パッケージ       |
|----------------------------|-------------|
| Application Server 7.0 U1  | SUNWjasaco  |
|                            | SUNWjascmo  |
|                            | SUNWjasdmo  |
|                            | SUNWjaso    |
|                            | SUNWjjafo   |
|                            | SUNWjjmailo |
| Calendar Server 6.0        | SUNWjaics   |
| Directory Server 5.2       | SUNWjasvc   |
|                            | SUNWjasvcp  |
|                            | SUNWjasvu   |
|                            | SUNWjdsvcp  |
|                            | SUNWjdsvu   |
| Directory Proxy Server 5.2 | SUNWjdpsg   |
| Identity Server 6.1        | SUNWamlja   |
| Instant Messaging 6.0.1    | SUNWjiimc   |
|                            | SUNWjiimd   |
|                            | SUNWjiimin  |
|                            | SUNWjimid   |
| Message Queue 3.0.1        | SUNWjscs1mq |
|                            | SUNWiqcja   |
|                            | SUNWiqdja   |
|                            | SUNWiqija   |
| Messaging Server 6.0       | SUNWmsgja   |

表 D-21 日本語にローカライズされたパッケージ (続き)

| コンポーネント製品              | パッケージ       |
|------------------------|-------------|
| Portal Server 6.2      | SUNWjpsab   |
| Portal SRA 6.2         | SUNWjpsca   |
|                        | SUNWjpsda   |
|                        | SUNWjpsdm   |
|                        | SUNWjpsds   |
|                        | SUNWjpsdt   |
|                        | SUNWjpsdx   |
|                        | SUNWjpsg    |
|                        | SUNWjpsga   |
|                        | SUNWjpsgm   |
|                        | SUNWjpsgw   |
|                        | SUNWjpsgw   |
|                        | SUNWjpsim   |
|                        | SUNWjpsm    |
|                        | SUNWjpsma   |
|                        | SUNWjpsn    |
| Sun Cluster エージェント     | SUNWjschtt  |
|                        | SUNWjcsclas |
| Sun Cluster 3.1 ソフトウェア | SUNWjccon   |
|                        | SUNWjsc     |
|                        | SUNWjscman  |
|                        | SUNWjcschl  |
|                        | SUNWjcssv   |
|                        | SUNWjscvw   |
|                        | SUNWjscman  |
| Web Server 6.1         | SUNWjwbsvr  |

## 韓国語のパッケージ

次の表は、韓国語にローカライズされたパッケージを示しています。

表 D-22 韓国語にローカライズされたパッケージ

| コンポーネント製品                 | パッケージ       |
|---------------------------|-------------|
| Application Server 7.0 U1 | SUNWkasaco  |
|                           | SUNWkascmo  |
|                           | SUNWkasdmo  |
|                           | SUNWkaso    |
|                           | SUNWkjafo   |
|                           | SUNWkjmailo |

表 D-22 韓国語にローカライズされたパッケージ ( 続き )

| コンポーネント製品                  | パッケージ                                                                                                                                                                                         |
|----------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Calendar Server 6.0        | SUNWkoics                                                                                                                                                                                     |
| Directory Server 5.2       | SUNWkasvc<br>SUNWkasvcp<br>SUNWkasvu<br>SUNWkdsvc<br>SUNWkdsvu                                                                                                                                |
| Directory Proxy Server 5.2 | SUNWkdpdg                                                                                                                                                                                     |
| Identity Server 6.1        | SUNWamlko                                                                                                                                                                                     |
| Instant Messaging 6.0.1    | SUNWkiimc<br>SUNWkiimd<br>SUNWkiimin<br>SUNWkimid                                                                                                                                             |
| Message Queue 3.0.1        | SUNWiqcko<br>SUNWiqiko                                                                                                                                                                        |
| Messaging Server 6.0       | SUNWmsgko                                                                                                                                                                                     |
| Portal Server 6.2          | SUNWkpsab                                                                                                                                                                                     |
| Portal SRA 6.2             | SUNWkpsca<br>SUNWkpsda<br>SUNWkpsdm<br>SUNWkpsds<br>SUNWkpsdt<br>SUNWkpsdx<br>SUNWkpsg<br>SUNWkpsga<br>SUNWkpsgm<br>SUNWkpsgw<br>SUNWkpsgwc<br>SUNWkpsim<br>SUNWkpsm<br>SUNWkpsma<br>SUNWkpsn |
|                            | SUNWkpsnf<br>SUNWkpsnl<br>SUNWkpsnm<br>SUNWkpsoh<br>SUNWkpsp<br>SUNWkpsps<br>SUNWkpsr<br>SUNWkpsra<br>SUNWkpsrp<br>SUNWkpss<br>SUNWkpssa<br>SUNWkpsse<br>SUNWkpssso<br>SUNWkpssp<br>SUNWkpssu |
| Sun Cluster エージェント         | なし                                                                                                                                                                                            |
| Sun Cluster 3.1 ソフトウェア     | SUNWkscshl<br>SUNWkscvw                                                                                                                                                                       |
| Web Server 6.1             | SUNWkwbsvr                                                                                                                                                                                    |

## スペイン語のパッケージ

次の表は、スペイン語にローカライズされたパッケージを示しています。

表 D-23 スペイン語にローカライズされたパッケージ

| コンポーネント製品                  | パッケージ       |
|----------------------------|-------------|
| Application Server 7.0 U1  | SUNWeasaco  |
|                            | SUNWeascmo  |
|                            | SUNWeasdmo  |
|                            | SUNWeaso    |
|                            | SUNWejafo   |
|                            | SUNWejmailo |
| Calendar Server 6.0        | SUNWesics   |
| Directory Server 5.2       | SUNWeasvc   |
|                            | SUNWeasvcp  |
|                            | SUNWeasvu   |
|                            | SUNWedsvcp  |
|                            | SUNWedsvu   |
| Directory Proxy Server 5.2 | SUNWedpsg   |
| Identity Server 6.1        | SUNWamles   |
| Instant Messaging 6.0.1    | SUNWeiimc   |
|                            | SUNWeiimd   |
|                            | SUNWeiimin  |
|                            | SUNWeiimid  |
| Message Queue 3.0.1        | SUNWiqces   |
|                            | SUNWiqies   |
| Messaging Server 6.0       | SUNWmsges   |



表 D-23 スペイン語にローカライズされたパッケージ (続き)

| コンポーネント製品              | パッケージ                     |
|------------------------|---------------------------|
| Portal Server 6.2      | SUNWepsab      SUNWepsnf  |
| Portal SRA 6.2         | SUNWepsca      SUNWepsnl  |
|                        | SUNWepsda      SUNWepsnm  |
|                        | SUNWepsdm      SUNWepsoh  |
|                        | SUNWepsds      SUNWepsp   |
|                        | SUNWepsdt      SUNWepsps  |
|                        | SUNWepsdx      SUNWepsr   |
|                        | SUNWepsg      SUNWepsra   |
|                        | SUNWepsga      SUNWepsrp  |
|                        | SUNWepsgm      SUNWepss   |
|                        | SUNWepsgw      SUNWepssa  |
|                        | SUNWepsgwc      SUNWepsse |
|                        | SUNWepsim      SUNWepsso  |
|                        | SUNWeps      SUNWepssp    |
|                        | SUNWepsma      SUNWepssu  |
|                        | SUNWepsn                  |
| Sun Cluster エージェント     | なし                        |
| Sun Cluster 3.1 ソフトウェア | なし                        |
| Web Server 6.1         | SUNWewbsvr                |

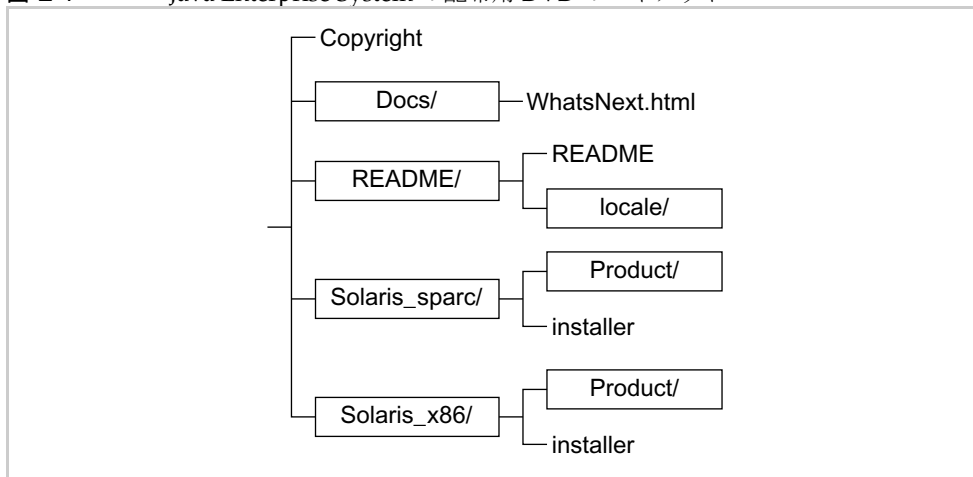
コンポーネント製品用のローカライズされたパッケージ

# 配布内容のディレクトリ構造

この付録では、Java Enterprise System の配布用 DVD の内容について説明します。

Java Enterprise System 製品の DVD には、Solaris™ オペレーティングシステム (SPARC Platform Edition) 用と Solaris オペレーティングシステム (X86 Platform Edition) 用の両方の製品配布が含まれます。次の図は、DVD の最上位のレイアウトを示しています。

図 E-1 Java Enterprise System の配布用 DVD のレイアウト



次の表は、Java Enterprise System の配布用 DVD に含まれる項目について説明しています。

表 E-1 Java Enterprise System の配布用 DVD に含まれる項目の説明

| 項目             | 説明                                                                                                                                   |
|----------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Copyright      | Java Enterprise System のこの配布に関する著作権通知                                                                                                |
| Docs/          | Java Enterprise System の配布のマニュアル情報を含むディレクトリ                                                                                          |
| WhatsNext.html | マニュアルやリソースへのポインタを含む、Java Enterprise System を紹介するドキュメント                                                                               |
| README/        | README ファイルを含むディレクトリ                                                                                                                 |
| README         | Java Enterprise System のこの配布に関する README ファイル                                                                                         |
| locale/        | README ファイルのローカライズされたバージョンを含むディレクトリ                                                                                                  |
| Solaris_sparc/ | Solaris OS (SPARC Platform Edition) の配布にインストーラが使用するファイルを含むディレクトリ                                                                     |
| Solaris_x86/   | Solaris OS (x86 Platform Edition) の配布にインストーラが使用するファイルを含むディレクトリ                                                                       |
| installer      | Java Enterprise System のインストールプログラム。各 Solaris プラットフォームごとに専用のインストールプログラムが用意されている                                                      |
| Product/       | インストール時に Java Enterprise System が使用するパッケージ、ツール、ローカライズファイル、その他のファイルのサブディレクトリを含むディレクトリ。各 Solaris プラットフォームごとに専用の Product ディレクトリが用意されている |

# ネットワークインストールのための セットアップ方法

この付録では、サイトのネットワークで Java Enterprise System のインストールイメージを使用できるようにする方法について説明します。

Java Enterprise System の配布は、共有される場所にインストールファイルを簡単に格納できるように設計されています。その利点として、インストールファイルの取得が 1 回だけですむ、という点が挙げられます。さらに、Java Enterprise System インストーラを、この共有の場所から何度でも実行することができます。

配布方法として次の 3 つがあり、Java Enterprise System ソフトウェアはこれらの方法で入手できます。

- **CD または DVD**

Sun の販売代理店または [www.sun.com](http://www.sun.com) に連絡することで、CD または DVD を含むメディアキットを入手できます。各 CD には、単一のオペレーティングシステム用の、(Sun Solaris SPARC または Solaris x86)、Java Enterprise System インストーラプログラム、およびすべてのコンポーネント製品のインストールファイルが含まれています。DVD には、すべてのオペレーティングシステム用の、Java Enterprise System インストーラプログラム、およびすべてのコンポーネント製品のインストールファイルが含まれています。

一部の Solaris 9 メディアキットには、CD または DVD に記録された Java Enterprise System ソフトウェアがすでに含まれています。

- **Web ダウンロード**

Sun Download Center (<http://www.sun.com/download>) では、Java Enterprise System ソフトウェアをいくつかの形式でダウンロードできます。

- 単一オペレーティングシステム用のすべてのインストールファイルを含む ISO CD イメージ
- 単一オペレーティングシステム用のすべてのインストールファイルを含む圧縮アーカイブ

- コンポーネント製品、その製品に必要な共有コンポーネントを含む、単一コンポーネント製品用のすべてのインストールファイルの圧縮アーカイブ

---

**注**                    同じプラットフォーム用のコンポーネント製品をいくつかダウンロードする場合、通常、すべてのコンポーネントのダウンロードを選択することをお勧めします。

---

- **システムにすでにロードされているソフトウェア**

ソフトウェアが事前にロードまたはインストールされている Sun のハードウェアシステムを注文した場合は、Java Enterprise System のインストールファイルがシステムにすでにロードされている可能性があります。システムに次のディレクトリが存在する場合は、Java Enterprise System のインストールファイルがすでにロードされています。

```
/var/spool/stage/JES_03Q4_SPARC/Solaris_sparc/
```

事前にロードされているソフトウェアのインストールと設定については、59 ページの「特定の配備要件に適したインストール手順」を参照してください。

▶ **共有ディレクトリでインストールイメージを利用できるようにするには**

1. root としてログインするか、スーパーユーザーになります。
2. ネットワーク上に共有ディレクトリを作成します。

例：

```
mkdir java_ent_sys_2003Q4
```

3. Web サイト、CD、または DVD に含まれるインストールファイルにアクセスし、インストールファイルの共有を準備します。

**Web ダウンロードの場合：**Java Enterprise System の配布内容をダウンロードしたら (CD イメージまたは圧縮されたアーカイブ)、共有の場所でファイルを解凍します。

- a. 通常は、CD イメージは CD に書き込まれていますが、必要に応じてマウントすることもできます。

マウントの例：

```
unzip java_es_03Q4-solaris-sparc-iso.zip
lofiadm -a pathname/java_es_03Q4-solaris-sparc.iso /dev/lofi/1
mkdir mountpoint
mount -F hsfs /dev/lofi/1 mountpoint
ls mountpoint
Copyright Docs README Solaris_sparc
```

```
cd mountpoint/Solaris_sparc
ls
Product installer
```

- b. 圧縮されたアーカイブを共有の場所にコピーし、ファイルを解凍します。  
例：

```
unzip java_es_03Q4-solaris-sparc.zip
```

- CD または DVD の場合：インストールファイルを共有の場所にコピーします。  
例：

```
mkdir shared-loc/java_ent_sys_2003Q4
cd /cdrom
find jes_03q4_sparc | cpio -pdmu shared-loc/java_ent_sys_2003Q4
```

---

|   |                                                                                                                                                                                              |
|---|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 注 | <p>複数プラットフォームのファイルを共有の場所にコピーした場合、README ファイルと COPYRIGHT ファイルに関する次のようなプロンプトが表示されます。</p> <pre>File already exists. OK to overwrite?</pre> <p><b>Yes</b> と入力します。これらのファイルはすべてのプラットフォームで共通です。</p> |
|---|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

---

4. ファイルが利用可能になったことをユーザーに通知します。

次の表は、Java Enterprise System ソフトウェアの Solaris SPARC の配布内容と Solaris X86 の配布内容を示しています。(ISO 配布には、バンドル名に iso という指定が含まれる。例：java\_es\_03Q4-solaris-sparc.iso.zip)

表 F-1 Solaris SPARC の配布内容

| コンポーネントバンドル            | それ以外に含まれる内容             | バンドル名                                    |
|------------------------|-------------------------|------------------------------------------|
| Solaris SPARC プラットフォーム | すべてのコンポーネント             | java_es_03Q4-solaris-sparc.zip           |
| Application Server     | Message Queue           | java_es_03Q4_appserver-solaris-sparc.zip |
| Calendar Server        | 管理サーバー、Directory Server | java_es_03Q4_calendar-solaris-sparc.zip  |
| Directory Server       | 管理サーバー                  | java_es_03Q4_directory-solaris-sparc.zip |
| Directory Proxy Server | 管理サーバー、Directory Server | java_es_03Q4_dirproxy-solaris-sparc.zip  |

表 F-1 Solaris SPARC の配布内容 ( 続き )

| コンポーネントバンドル       | それ以外に含まれる内容                                                                                                                                  | バンドル名                                    |
|-------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------|
| Identity Server   | 管理サーバー<br>Application Server<br>Directory Server<br>Message Queue<br>Web Server<br>(commcli ユーティリティ)                                         | java_es_03Q4_identity-solaris-sparc.zip  |
| Instant Messaging | 管理サーバー<br>Application Server<br>Identity Server<br>Message Queue<br>Web Server<br>(commcli ユーティリティ)                                          | java_es_03Q4_im-solaris-sparc.zip        |
| Messaging Server  | 管理サーバー<br>Directory Server                                                                                                                   | java_es_03Q4_msgserver-solaris-sparc.zip |
| Message Queue     | Message Queue                                                                                                                                | java_es_03Q4_msgq-solaris-sparc.zip      |
| Portal Server     | 管理サーバー<br>Application Server<br>Directory Server<br>Identity Server<br>Message Queue<br>Portal Server SRA<br>Web Server<br>(commcli ユーティリティ) | java_es_03Q4_portal-solaris-sparc.zip    |
| Sun Cluster       |                                                                                                                                              | java_es_03Q4_cluster-solaris-sparc.zip   |
| Web Server        | Web Server                                                                                                                                   | java_es_03Q4_webserver-solaris-sparc.zip |

表 F-2 Solaris X86 の配布内容

| コンポーネントバンドル          | それ以外に含まれる内容   | バンドル名                                  |
|----------------------|---------------|----------------------------------------|
| Solaris X86 プラットフォーム | すべてのコンポーネント   | java_es_03Q4-solaris-x86.zip           |
| Application Server   | Message Queue | java_es_03Q4_appserver-solaris-x86.zip |



表 F-2 Solaris X86 の配布内容 ( 続き )

| コンポーネントバンドル            | それ以外に含まれる内容                                                                                                                                      | バンドル名                                  |
|------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------|
| Calendar Server        | 管理サーバー、<br>Directory Server                                                                                                                      | java_es_03Q4_calendar-solaris-x86.zip  |
| Directory Server       | 管理サーバー                                                                                                                                           | java_es_03Q4_directory-solaris-x86.zip |
| Directory Proxy Server | 管理サーバー、<br>Directory Server                                                                                                                      | java_es_03Q4_dirproxy-solaris-x86.zip  |
| Identity Server        | 管理サーバー<br>Application Server<br>Directory Server<br>Message Queue<br>Web Server<br>(commcli ユーティリ<br>ティ)                                         | java_es_03Q4_identity-solaris-x86.zip  |
| Instant Messaging      | 管理サーバー<br>Application Server<br>Identity Server<br>Message Queue<br>Web Server<br>(commcli ユーティリ<br>ティ)                                          | java_es_03Q4_im-solaris-x86.zip        |
| Messaging Server       | 管理サーバー<br>Directory Server                                                                                                                       | java_es_03Q4_msgserver-solaris-x86.zip |
| Message Queue          | Message Queue                                                                                                                                    | java_es_03Q4_msgq-solaris-x86.zip      |
| Portal Server          | 管理サーバー<br>Application Server<br>Directory Server<br>Identity Server<br>Message Queue<br>Portal Server SRA<br>Web Server<br>(commcli ユーティリ<br>ティ) | java_es_03Q4_portal-solaris-x86.zip    |
| Web Server             | Web Server                                                                                                                                       | java_es_03Q4_webserver-solaris-x86.zip |



# Identity Server によるユーザーの プロビジョニング

この付録では、Identity Server を利用した Messaging Server および Calendar Server ユーザーのプロビジョニングについて、その概念と手順の概要を説明します。

この付録で説明する内容は次のとおりです。

- Identity Server によるユーザープロビジョニングの概要
- Identity Server サービスによる Java Enterprise System ユーザープロビジョニングの例
- サンプルの Java Enterprise System ユーザーの作成
- LDAP 変更コマンドによるユーザーのプロビジョニング
- メッセージングプロビジョニング用の Identity Server サービスの定義と拡張
- Identity Server サンプルサービスのインポートと登録

---

**注** この付録では、Identity Server サービスによる Messaging Server および Calendar Server LDAP ユーザーエントリの最小限のプロビジョニングについて説明します。インタフェースでは入力の評価は行われなため、エラーの報告なしに電子メールを受信できないユーザーエントリや、それ以外の機能障害を持つユーザーエントリが作成される可能性があります。したがって、このインタフェースはデモンストレーションの目的にだけ使用してください。

Messaging Server ユーザーと Calendar Server ユーザーのプロビジョニングの推奨メカニズムは、『Sun ONE Messaging and Collaboration 1.0 User Management Utility Installation and Reference Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-4216-10>) で解説されている commadmin インタフェースです。

---

# Identity Server によるユーザープロビジョニングの概要

以前のリリースでは、`ldapmodify` 操作または `iPlanet Delegated Administrator` を使用して `Messaging Server` および `Calendar Server` ユーザーをプロビジョニングしていました。Identity Server 6.1 では、`Messaging Server` と `Calendar Server` のユーザープロビジョニング作業は、次第にこの共有メカニズムへと移りつつあります。Java Enterprise System には、`comadmin` というユーザー管理ユーティリティプロビジョニングツール (Sun ONE LDAP Schema v.2 用) が用意されています。

Identity Server 6.1 は、メールとカレンダーをプロビジョニングするうえで最低限必要となる機能を備えています。Identity Server は、Identity Server サービスと呼ばれる高い拡張性を備えた LDAP データ管理メカニズムを使用してプロビジョニングを実行します。Identity Server サービスを定義することで、オブジェクトクラスと属性に対する任意の LDAP 操作を自動化し、それらを Identity Server フレームワーク内に組み込むことができます。サービスの要件は次のとおりです。

- 必要なオブジェクトクラスと属性値のリスト
- 新しい XML サービス定義

`Messaging Server` と `Calendar Server` の必要なオブジェクトクラスおよび属性値については、『Sun ONE Messaging and Collaboration 6.0 Schema Reference Manual』 (<http://docs.sun.com/doc/816-6710-10>) を参照してください。このマニュアルと『Sun ONE Identity Server 6.1 Customization and API Guide』 (<http://docs.sun.com/doc/816-6774-10>) を参照すれば、基本的なユーザープロビジョニングを自動化するための独自のメールサービスとカレンダーサービスを、Identity Server 内に定義できます。

Identity Server には、サンプルの XML サービス定義が付属しています。この定義は、メールユーザーとカレンダーユーザーの最小限のプロビジョニングを、Identity Server コンソールを使用してどのように実行するかを示したものです。詳細については、454 ページの「メッセージングプロビジョニング用の Identity Server サービスの定義と拡張」を参照してください。

すべてのコンポーネント製品に対してユーザーをプロビジョニングするには、各コンポーネント製品のサービスをそのユーザーに割り当てます。個々のユーザーをプロビジョニングする場合は Identity Server コンソールを使用し、複数のユーザーをまとめてプロビジョニングする場合は `amadmin`、`ldapmodify` のいずれかのコマンドを使用します。

---

**注** Identity Server の「サービスメカニズム」を使用して解決できるのは、Messaging Server と Calendar Server の最小限のプロビジョニング要求だけです。このリリースの Identity Server の「サービスメカニズム」では、Messaging Server と Calendar Server のすべての要求に対応することはできません。一般に、Identity Server コンソールを使用して何千ものユーザーをプロビジョニングすることはありません。大量のユーザーを処理する場合に推奨されるのは、従来の `ldapmodify` コマンドを使用する方法です。

---

## Identity Server コンソールについて

簡単に言うと、Identity Server サービスは、LDAP エントリの HTML 表現を提供します。この HTML 表現は、Identity Server コンソールの右側のフレームに HTML フォームとして表示されます。

Identity Server サービスを使用すると、一連のオブジェクトクラスと属性をまとめて設定できるほか、属性の一部だけをコンソールインタフェース経由で公開できます。Identity Server サービスは、Identity Server の管理機能を拡張するための公開インタフェースです。

# Identity Server サービスによる Java Enterprise System ユーザープロビジョニングの例

ここでは、Messaging Server と Calendar Server のユーザーを Identity Server コンソールを使用してプロビジョニングする方法を、例を使って説明します。この例は、Identity Server に付属するサンプルの Messaging Server サービスに似ています。このサンプルサービスは、`is_svr_base/SUNWam/samples/integration/user` ディレクトリにあります。

この例では、汎用的な LDAP プロビジョニング用に Identity Server コンソールをカスタマイズする方法について情報を提供します。ただし、この例で提供されているのは、Identity Server 内に作成されたユーザーが Messaging Server と Calendar Server にログインするのに最小限必要となるオブジェクトクラスと属性だけです。この例の目的は、通信関連製品の完全なプロビジョニングをユーザーに提示することではありません。

このサンプルが正常に動作するには、Calendar Server、Identity Server、および Messaging Server が同じ Directory Server に対してインストールされており、それらの製品がすべて Sun ONE LDAP Schema v.2 DIT を使用している必要があります。

この例では、Java Enterprise System ユーザーに新しい属性を追加する方法について説明しています。新しい属性を追加すると、Identity Server の「ユーザー」ページでこれらの新しい属性を管理できるようになります。次の2つの方法を使用できます。

- 既存の `amUser.xml` を変更して新しい属性を追加する
- 新しい属性を新しいサービスとしてグループ化し、それを Identity Server にインポートする

ここで説明する手順は、2番目の方法に基づいています。これらの手順で説明している2つの新しいサービスは、Messaging Server と Calendar Server の Identity Server ユーザーを最小限にプロビジョニングするためのものです。

---

**注** これらのサンプルサービスは、Identity Server を使用してデータ管理作業を自動化する方法を示しています。これらのサービスは Calendar Server と Messaging Server のユーザーの最小限の要求に応じていますが、その目的は、完全なプロビジョニングソリューションを提供することではありません。

すべてのユーザー機能を利用したい場合や、適切な値が設定されていることを確認したい場合は、Calendar Server と Messaging Server のプロビジョニング関連マニュアルを参照してください。これらのマニュアルの一覧については、[321 ページの「ユーザーのプロビジョニング、スキーマ、ツールに関する参照情報」](#)を参照してください。

---

## 新しい Identity Server プロビジョニングサービスを定義する手順の概要

新しい Identity Server プロビジョニングサービスを定義するには、次の5つの操作を実行します。

1. アプリケーションの LDAP 要件を確認する
2. Identity Server サービスを定義する
3. 新しいサービスを Identity Server にインポートする
4. 新しいサービスを組織に登録する
5. 新しいサービスをユーザーに割り当てる

次に、これら概要レベルの各手順について、より詳しく説明します。

### アプリケーションの LDAP 要件の確認

LDAP を使用するほとんどのアプリケーションには、次のような特定のユーザーエントリ要件があります。

- 必要な一連のオブジェクトクラス定義。これを定義することで、そのエントリがそのアプリケーション用としてマーキングされるとともに、特定の一連の属性をそのエントリに追加できるようになる
- 必要な属性と値

オブジェクトクラスと、それに対応する属性のセットについては、『Sun ONE Messaging and Collaboration 6.0 Schema Reference Manual』(<http://docs.sun.com/doc/816-6710-10>) を参照してください。

448 ページの表 G-1 は、Messaging Server の製品マニュアルに記載されている LDAP ユーザー要件に基づいています。この表では、一般的な Messaging Server ユーザーエントリが左側に記載されています。これらのオブジェクトクラスおよび属性のいくつかは、Directory Server の基本情報であるため、Identity Server でもすでに管理されています。

表 G-1 Messaging Server ユーザーの一般的な LDAP エントリ

| LDAP エントリ                                     | 既存のユーザーエントリの変更に必要な LDIF 変更情報             |
|-----------------------------------------------|------------------------------------------|
| dn: uid=scott,ou=People,<br>dc=example,dc=com | dn:uid=scott,ou=people,dc=example,dc=com |
| objectClass: person                           | changetype: modify                       |
| objectClass: organizationalPerson             | add: objectclass                         |
| objectClass: inetOrgPerson                    | objectClass: ipUser                      |
| objectClass: inetUser                         | objectClass: inetMailUser                |
| objectClass: ipUser                           | objectClass: inetLocalMailRecipient      |
| objectClass: inetMailUser                     | objectClass: userPresenceProfile         |
| objectClass:                                  | -                                        |
| inetLocalMailRecipient                        | replace: mail                            |
| objectClass: userPresenceProfile              | mail: scott.mcduke@example.com           |
| cn: scott mcduke                              | -                                        |
| sn: mcduke                                    | replace: mailAlternateAddress            |
| givenName: scott                              | mailAlternateAddress:                    |
| mail: scott.mcduke@example.com                | scott@domain1.example.com                |
| mailAlternateAddress:                         | -                                        |
| scott@domain1.example.com                     | replace: mailDeliveryOption              |
| mailDeliveryOption: mailbox                   | mailDeliveryOption: mailbox              |
| mailHost: mailhost.example.com                | -                                        |
| uid: scott                                    | replace: mailHost                        |
| mailUserStatus: active                        | mailHost: mailhost.example.com           |
| inetUserStatus: active                        | -                                        |
| mailQuota: -1                                 | replace: inetUserStatus                  |
| mailMsgQuota: 100                             | inetUserStatus: active                   |
| userPassword:                                 | -                                        |
|                                               | replace: mailUserStatus                  |
|                                               | mailUserStatus: active                   |
|                                               | -                                        |
|                                               | replace: mailQuota                       |
|                                               | mailQuota: -1                            |
|                                               | -                                        |
|                                               | replace: mailMsgQuota                    |
|                                               | mailMsgQuota: 100                        |

## Identity Server サービスの定義

Identity Server が提供する拡張性の高い LDAP データ管理インタフェースを使用すると、LDAP ユーザーエントリを管理するための新しい Identity Server サービスを定義できます。このサービスを使用して、メールとカレンダーのユーザーをプロビジョニングします。



Identity Server サービスの作成については、『Sun ONE Identity Server 6.1 Customization and API Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6774-10>) の第 6 章「Service Management」を参照してください。

新しい Identity Server サービスを定義するには、次の 6 つの操作を実行します。

1. サンプルに基づいて XML ファイルを作成する
2. Messaging Server または Calendar Server が必要とするオブジェクトクラスを「Global」セクションに追加する
3. Messaging Server および Calendar Server の最小限の属性を「User」セクションに追加する
4. XML サービス定義をインポートする
5. ローカルプロパティファイルを Identity Server のインストールディレクトリにコピーする
6. Identity Server を再起動する

詳細については、454 ページの「メッセージングプロビジョニング用の Identity Server サービスの定義と拡張」を参照してください。

## サンプルの Java Enterprise System ユーザーの作成

ここでは、Identity Server による Java Enterprise System ユーザーアカウント管理を説明するために、サンプルの Java Enterprise System ユーザーを簡単に作成する方法について説明します。ここでは、ユーザーが Java Enterprise System の概念やテクノロジーに精通していることを前提としています。

### ▶ サンプルの Java Enterprise System ユーザーを作成するには

1. Identity Server、Portal Server、Messaging Server、Calendar Server、Directory Server、および管理サーバーを次の順序でインストールおよび設定します。
  - Identity Server のインストール前またはインストール時に、Directory Server をインストールします。
  - Identity Server のインストール前またはインストール時に、Portal Server をインストールします。
  - Messaging Server および Calendar Server のインストール前またはインストール時に、管理サーバーをインストールします。
  - Identity Server では、デフォルトの組織として `dc=example,dc=com` を指定します。

- Messaging Server と Calendar Server の設定ツールを実行します。その際、dcroot として dc=example,dc=com を、ユーザーツリーとして Default Organization を、それぞれ指定します。これにより、o=Default Organization,dc=example,dc=com という組織が作成されます。Messaging Server と Calendar Server を設定すると、必要なメッセージングおよび共同作業用のスキーマが、Directory Server に読み込まれます。
2. Identity Server のオブジェクトクラスが含まれるように、新しい組織および組織単位を更新します。

デフォルトの組織の分岐は Identity Server の外部で作成されたため、Identity Server がその分岐を完全に使用できるようにするには、その分岐を更新する必要があります。ldapmodify コマンドを次のようにして実行します。これにより、ou=People,o=Default Organization,dc=example,dc=com にオブジェクトクラス iplanet-am-managed-people-container: がマーキングされます。

```
ldapmodify -D "cn=Directory Manager" -w password -h
directory.example.com
dn: ou=People, o=Default Organization, dc=example,dc=com
changetype: modify
add: objectclass
objectClass: iplanet-am-managed-people-container
```

3. サンプルの Messaging Server サービスを Identity Server にロードします。このサンプル XML ファイルは、Identity Server のインストールルートディレクトリに格納されています。  
例：  

```
cd /opt/SUNWam/samples/integration
/opt/SUNWam/bin/amadmin --runasdn
"uid=amAdmin,ou=People,o=Default Organization,dc=example,dc=com"
--password password --schema sampleMailServerService.xml
```
4. ローカライズに使用される関連プロパティファイルを locale ディレクトリにコピーします。  

```
cp sampleMailServerService.properties /opt/SUNWam/locale
```
5. Identity Server コンソールから次の URL にアクセスします。  

```
http://webserver:port/amconsole
```
6. 「サービス」タブで新しいサービスを登録します。

7. `o=Default Organization,dc=example,dc=com` までのすべての組織に、新しいサービスを登録します。

組織 `example` → `Default Organization` の「サービス」オプションに新しいサービスが表示されます。

Identity Server を使用して新しいサービスを作成する場合は、Messaging Server サービスを追加し、必要な Messaging Server 属性がすべて設定されていることを確認してください。

## LDAP 変更コマンドによるユーザーのプロビジョニング

Solaris™ および Directory Server に付属するコマンド行ユーティリティ `ldapmodify` は、LDIF (Lightweight Directory Interchange Format) 形式を使用して LDAP エントリを操作します。ここで示す例は、次の条件を前提としています。

- Identity Server と Messaging Server が同じディレクトリ構造に対してインストールされている
- すべての組織エントリが更新されており、Identity Server と Messaging Server が必要とするオブジェクトクラスがすでに存在している
- Identity Server コンソールを使用してユーザー `user1` がすでに作成されている

変更を加える前に、LDAP 内のユーザーエントリが次のとおりになっていることを確認します。太字のオブジェクトクラスは、Identity Server に固有のクラスです。

```

./ldapsearch -b dc=example,dc=com -D "cn=directory manager" -w
password -h localhost -s sub "uid=user1"

uid=user1,ou=People,o=DefaultMailOrg,dc=example,dc=com
sn=user1
cn=user1
iplanet-am-modifiable-by=cn=Top-level Admin
Role,dc=example,dc=com
inetUserStatus=Active
uid=user1
objectClass=iplanet-am-user-service
objectClass=inetAdmin
objectClass=iPlanetPreferences
objectClass=inetOrgPerson
objectClass=organizationalPerson
objectClass=person
objectClass=iplanet-am-managed-person
objectClass=inetuser
objectClass=top
userPassword={SSHA}yitmE0+srF68Q7u52ggzxqnkAUY0FxmC+jkXYA==
iplanet-am-user-login-status=Active

```

上記のオブジェクトクラスを必要なオブジェクトクラス一覧 (317 ページの表 11-4 を参照) と比較すれば、このユーザーの設定では、Identity Server にしかアクセスできないことがわかります。

```

ldapmodify -D "cn=directory manager" -w password dn:
uid=user1,ou=People,o=DefaultMailOrg,dc=example,dc=com
changetype: modify
add: objectclass
objectclass: ipuser
objectclass: userpresenceprofile
objectclass: inetmailuser
objectclass: inetlocalmailrecipient
-
modifying entry
uid=user1,ou=People,o=DefaultMailOrg,dc=example,dc=com

```

変更を加えたら、LDAP 内のユーザーエントリが次のとおりになっていることを確認します。太字のオブジェクトクラスは、Messaging Server に固有のクラスです。

```
uid=user1,ou=People,o=DefaultMailOrg,dc=example,dc=com
sn=user1
cn=user1
iplanet-am-modifiable-by=cn=Top-level Admin
Role,dc=example,dc=com
inetUserStatus=Active
uid=user1
objectClass=iplanet-am-user-service
objectClass=inetAdmin
objectClass=iPlanetPreferences
objectClass=inetOrgPerson
objectClass=organizationalPerson
objectClass=person
objectClass=iplanet-am-managed-person
objectClass=inetuser
objectClass=top
objectClass=ipuser
objectClass=userpresenceprofile
objectClass=inetmailuser
objectClass=inetlocalmailrecipient
userPassword={SSHA}yitmE0+srF68Q7u52ggzxqnkAUY0FxmC+jkXYA==
iplanet-am-user-login-status=Active
```

この時点で、ユーザー user1 は Messaging Server にアクセスできるようになります。運用環境でのユーザーの作成では、さまざまなメール属性の設定が必要になることがあります。Messaging Server の機能を利用するには、これらの属性が必要です。ユーザー user1 が利用できる機能は制限されているため、これらの値を適切に設定するまでエラーメッセージが表示されます。

**注** 上記のサンプルは、Identity Server 経由でエントリが作成された既存ユーザーに、Messaging Server のサポートを追加するための方法の 1 つを示したものです。実際の配備では、ユーザーベースを一括で読み込めるように、これらの値がすでに設定されたユーザーエントリを作成します。

また、このサンプルは Solaris の ldapsearch コマンドに基づいて作成されたものですが、その出力は LDIF 形式に完全には準拠していません。この出力はミシガン大学の古い形式を使用しています。LDIF バッチを作成する際には、Directory Server に付属する ldapsearch コマンドによって生成される標準の LDIF 形式を使用してください。

# メッセージングプロビジョニング用の Identity Server サービスの定義と拡張

ここで紹介する例は、既存のユーザーが Messaging Server にログインできるようにするための最小限のプロビジョニングを行う、単純な Identity Server サービスを定義しています。

新しいアプリケーション用のサービスを作成するには、次のことが必要になります。

- Identity Server サービスの構文と使用法の理解
- アプリケーションが必要とする LDAP のオブジェクトクラスと属性の記述

次の例は、サービスの作成方法を説明した『Sun ONE Identity Server 6.1 Customization and API Guide』(<http://docs.sun.com/doc/816-6774-10>)に基づいています。この例は、すでに説明したファイルに似ており、Messaging Server のオブジェクトクラスと属性を説明した『Sun ONE Messaging and Collaboration 6.0 Schema Reference Manual』(<http://docs.sun.com/doc/816-6710-10>)を使用しています。

## コード例 G-1 サンプルメールサービス

```
<?xml version="1.0" encoding="iso-8859-1"?>
<!--
 Copyright (c) 2003 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved
 Use is subject to license terms.
-->
<!DOCTYPE ServicesConfiguration
 PUBLIC "-//iPlanet//Service Management Services (SMS) 1.0 DTD//EN"
 "jar://com/sun/identity/sm/sms.dtd">

<ServicesConfiguration>
 <Service name="sampleMessagingServerService" version="1.0">
 <Schema
 serviceHierarchy="/Java Enterprise System/sampleMessagingServerService
 i18nFileName="sampleMessagingServerService"
 i18nKey="sample-messagingserver-service-description">
 <Global>
 <AttributeSchema name="serviceObjectClasses"
 type="list"
 syntax="string"
 i18nKey="">
 <DefaultValues>
 <Value>ipuser</Value>
 <Value>inetMailUser</Value>
 <Value>inetLocalMailRecipient</Value>
 <Value>nsManagedPerson</Value>
 <Value>userPresenceProfile</Value>
 </DefaultValues>
 </AttributeSchema>
 </Global>
 </Service>
</ServicesConfiguration>
```

## コード例 G-1 サンプルメールサービス ( 続き )

```

<User>
 <AttributeSchema name="mail"
 type="single"
 syntax="string"
 any="display|required"
 <DefaultValues>
 <Value>username@domainname</Value>
 </DefaultValues>
 </AttributeSchema>
 <AttributeSchema name="mailAlternateAddress"
 type="list"
 syntax="string"
 any="display|required"
 il8nKey="a102">
 </AttributeSchema>
 <AttributeSchema name="mailDeliveryOption"
 type="multiple_choice"
 uitype="radio"
 syntax="string"
 any="display|required"
 il8nKey="a103">
 <ChoiceValues>
 <ChoiceValue>mailbox</ChoiceValue>
 <ChoiceValue>native|unix</ChoiceValue>
 <ChoiceValue>autoreply</ChoiceValue>
 <ChoiceValue>program</ChoiceValue>
 <ChoiceValue>forward</ChoiceValue>
 </ChoiceValues>
 <DefaultValues>
 <Value>mailbox</Value>
 </DefaultValues>
 </AttributeSchema>
 <AttributeSchema name="mailHost"
 type="single"
 syntax="string"
 any="display|required"
 il8nKey="a104">
 <DefaultValues>
 <Value>hostname.domain.com</Value>
 </DefaultValues>
 </AttributeSchema>
 <AttributeSchema name="mailUserStatus"
 type="single_choice"
 syntax="string"
 any="display|required"
 il8nKey="a106">
 <ChoiceValues>
 <ChoiceValue>active</ChoiceValue>
 <ChoiceValue>inactive</ChoiceValue>
 </ChoiceValues>
 <DefaultValues>
 <Value>active</Value>
 </DefaultValues>
 </AttributeSchema>

```

コード例 G-1 サンプルメールサービス ( 続き )

```

</AttributeSchema>
<AttributeSchema name="mailQuota"
 type="single"
 syntax="numeric"
 any="display|required"
 i18nKey="a107">
 <DefaultValues>
<Value>-1</Value>
</DefaultValues>
</AttributeSchema>
<AttributeSchema name="mailMsgQuota"
 type="single"
 syntax="numeric"
 any="display|required"
 i18nKey="a107">
 <DefaultValues>
<Value>-1</Value>
</DefaultValues>
</AttributeSchema>
<AttributeSchema name="mailMsgQuota"
 type="single"
 syntax="numeric"
 any="display|required"
 i18nKey="a108">
 <DefaultValues>
<Value>100</Value>
</DefaultValues>
</AttributeSchema>
</User>
</Schema>
</Service>
</ServicesConfiguration>

```

コード例 G-2 Messaging XML ファイル用の en\_US ロケールメッセージ

```

sample-messagingserver-service-description=Messaging and Calender Sample -
Java Enterprise System
a101=Mail (username@domain)
a102=Mail Alternate Address (username@domain)
a103=Mail Delivery Option (mailbox)
a104=Mail Host (mailservername.domain.com)
a106=Mail User status (active)
a107=Mail Quota (-1)
a108=Mail Msg Quota (100)
a109=extra

```



# Identity Server サンプルサービスのインポートと登録

ここでは、サンプルの Identity Server サービスをインポートおよび登録する方法について説明します。

## ▶ 新しいサービスを Identity Server にインポートするには

次の手順は、新しいサービスを作成することで新しい属性をユーザーに追加する方法を示しています。ここで使用するサンプルサービスには、ユーザー属性が 4 つ含まれています。

1. `sampleMessagingServerService` がまだ読み込まれていないことを確認します。すでに読み込まれていた場合は、`amadmin` コマンドを使用してそれを削除します。

```
is_svr_base/SUNWam/bin/amadmin --runasdn uid=amAdmin,ou=People,default_org,root_suffix
--password password --deleteservice sampleMessagingServerService
```

2. `amadmin` コマンドを使用して新しいサービス `sampleMessagingServerService` を Identity Server にインポートします。

```
is_svr_base/SUNWam/bin/amadmin --runasdn uid=amAdmin,ou=People,default_org,root_suffix
--password password --schema sampleMessagingServerService.xml
```

3. プロパティファイル `sampleMessagingServerService.properties` を `is_svr_base/locale` ディレクトリにコピーします。
4. Identity Server を再起動します。

## Identity Server サービスを削除およびインポートするためのサンプルスクリプト

次のスクリプトを使用して、Identity Server サービスを削除およびインポートできます。

```

#!/bin/ksh
#
Sample shell script to automate services import
#
MAIL=sampleMessagingServerService
AMHOME=/opt/SUNWam
SRC=.
ADMINUID="uid=amAdmin,ou=People,dc=example,dc=com"
ADMINPASS=password
#####
installs service
#####
addService() {
echo
echo "-----"
echo adding service "$1"

$AMHOME/bin/amadmin -u "$ADMINUID" -w $ADMINPASS --deleteservice
$1
$AMHOME/bin/amadmin -u "$ADMINUID" -w $ADMINPASS -s $SRC/${1}.xml
echo copying properties file

cp $SRC/${1}.properties $AMHOME/locale
cat $AMHOME/locale/${1}.properties

}

addService $MAIL
$AMHOME/bin/amserver start

```

### ▶ 新しいサービスを組織に登録するには

1. Identity Server コンソールに管理者としてログインします。
2. 新しい属性の追加先のユーザーが属している組織に、新しいサンプルサービスを登録します。

登録ボタンをクリックして、新しいサービスを選択する必要があります。処理が完了すると、新しいカテゴリが表示されます。その下に新しいサービスが表示されます。このサンプルが作成するのは XML の **Global** 属性と **User** 属性だけであるため、組織に対して設定すべき内容は何もありません。

▶ **新しいサービスをユーザーに割り当てるには**

- 新しい属性を管理するには、サンプルサービスをユーザーに割り当てます。  
これにより、「ユーザー」ページで新しい属性を管理できるようになります。

▶ **各ユーザーにサービスを設定するには**

- このユーザーが一連の新しい属性を利用できるようになっていることを確認し、それらの属性と最初の手順で説明した LDAP 属性との関係に注意してください。ユーザーがメールに正しくアクセスするには、これらのメールサーバー属性のほとんどが適切に設定されている必要があります。



# 用語集

このマニュアルセットで使用される用語の完全なリストについては、『Java Enterprise System Glossary』(<http://docs.sun.com/doc/816-6873>)を参照してください。



# 索引

## 記号

/etc/opt/SUNWics5/config/ics.conf, 355  
/msg\_svr\_base/sbin/configure, 226  
/opt/SUNWcomm/sbin/config-iscli, 219, 226  
/opt/SUNWics5/cal/sbin/comm\_dssetup.pl,  
219  
/opt/SUNWics5/cal/sbin/csconfigurator.  
sh, 220  
/opt/SUNWmsgsr/lib/comm\_dssetup.pl, 226  
/SUNWiim/iim.conf, 357  
/usr/cluster/bin/scinstall, 214  
/var/sadm/install/logs, 248

## A

ADMINSERV\_CONFIG\_ADMIN\_PASSWORD 状態ファイルパラメータ, 84, 280  
ADMINSERV\_CONFIG\_ADMIN\_USER 状態ファイルパラメータ, 84, 94, 95, 280  
ADMINSERV\_DOMAIN 状態ファイルパラメータ, 84  
ADMINSERV\_PORT 状態ファイルパラメータ, 84  
ADMINSERV\_ROOT 状態ファイルパラメータ, 84, 95  
AM\_ENC\_PWD 状態ファイルパラメータ, 98, 116  
amadmin, 444  
Ant, 40, 421  
Apache Common Logging, 421  
Application Server, 45  
Admin Server の起動, 234

Sun Cluster 上, 215

アップグレード, 150, 151

アンインストールに関する情報, 269

概要, 35

カスタムインストールの完了, 217, 218, 220, 221,  
222, 225

起動, 232

最小インストールの完了, 218

設定情報, 86

停止, 234

パッケージ, 414

ローカライズされたパッケージ, 422

ワークシート, 370

AS\_ADMIN\_PASSWORD 状態ファイルパラメータ, 86

AS\_ADMIN\_PORT 状態ファイルパラメータ, 86

AS\_ADMIN\_USER 状態ファイルパラメータ, 86

AS\_HTTP\_PORT 状態ファイルパラメータ, 86

asadmin -reconfig, 233

## B

BEA WebLogic, 45, 239

## C

Calendar Server

Sun Cluster 上, 215

アップグレード, 151  
アンインストールに関する情報, 270  
インストールの完了, 219  
概要, 36  
起動, 234  
シングルサインオン用の設定, 355  
設定, 219  
設定プログラム, 220  
停止, 235  
ローカライズされたパッケージ, 422  
ワークシート, 371

CDS\_DEPLOY\_URI 状態ファイルパラメータ, 107, 111

CD による配布, 52, 167, 191, 437

CMN\_ADMIN\_PASSWORD 状態ファイルパラメータ, 83

CMN\_ADMIN\_USER 状態ファイルパラメータ, 83

CMN\_AS\_DOMAINSDIR 状態ファイルパラメータ, 80

CMN\_AS\_INSTALLDIR 状態ファイルパラメータ, 80, 100

CMN\_CS\_INSTALLDIR 状態ファイルパラメータ, 80

CMN\_DOMAIN\_NAME 状態ファイルパラメータ, 82

CMN\_DPS\_INSTALLDIR 状態ファイルパラメータ, 81

CMN\_DS\_INSTALLDIR 状態ファイルパラメータ, 80

CMN\_HOST\_NAME 状態ファイルパラメータ, 82

CMN\_IIM\_DOCSDIR 状態ファイルパラメータ, 81

CMN\_IIM\_INSTALLDIR 状態ファイルパラメータ, 81

CMN\_IPADDRESS 状態ファイルパラメータ, 82

CMN\_IS\_INSTALLDIR 状態ファイルパラメータ, 81

CMN\_MS\_INSTALLDIR 状態ファイルパラメータ, 81

CMN\_PS\_INSTALLDIR 状態ファイルパラメータ, 81

CMN\_SRA\_INSTALLDIR 状態ファイルパラメータ, 81

CMN\_SYSTEM\_GROUP 状態ファイルパラメータ, 83

CMN\_SYSTEM\_USER 状態ファイルパラメータ, 83

CMN\_WS\_INSTALLDIR 状態ファイルパラメータ, 82

comm\_dssetup.pl, 219

CONFIG\_DIR\_ADM\_PASSWD 状態ファイルパラメータ, 90

CONFIG\_DIR\_ADM\_USER 状態ファイルパラメータ, 90

CONFIG\_DIR\_HOST 状態ファイルパラメータ, 89

CONFIG\_DIR\_PORT 状態ファイルパラメータ, 89

CONFIG\_IDENT\_NA4ORG 状態ファイルパラメータ, 114

CONFIG\_IDENT\_NA4USER 状態ファイルパラメータ, 114

config-iscli, 219, 226

configure スクリプト (Messaging Server), 316

configure プログラム (Messaging Server), 226

configutil, 353

CONSOLE\_DEPLOY\_URI 状態ファイルパラメータ, 109, 110

CONSOLE\_HOST 状態ファイルパラメータ, 106, 108, 110

CONSOLE\_PORT 状態ファイルパラメータ, 108, 110

COOKIE\_DOMAIN\_LIST 状態ファイルパラメータ, 107, 111, 118

COPYRIGHT ファイル, 439

csconfigurator.sh (Calendar Server), 220, 316

## D

DC ツリー, 326, 335

Directory Proxy Server

- アップグレード, 152
- アンインストールに関する情報, 272
- 概要, 37
- 最小インストールの完了, 221
- 情報, 258
- 設定情報, 94
- ローカライズされたパッケージ, 422
- ワークシート, 373

Directory Server

- Sun Cluster 上, 215
- アップグレード, 152



アンインストールに関する情報, 271  
概要, 36  
管理者アクセス, 280  
起動, 235  
最小インストールの完了, 220  
設定情報, 87  
セットアップスクリプト, 219, 226  
停止, 236  
パッケージ, 415  
プロビジョニングの計画, 309  
ローカライズされたパッケージ, 422  
ワークシート, 371

DPS\_CDS\_ADMIN 状態ファイルパラメータ, 94  
DPS\_CDS\_PWD 状態ファイルパラメータ, 95  
DPS\_PORT 状態ファイルパラメータ, 94  
DPS\_SERVERROOT 状態ファイルパラメータ, 95  
DS\_ADD\_SAMPLE\_ENTRIES 状態ファイルパラメータ, 92  
DS\_ADM\_DOMAIN 状態ファイルパラメータ, 88  
DS\_ADMIN\_PASSWORD 状態ファイルパラメータ, 87, 281  
DS\_ADMIN\_USER 状態ファイルパラメータ, 87  
DS\_DIR\_MGR\_PASSWORD 状態ファイルパラメータ, 87  
DS\_DIR\_MGR\_USER 状態ファイルパラメータ, 87  
DS\_DISABLE\_SCHEMA\_CHECKING 状態ファイルパラメータ, 93  
DS\_POPULATE\_DATABASE\_FILE\_NAME 状態ファイルパラメータ, 93  
DS\_POPULATE\_DATABASE 状態ファイルパラメータ, 93  
DS\_SERVER\_IDENTIFIER 状態ファイルパラメータ, 88  
DS\_SERVER\_PORT 状態ファイルパラメータ, 88  
DS\_SUFFIX 状態ファイルパラメータ, 88  
DS\_SYSTEM\_GROUP 状態ファイルパラメータ, 88  
DS\_SYSTEM\_USER 状態ファイルパラメータ, 88  
DSAME からのアップグレード, 153  
DVD による配布, 52, 167, 191, 435, 437

IBM WebSphere, 45, 239, 253

Identity Server

Application Server での確認, 238

BEA WebLogic での確認, 239

IBM WebSphere での確認, 239

SDK, 352

Web Server での確認, 238

アップグレード, 153

アンインストールに関する情報, 272

概要, 37

管理者アクセス, 281

起動, 237

サービス, 445

サービスのインポートと登録, 457

サービスの定義, 448

再起動, 294

最小設定, 74, 212, 222

設定, 222

設定情報, 96

停止, 239

パッケージ, 416

プロビジョニング, 446

ローカライズされたパッケージ, 422

ワークシート, 374, 378, 380, 384, 387, 390, 393, 394

Identity Server SDK

設定情報, 115

パッケージ, 416

Identity Server の再起動, 294

installer コマンドのオプション, 405

Instant Messaging

アップグレード, 154

アンインストールに関する情報, 273

インストールの完了, 225

概要, 38

起動, 240

シングルサインオン用の設定, 357

設定, 225

パッケージ, 416

ローカライズされたパッケージ, 422

ワークシート, 395

iPlanet Calendar Server からのアップグレード, 151  
iPlanet Delegated Administrator, 444  
iPlanet Directory Server Access Management Edition (DSAME) からのアップグレード, 153  
iPlanet Message Queue からのアップグレード, 155  
IS\_ADMIN\_USER\_ID 状態ファイルパラメータ, 97, 116  
IS\_ADMINPASSWD 状態ファイルパラメータ, 97, 116  
IS\_APPSERVERBASEDIR 状態ファイルパラメータ, 101  
IS\_AS\_CONFIG\_DIR 状態ファイルパラメータ, 101  
IS\_BEA\_ADMIN\_PASSWORD 状態ファイルパラメータ, 103  
IS\_BEA\_ADMIN\_PORT 状態ファイルパラメータ, 103, 108  
IS\_BEA\_DOC\_ROOT\_DIR 状態ファイルパラメータ, 103  
IS\_BEA\_DOMAIN 状態ファイルパラメータ, 103  
IS\_BEA\_INSTALLDIR 状態ファイルパラメータ, 103  
IS\_BEA\_INSTANCE 状態ファイルパラメータ, 103  
IS\_BEA\_MANAGED\_SERVER 状態ファイルパラメータ, 104  
IS\_BEA\_WEB\_LOGIC\_JAVA\_HOME\_DIR 状態ファイルパラメータ, 103  
IS\_DIRMGRPASSWD 状態ファイルパラメータ, 112, 117, 281  
IS\_DS\_HOSTNAME 状態ファイルパラメータ, 112, 117  
IS\_DS\_PORT 状態ファイルパラメータ, 112, 117  
IS\_IAS7\_ADMINPASSWD 状態ファイルパラメータ, 101  
IS\_IAS7\_ADMINPORT 状態ファイルパラメータ, 102  
IS\_IAS7\_ADMIN 状態ファイルパラメータ, 101  
IS\_IAS7INSTANCE\_PORT 状態ファイルパラメータ, 101, 102, 108  
IS\_IAS7INSTANCEDIR 状態ファイルパラメータ, 101  
IS\_IAS7INSTANCE 状態ファイルパラメータ, 101  
IS\_IBM\_APPSERV\_PORT 状態ファイルパラメータ, 105  
IS\_IBM\_DOC\_DIR\_HOST 状態ファイルパラメータ, 105  
IS\_IBM\_INSTALLDIRle パラメータ  
IS\_IBM\_INSTALLDIR, 104  
IS\_IBM\_VIRTUAL\_HOST 状態ファイルパラメータ, 104  
IS\_IBM\_WEB\_SERV\_PORT 状態ファイルパラメータ, 105, 108  
IS\_IBM\_WEBSPPHERE\_JAVA\_HOME 状態ファイルパラメータ, 105  
IS\_LDAP\_USER 状態ファイルパラメータ, 97, 116  
IS\_LDAPUSERPASSWD 状態ファイルパラメータ, 97, 116  
IS\_LOAD\_DIT 状態ファイルパラメータ, 113  
IS\_ORG\_OBJECT\_CLASS 状態ファイルパラメータ, 114  
IS\_ROOT\_SUFFIX 状態ファイルパラメータ, 112, 117  
IS\_SUNAPPSEVER\_DOCS\_DIR 状態ファイルパラメータ, 102  
IS\_USER\_OBJECT\_CLASS 状態ファイルパラメータ, 114  
IS\_WS\_HOST\_NAME 状態ファイルパラメータ, 99  
IS\_WS\_INSTANCE\_DIR 状態ファイルパラメータ, 100  
IS\_WS\_INSTANCE\_PORT 状態ファイルパラメータ, 99, 108

## J

J2SE のアップグレード, 163, 173, 188  
JATO, 421  
Java 2 Standard Edition, JDK 1.4.1, 421  
Java API for XML Parsing 1.2, 421

Java Application Framework, 421  
Java Enterprise System  
 概要, 31 ~ 48, 309  
 サンプルユーザーの作成, 449  
 ユーザー, 308  
 ユーザーの管理, 312  
JavaHelp Runtime, 421  
Java Mail Runtime, 421  
Java Security Services (JSS), 421  
JAX-RPC Runtime, 421  
JAXR Runtime, 421

## K

KT Search Engine (KTSE), 421

## L

LDAP  
 概要, 313  
 データベース, 319  
 要件, 447  
LDAP C SDK, 421  
ldapmodify, 444, 450, 451

## M

MANPATH 環境変数, 217, 218  
Message Queue  
 Sun Cluster 上, 215  
 アップグレード, 154  
 概要, 38  
 設定, 225  
 パッケージ, 417  
 ローカライズされたパッケージ, 422  
Messaging Server  
 Sun Cluster 上, 215  
 アップグレード, 156

アンインストールに関する情報, 273  
インストールの完了, 226  
概要, 38  
起動, 241  
シングルサインオン用の設定, 353  
設定, 226  
設定プログラム, 226  
停止, 242  
パッケージ, 417  
プロビジョニング, 226, 454  
ローカライズされたパッケージ, 422  
ワークシート, 396

## N

Netlet プロキシパッケージ, 419  
Netscape Calendar Server からのアップグレード,  
 151  
Netscape Portable Runtime (NSPR), 421  
Netscape Security Services (NSS) コンポーネント,  
 422  
Network Security Services (NSS), 422

## P

PASSWORD\_SERVICE\_DEPLOY\_URI 状態ファイル  
 パラメータ, 109, 110  
PATH 環境変数, 217, 218  
Perl, 41, 163, 188  
pgkinfo, 162, 187  
pkgadd, 44  
pkginfo, 213, 214, 278  
pkgrm, 253  
Point Base サーバーパッケージ, 414  
portal\_server\_install\_dir/lib/configurator, 227  
Portal Server  
 アップグレード, 153, 156  
 アンインストールに関する情報, 275  
 依存, 45

インストールの確認, 242  
概要, 39  
カスタムインストールの完了, 227  
最小インストールの完了, 227  
設定情報, 120  
設定ツール, 227  
パッケージ, 418  
ローカライズされたパッケージ, 422  
ワークシート, 374

## Portal Server, Secure Remote Access

アップグレード, 156  
アンインストールに関する情報, 276  
概要, 39  
起動, 243  
最小インストールの完了, 227  
設定情報, 125  
停止, 243  
パッケージ, 419  
ローカライズされたパッケージ, 422

prodreg, 162, 187

prodreg, 252

PS\_AS\_ADMIN\_PASSWORD 状態ファイルパラメータ, 124, 129

PS\_AUTO\_DEPLOY 状態ファイルパラメータ, 122

PS\_DEPLOY\_INSTANCE 状態ファイルパラメータ, 124

PS\_DEPLOY\_ADMIN\_PASSWORD 状態ファイルパラメータ, 128, 129

PS\_DEPLOY\_ADMIN\_PORT 状態ファイルパラメータ, 124

PS\_DEPLOY\_ADMIN 状態ファイルパラメータ, 124

PS\_DEPLOY\_DOCROOT 状態ファイルパラメータ, 124

PS\_DEPLOY\_DOMAIN 状態ファイルパラメータ, 123

PS\_DEPLOY\_INSTANCE 状態ファイルパラメータ, 123

PS\_DEPLOY\_URI 状態ファイルパラメータ, 122

PS\_DEPLOYDIR 状態ファイルパラメータ, 123

PS\_DOMAIN\_DIR 状態ファイルパラメータ, 123

PS\_DS\_DIRMANAGER\_DN 状態ファイルパラメータ, 121

PS\_DS\_DIRMANAGER\_PASSWORD 状態ファイルパラメータ, 121

PS\_IBM\_APPSERV\_NAME 状態ファイルパラメータ, 105

PS\_IS\_ADMIN\_PASSWORD 状態ファイルパラメータ, 121

PS\_IS\_LDAP\_AUTH\_PASSWORD 状態ファイルパラメータ, 121

## R

README ファイル, 439

Rewriter プロキシパッケージ, 419

## S

S88sendmail, 241

scinstall ユーティリティ, 214

sendmail, 163, 188

sendmail, 241

SERVER\_DEPLOY\_URI 状態ファイルパラメータ, 107, 111, 118

SERVER\_HOST 状態ファイルパラメータ, 106, 110

Simple Authentication Security Layer (SASL), 422

SOAP runtime, 422

Solaris SPARC の配布内容, 439

Solaris X86 の配布内容, 440

SRA\_CERT\_CITY 状態ファイルパラメータ, 132, 137, 142

SRA\_CERT\_COUNTRY 状態ファイルパラメータ, 132, 137, 142

SRA\_CERT\_DIVISION 状態ファイルパラメータ, 132, 136, 141

SRA\_CERT\_ORGANIZATION 状態ファイルパラメータ, 132, 136, 141

SRA\_CERT\_PASSWORD 状態ファイルパラメータ, 132, 137, 142

SRA\_CERT\_STATE 状態ファイルパラメータ, 132, 137, 142

SRA\_DEPLOY\_URI 状態ファイルパラメータ, 128, 129, 130, 133, 137

SRA\_GATEWAY\_PROFILE 状態ファイルパラメータ, 127

SRA\_GW\_DOMAIN 状態ファイルパラメータ, 131

SRA\_GW\_HOSTNAME 状態ファイルパラメータ, 131

SRA\_GW\_IPADDRESS 状態ファイルパラメータ, 131

SRA\_GW\_PORT 状態ファイルパラメータ, 131

SRA\_GW\_PROFILE 状態ファイルパラメータ, 131

SRA\_GW\_PROTOCOL 状態ファイルパラメータ, 131

SRA\_GW\_START 状態ファイルパラメータ, 132

SRA\_GW\_SUBDOMAIN 状態ファイルパラメータ, 131

SRA\_IS\_INSTALLDIR 状態ファイルパラメータ, 130, 133, 138

SRA\_IS\_ORG\_DN 状態ファイルパラメータ, 135, 140

SRA\_IS\_PASSWORD\_KEY 状態ファイルパラメータ, 136, 141

SRA\_IS\_SERVICE\_URI 状態ファイルパラメータ, 136, 141

SRA\_LOG\_USER\_PASSWORD 状態ファイルパラメータ, 127, 132, 139

SRA\_NLP\_DOMAIN 状態ファイルパラメータ, 134

SRA\_NLP\_GATEWAY\_PROFILE 状態ファイルパラメータ, 134

SRA\_NLP\_HOSTNAME 状態ファイルパラメータ, 134

SRA\_NLP\_IPADDRESS 状態ファイルパラメータ, 134

SRA\_NLP\_PORT 状態ファイルパラメータ, 134

SRA\_NLP\_START 状態ファイルパラメータ, 134

SRA\_NLP\_SUBDOMAIN 状態ファイルパラメータ, 134

SRA\_NLP\_USER\_PASSWORD 状態ファイルパラメータ, 134

SRA\_RWP\_DOMAIN 状態ファイルパラメータ, 138

SRA\_RWP\_GATEWAY\_PROFILE 状態ファイルパラメータ, 139

SRA\_RWP\_HOSTNAME 状態ファイルパラメータ, 138

SRA\_RWP\_IPADDRESS 状態ファイルパラメータ, 138

SRA\_RWP\_PORT 状態ファイルパラメータ, 138

SRA\_RWP\_START 状態ファイルパラメータ, 139

SRA\_RWP\_SUBDOMAIN 状態ファイルパラメータ, 138

SRA\_SERVER\_DEPLOY\_URI 状態ファイルパラメータ, 135, 140

SRA\_SERVER\_HOST 状態ファイルパラメータ, 135, 140

SRA\_SERVER\_PORT 状態ファイルパラメータ, 135, 140

SRA\_SERVER\_PROTOCOL 状態ファイルパラメータ, 135

SRA\_SERVER\_PROTOCOL 状態ファイルパラメータ, 140

Sun Cluster, 245

- アップグレード, 156
- アンインストールに関する情報, 277
- 概要, 34, 213
- 確立、クラスタ, 214
- 設定, 214
- 配備例, 59
- パッケージ, 419
- ローカライズされたパッケージ, 422

Sun Cluster エージェント

- 概要, 214
- ローカライズされたパッケージ, 422

Sun ONE LDAP Schema v.1, 329

Sun ONE LDAP Schema v.2

- 互換モード, 328
- ネイティブモード, 328

Sun ONE Presentation Framework, 421

## T

tail コマンド, 209

## U

uninstall コマンドのオプション, 407

USE\_EXISTING\_CONFIG\_DIR 状態ファイルパラメータ, 89, 90, 91, 92

USE\_EXISTING\_USER\_DIR 状態ファイルパラメータ, 91

USER\_DIR\_ADM\_PASSWD 状態ファイルパラメータ, 92

USER\_DIR\_ADM\_USER 状態ファイルパラメータ, 91

USER\_DIR\_HOST 状態ファイルパラメータ, 91

USER\_DIR\_PORT 状態ファイルパラメータ, 91

USER\_DIR\_SUFFIX 状態ファイルパラメータ, 92

配備, 45

Web ダウンロード, 52, 167, 191, 437

WS\_ADMIN\_PASSWORD 状態ファイルパラメータ, 143

WS\_ADMIN\_PORT 状態ファイルパラメータ, 143

WS\_ADMIN\_SYSTEM\_USER 状態ファイルパラメータ, 143

WS\_ADMIN\_USER 状態ファイルパラメータ, 143

WS\_INSTANCE\_AUTO\_START 状態ファイルパラメータ, 144

WS\_INSTANCE\_CONTENT\_ROOT 状態ファイルパラメータ, 144

WS\_INSTANCE\_GROUP 状態ファイルパラメータ, 144

WS\_INSTANCE\_PORT 状態ファイルパラメータ, 144

WS\_INSTANCE\_USER 状態ファイルパラメータ, 144

## W

WebMail セッション, 353

WebNFS, 422

Web Server, 45

Secure Remote Access, 40

Sun Cluster 上, 215

アップグレード, 157

アンインストールに関する情報, 277

カスタムインストールの完了, 228

管理インタフェースの起動, 244

起動, 243

最小インストールの完了, 228

設定情報, 143

停止, 244

パッケージ, 420

ローカライズされたパッケージ, 422

ワークシート, 403

Web コンテナ

確認, 237

トラブルシューティング, 253

## あ

アップグレードの必要性の判断, 164

アップグレード、必要性の判断, 69

アンインストーラ, 413

概要, 48, 264

グラフィカルインタフェースの使用, 282

コマンドオプション, 282, 291, 292

コンソールベースのインタフェースの使用, 287

パッケージ, 413

アンインストール, 263

アンインストール後の作業, 294

概要, 264

管理者アクセス, 280

コマンドオプション, 407

コンポーネント製品の情報, 268 ~ 278

サイレントモードの使用, 290

状態ファイルの作成, 291

トラブルシューティング, 296

部分的なインストールのクリーンアップ, 252

モード, 263  
アンインストール後の作業, 294  
アンインストールのための管理者アクセス, 280, 289

## い

依存, 47  
Portal Server, 45  
アンインストール, 265  
概要, 45  
共有コンポーネント, 44  
コンポーネント製品, 45  
コンポーネントのアップグレード, 171, 194  
チェック, 171, 194  
トラブルシューティング, 249  
インストール  
グラフィカルインタフェースの使用, 161 ~ 183  
検出機能, 169  
コマンドオプション, 405  
サイレントモードでの実行, 208  
テキストベースのインタフェースの使用, 191  
トラブルシューティング, 252  
モード, 43  
インストール  
概要, 49  
キャンセル, 182  
グラフィカルインタフェースの使用, 161 ~ 183  
コンポーネント製品の設定, 179  
サイレント, 201 ~ 209  
準備, 76  
ディレクトリ, 80, 175  
テキストベースのインタフェースの使用, 186 ~ 199  
トラブルシューティング, 247  
部分的なクリーンアップ, 252  
フローチャート, 49  
ログ, 183, 198  
インストールイメージ、ネットワーク上で利用, 437  
インストール後の作業, 211 ~ 245

インストール後のファイル, 197  
インストールサマリレポート, 182, 198  
インストールされているソフトウェアの検出, 45, 69  
インストールの準備, 76  
インストール配布内容のディレクトリ構造, 435  
インストール前のタスク, 57  
グラフィカルインストール, 162  
サイレントインストール, 201  
テキストベースのインストール, 187  
インストール前のチェックリスト, 162, 187

## お

オブジェクトクラス, 319  
オブジェクトクラスの設計, 326, 333  
オペレーティングシステムのパッチ, 175, 195

## か

概要  
Application Server, 35  
Calendar Server, 36  
Directory Proxy Server, 37  
Directory Server, 36  
Identity Server, 37  
Instant Messaging, 38  
Java Enterprise System, 31 ~ 48  
LDAP, 313  
Message Queue, 38  
Messaging Server, 38  
Portal Server, 39  
Portal Server, Secure Remote Access, 39  
Sun Cluster, 34  
アンインストール, 264  
インストール, 49  
管理サーバー, 35  
管理者のプロキシ認証, 363  
共有コンポーネント, 40  
コンポーネント製品, 34

シングルサインオン, 351  
設定の種類, 48  
テキストベースのインストーラ, 186  
プロビジョニング, 309

## 確認

インストール, 229 ~ 245  
管理者のプロキシ認証, 364  
コンポーネントパッケージ, 213, 214  
シングルサインオン, 358

## 確立、クラスタ, 214

カスタム設定, 176, 177

概要, 212  
完了, 215 ~ 245

カレンダーセッション, 353

管理クライアントパッケージ, 414

## 管理サーバー

Sun Cluster 上, 214  
アップグレード, 150  
アンインストールに関する情報, 268  
概要, 35  
管理者アクセス, 280  
起動, 231  
情報, 255  
設定情報, 84  
停止, 231  
パッケージ, 414  
ワークシート, 369

## 管理者のプロキシ認証

概要, 363  
確認, 364  
実装, 364

## き

キャンセル、インストール, 182  
共通サーバー設定, 48, 82  
ワークシート, 368  
共有クラス, 338  
共有コンポーネント, 265  
アップグレード, 172, 174

依存, 44  
概要, 40  
パッケージ, 421

共有コンポーネントのアップグレード, 174

## く

クラスタの確立, 214

グラフィカルベースのインストール, 161

## け

ゲートウェイパッケージ, 419

## 言語

Calendar Server, 422  
Instant Messaging, 422  
Portal Server, 422  
Portal Server, Secure Remote Access, 422  
概要, 41, 43  
韓国語のローカライズパッケージ, 430  
簡体字中国語のローカライズパッケージ, 423  
スペイン語のローカライズパッケージ, 432  
ドイツ語のローカライズパッケージ, 427  
日本語のローカライズパッケージ, 429  
繁体字中国語のローカライズパッケージ, 424  
フランス語のローカライズパッケージ, 426

検出機能, 169

## こ

高可用性配備 (Sun Cluster), 59

## コンポーネント製品

アップグレード, 149 ~ 157  
アンインストールに関する情報, 268 ~ 278  
依存, 45  
インストールされているソフトウェアの検出,  
45, 69  
概要, 34



- 確認, 229
- 起動と停止, 229 ~ 245
- 情報, 255 ~ 261
- 設定, 179, 316
- 追加, 183, 198
  - ユーザーのプロビジョニング, 317
- コンポーネント製品の起動, 229 ~ 245
- コンポーネント製品の追加, 183, 198
- コンポーネント製品の停止, 229 ~ 245
- コンポーネント製品のユーザーのプロビジョニング, 317
- コンポーネントのアップグレード, 69, 149 ~ 157, 171, 194
  - Application Server, 150, 151
  - Calendar Server, 151
  - Directory Proxy Server, 152
  - Directory Server, 152
  - Identity Server, 153
  - Instant Messaging, 154
  - iPlanet Calendar Server, 151
  - iPlanet Directory Server Access Management Edition (DSAME), 153
  - iPlanet Message Queue, 155
  - Message Queue, 154
  - Messaging Server, 156
  - Netscape Calendar Server, 151
  - Portal Server, 153, 156
  - Portal Server, Secure Remote Access, 156
  - Sun Cluster, 156
  - Web Server, 157
  - 管理サーバー, 150
  - 共有, 172

## さ

- サーバーコンソール
  - 起動, 232
  - 停止, 232
- サービスクラス, 347
- サービスクラスの設定, 348
- サービスクラスの例, 349
- サービス固有のオブジェクトクラス, 338

- 最小設定, 176
  - Application Server, 217, 218
  - Directory Proxy Server, 221
  - Directory Server, 220
  - Identity Server, 74, 212, 222
  - Portal Server, 227
  - Web Server, 228
  - 概要, 74, 212
  - 管理サーバー, 216
  - 完了, 215 ~ 245
- サイレントアンインストール, 290
- サイレントインストール, 201 ~ 209
  - インストーラの実行, 208
  - インストール前のタスク, 201
  - ガイドライン, 202
  - トラブルシューティング, 255
  - ログファイル, 209
- サマリレポート, 212
- サンプル Java Enterprise System ユーザーの作成, 449

## し

- 収集、設定情報, 77 ~ 148
- 状態ファイル
  - アンインストール用の作成, 291
  - サイレントインストール用の作成, 203 ~ 208
  - トラブルシューティング, 254
  - パラメータ, 204
  - プラットフォーム別の ID, 206
- 状態ファイルのパラメータ, 145
  - ADMINSERV\_CONFIG\_ADMIN\_PASSWORD, 84, 280
  - ADMINSERV\_CONFIG\_ADMIN\_USER, 84, 94, 95, 280
  - ADMINSERV\_DOMAIN, 84
  - ADMINSERV\_PORT, 84
  - ADMINSERV\_ROOT, 84, 95
  - AM\_ENC\_PWD, 98, 116
  - AS\_ADMIN\_PASSWORD, 86
  - AS\_ADMIN\_PORT, 86
  - AS\_ADMIN\_USER, 86

AS\_HTTP\_PORT, 86  
CDS\_DEPLOY\_URI, 107, 111  
CMN\_ADMIN\_PASSWORD, 83  
CMN\_ADMIN\_USER, 83  
CMN\_AS\_CONFIGDIR, 80  
CMN\_AS\_DOMAINSDIR, 80  
CMN\_AS\_INSTALLDIR, 80  
CMN\_CS\_INSTALLDIR, 80  
CMN\_DOMAIN\_NAME, 82  
CMN\_DPS\_INSTALLDIR, 81  
CMN\_DS\_INSTALLDIR, 80  
CMN\_HOST\_NAME, 82  
CMN\_IIM\_DOCSDIR, 81  
CMN\_IIM\_INSTALLDIR, 81  
CMN\_IPADDRESS, 82  
CMN\_IS\_INSTALLDIR, 81  
CMN\_MS\_INSTALLDIR, 81  
CMN\_PS\_INSTALLDIR, 81  
CMN\_SRA\_INSTALLDIR, 81  
CMN\_SYSTEM\_GROUP, 83  
CMN\_SYSTEM\_USER, 83  
CMN\_WS\_INSTALLDIR, 82  
CONFIG\_DIR\_ADM\_PASSWD, 90  
CONFIG\_DIR\_ADM\_USER, 90  
CONFIG\_DIR\_HOST, 89  
CONFIG\_DIR\_PORT, 89  
CONFIG\_IDENT\_NA4ORG, 114  
CONFIG\_IDENT\_NA4USER, 114  
CONSOLE\_DEPLOY\_URI, 109, 110  
CONSOLE\_HOST, 106, 108, 110  
CONSOLE\_PORT, 108, 110  
COOKIE\_DOMAIN\_LIST, 107, 111, 118  
DPS\_CDS\_ADMIN, 94  
DPS\_CDS\_PWD, 95  
DPS\_PORT, 94  
DPS\_SERVERROOT, 95  
DS\_ADD\_SAMPLE\_ENTRIES, 92  
DS\_ADM\_DOMAIN, 88  
DS\_ADMIN\_PASSWORD, 87, 281  
DS\_ADMIN\_USER, 87  
DS\_DIR\_MGR\_PASSWORD, 87  
DS\_DIR\_MGR\_USER, 87  
DS\_DISABLE\_SCHEMA\_CHECKING, 93  
DS\_POPULATE\_DATABASE, 93  
DS\_POPULATE\_DATABASE\_FILE\_NAME, 93  
DS\_SERVER\_IDENTIFIER, 88  
DS\_SERVER\_PORT, 88  
DS\_SUFFIX, 88  
DS\_SYSTEM\_GROUP, 88  
DS\_SYSTEM\_USER, 88  
IS\_ADMIN\_USER\_ID, 97, 116  
IS\_ADMINPASSWD, 97, 116  
IS\_APPSERVERBASEDIR, 101  
IS\_AS\_CONFIG\_DIR, 101  
IS\_BEA\_ADMIN\_PASSWORD, 103  
IS\_BEA\_ADMIN\_PORT, 103, 108  
IS\_BEA\_DOC\_ROOT\_DIR, 103  
IS\_BEA\_DOMAIN, 103  
IS\_BEA\_INSTALLDIR, 103  
IS\_BEA\_INSTANCE, 103  
IS\_BEA\_MANAGED\_SERVER, 104  
IS\_BEA\_WEB\_LOGIC\_JAVA\_HOME\_DIR, 103  
IS\_DIRMGRPASSWD, 112, 117, 281  
IS\_DS\_HOSTNAME, 112, 117  
IS\_DS\_PORT, 112, 117  
IS\_IAS7\_ADMIN, 101  
IS\_IAS7\_ADMINPASSWD, 101  
IS\_IAS7\_ADMINPORT, 102  
IS\_IAS7INSTANCE, 101  
IS\_IAS7INSTANCE\_PORT, 101, 102, 108  
IS\_IAS7INSTANCEDIR, 101  
IS\_IBM\_APPSERV\_PORT, 105  
IS\_IBM\_DOC\_DIR\_HOST, 105  
IS\_IBM\_VIRTUAL\_HOST, 104  
IS\_IBM\_WEB\_SERV\_PORT, 105, 108  
IS\_IBM\_WEBSPHERE\_JAVA\_HOME, 105  
IS\_LDAP\_USER, 97, 116  
IS\_LDAPUSERPASSWD, 97, 116  
IS\_LOAD\_DIT, 113  
IS\_ORG\_OBJECT\_CLASS, 114  
IS\_ROOT\_SUFFIX, 112, 117  
IS\_SUNAPPSERVER\_DOCS\_DIR, 102  
IS\_USER\_OBJECT\_CLASS, 114  
IS\_WS\_DOC\_DIR, 100  
IS\_WS\_HOST\_NAME, 99  
IS\_WS\_INSTANCE\_DIR, 100  
IS\_WS\_INSTANCE\_PORT, 99, 108  
PASSWORD\_SERVICE\_DEPLOY\_URI, 109, 110  
PS\_AS\_ADMIN\_PASSWORD, 124, 129  
PS\_AUTO\_DEPLOY, 122  
PS\_DEPLOY\_INSTANCE, 124  
PS\_DEPLOY\_ADMIN, 124  
PS\_DEPLOY\_ADMIN\_PASSWORD, 128, 129  
PS\_DEPLOY\_ADMIN\_PORT, 124

PS\_DEPLOY\_DOCROOT, 124  
PS\_DEPLOY\_DOMAIN, 123  
PS\_DEPLOY\_INSTANCE, 123  
PS\_DEPLOY\_URI, 122  
PS\_DEPLOYDIR, 123  
PS\_DOMAIN\_DIR, 123  
PS\_DS\_DIRMANAGER\_DN, 121  
PS\_DS\_DIRMANAGER\_PASSWORD, 121  
PS\_IBM\_APPSERV\_NAME, 105  
PS\_IS\_ADMIN\_PASSWORD, 121  
PS\_IS\_LDAP\_AUTH\_PASSWORD, 121  
SERVER\_DEPLOY\_URI, 107, 111, 118  
SERVER\_HOST, 106, 110  
SRA\_CERT\_CITY, 132, 137, 142  
SRA\_CERT\_COUNTRY, 132, 137, 142  
SRA\_CERT\_DIVISION, 132, 136, 141  
SRA\_CERT\_ORGANIZATION, 132, 136, 141  
SRA\_CERT\_PASSWORD, 132, 137, 142  
SRA\_CERT\_STATE, 132, 137, 142  
SRA\_DEPLOY\_URI, 128, 129, 130, 133, 137  
SRA\_GATEWAY\_PROFILE, 127  
SRA\_GW\_DOMAIN, 131  
SRA\_GW\_HOSTNAME, 131  
SRA\_GW\_IPADDRESS, 131  
SRA\_GW\_PORT, 131  
SRA\_GW\_PROFILE, 131  
SRA\_GW\_PROTOCOL, 131  
SRA\_GW\_START, 132  
SRA\_GW\_SUBDOMAIN, 131  
SRA\_IS\_INSTALLDIR, 130, 133, 138  
SRA\_IS\_ORG\_DN, 135, 140  
SRA\_IS\_PASSWORD\_KEY, 136, 141  
SRA\_IS\_SERVICE\_URI, 136, 141  
SRA\_LOG\_USER\_PASSWORD, 127, 132, 139  
SRA\_NLP\_DOMAIN, 134  
SRA\_NLP\_GATEWAY\_PROFILE, 134  
SRA\_NLP\_HOSTNAME, 134  
SRA\_NLP\_IPADDRESS, 134  
SRA\_NLP\_PORT, 134  
SRA\_NLP\_START, 134  
SRA\_NLP\_SUBDOMAIN, 134  
SRA\_NLP\_USER\_PASSWORD, 134  
SRA\_RWP\_DOMAIN, 138  
SRA\_RWP\_GATEWAY\_PROFILE, 139  
SRA\_RWP\_HOSTNAME, 138  
SRA\_RWP\_IPADDRESS, 138  
SRA\_RWP\_PORT, 138

SRA\_RWP\_START, 139  
SRA\_RWP\_SUBDOMAIN, 138  
SRA\_SERVER\_DEPLOY\_URI, 135, 140  
SRA\_SERVER\_HOST, 135, 140  
SRA\_SERVER\_PORT, 135, 140  
SRA\_SERVER\_PROTOCOL, 135, 140  
USE\_EXISTING\_CONFIG\_DIR, 89, 90, 91, 92  
USE\_EXISTING\_USER\_DIR, 91  
USER\_DIR\_ADM\_PASSWD, 92  
USER\_DIR\_ADM\_USER, 91  
USER\_DIR\_HOST, 91  
USER\_DIR\_PORT, 91  
USER\_DIR\_SUFFIX, 92  
WS\_ADMIN\_PASSWORD, 143  
WS\_ADMIN\_PORT, 143  
WS\_ADMIN\_SYSTEM\_USER, 143  
WS\_ADMIN\_USER, 143  
WS\_INSTANCE\_AUTO\_START, 144  
WS\_INSTANCE\_CONTENT\_ROOT, 144  
WS\_INSTANCE\_GROUP, 144  
WS\_INSTANCE\_PORT, 144  
WS\_INSTANCE\_USER, 144

シングルサインオン (SSO), 351 ~ 364

Calendar Server の設定, 355

Instant Messaging の設定, 357

Messaging Server の設定, 353

概要, 351

確認, 358

従来の方法, 353

トラブルシューティング, 358

要件, 353

## す

スキーマ, 326, 333

## せ

製品の登録, 182

製品のレジストリ, 252, 278, 279

設定

Calendar Server, 219

Identity Server, 222  
Instant Messaging, 225  
Message Queue, 225  
Messaging Server, 226  
インストール時の情報入力, 179  
概要, 48  
確認, 229 ~ 245

設定後のプロビジョニング, 316

設定情報

Application Server, 86  
Directory Proxy Server, 94  
Directory Server, 87  
Identity Server, 96  
Identity Server SDK, 115  
Portal Server, 120  
Portal Server, Secure Remote Access, 125  
Web Server, 143  
管理サーバー, 84  
収集, 77 ~ 148  
状態ファイル、コンポーネント製品以外, 145

設定ツール, 211, 316

Portal Server, 227

設定の種類, 48

## た

ダイナミックメーリングリスト, 345

ダウンロードファイル, 52, 437

## て

ディスク容量, 171, 175, 195

ディスプレイプロファイル、XMLProvider 定義,  
454

ディレクトリ情報ツリー, 326, 336

データモデル, 326, 333

テキストベースのインストール, 185 ~ 198

## と

トラブルシューティング, 247 ~ 261

アンインストール, 296

概要, 247

コンポーネント製品の情報, 255

シングルサインオン, 358

標準的な技法, 247 ~ 252

ログ, 248

## な

名前空間、2つの DIT を使用する理由, 337

## ね

ネットワーク上のインストールイメージ, 437

ネットワーク上のインストールイメージの利用,  
437

## は

配備例

高可用性 (Sun Cluster), 59

プロビジョニング, 445

配布内容のディレクトリ構造, 435

配布メディア, 437

パッケージ

Application Server, 414

Directory Server, 415

Identity Server, 416

Instant Messaging, 416

Message Queue, 417

Messaging Server, 417

Netlet プロキシ, 419

Point Base サーバー, 414

Portal Server, 418

Portal Server, Secure Remote Access, 419

Rewriter プロキシ, 419

Sun Cluster ソフトウェア, 419  
Web Server, 420  
アンインストール, 413  
韓国語のローカライズパッケージ, 430  
簡体字中国語のローカライズパッケージ, 423  
管理クライアント, 414  
管理サーバー, 414  
共有コンポーネント, 421  
ゲートウェイ, 419  
スペイン語のローカライズパッケージ, 432  
ドイツ語のローカライズパッケージ, 427  
日本語のローカライズパッケージ, 429  
繁体字中国語のローカライズパッケージ, 424  
フランス語のローカライズパッケージ, 426  
ローカライズ, 422  
ローカライズされたパッケージ, 422  
パラメータ、サイレントインストール用の状態ファイル, 204

## ふ

フローチャート、インストール, 49  
プロビジョニング, 305 ~ 323  
  Identity Server コンソール, 445  
  Identity Server サービスの作成, 457  
  Identity Server サービスの使用例, 445  
  Identity Server サービスの定義, 448  
  Identity Server プロビジョニングサービス, 446  
  ldapmodify の使用, 451  
  Messaging Server, 454  
  概要, 309  
  管理オプション, 319  
  ツール, 323, 330  
  マニュアル, 321  
プロビジョニングの管理オプション, 319  
プロビジョニングの計画, 309, 312  
プロビジョニング用のツール, 323  
プロビジョニング用のデータ要件, 317

## ほ

ポート番号, 409  
ポリシーエージェント, 352

## ま

マニュアル, 26, 245  
  設定, 214  
  プロビジョニング用, 321

## め

メーリングリスト、ダイナミック, 345  
メディアの説明, 437  
メモリ, 175, 195

## ゆ

ユーザー管理ユーティリティ, 219, 226  
ユーザーの管理, 312

## よ

要件  
  LDAP, 447  
  アンインストール前の作業, 278  
  インストール前のタスク、サイレントインストール, 201  
  インストール前のチェックリスト, 162  
  サイレントインストールのガイドライン, 202  
  シングルサインオン, 353  
  プロビジョニング, 317

## ろ

ログ, [248](#)

インストール, [183](#), [198](#)

サイレントインストール, [209](#)

## わ

ワークシート, [367](#) ~ [403](#)